和風Wizardry純情派

〈祭〉

林 亮介

インタビューメモ（その1）

※そこらへんにいる人にこのトーナメントへの抱負を語っていただきました（一部は電話『』です）。
※身長順に並べてます。（インタビュアー：Kana.Oと仲間たち）

◆津差龍一郎（つさ　りゅういちろう）「体重別じゃないなんてこの街らしいが後悔するなよ？」

◆南沢浩太（みなみさわ　こうた）「はあ……。俺も参加するのか。応援役じゃだめかな」

◆湯浅貴晴（ゆあさ　たかはる）「ええ？　ほんとにやるんですか？　好きだなあ……。俺？　出ない出ない。じゃ」

◆進藤典範（しんどう　のりひろ）「やっぱり、第二期の人には負けたくないすね」

◆千代田恭一（ちよだ　きょういち）「いくつ勝てるか。ちったいいとこ見せて祝杯といきたい」

◆黒田聡（くろだ　さとし）「面白いですねえこういうの。優勝？　うん、まあ組み合わせ次第かなあ」

◆橋本辰（はしもと　たつ）「お前らも元気だな。賞品はあるのか？　あるなら参加したいがダメか？　そうかダメか」

◆秋谷佳宗（あきたに　よしむね）「生徒さん来てるから、みっともないところは見せませんよ」

◆神足燎三（こうたり　りょうぞう）「……まったく。ジジイは朝弱いんだよ。寝かしといてくれよ」

◆片岡宗一（かたおか　そういち）「勝ち負け？　興味ねえなあ。なあ、ヒマならツナギを運ぶのを手伝ってくれねえかな」

◆月原浩（つきはら　ひろし）「全力でやるよ」

◆小笠原幹夫（おがさわら　みきお）「そりゃまあ、目指すのは優勝さ。組み合わせ、もう出た？」

◆星野幸樹（ほしの　こうき）『おお、そろそろ始まるのか？　お前ら俺をのけ者にして楽しそうだな。無事に終わるといいな』

◆国村光（くにむら　ひかる）『あーん!?　試合までにはちゃんと行くから！　いちいち電話はいらんよ！　仕事中だ！』

◆野村悠樹（のむら　ゆうき）「殴る蹴るはアリですか？　……よかった。じゃないと不公平ですからね」

◆青柳誠真（あおやぎ　せいしん）「訓練の時間が普段合わない人と手合わせできるのはいいと思いますよ」

◆寺島薫（てらしま　かおる）「面白いなあ。大会なんて久しぶりだ。そうだねえ。優勝したいね、やっぱり」

◆光岡徹也（みつおか　てつや）「彼女が見に来るんですよ、午後から。なんとかそこまでは残らないと」

◆相馬一郎（そうま　いちろう）「自分がどれくらいのものか今日わかりますね。楽しみだな」

◆葛西紀彦（かさい　のりひこ）「まあ、めざせベスト16ってところかな。がんばるけどね」

◆志村克久（しむら　かつひさ）「第二期は翠嬢や真壁君、津差氏だけじゃありませんよ」

◆佐藤良輔（さとう　りょうすけ）「貴重な経験ですね。勉強します。オス！」

◆長船梓（おさふね　あずさ）「すいませんお邪魔しまして。これも任務でして、苦情は上官にお願いいたします」

◆内田信二（うちだ　しんじ）「最近、強くなった気がしてるんです。優勝狙います」

◆坂田直之（さかた　なおゆき）「負けるつもりでここにいるヤツなんて誰もいませんよ」

◆狩野謙（かのう　けん）「今度から星野さんの部隊に加わるんで、腕試しのつもりでがんばりますよ」

◆真壁啓一（まかべ　けいいち）「優勝する気がします。有終の美を飾り、惜しまれながら街を去る……俺じゃないみたい」

（裏表紙に続く）

和風Wizardry純情派
祭

林　亮介

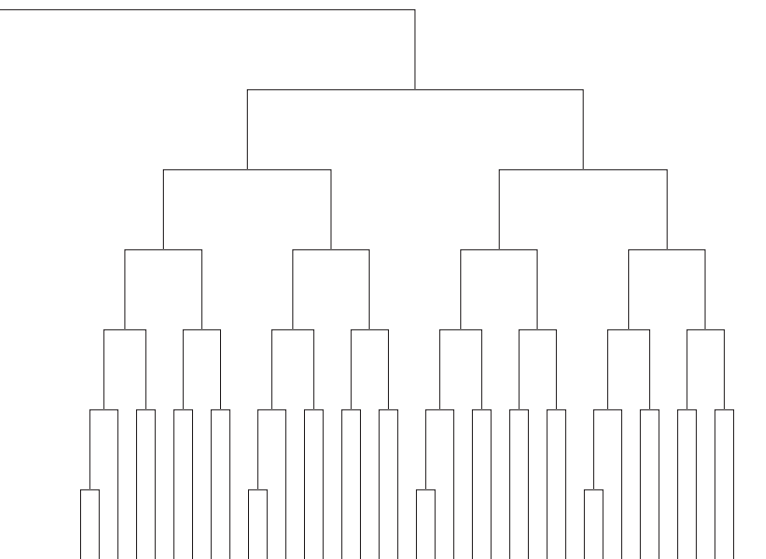
迷宮探索事業団広報部

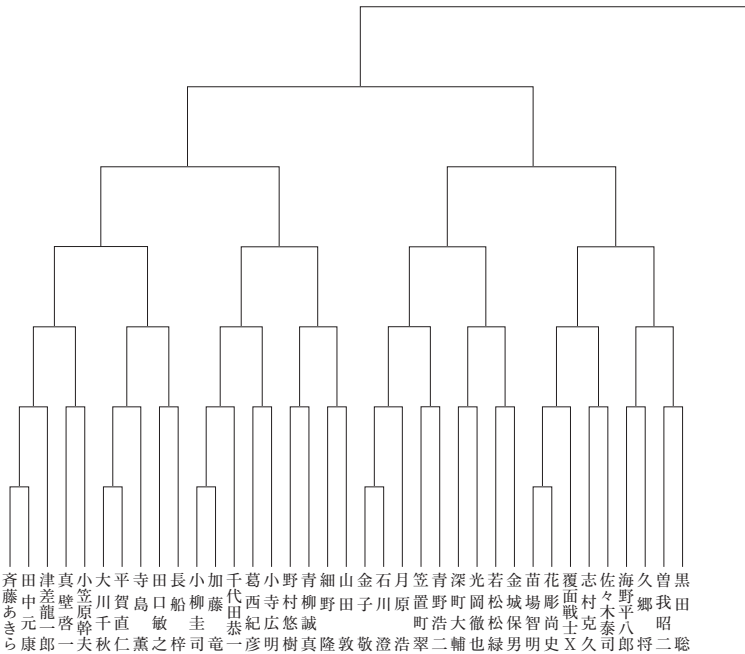
装丁／イラスト
クワタナヲえ
http://www.naoeros.com/

ＤＴＰ
株式会社　イマイシ
IMIS-PRT@nifty.com

目　次

第一章　前夜～開会式　7
第二章　損組～第一回戦　29
第三章　第二回戦　73
第四章　第三回戦　101
第五章　準々決勝　167
第六章　準決勝　241
第七章　決勝　307
第八章　後夜祭　353


杉本哲弘
森嶋雄二
神足燎三
松本勉
田上小太郎
遠藤剛司
有川満
南沢太
吉原浩典
辺見章
相馬明郎
矢口一宗
坂田直之
秋谷宗佳
真城雪
泉谷敦
三上栄
十条六郎
村上忍
中田武美
内田信二
千川浩
石井ひびき
丹羽信一郎
佐藤良輔
赤木龍司
幸田幸
伊藤類
進藤典範
国村光
岩本圭介
有川夕子
加藤保
狩野謙
鈴木英智
塩崎傑


斉藤あきら
田中元康
津差龍一郎
真壁啓一
小笠原幹夫
大川千秋
平賀直仁
寺島薫
田口敏之
長船梓
小柳圭司
加藤竜一
千代田恭彦
葛西紀明
小寺広明
小野村悠樹
青柳真誠
細野隆敦
山田敬
金子澄
石川原浩
月置翠
笠野浩二
青町大輔
深岡徹
光松緑也
若松保男
金城智
苗場尚史
花彫X
覆面戦士克
志村泰司
佐々木八郎
海野平
久郷将
曽我昭二
黒田聡

（前略）

……そのトーナメントのレポート記事を作成する作業はしばしば中断された。探索者の仲間から「この人の映像をすべてほしい」という依頼が入ったからだ。トーナメントの記事編集は事業団から正式に依頼されたビジネスだったが、私は無報酬のそれらを優先したし、事業団も理解してくれた。

トーナメントが開催されてからたった三日後に行われた工事作業でたくさんの探索者が命を落としたのだ。だからトーナメントの映像は彼らの最後の元気な姿になってしまった。それが、私がその依頼を優先し事業団がそれを黙認した理由である。

トーナメントのレポート記事が私のキャリアベストになった理由でもあると思う。

今でも私と夫は思い出したように映像を見返している。

（後略）

（落合　香奈『あの街』より抜粋）

第一章　前夜～開会式

大会前夜　落合香奈

電話はコートのポケットに入れていたから振動に気づいたのは運の良いことだった。取り出した小さな液晶に光る文字を見て、落合香奈（おちあいかな）は意外の感にとらわれる。その人物からの電話が珍しいからではない。それももちろんあったが、自分の電話にその人物が登録されていたことが予想外だったのだ。着信ボタンを押して耳に当てた。

「はい、落合です」

『落合さんですか？　すみません、内田です』

「はいはい。どうしたの？」

電話の向こうにいる声は、探索者の一人で内田信二（うちだしんじ）という男のものだった。数多ある部隊の中でも最も進度の高い部隊四組の一員である。落合の所属する部隊もまたその一つだった。ともにこの街での来歴は長いがこれまで特に親しくした覚えはない。何の用件だろうか？

『落合さん、フランス映画得意ですよね』

「得意不得意で考えるものじゃないと思うけど……それなりに観てるわよ」

返す言葉は勢い込んでいた。

『入門の本とかあったら貸してもらえませんか？』

思わず苦笑する。何が起きたのか？　との問いへの答えはさらにそれを深くするものだった。最近知り合って親しくしている女性がフランス映画を好み、明日映画を一緒に観るのだという。こちらが詳しくないことは向こうも承知だが、観るならば面白く思いたい（そう表現したが、要するに恋した相手の好むものを理解したいのだろう。それはとても甘酸っぱく好ましい心の動きだった）。だから、愉しむポイントとかを予習しておけば、ということらしい。

あー、と自分の家の書棚を思い出して少しつまった。

「日本語の本はほとんどないなあ。フランス語、読めた？」

沈黙に申し訳なく思う。そして自分がいま向かっている場所のことを思い出した。

「ナミーの家ならＤＶＤはたくさんあるから、その監督のとっつきやすいのを観てみればいいんじゃないかな。私も今からナミーの部屋に行くところだし、北酒場でワインを一本買ってくれば、二人がかりでよさを叩き込んであげる

けど」
　ほんとですか？　という喜びの声のあとすぐにお邪魔では、と遠慮が顔をのぞかせた。なぜか慌てて落合は手を振った。誰も見るものはいないのだが。
「私も明日の大会にナミーを引っ張り出すためにいくだけだから、別にいいわよ。そのあと用事があるわけでもないし」
『大会？　大会って何の大会ですか？』
「うちの子が言い出したんだけどね、なんだか戦士たちがチャンバラやろうって話になったのよ。ヨシムネから聞いてない？」
『マジすか！』
「まじっす」
『やっぱりフランス映画はまた今度でいいです！　明日のためにひとっ走りすることにします！　ありがとうございました！』
　言葉だけは丁寧に、しかしこちらの反応を窺うことなく電話は切られた。苦笑しつつ見つめる液晶がふっと暗くなる。こういうことを血気盛ん、というのだろうか。まったくもってかわいらしい男だった。
　会話に名前の出たヨシムネという男から、最近になって彼の実力が飛躍的に伸びているという話は聞いていたのだ。傍から見てわかるのならば本人も実感していることだろう。それもまた大会を楽しみに思わせるのかもしれない。ともあれやる気は十分のようだし、一つ華を添えてくれることになるだろう。
　幸せ者の彼女さんも、映画館で居眠りする横顔より試合場で俊敏に勝ち上がる姿をこそ喜ぶに違いない。くすくすと嬉しい気持ちになって携帯電話をポケットに戻した。

大会前夜　星野由真

　星野由真（ほしのゆま）は悲しい思いで机の上のハンバーグを見つめている。大好きなメニューなのだ。美味しいのはもちろんだけど、中に自分がきらいなニンジンやシイタケが入ってい

ても気にせず食べられることが大きい。食べると母親が誉めてくれる、それが嬉しかった（ちなみにハンバーグ以外でのニンジンとシイタケはまだ食べられたことはない。何度も挑戦しているのに）。それなのに、大好きなハンバーグがどんどんと冷たくなっていった。ほかほかと立ち上っていた湯気もいまはうっすらとしたものになってしまっている。お母さんの苦労と優しさが台無しにされているようで悔しかった。

と、膝の上に重みを感じた。この家で飼っている三毛猫だった。彼は自分を見上げてから一度視線を机の上のハンバーグに移した。その様子がまるで「これはぼくにも食えるものか？」と狙われているような気がして由真はその前肢をしっかりと握りしめる。チョボという名前のその猫は嫌がり暴れ、膝の上から降りていった。そして、声が漏れてくる部屋へと音もなく歩いていった。自分に一番甘い人間の場所に。

あ、止めなきゃと思っているうちに慌てたようにその部屋からとびでてきた。追い払われたのだろう。そしてハンバーグは冷めていく。

やっと原因が机に戻ってきた。思わず文句を言おうとしてしかし由真は言葉を飲み込んだ。子供の敏感な感性は父親がなんだか不機嫌なことに気づいたのだ。親と子供では当然親のほうが苦労が多く苛立ちが多く、そういったとばっちりを優しく許すことが子供の自我の芽生えである。そんな意識は由真にはないが、本能的に許すことにした。まだ湯気は立っているのだ。

ハンバーグが半分になった時、母親が話しかけた。「お仕事の電話だったの？」と。

いや、と答える表情はまだ晴れていない。地下に潜る仲間からの電話だ。明日この街でチャンバラ大会をやるらしい。

「あらあら」

母が苦笑して、父の雰囲気が少し和らいだ。やっぱりお父さんはお母さんが笑うのが嬉しいんだなあ。それが嬉しくもあり、少し悔しくもある。まだ七歳とはいえ女はすべからく本性として女なのかもしれない。

「今日だったら俺は非番だったのに、よりによって明日じゃ参加できないだろう。二日続けて休みを取るわけにもいかないし」

父親は口髭をしごいた。そしてふと何かを思いついたようだった。

「そうだな。俺を仲間はずれにした報いは受けてもらうことにするか。智美はあいつを覚えているか？　俺の部下で、長船というやつだけれど」

「以前ご飯を食べに来た人よね。まだ独身だったわよね？　いいひといないのかしら。事業団の鶴峰さんのお嬢さんが離婚して戻ってきているって話を聞いたけど――」

「あいつの身のふり方はとりあえずおいておいてだ」

父親は慌てて言葉をさえぎる。

「明日はあいつを出場させることにしよう。ヘタすると優勝までかっさらうぞ。そうならなくてもお互いにいい経験になるだろうしな」

機嫌はすっかりよくなったみたいだ。安心してご飯を口につめこんだ。

大会前夜　葛西紀彦

常なら熱気と騒音が空気をかき混ぜている場所だったが今夜は珍しく静かだった。地下での大規模な工事を目前に控え、警備のためほとんどの探索者は明日の探索を休むことにしている。そのことは当然鍛冶師たちにも伝わっており、急ぎの仕事がないとわかっているからには今日は手綱を緩めることにしたのかもしれない。葛西紀彦（かさいのりひこ）はいやな予感を感じながら見知った顔を捜して歩いていた。第二期の探索者がやってきて作業量が増えたことで鍛冶棟にも新顔の鍛冶師たちが増えている。第一期の試行錯誤の時期をともに乗り越えた古株たちはそろって指導的な立場についているようだった。こういう日だからその偉い立場を利用して早々に帰ってしまったのだろうか。

「葛西か？」

聞き覚えのある声に振り向いた。大柄で粗野という表現が適切な中年男性が笑っていた。彼の名前は片岡宗一（かたおかそういち）といい、この鍛冶棟ができた当初から技師たちの主任のような立場についている。年上であり文字通り命を預ける武具を

作ってくれている相手に向け敬意を込めてお辞儀をした。片岡は鷹揚にうなずき、誰を探しているかと尋ねてきた。

「園田さんです」

短い返答は、今日は帰らせたというものだった。鍛冶師もたくさんいるからには技術にも差があり、探索者もたくさんいるからには向かい合う危険度に差がある。そのため、現在の最深階層である第四層と呼ばれる空間を探索する部隊の鉄剣とツナギの補修は限られた数人しか許されていないという。大多数が代行できないのだからその数人の労働条件はいきおい過酷にならざるを得ない。今日のように、翌日に重要な探索がいない日などは率先して普段の負担が大きいものを帰すことにしているのだ、と片岡は詫びた。下げられた頭に恐縮し慌てて手を振りながら、一番過酷なはずのこの人が休んでいる様子を見たことがないのはなぜだろうとぼんやりと考える。

「俺が代わりにできることなら俺がやるが——それにしても、明日は休みじゃなかったのか？」

探索は休みですけど、と葛西は軽く手を振った。明日は完全オフにするつもりで練習用のツナギを洗濯に出しちゃったんですけど、いきなりチャンバラ大会をやることになって。

「チャンバラ大会？」

片岡の目がちかりときらめいた。そして反射的になされた問いかけは「武器はなんだ」というものだった。

「木剣です。だから綿が多く入ってて軽い練習用のツナギが欲しいんですよね」

片岡はしばらく考え込み、ツナギのポケットから小さな携帯電話を取り出した。あ、最新式だと目ざとく気づくが特に意外には思わなかった。それほどにこの無骨な男の科学工学に対する知識と好奇心は広くて深い。

「河野か。俺だ」

呼ばれた名前は知っている。鍛冶師たちのうち、片岡に次ぐ副主任の位置に就いている男だった。

「これからツナギを大至急作るぞ。園田、桑原、三島、大槻、金城、谷に連絡して出て来いって伝えろ」

葛西はぎょっとした。自分は洗濯のために預けたツナギ

を取りにきただけであり、新調してくれとは一言だって口にした覚えはなかったからだ。

「三〇分で来い」

傲然と告げて電話を切った男に話しかける機会を窺っていたが、それを制して強い視線が葛西を縛りつけた。一年余り生死の境を綱渡りして育まれたはずの度胸はしかし熟練で年長の鍛冶師の前にはすっかり萎縮してしまっている。葛西、との呼びかけに背を伸ばした。

「明日のその大会で勝ち残りそうな人間を八人リストアップして、そいつらのサイズを教えてくれ。そいつら用に新しい綿を使った生地でツナギを作る。三〇分でできるか？」

命令は単純なもので普段の葛西なら一度で首肯し問題なく遂行できるものだ。しかし携帯電話を取り出したのは、万に一つでも間違えでもしたらどんな目に遭わされるのだろう、と恐れたからだ。指示をそのまま携帯電話のメモ機能に打ち込みながら、ふと指が止まった。新しい綿を使った生地、という単語を入力したときだった。

「石で強化したツナギのためですか？」

この街で発見された不思議な石が、地下限定であっても金属を飛躍的に硬化させてくれることはよく知られている。しかしそれはまだツナギには実用化されていなかった。その技術は既に確立されているにも関わらず。そしてその理由はそれほど広く知られているわけではない。

しかし葛西は知っていた。目の前で原因となる光景を見たのだから。

あの一件のためにツナギを強化することをあきらめたわけではなかったのだ、この男は。そして鍛冶師たちも。電話から漏れてきた副主任の声はまったく反対意見を述べてはいなかった。滅多になく貴重であるはずの自由な夜をなげうつだけのものが彼らの中にもあるのだ。先ほどとはちがう理由で背を伸ばし、腹に力をこめた。

「八人ですね。ベスト8に残る人間、すべて当ててみせます。三〇分でメールを送ります」

鍛冶師たちは今回のチャンバラ大会――木剣でツナギを着て真剣に殴りあう――を好機としてどのような生地がもっとも軽さと衝撃吸収性を両立するか真剣に知りたいと思っ

ているのだ。何のために？　決まっている。自分たちを死なせないためにだ。飛躍的に硬度を高めてくれる石を、安心して生命線であるツナギに適用するデータを集めるためだ。これは遊びではない。自分の主観や意地を混ぜてはいけない。脳裏に浮かんだ十あまりの顔には当然自分は入っていなかった。

大会前夜　常盤浩介

ほらいた！　と笠置町（かさぎまち）翠（みどり）の声は嬉しそうだ。先ほどまでの宴会で摂取したアルコールのせいもあるだろうし、携帯電話へのメールで済ませればいい伝言のためにわざわざ宴会を抜け出したところからも察せられるとおり、その男がいないことに退屈していたのかもしれない。寂しかったのかな、とちらりとよぎった思いを常盤浩介（ときわこうすけ）は打ち消した。恋人の姉でもあるその女性は勘働きが鈍いくせに嗅覚は鋭いという目をつけられたら厄介なタイプなのだ。

真壁啓一（まかべけいいち）は座っている椅子を回転させて三人を見た。ふと近づく足がにぶった。

近づく三人、自分と自分の恋人とその姉を一瞥する瞳には常の晴朗さが見られなかった。常盤は怪訝に、そして注意する必要を覚えた。頬に気遣わしげな視線を一瞬だけ感じたのは自分の恋人である葵も気づいたことを示している。しかしひとり、アルコールにたがをゆるめられた女だけは元気で怖いもの知らずだった。

「大会だよ！　真壁さん！」

当然真壁さんも出るんだよ！　せめてベスト16には入らないと怒るからね！　今から稽古するぞ稽古！

止めたくても言葉は途切れることを知らず、真壁はしばらく朱の勝るその頬を無表情に眺めていたが、そっけなく視線をそらして画面に表示されているブラウザを消した。そして立ち上がり、椅子の背もたれにかけてあるコートをゆったりとはおる。その背中は明らかに三人を拒絶しており、常盤はいちど出直すべきだという視線を恋人とかわしあった。しかしもっとも手綱をしめる必要のある人間には

その視線は届かなかった。翠はかぶっていた帽子を脱いで真壁の後頭部を叩こうとしている。止めなければ——格闘では自分など赤子の手をひねるように組み伏せるだろう相手だったが、できるできないではなく止めなければならない、という強い気持ち（それは、今まさに自動車に轢かれそうな人間を見守るものと同種だったろう）に揺り動かされて手を伸ばした。そしてその手が止まった。

帽子が床に落ちていた。

呆然とした表情の翠を、依然としての無表情で真壁は見つめていた。いや、かすかに眉間をよぎる震えは怒りを抑えている現われかもしれない。翠が一歩あとじさり、床に落ちた帽子に視線を落とした。その姿を見て、動物は負けを感じると視線をそらすらしいな、と張り詰めた空気の中で冷静に考える自分がいる。

その動きが呪縛を解いたのだろうか。じっと翠の顔を見つめていた真壁が何も言わずに歩き出した。出口に向かって。

「真壁さん」

声が震えていることが自分でもわかった。しかし怯えているのは目の前の男にではない。絶対に怒らない、と信頼していた人間を怒らせてしまったこと、それほどの失礼を働いてしまった自分への罪悪感だった。この怒気に晒されながらなお常盤は自分たちへの報復を心配しなかった。ただただ目の前の男を深く傷つけたことだけが悔やまれる。

それでも言うべきことはわかっている。つばを一つ飲み込み常盤はあとを続けた。待ってください。

真壁の視線はじっと常盤を見据えていた。初めて会った相手だってこの人はこんな風には見ないはずなのに。その実感が無性に恐ろしく悲しかった。数歩の距離にわだかまる深淵は闇よりも濃く深く思われた。

「み、翠さんが謝りたいそうです。どうか謝らせてあげてください」

あ、あとね。いつの間にか常盤のコートの袖を握りしめている葵の声は滑稽なほどに上ずっていた。あとですね、ええと。

「み、翠にも謝ってください。あ、あたし、悪いのは翠だ

けどひどいのは真壁さんだと思うんですけどっ」

震えながら袖を握る力は強く、引っ張られた常盤は一歩よろめいた。そんな二人を見つめる怒りの波動はしかし一向に衰える気配すら窺えない。たっぷり二呼吸のあいだ自分たちを苦しめた視線は、ついでその斜め前に立つ娘にうつされた。それにつられて常盤の視線も動く。引きずられたというべきだろうか。

翠はまだ呆然として、床に落ちた帽子を見つめている。その背中はあまりにもはかなくかよわかった。歴戦の剣士だといって誰が信じるだろう。

そして、その姿を見た真壁の身体を包んでいた陽炎がすっと消えていくのが感じられた。重力すら伴っていた圧迫感が最初からなかったかのように霧消している。真壁は身体ごと三人に向き直り、ゆっくりと翠に歩み寄った。硬直している翠の前で身をかがめ、落ちたベレー帽を拾い上げた。

帽子のほこりを軽くはたき、翠の前髪を静かにかきあげてベレー帽を深くかぶせた。翠は依然として身動きができずされるがままになっている。そして――

「きゃ！」

打撲音はまるで握りこぶしで殴ったかのように二人を震わせた。中指で額を弾いただけのことだ。それは見ていればわかる。しかし音から推測するそれはきっと、単に指一本がぶつけられたとは思えない威力だったろう。顔を歪め手のひらを額に当てる翠の両目には涙がにじんでいた。そして真壁がにっと笑った。

「いっ――」

苦痛から怒りへ。剣呑な表情の動きにしかし常盤は心の底から安堵した。よかった。これで元通りだ。そう思った。袖にすがりつく力も明らかに弱まっていた。

「たいわね何するのよ！　ふざけんな！　誰が謝るもんか！」

「おーう。酔っ払っての無礼にも反省の色なしか。すごいな翠は。まさか君が王族の出だとは思わなかった」

びっくりだなあ、とふざけた視線を送られた常盤はつられて笑顔になった。今更のように膝が激しく震えだしている。

「でもまあ俺は謝ろう。乱暴して悪かった。ごめんな」

その言葉で翠は接ぎ穂を失ったようだった。え、ああ、うう、としどろもどろに帽子をかぶりなおし、痛みを思い出したように額をさすっている。

「常盤くんも葵もありがとう。お礼がてら北酒場でビールをおごるよ。面白い話もあるみたいだから、それも聞かせてもらいたいしね」

あたしにも？　という声には言葉より先にもう一度額を弾こうとする手のひらが向かった。超人的な反射神経を持つ娘は、しかし今度こそは上半身を大きくひねることで避ける。極端に大きな動きに、帽子からこぼれた髪が揺れた。大きな動き。その動きにまぎれてそっと目元をぬぐった様子を常盤は暖かい気持ちで盗み見ていた。

当日朝　鈴木秀美

予備校の授業は夕方からのコマしかない今日は昼までずっと眠っていようと思っていた。そのつもりで昨夜は遅くまで恋愛映画を観ていたのだ。カルチェ・ラタンで繰り広げられる愛のかけひきにうっとりした結果として、布団に入ったのは二時前になっていたのを覚えている。

そんな惰眠をさえぎったのは携帯電話の鳴る音だ。本来ならば舌打ちして保留にするところだったが、しかし鈴木は喜んで液晶を開いた。この街に来てまだ短いから知り合いも多くはなく友人はさらに少なく、そのうえある出来事が起きてからは周囲も遠慮して腫れ物を触るような扱いをされるようになっていた。最初はありがたかったその扱いも最近ではくすぐったく、寂しくなってきている。本来なら無礼なはずのこの電話に却って喜びを感じるのはそのためだったろう。

液晶に映っているのは同居人の名前だった。隣りの部屋からだろうか？　疑問に思ったもののとにかく通話ボタンを押した。

「落合さんですか？　どうしたんです？」

受話器の向こう側、落合香奈（おちあいかな）は申し訳なさそうに眠いところごめんねとまず詫びた。いいですよと相手に見えるわ

けもないのに笑顔を浮かべる。
「ちょっとね、これから送るファックスの内容をやってもらいたいのよ」
口頭で指示するよりも書面で送ったほうがミスは少ない。つまり、ミスのための手戻りを惜しむくらいにせっぱ詰まっているのだ。やっぱり効率のいい人だな、と感心しながら承諾し電話を切った。
間髪いれずに共通で使用しているファックスが着信を告げた。こすれるような音を立てながら見慣れた丸文字（それはスーツが似合うしっかりもののお姉さんの文字としては意外なものだったが）が並んでいる。書き損じは一つ残らずみの虫の落書きに書き換えてあるところに思わず苦笑してしまった。時間がないだろうに、こういうところに性格が見えて面白い。
ネット。フリーソフト。トーナメント表。七二人。
すっかり冴えた目で単語だけ拾い上げてなんとなく概要を把握する。つまり、この街の戦士たちでチャンバラ大会をやろうということらしい。トーナメント表を作ろうとしたがどう作っていいものかわからず、困ったときのインターネットに頼ることにしたようだ。自分への依頼はどうにかして七二人ぶんのトーナメント表を作り、印刷して持ってきてくれというものだった。トーナメントに記入するべき参加者だろう、昨夜か今朝か、とにかく同居人が家を出る際には既に印刷していたらしい活字の羅列がそのあとに続いた。それを真剣に眺める。
「ほへー。すごいメンバーだ……」
思わず呟いてしまう。
「黒田さん南沢さん葛西さん、あ、真城さんも出る。笠置町さんも出るし……うわあ！　寺島さんに秋谷さんも出るのかあ」
そうそうたる顔ぶれであり、ふと思った。自分がここに出たらどれだけ勝ち残れるだろう？
とてもムリだ、とあっさりと認めた。普段の練習なら翻弄できる相手であっても真剣勝負の場では人間としての厚みで勝負にならない。それは同じ女でほんの少し年長である理事の娘に対してもそうである。劣等感とともに認める。

だからこそ――。

ノートパソコンの電源を入れた。冷却ファンの駆動音をその場に残し、ひんやりと冷たいフローリングに降り立った。そして部屋の片隅に置かれている段ボール箱の前にしゃがみこんで、両手でその箱をさすった。大き目のその箱には『鈴木秀美様　訓練場用ツナギ』とマジックの文字が読める。

「人数は七三人にしよう。うん」

足の裏から伝わってくる冷気にひとつくしゃみをする。そして箱のガムテープを引き剥がした。

当日朝　寺島薫

力を入れて押したその圧迫は明らかに肩に伝わるまでに減殺されているようだった。寺島薫（てらしまかおる）は今ひとつ信じられずにもう一度押す。やはりだ。視線をあげると不安そうに様子をうかがう片岡宗一（かたおかそういち）の笑顔があった。

「こりゃどういう手品だい、片岡さん」

片岡は答える代わりに握りこぶしを作って構えて見せた。寺島は意図を了解して両足を開き、地面を踏み固める。

その音は正月の朝に打ち下ろす杵のように重かった。片岡の広く分厚い上半身が生むにふさわしい派手な音であり、あたりで思い思いに準備運動をしている人間が全て振り返るだけの衝撃を撒き散らした。

それでも、どんな驚きや戸惑いの表情も実際にその殴打を受けた寺島が浮かべる表情には及ばなかったろう。寺島は呆然としたように寺島の拳が密着した左胸を見下ろし、次いでまた片岡の顔を眺めた。手品じゃない、と呆然と呟く。

「手を抜いてないよな。いや、抜いてないことくらいはいくらなんでもわかる。それでこの衝撃かよ。こりゃもう魔法だ。アンタ一体このツナギに何をしたんだ？」

やっぱりお前さんのが一番効果がありそうだな。満足げに片岡は笑い、打撃を与えた箇所をぽんとはたいた。

片岡宗一はここ迷宮街に勤める鍛冶師である。その職掌

の第一は探索者たちが日々命をかける鉄剣やツナギを製造することであり、その改良も含まれている。そして本日、一流の剣士たちが木剣で殴りあうこの場に八着の試作ツナギを持ち込んだのだった。剣士たちが自らの命を永らえるための鍛錬を欠かさないように鍛冶師たちは彼らの命を護るための研究を欠かさないのだから。

話に聞くと、鍛冶師たちが今日のチャンバラ大会のことを知ったのは昨夜も遅いという。それなのに彼らは七時半には会場に軽トラを乗りつけてツナギを配った。それだけの短い時間で試作品を思いつくはずはない。であれば、ずっと衝撃を緩和する素材の研究を続けていたのだ。

「ほんものを作るときは、金属部分にはあの石をつける。それで切ったり突いたりにも強くなるはずだ。それに実はな、ある程度以上効果のある石はウレタンの衝撃吸収性を増加してくれることもわかったんだ。ゴンドラ建造のために大阪で調べていて偶然見つけたんだけどな」

握りこぶしで肩を幾度か叩く。子供がやる肩たたきくらいの強さはあるはずなのに、たった三センチ下にある肌にはほとんど衝撃が伝わってこなかった。

「この中に、ウレタンを網目状にして食わせてあるんだよ。石をくっつけて地下に行くとこれがもう少し硬く、粘っこくなる。画期的なツナギになると思うぞ」

「これは――これは、すごいなこれは。何者だよアンタ」

寺島の感激は満足な言葉にならなかった。ゴンドラが開通するといよいよ彼の部隊も第四層に挑む。仰ぎ見た先達たちが一様に挫折したその場所への挑戦は寺島の心にもやはり翳を落としていた。しかしこのツナギがあれば死の確率はかなり下がるはずだ。

「これはまだ試作品だから分厚い。実際にこれで切りあうといろいろな部分が邪魔に感じられるはずだ。お前さんの実力は際立っていると聞いているから、お前にこれを着てもらうんだ。まさか一回戦で消えるようなことにはならずにどこが邪魔になったかフィードバックしてくれよ」

「そうだな。決勝まで行くよ。これを着るならな」

頼もしい言葉に片岡は笑顔を浮かべた。その瞳の下にくっきりとわかるクマに向け、寺島は内心で頭を下げた。

当日朝　黒田聡

ゆっくりと上げた脚、かかとが天に向いた。片足は大地に、片足は天にと伸ばされた黒田聡の身体はまるで一本の棒のようにも見える。精鋭四部隊の中では『地下限定で』最強の戦士と呼ばれていた黒田だったが実際の身体能力は垂直に上げた脚が微動だにしないその様子を見てもわかるように高い。ゆっくりと脚を戻し、それが地につくと同時に高く跳躍した。そのまま身体を丸めくるりと一回転をする。脚の着地は跳躍前より少し後ろの位置だったが、しかし乱れなくそろっていた。おお、と見物人たちからどよめきが起こる。

訓練場は常にない喧騒に満たされていた。明日からの工事作業にほとんどの実力ある部隊が駆り出されるために本日は優秀な戦士たちがみな休みをとっており、イベントが好きな女帝真城雪の呼びかけに応えた戦士たち七〇人あまりが集まって剣術トーナメントをすることになったためだ。普段は自分たちの部隊の戦士たちしか見ていない後衛たちも北酒場謹製の弁当を片手に見物に集まりお祭りの風情がある。

調子よさそうですねえ、と人垣から声がかかり、黒田はそちらを向いた。頭一つ飛び出た高さで進藤典範が笑っている。第二期のなかでも優秀な戦士を二〇人数えたら必ず名前の上がる男だった。当然今日もエントリーしていた。

「向こうで野村さんが剣と空手の複合演武やってましたよ。切り込みと蹴りが同時にしか見えない速さです。狂ってるな」

野村悠樹はなんといったか聞きなれない空手の流派の師範代の資格をもっている戦士だった。この街には修行の一環として心身の鍛練のために来ているという変り種の一人だ。黒田が優勝するにはどこかであたる可能性が高い。で？

進藤は出るの？　と問い掛けたら彼は笑ってうなずいた。うちの部隊前衛二人いなくなっちゃいましたから、ここで評判をあげて優秀な戦士をスカウトしないとです。

おはようございます、と声をかけられた。そちらを見やると同じく第二期の戦士である真壁啓一が歩いてきていた。練習用の厚ぼったいツナギを着けて木剣を担いでいるとこ

ろを見れば、彼も参加するつもりなのだとわかる。その実力を考えれば当然と思えた。トーナメントは七三人だから六回は勝ち抜かなければならないことになるが、七三人のうちに本当に警戒しなければならないのは三〇人程度で、真壁はその三〇人に入っていた。進藤は入っていない。

やる気十分だね、という言葉に真壁はいい笑顔を返した。

「当たり前じゃないですか。この街を出ていく直前にこんなトーナメントって、まさに俺のためにあるようにしか思えませんよ。俺が優勝して『ああ、真壁ってすごい男がいたよ。結局あいつにはこの街は小さすぎて出ていっちまったがな』とみんなが俺を伝説にするためのイベントでしょう？　これって」

黒田は苦笑したが、観客の一角の失笑がさらに大きかった。三人はそちらを向く。西谷陽子（にしたにようこ）という女性がにこにこと三人を眺めていた。

「へええ。西谷さんが非番のときにこの街にいるなんて珍しいですね。ところで何がおかしいんですか？」

進藤に問われ、おっとりした笑顔の女性は一方の壁を指差した。先ほどまでなかった白い張り紙は、トーナメント表だろうか？　いま組み合わせが貼られてきたの見てきたんだけどねー、と含み笑いをする。

「真壁くんの一回戦の相手はうちのところのオガで、オガに勝っても二回戦は津差さんだよ」

精鋭四部隊の戦士の一人と、第二期どころか迷宮街屈指の怪物。かわいそうに、と送った視線の中で真壁の笑いが凍りついていた。

当日朝　進藤典範

トーナメント表を書き出した模造紙の前で進藤典範（しんどうのりひろ）は立ちすくんだ。寸前まで楽観視していた。訓練場では自分はそれなりだと理解している。優勝はもちろんムリでも組み合わせ次第ならベスト16まで進めるのではないか？　そう思っていた。しかしそれも自分の組み合わせを見るまでだった。抽選によって自分は『損組』と呼ばれるうちに入った

らしく、いわゆる一回戦の前に一度試合があったそれはまだいい。同じ第二期の戦士で順当にやれば問題はないと思えたからだ。しかし勝ち上がった後にぶつかるであろう相手の名前が問題だった。

橋本辰。

訓練場の教官。

「これトーナメントする意味ないじゃん……。ネコの喧嘩にトラが出てきたよ」

いつの間にか隣りに来ていた倉持ひばりがぽんと肩を叩く。まあ待ち時間なしで稽古一回つけてもらえると思えば？

その言葉に弱々しくほほえんだ。

「あーごめんごめん、それギャグ。いくらなんでも橋本さんは出ないよ。安心して」

通りすがりの神田絵美——両手に飾り付けを抱えている——が申し訳なさそうに言った。進藤の顔がぱっと明るくなる。おお！　そうなんですか！　でも代わりは誰ですか？

「そこに来る奴は、いまごろ仕事サボって新幹線に乗ってる」

「……国村さん？」

肯定の笑顔に肩を落とした。やっぱり稽古をつけてもらうことには変わりないのね、との倉持の言葉にうなずいた。

当日朝　鯉沼今日子

普段から小さいその身体はさらに縮こまっている。電話の相手は商社の買取責任者だから、その社員でもある三峰えりかにとっては上司にあたった。そして何より、鯉沼今日子も顔を見かけたことがあるが、彼女の経験にあるどんな上司よりもはるかに威圧感に満ちた顔をした生き物だった。

「はい、すみません。はい、はい。……はい、気をつけます。はい、……ありがとうございました。失礼します」

携帯電話を切ってふうと息をつく。しょんぼりした肩を、いたわりをこめて見やった。

「非番の日にまでお疲れ様。なにかミスしたの？」

いいえ、と若い研究者は首を振る。このイベントのことで怒られちゃいました。

その言葉に鯉沼の顔が険しくなった。自分たちが訓練の一環としてなにをしようと商社には関係ないはずだ。それも、三峰は首謀者ですらない。どんな理由と正当性があってあの男はこんな小さな娘を怒るのか。一体何様のつもりなのだろう。事情を問いただそうと開いた口がそのまま止まったのは続いた言葉を聞いたからだ。

「せっかくそんなことやるんだったら、うちからなんでも賞品持っていけって。お前は本当に気が利かないって」

あ、あら、そう、と気の抜けたような鯉沼の言葉。それはそれで何を考えているのかわからない。

当日朝　三峰えりか

『あら、えりちゃん。今日はお休みじゃなかったの？』

「木島さん、いやちょっと用事があって。木島さんは後藤さんから聞いてます？」

『何を？』

「景品のこと」

『景品？　聞いてないけど』

「今日私お休みで、探索者の仲間と一緒にチャンバラ大会をやってるんですけど」

『だめよ！　やめなさい危ないから』

「いえ私は出てなくて、運営のお手伝いをですね」

『なに？　結構おおごとなのね』

「そうなんです。で、後藤さんに賞品としてノベルティのマグカップとかマウスパッドとかカレンダーとかもらっていいかって聞いたら」

『怒られたでしょ』

「ええこっぴどく。で、木島さんに適当に見繕ってもらえって言われたんですけど……木島さんにはその旨は伝わってないんですよね」

『伝わってないけど、それはわざわざ言うまでもないことだからでしょ。いいわ。適当に選んであげるけど――チャ

ンバラってことはほとんど男の人なの？』
「女の人も何人か出ますけど」
『なるほどね。で、出場者は何人くらい？』
「七二人です」
『二回勝ったらもうベスト16……なら、賞品はベスト8からでいいでしょう』
「なるほど。じゃあもうお任せしていいですか？」
『いいわよ。適当に集めて、決まったらまた電話するわ。渡すのは午後に顔を出すわね。グラウンドでやってるの？』
「ありがとうございます！　その近くの体育館みたいなところです」
『いいわねえ。誰か営業さん戻ってきて午後もいるようだったら私も見物に行こうかしら』
「後藤さんに怒られますよー」
『そうね、残念。商品だけど、温泉のペア旅行券とかどうかしら』
「えーと、ペアだとみんな結構もてあましそうです」
『だからいいんじゃない。手に入れた経緯を相手が知っているチケットならわざわざ用意するよりよっぽど誘いやすいし、受けやすいものなのよ』
「へー。そういうもんですか」
『えりちゃんも多分誘われるわよ』
「……じゃあ、チケットにはフロリダのディズニーランドをぜひ」
『それは難しいけど、東京のなら探してみようかしら。とにかく了解しました。楽しみに待っていて』
「ありがとうございます！」

当日朝　真壁啓一

訓練場の隅の一角、板張りの床で柔軟をしていると視界に見なれたブーツが入った。顔を挙げると仲間の女戦士である笠置町（かさぎまち）翠（みどり）が見下ろしている。当然のようにツナギに身を包んでやる気十分である。
「真壁さん、聞いた？　賞品がつくって」

「へええ。どんなの？」
開脚した右足に上体を倒しながら真壁啓一（まかべけいいち）が問い返すと、返答の代わりに背中に小さなお尻が乗せられた。重みを感じながら息を吐き出していく。
「優勝は、国内どこでもオッケーの温泉ペア宿泊券二泊ぶん」
息を吐ききり、今度は深く吸う。呼吸によって広がった胸郭や腹腔の圧力で全身の筋肉が伸びていくのが感じられる。そして少し息を吐いた。
「温泉かあ。みんな目の色変えるだろうな」
「だね。で、ベスト4がディズニーランド／シーペアチケットとホテルミラコスタ優先ペア宿泊券だってさ」
「すげえな。俺がほしいわそれ。でもベスト4か」
「そしてそして、ベスト8がＵＳＪのペアチケット。あたしはベスト8狙いでいくよ」
言葉から一拍置いて娘の重みが消失した。座った姿勢から立ち上がったのに椅子である自分の身体にまったくの反動を与えないその動きに心の中で感嘆する。そして真壁は顔をあげた。自分を見下ろす女の笑顔はさっぱりとしているように見える。
「これ獲って、孝樹兄ちゃんと由美さんにプレゼントするんだ。この前のお返しにね」
そうか、と顔が自然とほころぶのを感じた。そうか。もうひとつ呟いてうなずいたら、さすがにおもはゆく感じたのだろうか。娘の頬がほんのりと紅潮した。
「それで片思いはおしまい――ありがとうね」
身を翻し走り去っていく背中を暖かい気持ちで見送る。

当日朝　長船梓

長船梓（おさふねあずさ）は大きく口を開いて一つあくびをして、ついでぎょっとなった。今は勤務時間中である。あくびをしているところなど見られたら上官に大目玉を食らうところだった。
それにしてもなぜ、この熱気の中においてあくびなど出

るのだろう？　自分の状態を真剣に見つめなおした。緊張しているための生あくびだろうか？　一瞬考えて否定する。違う。

それどころか、ここにはいるのは心身ともに弛緩しきっている人間だった。あくびはゆるんでいるこころと前夜に突然命じられた早起きがあいまってのことだろう。つまり眠いのだ。木刀の両端を持ち両手をあげる。ゆっくりと腰をねじった。いつもより短い時間で急ごしらえのストレッチで温めたことを考えると悪い状態ではなかった。

でもなあ。今度は手を挙げた状態のままで右に身体を倒していく。肋骨と骨盤のあいだがゆっくりと開く。特に違和感もない。よし、悪くない。息を吐き出しきってからゆっくりと姿勢を戻した。長船はこれだけの運動で自分の調子をつかむことができた。それだけの鍛錬は積んできていた。

体調はいい。しかしこれは溜まってる仕事を放り出してまで参加するような大会なのだろうか？　木と木がぶつかりあう軽い音がする方向に目を向けた。そこでは分厚いツナギを身につけた探索者二人が模擬戦闘を行っていた。まるで児戯のようなチャンバラごっこを。

「星野さん……」

恨めしい思いで上官の名前をつぶやいた。今朝顔をあわせた彼は、自分にもいい経験になるだろうと笑った。本当にそうだろうか？　探索者たちの誰一人として、こと剣術で自分の相手になるとはとても思えないのだが。自分の存在はこの楽しげなお祭りをしらけさせるだけに思える。

優勝して自衛隊員の面目をほどこせってことか？　この街での最強の暴力は探索者ではないと叩き込んでこいということか？　上官もまた任務で探索者となり彼らとも親しくしているからそうとも思えないのだが。

ともあれ全力を尽くすだけだ。そう思い定めて目を閉じた。なんといっても任務として命じられた、つまり給料分の仕事に入っているのだから。

開会式の開催を呼びかける声がする。周囲の人間が投げかける奇異の視線を無視し、集合を始めた人の塊に加わった。

第二章　損組～第一回戦

村上忍　対　中田武美

跳躍が生み出す音は、飛び跳ねる女性の身体からすると小さく軽やかに思えた。この街で長身の女性といえば三人おり、一人は精鋭四部隊の一角で自身が優れた戦士と評判の高い真城雪（ましろゆき）、一人は週末探索者という珍しい境遇の部隊を率いている桐原聡子（きりはらさとこ）、そして試合場の白線脇で飛び跳ねている中田武美（なかたたけみ）である。この三人が女性には珍しい一七〇センチを超える身長の持ち主となる。

この会場で木剣を片手に厚ぼったいツナギに身を包んでいることが示すように、中田は女戦士だった。最前線で腕力と体力を頼りに化け物と押し合うその職種はごく自然に男性の独占市場となっていたが中にはこういう変り種もいるのだ。独占市場でなお生き延びているだけあって彼女たちはおおむね戦闘能力あるいは意識によって周囲から一目を置かれていた。それは、高い跳躍を続けながら不思議と着地音が小さいこの女性も変わらない。

元気いっぱいに動きつづける物体に、この街で唯一その物体よりも高身長の女性が声をかけた。

「たけみ！」

名前を呼ばれたのは跳躍しかかりの瞬間だった。そして頂点に達した時にはその上体は声の方向へと向けてねじられている。その顔に浮かんだ笑顔の無邪気なために見落としがちであったがそれは素晴らしい柔軟さと反射神経があって初めてできる動作だったろう。笑顔はさらに深くなり、着地音に続いてその女性の名前が叫ばれる。それはもう歓声の類の大きさと明るさだった。

「真城さん！」

あでやかに手を振ってみせる真城は中田と同じく女戦士、しかし必ず「最強の」と形容詞を奉られている。その能力に対する尊敬の念が中田の笑顔にはあふれていた。思わず真城も笑顔を返した。もう一つこの女性を際立たせるもの、この街では誰も並ぶもののない美貌が朝の光に照らされた。

「ここを取ったら信二だね？　信二相手にいい勝ち方したら、あの話を考えてあげるから！」

「ホントですかぁ!?」

ほんとほんと、だから頑張りなさいよと笑顔を見届けて

から真城は振り向いた。人の群れに自然と生まれた道を歩き出す横にそっと並んだ者がいる。
「おう、信二」
その男も身を厚ぼったいツナギに包んでいた。うっすらと肌につやがあるのはもう十分に身体を暖めているからであろう。彼は今しがた話に出た男で、名を内田信二（うちだしんじ）という。真城と同じく精鋭四部隊と呼ばれる現状での最下層までに到達している部隊にあって長く前衛を務めてきた戦士だった。真城はほとんど同じ高さの瞳に微笑みを向けた。
「ぶみと何を話してたんです？」
うん、と真城は眉根を寄せた。一週間くらい前からうちに加入したいって言われているのさ。
内田は納得したようにうなずいた。真城が率いる部隊は別名をアマゾネス軍団という。推奨の部隊定員である六名中で過半数を超える四名が女性という唯一の部隊だった。女性探索者は深刻なものから下世話なものまで大なり小なりその性別からくるデメリットに疲れるのがこの街である。その中で女性たちが多数を占めるアマゾネス軍団はおのずと羨望の視線を集めていた。だから中田が加入したい、と打診するのもわからないことではない。内田はそれは納得してうなずいたが、しかし怪訝な表情を浮かべた。
「でも、俺にいい勝ち方をしたところでそれが野村さんや南沢さんを押しのける理由になるんですかねえ」
「ならないよ」
声はあくまでも軽やかにしているつもりだった。しかし声に込められた真剣さが伝わったのだろうか、年下の男は表情を改めた。
「どうしてこの時期にあの子が加えてくれって言い出したのか気になるのよね。自分の能力に自信がついたのならいいわよ」
内田は少し考え、何かに思い当たったのか苦い表情になった。そう、と真城はうなずいた。
「境さんが亡くなり、健二が死んだ。また悲しいニュースの季節が来てる気がするのよね。で、武美もそれをなんとなく感じ取っていると思うのさ」
内田も真城も第一期募集の初期にこの街にやってきた。

それからいくつもの出会いと別れを経験しており、別れには低くない割合で死別が含まれている。その中で、悲報には波があることを――決して直截の言葉にはしないが――実感していた。境周（さかいあまね）と越谷健二（こしがやけんじ）という精鋭部隊の一員を初めとして、本来ならばこのトーナメントを華やかに飾るべき戦士たちにごく最近に欠員が出ていることがその波の訪れを感じさせるのだった。悲報はまだ続き、そのために精鋭部隊の中でまた再編成が起きるかもしれない。意識してか否かはともかくおそらく中田にはその予感があり、それが今回のアマゾネス軍団への就職希望となったのではないか。女帝と呼ばれる女はそう推測する。

その態度自体は問題もないしとがめるべきものでもないと思っている。しかし一方では危機感を呼び起こしていた。明後日には第一層から第四層へと突貫するゴンドラ工事が始まるのだ。これまで第四層を力ある部隊だけが到達できる境地たらしめていた二つの障害、第二層の長い一本道と第三層の不意打ちを受けやすい地形を迂回することによってこれまではあきらめていた部隊が多数第四層に向かうだろう。それは収入が増すことであったが同時に危険度が増すことでもある。肌で感じている探索者全体の運気の低下と併せて考えると気が重くなるのだ。その状況下にあって、無邪気に最精鋭部隊への参加を願う娘の姿は何か不吉なもののように思われた。

足を止め、内田の顔を見る。童顔がまだあどけなく感じられる若者は張り詰めた表情をしていた。内田、とやさしく声をかける。彼はしっかりとうなずいた。

「武美はまだまだうちに入るにはか弱い。それをお前が思い知らせてほしいんだ」

そしてできれば――言いよどんだあとの言葉は目の前の男が続けた。

「俺は止めるつもりはありませんよ。結局は他人を止められない、ってのは綾乃の時によくわかりましたから」

表情には鈍い痛み。しかし少なくとも過去の悲しみを正面から見つめられるようになったらしい。そのことが真城には嬉しかった。内田はもういちど、止めるつもりはありませんと繰り返した。

「どうせゴンドラができたらあいつらも第四層に来るんだ。俺にできるのは、それまでの数日でもぶみが強くなれるような種を叩き込むだけです。それには俺が一番でしょう」

目の前の男はいつも誰かの死を嘆いて泣いていたような気がしていた。だからずっと頼りない男だと思っていた。しかし、男子三日会わざれば刮目して見よ、の言葉は本当だったのだ。真城は感動し、思わずそのツナギの袖を握り締めて微笑んだ。

伊藤類　対　進藤典範

白線で区切られた四角い試合場、その向こう側から対戦相手の気合が響き渡った。腹の底から発されるそれはまさに大音声で、一瞬だけ目の前の相手を見直す。なつかしさを感じた。伊藤類は素質を判断する場で自分の前に戦士のテストに合格した男だ。それからも、北酒場で出会っては笑顔を交わしてきた。つまり、ほぼ同じ時間だけこの街で経験を積んだ男ということになる。一ヶ月は長いな、と実感する思いだった。目の前の男のときの声、語尾が明らかに震えているのに自分は落ち着き払っている——その差を生むだけの時間ということだから。

そうか。伊藤を見て一つ思い出したことがあった。そうだったのか。木剣を構えた。

開始の声と同時にまた怒号を響かせて踏み込む気配が感じられる。それをなぞるように伊藤の動作が始まった。

そうか。迫ってくる木剣に、右手を柄に左手を切っ先に添え、肩で固定して体当たりした。受け止めるならまだしも切りかかった刀身を逆に攻められるとは予想していなかったのかもしれない。簡単に木剣ははじかれて伊藤の体勢は大きく崩されていた。動きが単調だ。速度は遅い。力も弱い。慌てて伊藤は踏みとどまり、今度は両手で木剣を振りかぶった。しかしそれより早く、進藤は落ち着いたままで切っ先をその胸に当てた。

勝負あり、という声に背後から仲間の罠解除師の歓声が聞こえてきた。それには耳を貸さず、礼をしたあともその

場に立ったまま自陣に戻る伊藤の背中を眺めていた。これまた顔見知りの戦士と、たまに見かけてその容姿が気になっていた女性とが肩を落とした伊藤を笑顔で迎えていた。

くるりと振り向いた。胸を占めていた思いは顔に出ていたのだろうか？　自分を祝福してくれている年上の女性が眉を寄せた。

「どうしたの？　なにか気に食わないことでも？」

「今さら言ってもはじまらないことなんだけど」

なにが？　いぶかしげな仲間に無表情のまま続けた。エビはさ、弱くなんかなかったよ。親指で肩越しに後ろの景色を指し示した。

「真壁くんのログを読んで、津差さんや笠置町さんを追いかけて、佐藤さんや相馬さんとはいちいち比較して――いつの間にか第二期は彼らしかいないような気になっていて、そんな考え方だったからだ。きっと」

エビは弱くなんかなかった。今の伊藤はエビよりも全然遅いし、切り込みの力だってエビはそれほど劣っていなかった。二刀流の一本が、だよ。つまりもう一本分エビは伊藤よりも強かったんだ。今までずっと生き残ってきた伊藤よりも、さ。俺たちが――

「俺たちがエビを追い込んだんだな、きっと。俺は適性がある方だと思うし、ひばりさんはサラブレッドだ。恵まれている二人が自分たちを基準にしてエビにプレッシャーをかけていたんだ」

倉持（くらもち）ひばりは沈黙した。あるいは進藤の脳裏に浮かんだ推測に気がついていたのかもしれない。進藤が津差や真壁といった第二期のエリート戦士たちに対抗意識を燃やしていたように、倉持もまた親戚の娘たちに対抗意識を燃やしていたのではないのか、という推測に。だから二人して先を急いだのだ、と。

今さら言っても何もならないことだよ。倉持は一瞬の辛そうな表情のあと手に持ったタオルを乱暴に顔に叩きつけた。この娘は表には出さないが生きた伝説である魔女姫と同じ種類の才能を持っていると本人に明かされたことがあった。地上でもエーテルを即座に集めることができると。集めたそれを込めたのだろうか？　顔に当てられたタオルは

大量の静電気を含んでいたかのように進藤の顔にぴったりと張りついた。息苦しさを感じてはぎとる。

「今さら言ってもはじまらないこと。私たちができるのは、洋子のことを絶対に忘れずにこれから生きることだけでしょう？」

その通りだ。進藤は頷きようやく笑顔になった。ともあれ試合は勝ち抜いたのだ。まずはそれを喜ぶことにしよう。

真壁啓一　対　小笠原幹夫　①

「はーいお次はー！」

拡声器の声が会場の喧騒を圧した。しん、と場内が静まる。

「五番リングで真壁啓一（まかべけいいち）対小笠原幹夫（おがさわらみきお）の試合ですよー！　注目、注目ー！」

突然のそのアナウンスに真壁は立ちすくんだ。今までこんな紹介はなかったはずだ。特筆すべきものだけは知らせることになっていたのかもしれない。であれば、自分のカードは注目の一戦なのだ。すこしはギャラリー増えるかな、と見渡したらすでに人垣ができていた。背伸びすると、どうやら他の会場も一時試合を中止しているらしい。そりゃちょっと大げさすぎないか、と思ったがお祭りは嫌いではない。歓声に対して手を高く上げた。観客がどよめく。楽しそうに手を叩いている真城雪（ましろゆき）、その隣りに仲間の女戦士を発見してそちらに歩いていった。

「がんばれ！　真壁さん！　一矢報いろ！」

一矢報いろか、と苦笑する。笠置町（かさぎまち）翠（みどり）は出稽古に赴いた先で真壁の対戦相手である小笠原を間近で見ているはずだ。何かヒントはないだろうか？

「んーとね、タイプは真壁さんと同じくアウトファイターだけど、リーチと筋力とテクニックは向こうが上、スピード互角、反射神経は真壁さんが上だよ」

「リーチ長いよなあ」

ちらりと視線を送る。身長は一八〇センチくらいでこの街の前衛では平均的だが、手足が非常に長い。手足の長さ

なら津差と同じくらいありそうにすら見える。
「懐に飛び込む手だね」翠の言葉にうなずく。
よーし行ってこい！　と女帝が背中を強く叩く。力を注がれた気がする。

真壁啓一　対　小笠原幹夫　②

目の前の男の日記は読んだことがある。自分はまったく登場しないから（訓練場でも早朝派の彼と夜型の自分とでは出会ったことがなかった）検閲のつもりはなかったが、読んでいて一つ印象に残ったことがあった。その観察力の確かさだ。この街で生死の際に身をおきながら、そういった付帯状況にとらわれずものごとを正確に洞察して判断している。それは一人の戦士としてよりたとえば教官として非常にすぐれた資質に思えた。だからこの街を去ると聞いて残念に思う。
ともあれ今は敵手として目の前にいる。真壁の部隊の仲間でありいまセコンドについている娘によれば、その動きの速さは決してあなどれないという。息の根を止めるのが目的ではなく急所を打つことが目的であるこの模擬戦ではゆめゆめ油断できる相手とは思われなかった。
この手の人間は、そのすぐれた観察力と洞察力、考察力のために並みの人間よりも緻密で多岐にわたるパターンを想定してそれに従って行動する傾向があった。自分との攻防でもそれは活かされるだろう。だからこそ、初見でのみ使える手があった。できれば体力自慢で消耗しそうな津差との試合まで温存したかったが、津差は真壁ほど思考が柔軟ではないし明らかに遅い。一度見せるくらいなら通じるかもしれない。セコンドについている西谷陽子（にしたにようこ）にタオルを渡してお互いの拳を軽くぶつけた。
開始の号令とともに小手調べで数度の斬撃を繰り出す。軽々とついてくるその反射速度に感心しながら（なんといっても、自分の数分の一しか戦闘経験がない男なのだ！）少しずつ速度を上げていった。それにもしっかりとついてくる。

このまま、このまま、表情にすこしずつ真剣さをにじませる。このまま速度を上げていき、自分はついていけなくても真壁は対応できるところまで速度域を移す。そこでこの戦士は行動を起こすだろう。

主導権が真壁に移った。立て続けの速い切り込みに必死の形相で対応しながら、少しだけ木剣を持っている腕を宙に遊ばせた。さて、この小さな隙に踏み込んでくるか？

来た！　第四層のどの化け物よりも、もしかしたらエディよりも速い踏み込みでその身体が自分の両手足の懐に飛び込んでくる。このまま一発タックルをいれて体勢を崩せば真壁の勝利だ。少なくとも彼はそう思ったはずだ。木剣を手首だけで振った。狙いは真壁の木剣の切っ先。そのまま手放して、一瞬だけ木剣の自由を封じる。

一瞬封じれば十分だった。

左手を真壁の胸に。右足をその両足のさらに後ろに。右手を真壁の額に。そして両手を強く押す。思わぬ反発に重心が後ろにさがった真壁の身体、後じさろうとした脚が小笠原の右足につまずいた。

真壁は押されて大きくしりもちをついた。そのまま額に当てた右手に力を入れて地面に組み伏せた。胸を押さえていた左手を抜き手の形にしてその喉仏にぴったりとつける。二秒後の勝負ありの言葉に割れるような歓声が沸きあがった。

地下の化け物相手には組み打ちなど通用しない。だから訓練場でも使ったことがない。使わなくてよかった、とまだ呆然としている戦士の顔を見て思う。次にやりあったらもう通用しないだろう。負けるとは思わないが気力体力を消耗するはずだった。

そして視線を人垣に向けた。驚いた顔の津差龍一郎はしかし少しずつ事態を飲み込んでいるように見える。組み合わせに恵まれなかったなあ、と息をついて真壁の隣りにごろりと横になった。

真壁啓一　対　小笠原幹夫　③

お疲れ！　と手ずから渡されたタオルを額に押し当て、起毛の下からそっと娘の顔を覗き見る。それだけの視線も肌は捕らえたようで、笠置町翠はもの問う視線を向けた。

「いや、一回戦負けをしたのに怒られないなと思ってさ」

意識して言葉に怯えをにじませ真壁啓一は答えた。それに翠がさっと赤面した。

「あたし、そんなに教育ママみたいな感じなのかな」

昨夜はベスト16まで行かないと怒ると言われたから、と正直に答えると違う記憶も呼び起こしたのだろうか途端に苦いものを口に含んだ表情になる。

「あー、えーと、昨夜のことは忘れてください。ごめんなさい」

いやいや、と真壁は手を振った。翠は続ける。

「あの時は相手が小笠原さんだと思わなかったしね。それよりもきちんと斬り合いにも対処できていたし、スピードの上げ方はとてもよかったと思うよ。組み打ちを隠し持っていた分だけ不利だったけど、あれがなければどう転ぶかわからないくらいだったんじゃないかな」

その表情は慰めではなく嘘でもないことを示していた。なるほど、動転して気がついたら負けていたが、内容は決して悪くはなかったのか。

「組み合わせも悪かったよ。例えば津差さんと順序が逆だったら小笠原さんは津差さんの時に手の内をさらしたと思うもの。一度見ておけばあれほどの不意打ちにはならなかっただろうし」

なるほど。では胸にあるこの熱はなんとか宥めることにしよう。勝利を逃したわけではなく、最初から勝ちには遠い組み合わせだったのだと。

真壁は当月のうちにここ迷宮街を去るつもりでいた。理由はいろいろあったが、ついに自分が生き抜けるという確信をもてなかったことがいちばん大きい。ネズミは沈む船を察知する嗅覚を持つといわれるが、この街で爪牙としのぎあう生活をする限り、自分はいつか沈む船としか思えなかったのだ。

それでもこの街ではできるだけのことをした。それは胸

を張って言えることだった。たった三ヶ月間ではあったが毎日のように走り、累積の距離は千五百キロを超えるだろう。体操に熱中していた時期も手の皮は丈夫だったが、毎日の素振りはその頃とは比べ物にならないほど手のひらを硬化させた。暇さえあれば筋肉図を読み込み、アウターマッスルならばすべてそらで言うことができる。筋力も軒並み向上しそれでいて動きは速くなり、全力で一時間斬りあっても耐えられる体力も身についた。ついに自分の力を確信できず、しかし客観的に見ればそれなりのものを積み上げていると思っていた。

　このチャンバラ大会ではそれを試せると思ったのだ。自らに誇れる戦果をあげられると、あげてやると勢い込んで会場に臨んだ。

　結果は、何が起きたのかわからないうちの敗北である。勝負ありの声と同時に全身からふきだした汗の半分も実力を出し切れていなかった。どうしても消化不良の感は否めない。

「真壁さん、強くなったよ」

　うってかわって穏やかな声だった。穏やかで、真剣な。自分が身につけた剣術にプライドを持つこの娘は絶対に世辞は言わない。それは三ヶ月の密度濃いつきあいで知ったことである。救われた気分でそうか、とだけうなずいた。胸の中の熱が冷めていくのが心地よい。わかった。ありがとう。

「もう一つわかった」

　口まわりにタオルを押し付けながら、閉じていた目を開いた。うん？　とうながす翠に微笑んで見せる。タオルのお陰で邪悪に歪められた口もとは見えていないはずだ。

「やさしい翠は不気味だってことが――」

　言葉は途絶えていた。タオルの下部をすくいあげるように、あごの先に木刀の切っ先が添えられていたからだ。神速の抜き打ちだった。

「あーごめん間違ってた。こんなのも避けられないんじゃやっぱり一ミクロンも上達してないよ真壁さん」

　反射できない速度についてはとやかく言うつもりはない。こちらも油断していて予想すらしていなかったのだから。

それよりも、どうしてタオルに隠されたあごの先まで迷いなく振りぬくことができるのかこの娘は。真壁はこわばった表情でうなずく。

そして二人同時に吹き出した。

真壁啓一　対　小笠原幹夫　④

撮ってきました！　と元気のいい声は三峰えりかという娘のものだ。死体の買取商社の技術者でありながら探索者のパスをも得ているという変わり者であり、会社勤めをしているだけあってフットワークが軽く飲み込みがよく骨惜しみをしない娘だった。だから先ほどから何かあれば仕事を頼んでいる。現在三峰が従事している仕事も自分が頼んだものだ。

ありがとうね、とねぎらって落合香奈は自分のノートパソコンのちょうつがいの部分を彼女の方に向けてやった。彼女が手に持ったビデオカメラからケーブルをパソコンにつなぐのを確認して、画像を吸い出すソフトを立ち上げる。

「真壁くんと小笠原さんの試合です」

「何分くらいかかった？」

「一分くらいでしょうか」

結構あっけなかったのね、と意外に感じた。真壁啓一という第二期の若者とはたまに話をするし自分たちのリーダーから詳しく聞いていた。まだ日が浅いが大した成長速度だと表現していたからいい試合になるだろうと思っていたのだが。

改めて手元の用紙を眺めた。その表には現在使われている六つの試合場のどこで誰の試合が行われるかが書き込まれている。

「そっか、五番コートが早く終わったんならナミーと吉原さんのをここでやるかな？」

ちらりと視線を送ると第二期の女性探索者が意を得て駆け出していった。

このお祭にあたっては落合も観客でいようと思っていた。事情が変わったのは迷宮探索事業団で事務を管理している

徳永という男性の依頼を受けたからだ。開会式が始まる前、腕章に『審判』という文字を書き込む落合に事務屋は質問を投げた。

「素人さんが見て楽しいチャンバラになりますか？」

「なると思いますよ。特に雪とかヨシムネとか」

「じゃあ、カメラを四台貸しますから映像で残してくれませんか？」

「いいですね。報酬は？」

「出来上がりによりますが、基本で十万円」

「わかりました。編集とウェブサイト作成までやってお渡しすればいいですか？」

「助かります」

というやり取りの結果である。日給五千円で撮影要員ならびに助手として六名雇い、残す価値のあるカードは全て逃さない鉄壁の布陣を組むつもりでいた。

名前を呼びかけられた。先ほど調査に派遣した探索者である。ビンゴでした。五番コートでこれから南沢さんの試合やります！　うなずいて、傍らに立つ三峰にお願いと声をかけた。小柄な技術者はスニーカーのこすれる音を響かせて駆けていった。

元気ねえ、と口元がほころぶのを感じながら、その元気な娘が先ほど撮影してきた動画ファイルを再生する。ちょっと確認してみよう。

序盤の斬り合いは高水準の技術の応酬で、片方が第二期から参加した男だとはとても信じられないものである。しかしこの程度ならこれからいくらでも撮ることができるのも確かであり少し落胆した。

しかし、すぐに落胆は消えうせた。真壁が転ばされるシーンを見たからだ。うまい具合に小笠原の足の動きがよく見える角度だった。これはなかなかキャッチーな絵柄ではなくて？　動画ファイルの名前を「真壁転倒」と変更して『総集編ムービー材料』というフォルダに移動する。

田中元康　対　津差龍一郎

田中元康（たなかもとやす）はこの街に来てまだ二週間の戦士でしかない。実戦の経験も街での知名度も明らかに低いことはわかっていたがこのトーナメントに参加したのはやれると思ったからだ。相手を絶命させることを目的とする地下の戦闘ならばともかく、相手の急所に当てることで勝敗を決定する模擬戦闘であれば、小学生のときからずっと剣道を学んでいる自分に一日の長がある。これによって名をあげもっと上位の部隊へ移動することが今日の目的だった。だから、一回戦の相手が津差龍一郎（つさりゅういちろう）という迷宮街でも評判の巨漢だと知って喜んだのだ。

しかしこれは。開始線の向こうに立つ物体に冷や汗をかく思いだった。これはいくらなんでもあんまりだ。身体が大きいというたったそれだけのことがこれほどまでに人の心をかきみだすとは。弱気になる心を叱咤した。だからこそ自分が彼を華麗にしとめたときの効果は大きいはずだ。心を落ち着け舌なめずりをする。

「始め！」

審判役の戦士の声に、挨拶代わりに軽く木剣を打ち合わせた。

「な!?」

ほんの軽く打ち合わせただけなのに。同じ木剣なのに。ちょっとした触れ合いの結果とは思えないほどに剣先が揺らされ、手首が翻弄される。そして強い衝撃が走った。観客席がどよめいた。

空を見上げる。天高く、地上五メートルくらいだろうか。そこで回転している棒は、あれは自分の木剣なのだろうか？確かに手元にはもうないのだが、いったいいつ弾き飛ばされた？

切っ先を自分の喉元にぴったりとあてたまま巨漢は軽く腕を伸ばし、落下してきた木剣を受け止めた。歓声が沸きあがった。

南沢浩太　対　吉原章典　①

同居している恋人はその男を「よわっちく見える」と表現した。それはさすがに怖いもの知らずの言葉であり、完全に間違っていることは知っている。吉原章典（よしはらあきのり）の目の前に立っているのはこの迷宮の最精鋭部隊の一角を占める戦士なのだから。それでも恋人のその発言にうなずくところもあった。

少なくとも、よわっちくは見えたのだ。

体格の話ではない。それだったらこの街でも二番目に巨大な確か一九〇センチ前後だったろうか？　その身長に似つかわしく首も胸も腕も腰も脚も全てが太くそれでいて張り詰めている。顔さえ見なければ誰もが恐れるだろう。問題は顔とその表情にあった。心なし縦長の輪郭には似つかわしくなく目は細く唇も細い。そんななんとなく影の薄い顔立ちでしかもこの巨人はほとんど目を合わせてくることがなかった。戦闘能力に比べて気弱なのかな、とずっと思っていたものだ。

しかし――自分を静かに見下ろして開始の声を待っている南沢浩太（みなみさわこうた）の姿を恋人に見せてやりたかった。これは、よわっちいなんて言えるはずのないものだ。よりはっきり表現するならば、怖い。第三層の恐怖すら克服している自分が逃げ出したい気持ちで一杯だった。意識していないと膝が震えだしそうである。とりあえず一度視線を外して息をつきたいのに、それをしてしまったらもう目を合わせることができないのだとわかった。それでは勝負にならない。

というよりなんだよこれ。こんなにでかかったか？

迷宮街の外へと勤めに行く恋人が一探索者としてこの街の中だけで主に行動する南沢を見かけるのは不思議なことではなかった。なぜなら同じアパートに暮らしているのだから。南沢とは日曜日のゴミ収集場の掃除や草むしりなどで一緒になったことがある。観る目のない恋人はともかく吉原はその巨大さに似合わず軽やかな動きに感心しつつもこんな威圧感を感じたことはなかった。そして、目の前で木剣を持つ男は草むしりやゴミ箱掃除のときより二〇センチは巨大になっているような印象すら受ける。

「はじめ！」

え？　予想しなかった言葉に気が動転する。そして次の瞬間には目の前がツナギの青で満たされていた。視界を埋め尽くされてから、そういえばはじめの声で腰を落としていたなと思い至った。ということは、まさか――

思考よりも先に身体が動いているのは一流の戦士の証明である。当然訪れるであろう体当たりの衝突に備えて脚に力を入れ、腰は目の前の男よりも低く落とそうとしていた。

と、軽く肩をつかまれ引き寄せられた。衝撃に耐えようと前方に向かっていたエネルギーを利用されて思わず一歩踏み出してしまう。全身の産毛を逆立てて、ようやく身体の制御を取り戻すことができた。このあたりも考えて動いたことではない。だから、危ないと言語化された思考を認識したのももうその衝撃のあとだった。

南沢に距離を詰められてからの吉原の動きを整理すると以下のようになる。

まず、衝突に備えて踏ん張り前に力を向けた。

ところが衝突は来ず、それを利用されて引っ張られた。この時点で上体は前のめりになってしまう。

そして、転倒を避けるため踏みとどまった。つまりいま、吉原の身体の勢いはかすかに後ろに向いている。

そして、衝撃。

二度目の突進はタックルとなり落としたはずの腰よりもさらに低い位置からみぞおちに肩を入れられた。人間ってのはこんなに簡単に浮くのか、と混乱の中でのんきに実感した。

おれ　飛んで　やば　これ　見物客　突っ込む　剣　捨てないと　けが人　あれ？

分断された思考は混乱しているためである。巨大なものに文字通り轢かれて跳ね飛ばされたら誰だってそうなるだろう。それが回復できたのは力強い何かが飛び去ろうとする自分の足をつかんで確保したからだ。

あ、脚がつかまれた。

このまま叩きつけられるのかな。

でも、客席に突っ込むのよりはいいか。

それにしても結構長いあいだ浮いているんだな。

あ、落ち始めた。ぶつかるぞ、ぶつかるぞ――

鈍い音がして背中から床板に落ち、一瞬のあとで後頭部を強く打った。激痛に思わず目を閉じてしまう。次に開いたときには鼻に触れそうな位置に切っ先が突きつけられていた。

あー、そうか。

今はもうそらされている視線に納得するものがあった。彼が普段目を合わせない理由がわかった気がしたのだ。恵理子さんや、と胸のうちで恋人に語りかける。この人、全然よわっちくなんかなかった。

この人は自分の体格を知っているから目を合わせないんだ。うかつに見つめてしまうと相手が怯えるとわかっているからなんだ。黒田さんとは仲がよかったけど、多分黒田さんだったら怖気づかないだろうから、だから目をあわせられるんだろうな。つまり俺はまだ気をつかわれていたってわけか。

そして、今も。試合が終わった以上自分は南沢にとっていたわるべき弱者になってしまったのだろう。いやもう全くその通りです、と胸のうちで呟いて木剣を床に放り出した。

南沢浩太　対　吉原章典　②

「なんだよあれ、狂ってるぞ！」

神足燎三（こうたりりょうぞう）の言葉はもう悲鳴に近く、聞いていた黒田聡（くろださとし）は邪悪な笑みを浮かべてみせた。なにって、ナミーが勝ったんですよ？　吉原相手だから順当でしょう？

その得意げな態度に、神足はじろりと視線を注いだだけで何も言わなかった。再び振り返り、見物客の中に見え隠れする肩を視線で追った。信じられないという風情で呟く。

「南沢は確か、美濃部の代わりにお嬢のところに入ったんだよな」

そうですよ。黒田はうなずいた。

「てことは、去年の十一月くらいまでは美濃部よりは下だったってことだろう？」

それがそうではないんですよ。ナミーにはそれまでもい

ろんな部隊から誘いはあったんです。でも、アマゾネス軍団に欠員が出るのを待ち続けてたんですよ。

その理由を黒田は知っている。しかし神足はそこには興味がないようだった。

「なんなんだ、さっきのは。この大会にルールはないのか？　あいつ、まるで装甲車じゃないか。でかいって言っても津差ならまだ可愛いもんだが、あれはひどいぞ。そんなものをトーナメントに参加させて、ひ弱な人類である俺たちの生命の保証はどうなるんだ」

装甲車て！　黒田は思わず吹き出した。妙に愉快な気分になるのは高揚しているからだろう。この街の探索者たちのあいだに、普段は体格の与える印象とは正反対に物静かな親友を見くびる風潮があることは黒田も知っていた。お前らなにを言ってやがる、と腹立たしく思っていた。その過小評価に惑わされていた部隊の仲間が呆然としている姿はようやく積年の苛立ちを解消させてくれたのだった。黒田はまだざわめきが消えない見物人たちを見渡した。ほら見ろ！　お前らの誰がナミーに勝てるって言うんだ！　大声で叫んでやりたい。

「やーっぱいなあ、あれは」

正面からガチで行ったら、まあ吉原みたいなことにはならないだろうが苦戦するな。とはいえ生半可な罠だと食い破られてとてもおっかねえ目に遭いそうだしな。どうしたもんか！

腕組みして考えこみ始めた男をおいて、黒田はその場を離れた。思わずステップを踏みたくなるくらい晴ればれとしている。もちろん黒田が喜んでいられるのは決勝までは南沢と当たらないトーナメント表を確認しているからである。それまでには誰かが止めるだろう。目算には祈りが含まれている。

田口敏之　対　長船梓　①

自分の向かいに立つ人間はこの街の有力者なのだろうか。長船梓（おさふねあずさ）はにわかに周囲に増えた見物客をいぶかしい思い

で見渡した。その中には先ほどそのサイズと動きの滑らかさとで意識していた男も来ている。

対戦相手はなんという名前だったか——確認のためにツナギのポケットからトーナメント表を取り出した。田口敏之（たぐちとしゆき）という名前を記憶と照らし合わせる。探索者たちの戦闘能力については興味があったから上官にしばしば尋ねていたのだ。よく並ぶ名前もいくつかあったが、田口というものはなかった気がする。上官の眼鏡にかなわないか、なにか一派をなすほど特殊な剣術ではないか。ともあれ自分は自分のやるようにするだけだ。

相手はまだヘルメットをかぶっていなかった。この街では全く無名の自分を甘く見たのだろうか？　自分自身はヘルメットをかぶっている。

ヘルメットがあろうがなかろうが同じことか。装着を要請しようとして思いとどまった。自分が本気で面を打ったらヘルメットも木刀も粉砕され、おそらく破片で田口という男も怪我をするだろう。それは本意ではなかった。そして、今は訓練場の貸しツナギを着ているがこの程度の綿に自分が胴を打ち込んだら内臓破裂になってしまうかもしれない。

それはつまり、このツナギを着ていれば木刀で胴をなぐっても大丈夫というレベルの大会である、という意味だ。やはり自分がいるべき場所ではないのだ。逃げ出したい。

小手しかないか。粉砕骨折さえ避ければリハビリは短くて済む。

チャンバラだとわかっているが、剣道の有段者の意地からも剣道の得点になる勝ち方しかするつもりはなかった。グローブと木刀の柄との摩擦を確認して、試合相手を振り返った。

まずい。長船の心には焦りがある。

もう大会が始まり何試合か見た。当初の予想に反してそこにあるのはすばらしい運動能力の持ち主たちの争いだった。だから血が沸いてもおかしくないのだが、やはり今の自分の境遇に対して釈然としない思いがある。

ここにいる誰一人として自分に勝てるとは思えなかった。それが日本剣道だけにこの年まで精進してきた男の自負で

ある。剣術という面ではすでに探索者たちの底は見えた。であればそれこそ常識外の運動能力をもった参加者でもいないと自分の優勝は動くまい。そしてそれがいるとは思えなかった。所詮は同じ物理法則に従っている生き物なのだ。鍛え上げた自分をはるかに凌駕することなど不可能だろう。

このように楽しげなお祭りを、自分のような醒めた部外者の優勝で終わらせていいものだろうか？　その心配が心から離れなかった。

なんとかして棄権したいが——開始線で木刀を青眼に構える。やはり仮病しかないだろうか。上官の狙いが彼ら自衛隊員の武力を探索者に知らしめることにあるならば、ベスト8に入るくらいまで圧勝してから体調不良というのはどうだろうか。いや、たとえ上官が納得したとしても探索者たちは侮辱されたと感じるだろう。それもまた許されることではなかった。

「勝負あり！」

え、と意識を現実に切り替えた。目の前で田口というらしい男が膝をついていた。木剣は床に投げ出されている。どうやら考え事をしている間に開始の声がかかり、田口が一足一刀の線を殺気とともに踏み越えてきたらしい。そんなことをされたらもともと小手で勝とうと決めていたのだから身体は勝手に小手を打つに決まっていた。だから勝利したこと自体は不思議ではない。

問題なのは手加減ができなかったことだ。慌てて田口の様子を見たが、痛みと驚きの混じった表情ながらも打たれた左腕で木刀を拾い上げた。骨は折れてはいないようだ。ほっと安堵する。

どうやら頑丈さは俺たち自衛隊員よりありそうだ。これなら胴を狙っても死人は出さずに済むだろう。

さあ、どうやってこの茶番から抜け出すか考えよう。試合終了の礼と蹲踞だけは長年の修行の結果無心で行ってから思案を再開した。

田口敏之　対　長船梓　②

津差龍一郎は巨人だった。身長は二〇三センチで体重は一四〇キログラムに達している。頭から足の先まで全てのパーツが太く、分厚く、重々しい。それは大人には例外なく畏怖の念を起こさせるものだったが、子どもに対してはそうではない。しばしば街を歩いていると、駆け寄る足音に続く体当たりを食らっていた。

しかし、これは。肺から搾り出された空気が継げている。今回ぶつかってきたものの重量と衝撃は子どもとはとても思えないものだった。これはもう、攻撃に等しい。

一歩を踏み足して、さらに上体が崩れる。突然寄ってきた巨大な腹筋に硬直している的場由貴の姿を見て倒れないように踏ん張った。もう一歩さらに足を出してようやく止まることができた。重心を回復する。

怯えた表情の的場の頭にぽんと手を置く。しかし的場はびくりと大きく震えるだけだった。身長が一五〇センチ程度と小柄な娘と自分の体重差は三倍を超えるのだ。彼女にとってはおしくらまんじゅうではなく圧迫死の危機に感じられたのだろう。

津差は攻撃者を振り向いた。そしてそこにある顔に呆気に取られた。

「翠ちゃん」

日に焼けた頬でもありありとわかるように上気し、目はきらめいている。いきなり体当たりをするような子どもだとは思わなかったが、よほど興奮することでもあったのだろうか。どうしたかと尋ねた。

「津差さん、寺島さんを見かけませんでした？」

意外な名前である。寺島薫は第一期の探索者の一人で、この娘と同じように街に来る前から剣道の修行を積んでいる。基本的に探索者の剣術は力任せ運動神経任せのチャンバラだが、それでもこの男に学ぶものは多い。剣術指南の風格を漂わせていた。

それでも目の前の娘が寺島を探すことは意外だったし、自分に問われることはさらに意外である。普段親しくしている相手ではないのだ。というところで思いついた。

この会場はすでに行き交う人で見通すことができないで

いる。すぐれた剣士とはいえ女だから背は低いこの娘は、サバンナで草食獣がするようにまずキリンを探したのだ。人ごみを気にせず人間を探せる男を。合点して会場を見渡した。

「いた。これから四番コートで試合みたいだな。何かあったのか？」

「津差さん、さっきの田口さんの試合は見ました？」

いや、と首を振る姿に悔しそうな表情を浮かべる。

「すごい人が参加してるんですよ！」

すごい人？　このチャンバラに？　アイドルか何かか？

違います、と翠はもどかしそうだ。

「長船さんて方です！　剣道の全日本選手権のベスト4ですよ！　京都の代表です！　そうだ絶対そうだ！　だって陸上自衛隊所属って書いてあったもん！　うわあ！」

うわ！　うわ！　あとで胴着にサイン書いてもらわなきゃ！

と興奮で周囲が見えていない風情の娘に津差は苦笑した。

「ベスト4って、日本で四番目以内か。確かにすごそうだが、それはこの街で通じるものなのか？」

通じてますよ！　何言ってんの！　翠は気色ばんだ。

「すごかったんですよ！　明らかに心ここにあらずだったのに田口さんが間合いを越えたら自動的に反応しているんですから！　私もお父さんと稽古したとき脳天を打たれてそういうオートモードに入っちゃったことありますけど」

「オ、オートモード？」

「漫画であるでしょ？　気絶とかして反射だけで常識はずれに強くなるアレですよ！　長船さんはアレを通常の状態でやってるってことです！」

ああん、もう！　と翠は嬉しそうだ。早く寺島さん終わらないかな！　一緒にサインをもらいにかなきゃ！

サインはいいんだが――津差は視線を一方に向けた。そこに立っている相馬一郎（そうまいちろう）がこちらに苛立った視線を向けてきている。彼はこれから第二コートでの試合で審判をやるのだろう。そしてその出場者の片方は津差の胸元でまだはしゃいでいた。

「翠ちゃん、その前にまず試合だろう。このままだと青野の不戦勝になるぞ」

うわ！　そうだった！　とこれまた騒がしく翠は走っていった。道すがら妹から木刀を受け取る。やれやれとかぶりを振った津差にさらに言葉が投げかけられ苦笑の度が深くなった。まったく、あの子は。いい年してガキだな。

「津差さん！　私って長船さんとあたるまでに何回勝てばいいんですか!?」

青野、怒るぞ。津差は苦笑した。そしてトーナメント表を眺める。遠い位置の書き文字を優れた視力で追っていった。

はじめ。勝負あり。耳に届く相馬の声は連続していた。それを聞きながらゆっくりと頭を振った。

確かに子供だ。ただし恐ろしい子供だった。

中田武美　対　内田信二

気合が入りすぎだ、と内田信二（うちだしんじ）は苦々しく向かいに立つ娘を見やった。第一期で現在第三層を歩んでいるものなのだから、戦いに臨んで気を落ち着けるすべは知っているだろう。となると今は常になく気が高ぶっているのだろうか。それでは負けたとしても敗北はしみこんでいかないだろう。少しクールダウンできないだろうか。

「ぶみよう」

「ぶみっていうなぁ！」

中田武美（なかたたけみ）はその名前を読みかえられることを嫌っていた。血の気の多い娘だからやりすぎるとこぶしが飛んでくることがあり、本気で嫌がっていることもわかるためこの街では内田を含んだ数人しかそう呼ぶことはない。その数人が殴られずに済んでいる理由は、ほとんどが年長者で愛情を込めて呼ぶために中田も反抗できないためだったが内田は同年輩である。遠慮なく殴りかかった。しかしいつだって簡単にこぶしを受け止められているのである。中田もその経験を思い出したのだろうか。表情に少しの苦味がはしり、一度深呼吸をした。

「俺に勝ってアマゾネス軍団に行くって？」

「な、なんで知ってるのよ。聞いたの？」

「うん。聞いた。でも俺に勝ったくらいじゃ説得力ないぞ。野村さんと南沢さんを押しのけるってな大変なことだぞ。わかってるか？」

わかってるわよ、と中田は吼えた。でも勝ち方次第だって真城さんは言ってくれたんだから！

「今までずっと内田さんには鍛えてもらったけど、ここで越えさせてもらうからね。藍より青しだよ」

言葉が終わるや、すうと腰を落とした。左腕の木剣はだらりと下げられている。ほう、と内田は目を細めた。確かに前に稽古をつけたときより力強く隙が少なくなっている気がする。真城さん、と胸のうちで呼びかけた。こいつ自身にもたぶん手ごたえがあるんだと思いますよ。

「でもまあ、お前はまだアマゾネス軍団は早いよ」

しかし口で言っても仕方のないことだ。それはわかっている。身体に叩き込むしかないことであり、それにはタイプの同じ自分が適任なのだ。クジ運のいい女だなと思った。そしてこの街では下手な技術よりも運とめぐり合わせの方が大切なものである。

予想に反して中田は反論してこなかった。二人の気合を感じたのか、単に会話が終わったからか審判が開始の合図を二人の間にもたらした。

開始の声と同時に中田が踏み込んできた。いい反応だった。この街でも右利きが多いため左腕からやってくる木剣には少々面食らうものだ。カウンターはあきらめて受け止める。その木剣は受け止めさせることが目的だったらしく女剣士はそのまま体勢を落として足払いにうつった。内田は背後に飛びのいてかわしながらその切り替えに感心した。まさに一瞬の遅滞なくという連携である。体重移動のスムーズさが、普段この娘が走りこんでいる距離を想像させた。

内田が着地するのと足払いを放った中田が立ち上がるのが同時だった。退いたばかりで勢いが後ろに向かっている内田を好機と見たか、今度は強烈な横なぎの木剣が襲いかかってくる。これは誘いではないのか？　先ほどとの気迫の違いに内田は両腕を利用してその斬撃を受け止めた。

会場が湧いた。内田の心も同じように歓声を上げていた。それは寸前まで甘く見ていた娘の動きに驚いたからだ。

両足を踏ん張っての斬り込みを受け止められた直後であるというのに、中田の右足はもう高く上げられていた。
そうか本命は！
呆然としながらも、記憶の中にある左足の位置へと足払いを送った。
ネリチャギだったか！
脳天への踵落としである。テコンドーの技で、漫画で読んで内田もこれだけは知っている。
格闘技の経験があるとは聞いていない。それでもこの娘の運動能力があれば真似事くらいはできるということか。ブーツの堅さ重さとヘルメットをかぶっていない内田とを考え合わせ、十分勝利を得られる攻撃だと判断したのだ。立派なものだった。当たるなら。
感心しながらしかし内田は慌てずに、最高点に達して動きが止まった瞬間の右足の膝の裏をつかんだ。同時に右足が中田の左足を強く蹴った。
「わあ」
つかんだ右の膝を左にそらし、足払いは蹴上げるほど強いものだった。両足を操縦不能にされた中田はどことなく間の抜けた悲鳴をあげる。そして重い音を立てて床に叩きつけられた。
慌てて起き上がろうとした中田のへそから下を踏みつけた。それだけで女剣士は動けなくなったようだった。その一瞬で、手から離れていた木剣をはじいて遠くにと動かす。
「ぶみよう」
「ぶみって――ぐむう」
少しつま先に力を入れ横隔膜の方向に力を伝えるだけで言葉は途切れた。
「お前にはとりあえず四つ問題があるな。まず一つ目は、フェイントの斬り込みが弱いことだ。お前は女でどうしようもなく非力なんだから、そんな弱い斬り込みじゃはじき返されて却って崩されるぞ。フェイントは使わないか、そのあとにほかの攻撃を混ぜるにせよ全力でやれ。何か動けばそれだけ隙が生まれるんだ。だったら相手を崩せないような動きは一切するな」
敗北した直後だから当然のことだが粛然として聞く気に

なったようだ。

「二つ目は、動きが遅すぎる。身体を動かす能力はとんでもなく高い――雑技団かと思ったぜ――大したものなんだから、あとは脳みその方をスピードに慣らすんだ。スピードってのは手に入れるもんじゃなくて、そこに棲むものなんだから。そうすればもっと速く動こうと思えるようになるだろうな。思うことさえできれば、それに対応できる身体はあるんだから、お前は」

そうだなあ、と視線を斜め上に向ける。それを隙と見たのだろうか。ブーツの下の腹筋が緊張を伝えてきて、再び体重をのせた。中田は潰れたカエルのような声を上げておとなしくなる。

「野球でもやったらどうだ？　いや女だったらテニスの方がいいか。とにかく人間や地下の奴らと切りあってたんじゃあ高い速度域にはいつまで経っても引っ越せないから、ほかの訓練方法を探した方がいい。何か、棒状のもので思い切りひっぱたく球技をやるといいと思うぞ。それか西谷さんにお願いしてサーキットコースで助手席に乗せてもらうか」

「オ、オス、師匠」

「三つ目はクジ運だ。動きの豊富さと身体のやわらかさがお前の武器なんだから、その両方とさらにスピードで上にいる俺と一回戦で当たるクジなんか引くな。津差さんを引けばよかったんだよ。お前なら華麗に勝ったぞ」

「え、えーと、それは私の問題では」

まあ確かにこれは理不尽だろうし、内田もクジ運がいいからこそ自分と早期に当たる場所を引き当てたのだと思っている。それは口に出さず内田は苦笑した。そして、ふと思い出して観客たちの一角を眺めた。そこには少々険しい顔をした女性が立っている。中田が加入を夢見ているアマゾネス軍団の長、真城雪（ましろゆき）だった。真城さん、と呼びかける。

「でも、ぶみは真城さんが心配するほどでもないですよ。少なくとも、もっと上の速度域に棲むようになればまった く見違えると思います。さっきの特撮みたいな身のこなし見たでしょう？」

うん、びっくりした。武美を甘く見てたみたいだわ、と

真城は頷くが相変わらずその顔は険しい。その視線には殺意すら感じられて内田はひるんだ。
「ところでお前、いつまで女の子のおなかに足を乗っけてるつもりなんだ？」
その低い声に慌てて切っ先を中田の喉にあて、そのかわりとして足を外した。
しかし審判の勝負ありの判定はなかった。どうしたのだろう？　と考えて思い当たる。審判も四つ目の問題点を伝える時間を与えるつもりなのだろう。
「四つ目は一番大事なことだ」
こくりと中田はつばを飲んだ。
「いくら前衛だっても女なんだから男に股の間に入られたら足を閉じろ。少しは恥じらいを持て」
真剣に聞こうとした反動か、顔が真っ赤になる。慌てて閉じようとする両足を笑ってまたぎ、やさしいとすらいえる声で授業終わり、と締めくくった。そして審判を見る。
「勝負あり！」
歓声と笑い声に一度手をあげて飲み物を置いた場所へと向かった。こんなものでどうだろうか？　視線を送った先で真城がほほえみ、目を閉じ、ぺこりと頭を下げた。

坂田直之　対　秋谷佳宗

勝負を終えてタオルを受け取ったあと、渡してくれた仲間が意外なことを告げた。真城雪（ましろゆき）がお茶のペットボトルだけをひったくって走り出したのはそのためである。知人全てに頼んでおいた用件は、ある数名の試合が始まるようならば必ず呼んでくれというものだ。その中でももっとも観戦したかったものが、真城の試合とほぼ同時に始まったというのだ。行き交い立ち並ぶ人々に謝りながらかきわけ試合場の白線のすぐ脇まで到着したまさに目の前で勝負は終わっていた。坂田直之（さかたなおゆき）という第一期の戦士が呆然と手元を眺めている。両手に握られているべき木剣は、二人から少し離れた床に放り出されていた。
見逃した、と歯噛みしたい思いを抑えつつあたりをすこ

し見回した。知った顔を白線を越えた試合場の向かい側に見つける。
「真壁！」
声を呼ばれた男は視線を上げ、自分に気がついたようだった。笑顔で手を振るその姿はすでにツナギを着替えている。礼を終えた試合場の二人に降り注ぐ拍手の中、真城は試合場に踏み込んだ。
「真壁、お前は出なかったのかい？」
真壁啓一（まかべけいいち）は少し傷ついた顔をしてからもう負けました、と正直に言う。真城は笑った。実際に負けた姿を見ていたのだから。あまりに早い変わり身にからかいたくなっただけだった。
「ところで、今のヨシムネの試合は見ていた？」
見てましたよ、という言葉に詳細を尋ねる。真城はこの男の性格をよく知っていたがそれだけではなく、秀でた観察力のことも知っていたのだ。
「最初から秋谷さんが優勢で、くるくると二回転くらいしたら坂田さんの剣が飛ばされてました」
「回転した？」
話題にあがっている秋谷佳宗（あきたによしむね）はもとの職業がバレエダンサーであり、噂では帝国劇場の公演でバックダンサーを務めたこともあると言われている。もしそれが事実ならばまさに一流と言っていいだろう。だから回転できることに不思議はない。不思議なのは、目の前で回転された坂田直之（さかたなおゆき）がそこで切りかからなかった点だった。真壁、と既に自分のことを気にせずにほかの試合場の顔ぶれを眺めている男に声をかける。怪訝そうな顔に命じた。
「ヨシムネがやったように、ちょっとまわってみて」
え。いぶかしげな顔に、いいから、とさらに命じる。
真壁は一瞬だけ視線をあげて考え込んだ。そして、こうかなとくるりと回転してみせる。それは、さすがは元体操部だというだけはある躍動的な回転だった。しかしこれなら自分は反射で切りかかる。坂田だって同じだろう。どうして二回転もさせるままにしていたのだろう？
「真壁くん、首の使い方がなってないよ」
二人して視線を送った先にいるのは勝者である秋谷だっ

た。タオルを肩にかけ、片手にはペットボトルを持って笑顔で歩いてくる。そして二人の少し前で突然回転した。つま先立ちで、肘を上げた左腕を振ることで勢いを生み、斜めに下げた右腕でバランスをとり、そして――

「なるほど、首ね」

真壁が疑問をこめた目で二人を見交わす。真壁に説明する、と言うより間違っていたら秋谷に訂正してもらうために真城は口を開いた。

「バレエの回転は片足を中心にしてまわる。勢いを生むのは回転する側へ振る腕と蹴り足と、あとは首なのね」

秋谷がうなずいた。

「身体の向きにあわせて首の向きも変わるのかと思い込んでいたけど、そうじゃないのね。首の柔らかさが許すぎりぎりまで首は同じ方向を見るため回転とは逆にねじり、限界で一気に身体と同じように回転させる。それが一回点の最後に加速するエネルギーを生み出すのか」

その通り、と秋谷は笑顔を浮かべた。一見して理解するなんて、やっぱり真城さんはバレエをやるべきですよ。

「身長はあるしルックスはコールド勝ちだし、運動神経もいい。三年みっちりやればオーチャードホールで主役張れるダンサーになれますよ」

偽りなく本心からとわかる賛辞に反射的に笑顔を浮かべながらも頭はうなりを上げている。

「真壁。ヨシムネはフェイントが多かった？」

そうですね、と真壁は考え込み、ちらりと秋谷を伺う視線を投げた。秋谷は動じずに手振りで続けるように促す。

「フェイントは多かったけど、それは全部わかりやすかったと思います。動きは小さいんですけど目を見てればフェイントかそうじゃないかよくわかりました。――そうか、だから」

「坂田くんにも当然フェイントは読めていた。だから坂田くんは、見破るためにいつもよりも目を見るようになった。そこにあの回転だ」

身体は回転している。しかし視線は自分を縛り付ける。動くべきか、動かざるべきか。予想外の出来事に思わず躊躇してもおかしくはなかった。そして視線が途切れ呪縛が

解けたと思った回転の最後の瞬間には木剣は自分の手から弾き飛ばされている。
「坂田さんは慎重で反射神経もいいから長期戦になりそうでしたからね。わざとフェイントを見破らせて意識を目に集めて、旋回する力を全部こめて木剣弾きました。トーナメントは長いんだから楽できるところは楽しないとね」
その落ち着きはさすがに現状の最下層である第四層を歩いているだけのことはある。
「でも、いいのかな。私とはベスト8を決めるところでぶつかるんだけど、そんなに簡単に秘密を教えちゃって」
秋谷は肩をすくめた。
「真城さん相手にこんな子供だましは使いませんよ。総力戦です」
不敵に笑う。一礼すると、彼の仲間たちの方へと歩いていった。その背中までもが優美だった。
「しんどいなあ、あれが相手だと」
思わず漏れたため息に同情するように真壁はうなずいた。

野村悠樹　対　青柳誠真　①

見上げる視線の先には仲間の娘の笑顔があった。青柳誠真はゆっくりと立ち上がるとポケットからしおりを取り出した。薄い木片で、自分が初めて修行した寺の朱印をそのまま書き写してある。もう一人が手渡してくれたリュックに本をしまいこんでから、彼の服装に目をみはった。
「真壁くん、もう着替えたのか」
真壁啓一（まかべけいいち）はこともなげに笑ってうなずいた。今日はもう見物モードです。
「終わって一五分くらいしたらもう着替えてたんですよ真壁さん。まるで最初から負けたかったみたい」
笠置町葵（かさぎまちあおい）が横目でじろりと真壁をにらんだ。真壁はあんな重いもの着てられますかと相手にもしない。
頼りにならないんだから！　と口を尖らせる娘が一転して自分に視線を向けてきた。期待が込められているのがわかり、青柳は大げさに目をそらした。
「あー！　弱気だ！　青柳さん弱気だ！」
「真壁くんや」

真壁と苦笑を見合わせた。うちのお姫さまは家来につらくあたるようになってしまわれたな。

「同感にござる」

「ちがいますよう！　私はただ、真壁さんみたいに呆気なく終わってほしくないというだけで」

「小笠原さんはつらかったかい」

「結果もそうでしたけど、試合開始前からコロコロ転がされていた気がします」

そうだった。組み打ちの心得があるために懐に飛び込まれても対応できることを隠した上で、自分のリーチを見せ付けるような動きばかりしていた。あれが一流の戦士なのかと終わってみて初めて気づけたのだ。

「オセロで」

真壁の言葉に我に返る。

「オセロで、最後の数手でがらっと色が変わってしまう展開があるじゃないですか。あんな感じでしたよ」

ちらりと真壁の表情を盗み見た。そこにあるのは紛れもない悔しさの色である。深い付き合いの青柳は、この晴朗で穏やかな若者の中にある熱を知っていた。先ほどまで彼に対する不満をのべていたお姫さまも今はおとなしくしている。芯のところではわかっているのだ。

「相手は野村くんだ。真壁くんには悪いが小笠原さんよりさらにタチが悪い」

ご武運を。真壁がまじめくさった表情でいい、葵は胸の前で何かを打ち合わせる手つきをした。一瞬だけ考えて、それが火打石の真似だと思い至る。思わず吹き出したら娘も笑顔になった。

実力差は百も承知である。しかし勝ちたいと心から思った。津差龍一郎や笠置町翠が勝ち進むことは第二期の手柄にはならない。自分や真壁、相馬一郎といった通常の体格と経歴の人間が山を登ってこそ第一期たちに一矢報いたことになるのだ。

は、と小さく息を吐いた。

「いいなあ」

のんびりした声がかけられ、野村悠樹は顔を起こした。ツナギ姿に包まれた笑顔はなじみのもので、名前を内田信二という。彼とほとんど同じ時期にこの街にやってきた男であり、年齢も近いから親しくしていた。精鋭部隊の一角で長いこと戦い抜いてきた、少々小柄だが俊敏な身のこなしと判断の速さで評判になる一流の戦士である。

「何がだ？」

青柳さんの相手、とうらやましそうに続けた。野村は理由がわからずもう一度顔を見返してしまう。

「言うほど楽じゃないと思うぞ。第二期とはいえ自警団にも入っているし、評判では真壁くんとほぼ互角だそうだ。俺たちだって油断していい相手じゃない」

内田はきょとんとした顔をした。そうすると童顔とあいまって無性にかわいらしくなる。無骨一辺倒の野村とは対極にある顔だったが、これでいてともに優れた戦士なのだ。

「だって青柳さんって、黒田さんと同じ体質でしょ」

そうか、と青柳は納得した。

ひょんなことから地下で発見された特殊な石が、地下限定で金属の硬度を高めてくれることは全ての探索者が知っている事実である。先日からは新人探索者のマニュアルにも記載されたという話だったから、事業団としてもその効果は（原理はともかくとして）正式に認めたことになる。理事は知らないが徳永という事務の責任者はあやふやな希望を探索者に与えることを厳に戒めているから本当に効果があるのだ。

そしてその石の情報が波及する際にある男の体質についての知識も副次的に広まっていた。

その男の名を黒田聡という。野村や内田と同じく精鋭部隊の一角で戦い抜いた超一流の戦士であり、今回の優勝候補の筆頭でもある。その彼の体質とは、その石が自動で行うように地下のエーテルを集め、ツナギや鉄剣の硬度を高めるというものだった。

「野村は強化剣を使ったことはなかった？」

「今度のゴンドラ警備からだ。ようやく見つかった」

地下から産出されるその石も、全てが全て鉄剣を強化できるほどの効果があるわけではない。大半は役に立たず、事業団がゴンドラの材質補強のために買い取っていた。加えて産出されるのがほとんど第四層に限られていることもあり、第一期の戦士たちとはいえ強化された鉄剣を身につけている人間はほとんどいなかった。その中で目の前の内田が使用しているのは、スピード重視の戦い方をする人間のサンプルとして鍛冶師たちから貸与されているからである。

そして野村は内田について聞いた話を思い出した。その男は、強化剣を使うことによって内田の戦力が跳ね上がったと言ったのだ。

「もともと筋力に自信がある方じゃなかっただろうから、これまでスピードを殺してでも力を込めていたんだと思うよ。それがあの剣で、ムリな力を入れる必要がなくなった。数倍速くなって、刃先もこれまでより半分以下に細くなるほど研ぎをかけている。ちょっと今の内田の相手はしたくないな」

効果のほどは知らない。しかし戦い方が劇的に変わるのならば相当の衝撃だったはずだ。目の前でみられる内田のはしゃぎようも頷けるものだった。

そして内田は注目したのだ。石の助けを借りずに同じ効果を再現している人間がいることに。同じくエーテルを操る術師たちは脳裏にイメージを描くことで操作するという。であれば黒田の特殊能力も体質にもとづくものではないかもしれない。その思考法になにかヒントがあるのではないか。それをつかめば自分にも可能なのではないか。そう思ったとしても無理はなかった。

しかし問題があった。黒田の実力である。地下の再現なのだから、全力を出してもらいたい。だから基本的に稽古の場では望めないことかもしれない。しかし優勝候補の筆頭に挙げられるだけあって、野村も内田も意地でも及ばないとは言わないものの、真剣勝負の中で観察する余裕など持てなかった。

ところが、第二期の中にもまた同じことを成し遂げている戦士がいるという。これから野村が戦う青柳がそうだっ

た。黒田に比べれば扱いやすいであろう青柳だったら観察しヒントをつかめるのではないだろうか。それが内田が描いた筋書きなのだろう。だから内田は野村をうらやましがったのだ。

「なるほど」

野村はうなずいて立ち上がった。そして内田を軽く見下ろす。

「そういうことなら、青柳さんの持てるものを全部引き出せるように努力しよう。見ていて何かわかったら俺にも教えてくれ」

期待通りの言葉だったのだろうか。満面の笑顔にこちらも笑みを返すと試合場の向かいに待機している男を見つめた。しっかりとヘルメットをかぶっているその姿、雰囲気に背筋が少しあわ立った。

「全部引き出すんだよな」

「がんばってな」

「立ち上がり際で瞬殺はいかんよなやっぱり」

「そりゃそうだ」

「遠間から蹴りで仕留めるのもだめだな」

「当たり前だろ」

そう言ってさらにじっと青柳を見つめた。

「だめだ、ありゃ勝ち方選べる相手じゃない。ヘルメット取ってくれ」

「なんだい、びびったのか」

平然とした言葉を聞いてちらりと疑問がわきあがった。この男はどうして俺と同じ場所に立ち同じように青柳の姿を見ながらそれほどのんきでいられるのか。あそこのもと僧侶を取るに足りないとでも思っているのか。それほどの実力差はないはずだった。そしてひらめくものがあった。内田、と本人の顔を見ないで呟く。

「お前、俺を負けさせるつもりだったろ」

まさか！　という否定の声はしかし笑いを含んでいた。図星を貫いたのだろう。なまじ手心を加えるようでは万一に食い破られかねない。そんな気迫が第二期の戦士には満ち満ちている。そして野村が負ければ内田はもう一試合観戦できるのだ。

顔を向けずに手を伸ばす。渡されたヘルメットをしっかりとかぶりベルトをしめた。

野村悠樹　対　青柳誠真　③

空気が陽炎のように揺れた気がした。もちろん一瞬後には通常の景色である。他の感覚が一時的に視覚に干渉したのだと青柳誠真（あおやぎせいしん）は知っている。

本気になったらしい。

目の前の野村悠樹は優勝候補の一角に名前を並べている相手だ。青柳より一年以上前にこの街にやってきて、戦士としてのエリートコースを歩んできたと聞いている。剣を振るっての戦いだけではなく、それまで身につけていた空手の実力によってもその名声は響き渡っていた。第二期の中であっても決して筆頭に名前があがることのない自分との実力差は大きなものがあった。だからどこか甘く見られると思っていたし寸前まではくだけた雰囲気があった。それがこちらを眺めながら内田信二（うちだしんじ）という男と話すうちに切り替わった。油断するなとでも言われたのだろう。

ありがたい。

開始線に向けて歩きながら青柳の心によぎったのは紛れもない安堵の念だった。油断してくれなくてよかったと心から思っているのだ。

自分の特殊な体質のことは聞いている。自然とエーテルを集めツナギや鉄剣を強化しているらしい。以前、部隊の仲間にそのことについて訊かれ、確かに地下と地上では何かを殴ったときの手ごたえが全く違うということを話した覚えがある。彼はそれを体質のせいだと考えていた。

青柳自身は違うのではないかと考えている。単に地上では緊張感が足らずにぴりっとしないからではないかと。

この街に来て、基本になる四つの職業の中からどれにつくかと選ばされた。普通は適性検査の結果で不可能と判断されるものがあるが、青柳は全て適性ありと判断されたのである。そして戦士を選んだ。

迷いがあったからだ。地下に化け物が巣食っており地上

の弱者に危害を加えるならばどうにかせねばならぬ。言葉が通じず人間を食料とみなし武器を使い道具を使い卑怯な手段を使い、人間の得手ではない闇の中から自由に現れては女子供を殺める生き物がいるならばそれは悪鬼であり羅刹だった。悪鬼滅ぼさざるべからず。その一念は一生揺らぐことはない。

それでも、自分が前線にあって切りあうことができるのかという不安はずっとあった。自分の度胸が不安だったのだ。もし度胸がないのならば後衛にあって戦う気力のある者たちを補佐する方がよいのではないのか。その思いもあった。

結局は前線に立つことを選んだ。後衛でだましだましやっていても、いずれはだましきれない時がくるだろう。それを伸ばせば伸ばすほど仲間たちに迷惑がかかるのだ。ならば最初から前線にあって自分を命がけで試そう。恐怖に負けるなら死ねばいい。地上に近ければ仲間はなんとか逃げ出せるだろう。

だから、実力にあって際立っていると評判の理事の娘から仲間にと請われたとき、すでにあった約束を反故にしてでも応じたのだった。当時ですでに街で最上級の実力を備えているという双子が仲間にいるならば、自分が結局臆病者として死んだところで他の仲間は地上に帰れるだろう。

断りの電話を入れた時にも抗議の言葉は聞かれなかった。失望を何とか隠そうとしながら、努めて明るく「お互いの武運を」と言われその若者を巻き込まずに済んで良かったと心底に喜んだものだ。

予想に反して地下での戦闘で自分が怖気づくことはなかった。混じり気のない殺意を前にして、これまで稽古で一度も出せなかった渾身の力がすんなりと発揮できたのだ。相変わらず地上では本気になれなかったが、そんなことは問題ではない。地上で暴力を振るう必要などないのだから。だから、地上では走りこみと素振りを重視して身体能力を高めた。

審判の狩野謙が二人に視線を送った。無言で頷く。その瞬間にさらに目の前の男からの圧力が強くなった。

これは――これは。これは第三層より恐ろしい。

開始の号令で野村の姿が大きくなった。同時の踏み込みだった。右足がするすると自分の左スネをめがけて寄ってくる。空手家の得意である下段蹴りである、と意識した瞬間にはもうスネを激痛が襲っていた。格闘技の達者の習熟した技の速度は、経験のない素人が対応できるものではないのだ。

対応できるものではない。しかし耐えることはできる。激痛に萎えそうな膝に力を込め、一歩を踏み込んだ。左肩を思い切り野村の胸に叩きつける。これで一歩でも退かせることができれば——

しかし野村の身体は微動だにしなかった。両太ももがツナギを一杯にふくらませて耐えている。

空手家というのはこれほどのものなのか。

慄然（りつぜん）としながらも反射的に左手を伸ばしていた。下段蹴りを放った直後のためにすこし前に出されている右太ももののツナギをつかむ。そして一気にひっぱりあげた。

「うおっ!?」

これは予想していなかったのか、右足は大地から引っこ抜かれた。これで残る左足を払えば転倒させることができる。そう思い視線を送ったとき、信じられないものを見た。

左足は消失していた。どこに？　と慌てて見渡す前にみぞおちに何かが当てられた。ブーツの裏地だった。

思い切りみぞおちを蹴られた。呼吸不能になりながら、今度は太ももを掴んでいた左腕が引っ張られるのを感じる。野村は浮きながら青柳の身体を蹴ったのだから身体は後ろに向かうはずで、それにツナギを掴んだ手が引かれているのだ。懸命の力でツナギを握りしめだ。

「うおっ!?」

またもやの野村の叫び声は、自分が後ろへ跳ねようとした動きがツナギを掴む腕に完全に押しとどめられたからだろう。その身体は空中で静止していた。

これは意地でも放さない。このまま床に叩きつけてやる。

その決意と同時だろうか。野村の右の、太ももを掴まれているつま先が青柳の脇の下を蹴った。同時にどちらかの腕が軽く手首をはたいている。その二つの衝撃だけでなぜか放さないという決意の指が開いていた。自分の指を呆然

として見る。
そして、衝撃。自由になった右足が掴むものを失った左腕を蹴ったのだった。それが前へ出ようという青柳の勢いを完全に殺し、なすすべなく見守る前で野村は後方に反り返り両腕で着地し、バク転の要領で距離を開いていた。さらに数歩を後じさる。そこでぴたりと直立し、しっかりと青柳を見据えた。
青柳は苦い思いでその顔を見る。あれだけ激しく動いたにも関わらず余裕のある表情だった。実力差は自分が思っていたよりずっとあると認めざるを得なかった。
でも、と自分を慰める。野村の気迫に引きずられて、自分もかなり思うように身体を動かせている。これまはるで地下にいる時のようだった。訓練場にあって切り合いの稽古をしている自分とは全く別の動きができるということだ。今の自分ならば真壁や相馬といった第二期のエリートたちとも互角に戦えるはずだ。少なくとも野村の予想よりは確実にいい動きができる。
それほど悪い状況ではないのだ。きつく木剣をにぎりしめた。

野村悠樹　対　青柳誠真　④

やるね。野村の脳裏には賛嘆ともいえる思いがあった。握力、足腰をはじめとする身体能力もそうだが太ももものツナギを掴む判断も決して逃げない強固な意志もいい。これはもう、第一期第二期という分類法は意味を成さなくなっているのではないか。常の印象が結実した気分である。
目標があると違うのかな。小さく切り込まれた木剣を軽くいなし、近い距離から肩を青柳の胸に当てる。そして足払いの真似をすると軽快に距離をとられた。よく気づいたな、とまた感心する。
まだ……三ヶ月くらいか。呼吸を整える様子を眺めながらカレンダーを思い浮かべる。青柳を含む第二期探索者がこの街にやって来はじめてからである。運動神経がよく身体が鍛えられていたとはいえよくもまあ二ヶ月余りでここ

まで強くなるものだと感心するのだった。友人はそれを才能の違いと認識しているが野村はそうとは思わない。第一期と違い第二期の面々には格好の手本があるだけだと思っている。ともあれ、何らかの要素が大変な速度での成長を実現していることは確かだった。

青柳がぐっと腰を下ろした。攻勢から一転、こんどは長期戦を選ぶつもりだろうか？　途端に暑苦しく感じられ汗が額に汗がにじんだ。

この人と黒田さんの共通点か。

目の前の戦士と同じくエーテルを無意識に利用する体質である男、黒田聡（くろださとし）を思い出す。目の前の男より長身で頑強、それでいて細い身体をそこに重ねた。

あれ？　似てるか？

意外にもそう思った。もと僧侶と女癖の悪い美男子に共通点があることが意外だったが、どこかわからずしかし似ていると野村は感じている。

どこだろう。試すつもりでするすると歩を進め、木剣の間合いの一歩手前で長い蹴りを放つ。まともに肩に受けて青柳はたたらを踏んだ。さらに小さくスネへの蹴りを放ち、胸へ右拳を叩き込む。スネも胸も青柳は避けようとせず、逆に身体をぶつけてきた。その予想外の手ごたえと青柳の身体が後退しなかった計算外に、野村はまた一歩を退いた。

青柳はそこを逃さなかった。鋭く踏み込まれて全身の毛が逆立つ。腕は反射的に動き、鎖骨の下に拳を叩き込んでいた。

会場の音が途切れた。青柳の足も止まっていた。

青柳の上体が揺れ、しかし眼光だけは野村を射抜く。さらに突きこむかと伺う目の前で、ぐらりと野村に向けて倒れかかった。

反射的に野村が飛びのいたため、重い音を立てて青柳は床に叩きつけられていた。あちゃあ、と脱力した声が聞こえる。

「よけるのはひでえな、野村」

審判の狩野が呆れたように言う。反論する気力もなく、野村は青柳の身体をじっと見つめた。そのそばに狩野が座り込む。

「まだやる、青柳くん？」
反応はない。一突きで意識を失ったのだ。
勝ちを宣言され、青柳の部隊の仲間たちが気絶した彼を助け起こす様子を見届けてから、野村は自分の荷物のもとに戻っていった。ひやかすように内田が笑みを浮かべていた。なんだよ、と無愛想な声を投げる。
「別にい。余裕のない勝ち方だったなと思って」
野村は振り返った。肩を貸されて担ぎ上げられたところで青柳も気がついたらしく、仲間の力を借りてはいるものの自分の力で歩いているようだ。
「ああ。最後は真剣に殴った。余裕はなかったな。――内田。黒田さんとの共通点がわかったよ」
内田の表情がぴりっと引き締まった。
「青柳さんも黒田さんも、戦っているときの気迫のブレが恐ろしいほどに少ない。常に可能な限りの高い集中力と戦意を保っている気がする」
内田は考え込んだ。
「エーテルの利用も、もしかしたら俺たちもできているかもしれないってことか。少なくとも瞬間的には」
野村はうなずいた。経験を積む、とは毎回の行動や状態を結果によって採点し、成功であるならば次回に再現しようというメカニズムである。それは意識してでもあるし、無意識でもある。
たとえばある精神状態で戦いに臨んだ場合に鉄剣とツナギの硬度がわずかに高まることを発見したらどうなるか。意識ではつかめない微細な変化であろうとも延髄はそれを成功体験として次に伝えるだろう。次はその精神状態を足がかりにしてよりよい状態を模索する。そうして、本人が戦いに臨む際にもっともふさわしい心のありようを身体そのものが探していく。それが経験の蓄積というものだ。
だが、普通の人間では生死の境で同じ精神状態を保つことはできない。爪牙が迫ればひるみ、とどめを刺せば安堵し、仲間が傷つけば心配し、そして常に死の恐怖に苦しむ。それが人間のはずだった。だから身体がいかに最適の精神状態を探し当てようとも実践できるわけがない。はずだった。

普通の人間ならば。畏怖とともに青柳の眼光を思い出す。その光に射すくめられたのではない。目の力で考えるならばあるタフな友人の方が万倍も恐ろしい。野村が震えたのは、意識を刈り取るほどの突きをくらいながらその目にあらゆる動揺が生まれなかったことだ。それができれば、戦いのあいだ常にエーテルを利用する心のありかたを続けられるのではないだろうか。

事実は実験室からでしか生まれない。

懇意にしているある科学者の言葉を思い出して苦笑した。野村のこの推測も、証明できなければ何の価値もないものだった。頭を振った。そしてもう一度、試合場から離れた場所に横たわり、つらそうに胸を上下させている男をみやった。とりあえず一つだけは確信できることがある。

すぐに第一期と第二期の境は考えなくてよくなるだろう。あれだけ心が揺れない男は、あと一ヶ月と待たずに自分たちと肩を並べる存在になるはずだ。

「俺もお経でも読むかな」

内田の呟きを聞いて口の端をあげた。この男も同じようにもと僧侶の力を実感したのだろう。そして首筋の汗をぬぐった。自分でも驚くほどの水分を感じた。

野村悠樹　対　青柳誠真　⑤

土嚢に腰掛けるとすぐにやってきた顔があった。誰か知って野村悠樹は少し身をのけぞらせた。

「どうも、片岡さん」

迷宮探索事業団に雇われた鍛冶師の一人、片岡宗一である。鍛冶師と探索者とはよく酔って喧嘩をするが、その際に常に顔をあわせる強敵でもあった。この男、そして千代田恭一という二人にだけは通常は封印している空手の技を使うようにしていた。その二人は早期に潰さないと探索者側が負ける可能性があるためだ。

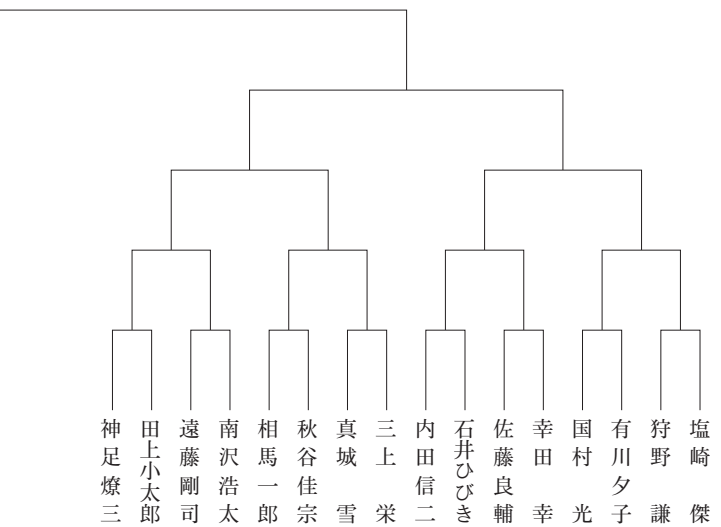
しかし当然のことながら片岡は酔ってもおらず因縁をつけに来たわけでもなく、野村は思い至った。

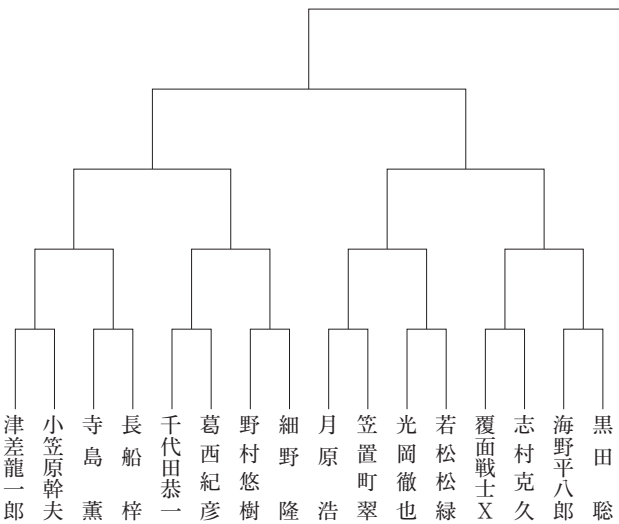
「ツナギかあ。そうか！」

片岡の表情は真剣だった。続く言葉を待つ。
「青柳さんのショルダーアタック食らったとき、どうにも衝撃が少ないと思ったんだ。ツナギのおかげですか？」
確かに今思えば、よく踏みとどまれたと思う一撃だったのだ。それも、今朝いきなり渡された実験作のツナギのお陰と考えれば合点がいった。片岡もそっけなく頷いた。
「だとしたらすごいですよ、これ――」
「そんなことはどうでもいい」
賞賛の言葉は真剣な眼光と声に押しつぶされた。
「青柳くんが太ももを掴んだときだ。お前が青柳くんを蹴って飛びのこうとしたとき、彼は太ももを掴む握力だけでその勢いを殺した。そんなことができるわけないだろう」
ああ、とぽんと手を打つ。そして掴まれた右ももを見下ろしぎょっとした。そこには五つの穴が穿たれて内部の綿が見える。
「お前のツナギは綿を分厚くしてなおかつ軽さを追求したものだ。だから外側の布地は変えていない」
そしてひざまずき、しげしげとツナギの表面を眺めた。
「生地の千切れ方に乱れがない。じりじりとちぎられたのではなく、掴んだ一発目でもう指がめり込んだな、こりゃ」
立ち上がって大きくため息をつく。
「青柳くんの握力を測らせてもらう必要はあるが、彼だってゴリラ並ということはないだろう。やっぱりこのままじゃ実戦には使えないな。表面の生地の材質に工夫が必要か、やっぱり内部の綿をもっと薄くするか」
そして腕を組みながら歩き去ろうとする。慌てて声をかけた。
「応急処置くらいしてくれないんですか？　これからの試合で掴まれてしまいますよ、これ」
「いいぞ、それでも。切れ目が入ったときの強度を調べられて丁度いい」
あの鍛冶師にとっては自分の勝ち負けは大したことじゃないらしい。苦笑してポケットから安全ピンを取り出した。内側にめり込むように破れた生地を元に戻し、簡単に安全ピンで留める。留めようとした。
針が生地を貫いたのはかなり強い力を込めてからだった。

これを指先だけで破く力はどれほどのものだというのか。
もし分厚い綿がなかったらどうなっていたことだろう。
「薄くされないでよかったよ」
呟いて細く長く息を吐いた。

第三章　第二回戦


神足燎三
田上小太郎
遠藤剛司
南沢浩太
相馬一郎
秋谷佳宗
真城雪
三上栄
内田信二
石井ひびき
佐藤良輔
幸田幸
国村光
有川夕子
狩野謙
塩崎傑


津差龍一郎
小笠原幹夫
寺島　薫
長船　梓
千代田恭一
葛西紀彦
野村悠樹
細野　隆
月原　浩
笠置町翠
光岡徹也
若松松緑
覆面戦士X
志村克久
海野平八郎
黒田　聡

海野平八郎　対　黒田聡

おつかれ、と渡されたタオルを受け取ったものの黒田聡は汗一つかいていない。相手は同じく第一期の戦士だったがいまだ第二層でくすぶっている相手であり、もう大きな差が開いていた。ついでお茶のペットボトルを受け取りながら、高田まり子に感謝の笑顔を向ける。

「あっちで野村くんと青柳さんの試合があったよ。野村君、けっこう苦戦してた」

うわあ、と他人事のように思う。六回も勝ち抜かなければならないこのトーナメントだったから、組み合わせの運が大きく影響してくるのは明らかだ。もともとある一線を越えたら実力的には大きな差はない。であれば心身を削りあう試合を経過していない方が勝つのは当たり前のことだった。自分のトーナメント表を見下ろしてにんまりと笑う。彼が所属するBグループには名だたる戦士としては自分と笠置町翠のみ。道場剣法となると分が悪い相手だったが、彼女は黒田とあたる前の三試合全てが第一期の、自分たち精鋭部隊のすぐ後につづく第三層を探索中の戦士たちである。いくらなんでも疲労困憊しているだろう。その彼女に勝つのは難しいことではなく、おそらく黒田はもっともいい状態でベスト8に進むことができるはずだ。このトーナメント、もらったね。そう言うと魔女姫は強気だね！　と感心したように目を丸くした。

問題は、とトーナメントを眺める。次にあたる『覆面戦士X』という名前だが――まあ、正体が誰にせよ出てこられて怖いのは理事と教官、そして星野幸樹という自衛隊の士官だけだった。理事と教官だったらもうあきらめるとして、残りは星野である。彼が自衛隊の任務についているのはわざわざ人をやって確認させた。それ以外であれば誰が出てきても大丈夫だ。

「あ、あそこの試合だね」

高田の言葉に試合場に視線を向けた。四角の白線のなかには見慣れた第二期の戦士の一人と小柄な人物がいた。両手にだらりと短い木刀をたらし、顔にはひょっとこのお面をつけている。ピンク色の地に花が咲き乱れているそのツナギに見覚えはなかったが――両刀？　いやな予感がする。

開始の言葉と同時にお面の戦士が間合いを詰めた。そして相手が慌てて掲げようとした木剣に右手の木刀を、左の木刀はそのみぞおちにぴったりとつけた。会場がしんと静まった。

それまで、の言葉に割れるような拍手喝采が起きる。後衛といえども連戦の見巧者、お面の剣士の並外れた実力を見切ったのだった。お約束を破って「秀美ちゃーん！」という声がかかり、慌てひょっとこ剣士が口の前に人差し指を立てた。

爆笑のなか、黒田は魔女姫の視線を感じた。楽勝？　と問い掛ける意地悪な微笑に笑みを返す。こわばった笑みを。

「とりあえず、あのお面はなんとか外させよう。それが目標ですね」

そう言うと魔女姫は弱気だね！　と苦笑した。弱気も仕方ない。一対一の殺し合いならともかく道場剣法ではきちんと教育を受けた彼女の二刀小太刀にかなうとはとても思えなかった。おそらく笠置町翠（かさぎまちみどり）でもムリだ。

志村克久　対　覆面戦士X

自分の吐息がお面にこもり、水滴となっているのが感じられる。先ほどから鈴木秀美（すずきひでみ）が必死になってしていることは、水滴が流れ落ちる前に舐め取ることだ。それを忘れると水滴がお面のあごから滴り落ちてしまう。それはまるでヨダレみたいだ。花も恥らう乙女がヨダレを垂らしていると思われていいものか。よくない。

「こんなお面やめればよかった……」

惨めな思いで呟くが後戻りはできない。トーナメント表には『覆面戦士X』と大書されているのだから。同居人から七二人分のトーナメント表を作ってくれと言われたとき、自分も参加したいというコメントとともに七三人分のものを作って送った。本名を使わなかったのは、サラブレッドと呼ばれる自分の前評判に比して活躍できずに終わることを恐れた、少しでもおちゃらかしにしたかった気持ちが生んだほんの冗談だった。お面は昨年末に兄が見舞いにやってきたときになぜか持ってきたものだ。

しかし、今さら何もなく外すのもなあ。

どうしよう、と頭を抱えていたからだろうか、自分の名前を呼ばれたことにすぐには気づけなかった。数秒のためらいのあとに覆面戦士X、と呼ばれて思わずお面の下で赤面する。なんて名前で呼ぶんだこの人、と自分を棚に上げて腹を立てた。

先ほどの対戦相手だった。名前はなんと言ったろう？

「そのツナギ、君がデザインしたの？」

意外な言葉にまばたきをする。そして一瞬だけ身構えた。このツナギは大事なものだったからだ。もしもデザインにケチでもつけようものならぶん殴ってやる。試合は私が勝ったんだぞ。私の方が強いんだからね。

「いえ」

お面の中で声がくぐもったが、否定は伝わったと思われた。友達がデザインしてくれたんです。

「友達ってもしかして今泉博（いまいずみひろし）？」

予想外の名前に目を見開いた。警戒すら忘れてただ呆然と首を上下に振る。男は嬉しそうに笑った。予想が当たったことがそんなに嬉しかったのだろうか？　かすかに疑問に思う。

「ああ、ごめんなさい」

志村といいます、と男は自己紹介した。自分や名前の挙げられた今泉よりは少し年上で、二十代の半ばだろうか。志村、という名前に聴き覚えがあって記憶をたどった。

「あ。美大出身の」

今泉くんから聞いてました。その言葉に男――志村克久（しむらかつひさ）は嬉しそうに笑った。かつて彼女と同じ部隊に所属した今泉という少年は、自分と同い年ながらも画家になりたいというしっかりとした目標を持ってそのために努力していた。探索者として取り柄があるとも思えない彼に鈴木がなんとなく惹かれたのは、その衆を抜いて際立っていた美貌が主原因ではなく（もちろん原因の大きな一部にはなっていたけれど）しっかりと前を見据える信念があったためだろう。それは漠然と女子高～女子大～ＯＬ～結婚という人生を思い描いていた自分にはなかったものだからだ。

平均年齢の高かった部隊にあってお互い一八才の二人はすぐに意気投合した。そして鈴木はツナギのデザインを今

泉に頼んだ。何でもいいから、私に似合うものを。頼んだのは知り合ってすぐのことで、実際にデザイン画を見せられたのはそれから一ヶ月ちかく経ってからのことだ。すっかり忘れられていたと思い込んでいただけに嬉しかった。

「そうか、それは完成したのか。よかった」

お面の目の穴から見上げる志村の顔は陰になっていてよくわからない。表情を読み取ろうと目を凝らしているうちに志村があとを続けた。

「ああ、ごめんなさい。俺は今泉君とはモルグで隣りのベッドだったんだよ。だから彼がずっと、それこそ毎晩のようにその花柄のデザインを悩んでるのを見ていたんだ。彼はあんなことになってしまったけれど、そのデザインのツナギは出来上がってたんだな」

気になっていたんだ。よかったよ。そう言って志村は手を伸ばした。鈴木はしかし、投げられた言葉が脳裏で鳴り響いていて肘をそっとつかまれても動けなかった。志村は腕を引っ張り上げ、まじまじとその花柄を見つめた。

この男は美大出身と聞いている。自分より美醜を裁く目を持っているということだ。その男が柄を眺める空気が暖かいことが彼女を嬉しくさせていた。

たっぷり五回ほどの呼吸のあとで、志村は一言いい出来だと呟いた。本当に惜しい奴だった、と続く。鈴木はぺこりと頭を下げた。

「今泉くん、ずっとこのデザインを悩んでたんですか？」

思わずの質問には穏やかな肯定のうなずきが返された。

「ずっと悩んでたよ。植物図鑑のカラーコピーとかネットで拾ってきたらしい花の写真とか、自分がわざわざ植物園まで行ったのも十回じゃきかないんじゃないかな。それを全部バインダーで閉じて、モルグではそれを眺めながらスケッチを描いていたな」

さっきあっけなくやられたのも、見とれてしまったんだと志村は照れくさそうに笑った。デザインと君の体格がとても似合っていて、それだけじゃなくて動きの軽やかさにもマッチしていたから、迂闊に勝負を忘れた瞬間にはもう負けていた。

負け惜しみだけどな。そう笑って去っていく足音が十分

に離れるのを感じ取ってから、鈴木はそっとお面を顔から外した。ツナギのデザインを頼んでからずっと、顔を合わせた二回に一回は催促していた気がする。そのたびに芸術家はせかされてもいい仕事はできないんだとはぐらかされた。それは言い訳だと思っていたのだ。実際には作るつもりはないのに適当なことを言っているのだと。だから、本当にデザイン画を渡されたときには驚いて、嬉しかったのだ。

視界がぼやける。鼻がぐずぐずという。反射的にツナギの裾で鼻水をぬぐおうとして直前で動きを止めた。危ないところだった。ポケットからちり紙を出し、大きな音を立てて鼻をかんだ。

寺島薫　対　長船梓　①

戦士たちの実力は身のこなしを見ればわかる、とはよく言われることだったし寺島薫（てらしまかおる）自身も実感しないでもないことだったが、それでも限度のあることであり大半はまったくわかっていないと思っている。いや、慎重に表現するならばわかるのは相手がどの程度劣っているかということだけで、あとはその名声にだまされているだけなのではないか。もちろん口には出さない。

身のこなし、と一言で表現するそれはいったいどの動作のことを指すのだろうか。それはもちろん戦闘時の動きではない。それで力の優劣がわかるのは当然のことだし、当然のことはわざわざしたり顔で言うべき価値のないことだ。もちろん普段の立ち、歩き、人とすれ違い、振り向くそれぞれの動きのことだろう。それがいったい剣を振るい爪牙を避ける動作とどのような関連があるというのだろうか。

わかると強弁するものたちと口論をするつもりはない。彼らはわかるのだろう。そして自分はそれほどはわからない。それだけのことだ。彼にわかるのは、それぞれの動きが自分の思う理想的な身体の使い方からどれだけ劣っているか、それによって戦闘の時の動きも同じだけ自分の理想より劣っているだろうと想像する、それだけのことだった。

だから例外にも出会っていた。かつて伝説の位置にいたあるもと教師は、普段の動きはまったく運動をしていないも同然のそれだったがこと戦闘となるとぎりぎりで避け、相手を殴れば何故だか即死したのだ。戦闘の激動のなかにおいてなお一向に急いでいると思えない動きなのになぜかすべて効果的に作用し敵を切り伏せていく——寺島は心底動揺し、自分が信奉していた剣理以外の理がこの世界に存在することを確信した。

そう。身のこなしが劣っているとわかるとたいていは剣力でも劣っていると推測できる。だが例外の存在もしみじみと実感している。寺島にとって挙措による実力判別とはその程度のものだった。さすがに血液型による性格分類よりは信じられるが手相ほどはあてにならない、その程度の位置づけである。

その寺島にしても目の前でゆっくりと身体の脇を伸ばしている男の動作からはその際だった常識はずれの能力を読み取ることができた。教官や理事といった同じく雲の上の人間には一様にあった威圧感が目を曇らせないだけに、その洗練の度合いが痛いほどに目に飛び込んでくる。

なんなんだ、あれは。

床に置かれたリュックだろうか？　頑丈そうな帆布でできた白い袋の上に置かれたペットボトルを手にとる動きですらその根底にある一つの剣理を感じさせる。常に腰椎に置かれた重心、上体を折り曲げ床にあるものを拾いながらなぜか腰からまっすぐ天へと伸びる中心線、その柔軟さのために伸ばしていてもかまわないはずなのにかすかに曲げられた膝はどのような襲撃にも即座に対応するためのものだろう。

地下であれば探索者は常に周囲に気を配り油断なく過ごすことができる。しかしそれは緊張を要することであり疲労を生むことだった。だから地上ではそんな警戒をすることはまず見られない。警戒しようにも身体が思い通りに備えてくれない。安全な場所にいるとはそういうことなのだ。それを、目の前の人物は試合前のいまこの場でも自然に成し遂げていた。

長船梓（おさふねあずさ）。トーナメント表にその名前を見つけてもしや

と思っているところで、同じく剣の心得がある笠置町（かさぎまち）翠（みどり）が突進するような勢いでやってきた。目撃者だったその娘の証言でその名前がまさに当人であることを知った。前回の全日本剣道選手権で、準決勝で接戦の末敗れた男である。敗れた相手は優勝し、もちろん会場で行われていた試合は一回戦からして寺島がいる場所とは違う次元であったものの、優勝者との差は紙一重だったと思っている。彼と理事の娘の認識においては実力的には準優勝者だった。

それがここに来た。おそらく――その時だけは苦笑が唇をかすめた――仲間はずれにされた、と実感したある自衛官がさしむけたのだろう。自分は休みを取りづらくても部下に理由をつけて仕事を融通することは官僚組織ではたやすいことだ。これは郵便局勤務だった寺島もよく知っている。

「寺島さん！」

呼ばれる声に我に返った。動きに見ほれていたはずの敵手はもう準備を整えて開始線に立っていた。審判の野村悠（のむらゆう）樹（き）が心なしこわばった顔をして自分を見ているのは、彼もまた古流空手を修めるその眼力で試合場に立つ男の実力を感じ取ったからかもしれない。

あ、ああ、と答えて木刀をかつぎ開始線に向かった。じっと長船の顔を見つめる。その顔にはまったくの動揺が見られなかった。若い、と思って年齢を思い出そうとした。確か二〇代の後半だったはずだ。その選手権の出場者は気力の充実する三〇代が多い。その中できらめいた若々しさを覚えている。

ともあれその視線は、自分を見ても何一つ変化がおきなかった。身のこなしを見れば劣っていることはわかりやすい。寺島が彼に及ばないことも当然わかったのだろう。警戒する必要もないほど劣っていることが。この街の剣士たちのほとんどに対し、剣では一日の長があるつもりだったしそれは認められていた。しかし目の前の男には些細な差だったのだ。惨めな思いで確認した。

降参はしたくなかった。この男を止められるとしたら自分か理事の娘しかいないとわかっていたからだ。手の内がわかっている人間しか、彼ほどの達人は止められまい。そ

して彼に優勝させてはいけない気がした。理由はわからない。

剣士であることを忘れ、地上であることを忘れ、人間であることすら忘れた。自身が一個の野獣であると想像する。

寺島薫　対　長船梓（おさふねあずさ）　②

目の前に立った二回戦の相手を見て、長船梓はようやく気分を切り替えることができた。寺島薫（てらしまかおる）という名前は上官から聞いており、剣道の名手だという評判だったのだ。この会場で唯一期待していたのが彼と理事の娘だったと言っていい。しかしこの会場のほかの剣士たちを眺めた落胆が、寺島に対する期待も打ち消しかけていた。

しかし上官の眼はこの件に関し正しかったらしい。しんと澄み切ったその視線はおよそ府大会のレベルで出会えるものではなかったからだ。剣道の実力は未知数ではあるが、それでも動作から見られるその剣力はおそらく府大会でベスト16程度は堅いのではないかと思われる。それだけでも十分楽しみであるのに加えて彼には死線を潜り抜けてきた経験がある。いったいどのようなものを見せてもらえるのか心が浮き立った。

開始の声とともに寺島は距離を縮めてきた。一足一刀の間合いよりも少し遠く、優れた跳躍力を持つ自分の間合いよりもさらに外側である。もしかしたら、この男は自分の試合を見たのかもしれない。その分だけ不利で、さらに命の危険がある面を打てない自分は小手と胴だけで対応しなければならない。防具をつけた試合ならばともかくこの場、この雰囲気においては互角か少し自分が上か。とにかく楽しくはなるだろう。

青眼に構えたまま対峙する。気合を発するのはやめた。習慣として試合開始からこれまで出していた声は、すべて静かで強い男の揺るがない眼光に吸い取られていくようだったから。覇気を放てば放つだけこちらが消耗するだけである。

星野さんはこれを伝えようとしていたのか。

動いていないはずなのに、額から汗が流れ落ちた。強敵との邂逅に昂揚しているためわからなかったが、どうやら（信じられないことに）精神力と体力とでは自分が劣るらしい。間違いが起きる前に勝負をつける必要があるかもしれない。

対峙するだけで十分楽しんだ、いざ打ち合いとなれば技術の差で自分が勝つに決まっているからそろそろ潮時だろう。そう自分を納得させて長船は青眼から上段へと構えを移した。これほどの相手ならば自分が面を打つつもりがないことを気づいているかもしれない。それならば上段は不利な構えになる。この隙に乗じてくれるかと思ったのだ。

しかし強い男は相変わらず呼吸すら乱さずじっと視線をそそいできていた。

この状況でまだ待つつもりか。すごいな。

感嘆しつつ、小細工を恥じながら再び構えを青眼にもどす。その瞬間で寺島の姿が大きくなった。罠の上段をとりやめた一瞬の気の緩みを突いて距離を詰められたことを知った。

ここで来るか！

悲鳴すら思い浮かべることができず、あまりの驚きのために長船の心が空白になった。その中で反射的に繰り出した木刀の切っ先が確かに寺島の右手を叩くのを感じた。完璧な小手である。

しかし、続く足音は緩まなかった。却って勢いすら増していた。

勝負ありじゃないのかよ!?

信じられないがまだやる気らしい。文句はあったがまずは目の前の男を止めることが先だ。脳天を撃とうかとちらりと思い、しかし残った左肘の少し下を木刀で打った。今度は手加減はしなかった。骨が折れてもおかしくない一撃だったが、動きを止めなければ危ないという直感があったのだ。

しかし寺島は止まらず、同時に肩で体当たりされた。確かに両腕とも使っていない、と倒されながらも認める。けれど剣道のルールだったら最初の小手で終わって——

思考が中断されたのは寺島の歯を見たからだ。歯を見せ

るといい、歯並びがいいといい、歯がみをするといい、歯が浮くという。歯、という漢字を使う限りそれは人間のものである気がする。そして、寺島の口腔の内部に並ぶものは形はまったく自分のものと同じだったが（歯並びはよいようだったが）、明らかに別物だった。

歯じゃない。大きく開かれたそれが自分の顔に向かってくる様子を別世界の出来事のように眺めながら、そう思った。これは、歯じゃない。

牙だ。

ツナギの襟をきっちりしめていなかったことを後悔する。倒れた自分の上に折り重なった寺島は、器用に顎だけで喉元を露出させるとそこに噛みつこうとしているようだった。長船にはそれが信じられない。なぜどうして、自分は喉を噛まれようとしているのか。人間相手ではなかったのか。試合は自分の勝ちで終わりではないのか。わけがわからない。ただ寺島の短く刈った髪が揺れる様を見ている。

その頭が視界から消失した。

鈍い音は少し遅れて届いた。

見上げる先で、こわばった顔をした審判が自分を見下ろしていた。まっすぐ伸びたその左拳は寺島の頭を床に縫い付けている。板張りに叩きつけるように、人間の頭に向けて突きを放ったのだろうかと朦朧としている頭で考えた。

「無事ですか」

審判の声にうなずく。途端に首筋に痛みが感じられた。右腕は気絶した寺島の身体の下敷きになっていたから、左手でその部分を触ってみる。手袋にはべっとりと赤い色がついていた。審判はツナギのポケットからハンカチを出すと首筋をぬぐってくれた。

「皮膚を噛み破られただけで、めぼしい血管は無事みたいです」

次いで非難するような視線を向けてくる。

「どうして二回目で頭を打たなかったんですか。一瞬迷って結局腕にしましたよね」

鋭い眼光にたじろいだ。口の中で、頭は危ないとだけ呟いた。

「確かにあなたが本気で頭を打ったら寺島さんは死んでい

たかもしれない。でも、私が寺島さんを気絶させなかったら殺されていたのはあなたです。そんなこともわからなかったのですか？」

何を言っているんだ？　殺すとか、殺されるとか――

「判定に迷いましたが、あなたの負けにします。見たところこの数日でこの街に来られた剣道の経験者というところですか？　腕自慢は結構ですし確かに私たちよりも達者のようですが、根っこのところで覚悟を据えるまでは地下に潜るのは控えたほうがいいと思いますよ」

お仲間が迷惑します、と冷たい苛立ちを含んだその言葉に対し、自分は地下に潜るつもりはないと反論したかったができなかった。確かに自分は殺されるところで、すんでのところでこの審判に命を救われたのだと今更になって気づいたからだ。

勝負ありの声を聞き、試合が終わったと理解したことが引き金になったのか全身が大きく震えだした。

ぺたり、と音だけは派手に響いた。周囲を行き交う男たちがぎょっとした視線を向けてきたのは叩かれた人間が彼らの意表を突く相手だったからだろう。笠置町翠（かさぎまちみどり）というその娘は、両親が迷宮探索事業団の理事といういわば自分たちの親玉であるというそれ以前にその覇気と剣の実力で全ての男たちに二目も三目も置かれた娘だったからだ。そして同時に、叩いた男が普段はその娘に従者とも家来とも思われる扱いをされている男だからだ。

叩かれた翠は数瞬自分が何をされたのかわからなかったのか後頭部を抑えたままで瞬きし、そして身体ごと加害者に向き直った。真壁啓一（まかべけいいち）はその勢いにも動じずにこやかに見つめるだけだ。

「な、何するのよ！」

真壁はやっと戻ってきた戻ってきたと苦笑した。

「戻ってきたって、なんのこと？」

翠はまだあっちには行くな。その言葉は抽象的で、娘は叩かれたことは忘れたようだった。ただ言葉の続きを待っ

ている。
「寺島さんは翠よりも十年も長く剣を振っているから、かなわないならああいうやり方でもいいって判断していいんだ」
寺島薫（てらしまかおる）は実力がはるかに上の相手に見事に勝った。しかしそれは、日本剣道を修める武道家としての自分に見切りをつけられたからこそ採れた方法だったのだ。翠はまだ自分に見切りをつけるほど長い時間修行していないだろう？
その言葉は事実で、翠は不承不承といった調子でうなずいた。だったら見切りをつけちゃだめだ。あと十年成長できる翠は、その間は負けることも必要だと思うぞ。
この言葉にも翠は素直にうなずき、真壁は続ける。
「あと、もっとまずいのは勝てばいいと思っても翠はまだああいう獣の心になっちゃダメだってことだ。寺島さんは翠や俺なんか比較にならない人生経験をつんだ大人だから、一時的にあっちに行っても帰ってこれるんだから。翠が一度あっちに行っちゃったら警察にマークされる危険人物になっちゃうぞ」
ただでさえ俺はいつ斬られるかびくびくしながら話してるのにさ。話の終結を感じて翠は微笑んだ。凄みのある表情だった。とりあえずは、口を開く。
「とりあえず今はびくびくしとけよ――盛大にな！　言えばわかることなのにひっぱたいたよね、頭」
両拳を軽くにぎり胸前に構えるそれはボクシングのスタイルだ。持って生まれた運動神経か一つの武道の一流は他の武道でもそれなりにこなす素地を併せ持つものか、その構えは経験者ならばみな基本どおりだと認めるだろう。遊びではすまない剣呑さを感じ取ったのか、これまた周囲の男たちが足を止める中でも真壁は動じなかった。ただ一方を指差す。そして、ほら試合試合、とだけ伝えた。
「うわ！　この借りはまたあとで。逃げないでよ！」
がんばれー、とにこやかに手を振る。一試合終わったあとの娘はすっかり忘れていることを知っているのだ。床に置かれたままの娘のタオルとペットボトルを取り上げるとのんびりと後を追った。

真壁啓一（まかべけいいち）の言葉が頭にこびりつくのは、そこに彼の常態であるおちゃらかしではない何かが混じっていたからだ。彼は多分、本気で心配していたのだ。

何さ、一回戦で消えた人間がえっらそうに。

笠置町翠（かさぎまちみどり）は心中でそう吐き捨てるが、それでも彼の心配だけは笑い飛ばすことができなかった。双子の妹とあの男に真剣に意見された場合だけはきちんと聞いたほうがいい、そんな不思議な確信があるのだ。そしてもう一度言われたことを思い出した。

勝てないと思っても、非常手段をとってはならない。何でもいいから勝てばいい、と覚悟をするほど自分は技も心も練れていない。真壁が言いたいのはそんなところだろう。

でもねえ。口に出さず呟いた。

「絶対に勝てない、と思ったときに自分がどうするかなんてその場にならないとわからないよ」

今度は口に出てしまったらしく、審判の神足燎三（こうたりりょうぞう）がもの問う視線を向けた。あわてて首を振る。神足はそれを確認すると敵手に顔を向けた。つられて翠の視線もそれを追う。

月原さんか。

月原浩（つきはらひろし）は第三層で止まっている部隊の中では一番優れていると目されている部隊のリーダーだった。精鋭四部隊の一角、アマゾネス軍団を率いる真城雪（ましろゆき）によれば、かつて三原部隊という当時の最精鋭だった部隊のマイナーリーグとして競ったこともあるという。たった三ヶ月の期間であれば進度に差が出ることも無理のないことで、部隊としての実力では精鋭四部隊と同等であるとは衆目の一致するところらしい。そして、それを率いる月原の剣士としての実力もまた人口に膾炙するものだった。翠自身も自警団で何度か一緒になったことがある。実働は一回だけだがその時は一喝しただけで酔っ払い三人の乱闘を鎮めたのだった。ちなみに翠も（喧嘩の場で緊張していたため）あやうくその大喝に悲鳴をあげるところだった。

この人相手なら、絶対に勝てないと思えるかな。

はじめ、という声が聞こえた直後に大音声があたりを震

わした。単に声が大きい、というだけのことがこれほどの恐怖をもたらすのか。思わず足の指がグーになってしまう。

月原相手なら、たとえば右手を使わないことにすれば絶対勝てないと思えるだろうか。一瞬考えて打ち消した。右手を封じるくらいのハンデではまだダメだ。ここはもう少し――そして勇気を振り絞った。

世界が闇に包まれる。目を閉じたのだ。

再びの大喝は、もしかしたらこちらが目を閉じたことに気づいて怒ったのだろうか。それとも視覚をつぶしたことで他の感覚が研ぎ澄まされたのだろうか。どちらにせよ先ほどよりも巨大な恐怖が彼女をとりかこんでいた。

怖い怖い怖い怖い！　怖いよ！

でも、この状態でも自分を失わずにいられるか――それができたら、きっと真壁が心配するような存在にならずにいられるかもしれない。だから耐えないといけない。耐えないと、と気持ちを新たにしたのは彼女の都合だったろう。もちろん月原にはその都合があり、既に彼は袈裟懸けを打ち込もうと一歩を踏み込んでいた。

ブーツが床とこすれる音に気合の声、空気を裂く木剣の軌跡と息を呑んだ観客の気配、それらの情報があるものは耳から、あるものは肌から流れ込んでくる。そして鮮明な映像を脳裏に結んでいた。そのためもはや視覚のない不利は消滅していた。

翠は迷いなく一歩を踏み出し右手の回し受けで月原の腕の軌道をそらした。そらされた月原の木剣が慣性だけで力なく床を打ったとき、翠が左手に構える木刀は月原の喉につけられていた。

「しょ、勝負あり！」

目を見開くと、これだけは脳裏に描けなかった情報が入ってくる。呆然としている敵手と審判の表情が。そして、ちらりと横を見るとこれまた同じ顔のセコンドが立っていた。

一礼して、セコンドのもとに歩いていく。右手にタオルを左手にペットボトルを持つ真壁からタオルを受け取った。ほとんど動きのなかった試合だったが、前髪がぺったりと張り付くほどの汗をかいていた。

み、翠さ、今さ。

真壁の声は少し震えているように思えた。
「なに？」
「今、目をつぶってた？」
やっぱりそうか。鮮明に映像を思い描けたからもしかしたら恐怖に耐えかねて見開いたのかも知れないと思っていたが、この男がそう言うからにはやはり閉じていたのだ。頷いて肯定を示す。そして見上げた。
「真壁さん、私、自分が考えているのよりはちょっと強いみたいだわ」
あ、ああ、と返答に困っている男の顔にくすりと吹き出した。その笑顔にようやく真壁はほっとしたようで、翠もつられて安堵する。この男には緊張するのもされるのも慣れていない。
「安心はさせてあげられないわ。ごめんねえ」
何が？　そう問いたげな視線にあいまいに笑顔を返し、タオルを広げて顔に押し付けた。そうして低くゆっくりと息を吐き出した。全身が疲れている。ちょっともたれたいなあ、とちらりと考えて慌てて打ち消した。

ツナギは全身を一枚の布地で覆うものだから、たとえば上半身を露出したい場合は首から下腹部までをつなぐファスナーを開き、両腕を抜く必要があった。その場合は両袖を腰でベルトのように結ぶのが普通であった。
そうして外気に触れた身体はさすがに歴戦の剣士である。主に保温用のために身体にぴったりと密着するインナーウェアからはその非現実的な筋肉の段差がはっきりと見てとれた。
布地を巻き上げ、同じように太い筋肉の束がより合わさってできた左手首を露出する。肘の少し下まで肌が見えたとき、寺島とその向かいに立って検分する男は息を呑んだ。
「――効果なかったってことか」
搾り出すような声の主は、片岡宗一（かたおかそういち）という。寺島のような探索者ではなく、彼らの命を護る各種の道具を作成し供給する鍛冶師であった。苦渋に満ちた声の理由は、自分が寺島に与えたツナギの試作品がほとんど打撃を吸収する用をなしていないと考えたからだろう。しかし寺島はかぶり

をふった。
「これで済んでるなら大変なことだよ」
鍛冶師のこわばった表情は慰めの言葉だったら許さないという気迫をたたえており、それを見た寺島は意識を改めた。自分にとっての戦いは先ほどの勝負ありの言葉で一段落ついた。しかし目の前の鍛冶師の、他人の命を護るという戦いはいままさに大事な局面を迎えていることを思い出したのだ。しばらく言葉を探す。
「腕がもげてもおかしくない一撃だったんだ。俺がさっき戦った奴は、実力だけで考えると俺たちよりとは次元が違う生き物だったんだから。俺は第三層までの化け物しか戦ったことはないけれども、身の丈二・五メートルのデカブツだってあんなきつい小手は打ってこないよ」
鍛冶師の表情には相変わらず半信半疑の色があった。それはそうだろう。寺島が挙げた相手は探索者ではない自衛隊員だったのだから。それが探索者中に名前が知られ、剣術指南とでも呼ぶべき尊敬を受けている男を追い詰めるとはこの街の常識で考えたらありえないことなのだ。
「衝撃吸収に関して、今までのツナギと俺が今着ているツナギとはまったくもって別次元のものだ。あの一撃を食らって骨も折れていないどころか——まあさすがに腕は少し重く感じられるが、まだ動かせるなんて大変なことなんだ。それは保証するぞ。この言葉が間違いだったら俺は腹を切る」
最後の言葉は冗談だったつもりだが、片岡はそれですとんと落ち着いたようだった。腹を切るなどという野蛮人の保証が自分には似合うということだろうか？　まさか、嘘だったら本当に腹を切らせる種類の人間じゃあるまいな。
片岡が他の会場の試合を見るために立ち去ったあと、青黒く内出血している腕を見下ろして、軽く拳を握りしめた。純粋な剣道を学んでいる寺島にとって左腕の動きが悪くなることは致命的なことだった。次の試合は第二期の巨人であり一息つけるところだったが、そのあとは第一期の空手家、第一期の美男子と寺島が本調子であっても難しい凄腕が続く組み合わせになっている。正直なところ左腕に障害が残っていると勝ち上がることが難しい相手だった。

しかし、と思いなおした。片岡への断言はまったくもって本当のことだったのだ。あの相手の木刀を食らっておきながらまだ動けるというだけで片岡へは感謝しなければならなかった。達人を下してすでに金星を一つあげている。今日のところはそれで十分かと自分を納得させようとして、思いなおして笑った。

片岡さんの大金星にも立ちあえたわけだからな。

そちらにより大きな喜びを感じながら、床に置いてあるペットボトルを手に取った。

寺島薫　対　長船梓　④

おう、と聞き覚えのある声が聞こえて長船梓は顔を上げた。陸上自衛隊に所属する彼にとって上官にあたる人物が見下ろしている。

「負けました。星野さん」

らしいな、と星野幸樹は笑うだけだ。その表情からは失望の色が読み取れず、思わず顔を見直す。星野はそんな思いもそ知らぬ風で、寺島が相手じゃなと呟いた。

「私はどうして負けたんでしょう」

手短に寺島薫との試合を説明した。星野はうなずきながら聞き、全て話し終わったらただ災難だったなとねぎらった。

「私は試合だと思っていました。きちんと小手を取り、それでも攻めてきたので攻撃されないようにと左腕を打ちました。それでも寺島さんは止まりませんでした」

そして身震いをする。自分の喉もとめがけて滑り込む牙の軌跡にはまったくのムダがなかった。そしてその向こうの瞳にはなんの感情もなかった。ただ、こちらを殺そうと決意しただけという凄みが感じられて動けなくなったのだ。悪意なら反発できる。しかし透明な殺意に対抗できるのはこちらも殺してやるという気概でしかない。それは専守防衛を奉じる軍人には縁遠いものである。

「この大会の全ての試合がそういう殺し合いならわかるんです。それなら私も早々にリタイヤしたと思います。けれ

ど、寺島さんとあたるまでのどの試合を見てもルールも相手への配慮もある試合でしかありませんでした。寺島さんが簡単に踏み越えた一線がきちんと守られていました」

巨大な体格の男は、自分がタックルで吹き飛ばした対戦相手が観客に突っ込まないようにと止めた。それは出場者たちの常識と良識を象徴的に示す出来事だと思う。

「寺島さんだけが狂人だったということではない気がします。その時の審判もまた、一線を踏み越えた寺島さんに同じだけの覚悟で対処しました。当事者の私が麻痺して何もできなかった時なのに」

お前に見せたかったのはそれなんだよ、と星野の意外な言葉が聞こえた。いつしか手元に注がれていた視線を上げる。

「お前はとんでもなく剣道が強いし、銃だって大したもんだ。体力も俺よりあるだろう。だから大概の問題には余裕を持って対処できるし、それがお偉方には頼もしく映る。だからこれからもっと責任ある立場に就くだろう」

一方で星野は危惧していた。何でも余裕をもって対応できているからこそ、心の余裕を失うような状況に遭遇した場合の長船を想像できないのだ。自衛隊は（題目がどうあれ）軍隊であり、さらに先手を取りにくい軍隊である。訓練ならともかくいざ火急の事態が起きてしまった場合、その状況はおそらくきわめて悪い。常にぎりぎりの努力を重ねながら逆境を耐えて這い上がる経験がある凡才ならばそういう時にも踏ん張ってくれるだろうとある程度安心できるが、なんでもソツなくこなす天才型の印象のある長船に全てを任せられるのか。機会があったら見定めておけとは星野がその上官から常に言われている事だった。そして機会がやってきたというわけだ。

二回も勝てば探索者たちも長船の能力に気づくだろう。そして部外者の自衛隊員の優勝だけは阻もうと死力を尽くすだろう。命を叩き潰す生活を続けてきた男たちの死力である。それは道場の上のベスト4という肩書きを圧殺するだけの脅威になるはずだった。

三回戦あたりから観戦に行けばいいと思っていたところがもう既に敗退してしまっていることだけが計算違いだっ

たものの、結果としてはまず満足のいくもので終わったようである。長船は世の中には理不尽な脅威があることを知り、それをいま必死に消化しようとしている。

「スポーツマンと武人の差ですね」

呟きは小さく、しかし再び上げた表情は明るかった。

「それでも私はスポーツマンであることをやめようとは思いません。力を力でねじ伏せるのではいつか限界がきますから。私はスポーツマンで自衛隊員です。生き死にの前に守るべきルールがあるはずですから」

星野はうなずいた。上官への返答は「責任を負わせるうえで精神面での心配なし」とすればいいだろう。寺島の恐怖と敗戦の衝撃はこれからの人生で何度でも長船の脳裏に蘇り彼を打ち倒し、その都度強靭にするだろうから。

「これを教えたかったんですか、星野さんは」

あいまいな星野の顔、返答がもたらされる前に口を挟むものがいた。

「いや、単に仲間はずれにされたから大会をぶち壊そうと思っただけでしょう？」

葛西、お前なあ。苦笑する上官の笑顔を珍しい思いで眺める。葛西と呼ばれた男は長船に屈託のない笑顔を向けて手を差し出した。その後ろにも男女一人ずつが並んで友好的な表情を浮かべている。

「二試合見て感服しました。今度時間があったら稽古をつけてください」

長船は顔をほころばせ、差し出された手を固くにぎりしめた。

真城雪　対　三上栄

この街に来た当初唯一の女戦士だった自分は、しばらくして最強の女戦士と呼ばれるようになった。少し時が経ち自分のあとに続く女戦士が幾人か現れだした頃のことだ。女であり（そして美貌であることも影響していると思う。思い出したくもないが、自分が原因で連携が壊れて崩壊した部隊も二つある）体力に劣ることで仲間を探すのにも苦

労していたあの頃、その『女』という一語がいやだった。生きていくうえのどんな局面でも性別が足かせになるなどとは思っていないが、女であることが明らかにデメリットであるいくつかの職は確実に存在する（もちろん逆もあるだろう）。そして探索者の前衛は確実に女性が不利な職業なのだ。

その不利な職業が自分にとっては天職と思えるほど打ち込めるものだっただけに、その頃は女であることがいやだった。確かに自分の腕力はキチン質の緑龍の皮膚を切り裂くには弱い。巨人の棍棒を受け止めるにも弱かった。ついに女は津差龍一郎にはなれないのだ。

ふう、と息を吐き出した。そして対戦相手を眺める。

だからよく知らない奴らは勘違いしている。真城雪はあくまで『女で最強』なのであり、地上でのその影響力（権力？）はひとえに人間的なものや数多くの救助活動をこなすことによるコネクションによるのだと。

確かに自分が男も交えて探索者の戦士として最強だと主張するつもりはなかった。敵の皮膚が固いキチン質なら、振り下ろす棍棒が三メートル弱の高さから振り下ろされてくるものならば自分の筋力は大きなハンディキャップを負わされている。でもそれは一人の戦士としての強さとはまた微妙に違う、と目の前でこわばった顔をしている三上栄を見つめた。あの男の肌ならば自分の振るう剣でも切り裂ける。あの男の剣なら自分の筋力でも受け止められる。対人で武器を持つならば、他人が思うほどには男女の差は存在しないものなのだ。言い換えるならば、人間というものは武器さえあれば女でも殺せる生き物なのだ。条件は五分であり、そして殺せるならばわざわざ長い跳躍をメインにする必要はない。

始めの声で無造作に間合いを詰め、小手調べで首筋に切り込みを繰り出した。三上は木剣でそれを受け止め、その表情がこわばる。女とは思えない力かい？　でも津差なみの長さの鉄剣を振るえるってのはこれくらいの筋力があるものさ。踏み込んで今度は逆から腰を狙う。その切り替えに慌てたように木剣を弾いた。正確さに驚いた？　身体に不相応に長い剣を扱い慣れるってのは短い木剣ならこれく

らいの芸当ができるってことだよ。さらに続けざまに数度の切込みを送った。三上は防戦一方に思われた。しかし、その腰がかすかに低く落とされたのを見逃さなかった。死地に全身で飛び込んで生き残るってことは、その緊張がなければこれだけ注意力を発揮できるってことなのさ。

クリンチかタックルか、どちらにせよ体重差を利用して一度劣勢を止めるのが目的のはずだ。三上が動き出す前に腰を落とし、その胸めがけて思い切り肩を当てた。三上はこらえることをせずに自分から後ろへ飛び、さらに距離をおくために斜め後ろに跳躍した。いい判断だ、と試合のさなかながらに感心する。

――そして。

下半身をたわめ力をこめた。三上の顔が一瞬で至近距離に近づき、それは驚愕に彩られている。

――死の危険に向かって一・五メートルも飛び込む脚力があるってことは、こういう気楽な場だったら二メートル以上跳べるってことなんだよ。飛び込んでさらに敵を殺すだけの剣を繰り出せるってことは、空中で自在に動けるってことなんだ。

三上は後方に向かっての渾身の跳躍だった。そのために木剣が身体の中心線からずれていた。真城が跳躍と同時に器用に繰り出した小さな前蹴りはその刀身の一点を軽く揺さぶり一刹那だけ操作不能にする。そして一刹那があれば十分だった。真城の剣先は胸の中央に当てられていた。

三上の右手が木剣を手放した。戦意喪失の合図である。

葛西紀彦　対　千代田恭一

夫の返答もまた同じだった。夫の部隊の仲間である葛西紀彦（のりひこ）の試合を眺める人の群れの中のことだった。葛西の対戦相手である千代田恭一（ちよだきょういち）を見て、どこかで見た顔だと思ったのだ。もちろん探索者であるからには北酒場そのほかですれ違っていてもおかしくはない。しかし、違う、と感じていた。千代田を見て思い出す温度は北酒場の喧騒のように高い温度ではなかった。ではどこか。自分たちと同じア

パートに住んでいる、とかそういうことだろうか？
「ああ、千代田さんはアレだ。鍛冶師さんだよ」
野村悠樹（のむらゆうき）の言葉に夫の鯉沼昭夫（こいぬまあきお）がポン、と手を打ち鳴らした。それと同時に今日子もまた思い出す。そうだ。ツナギを作る際に何度かお世話になっている顔だった。
「千代田さん、剣道をやってたりするのかな。まあ、鍛冶師さんたちはよく俺たちと乱闘になるから、腕に自信はあるんだろうなあ」
野村がのんびりと呟いた。この男は空手を学んでいるらしく剣を持っている時と同じかそれ以上に素手でも危険な存在だと言われている。だからこそ鍛冶師との喧嘩が起きる場合は探索者側の助っ人として巻き込まれることが多かった。その際に、千代田とも殴りあったことがあるのかもしれない。そう。千代田はこと喧嘩となったら必ず動員されそうな体格をしていた。
重い鉄塊を迅速に扱い、叩いて伸ばし研ぎをかけるという作業を常に行っている鍛冶師たちは往々にして筋骨隆々たるものだが千代田はもとの骨格からして巨大な男だった。探索者の中でも前衛たちはみな体格がよく、葛西も確か一八〇センチに少し届かないくらいだったはずだ。しかし千代田はそれより数センチ背が高く、その背中と肩の筋肉がもたらす威風はツナギに覆われてもなおあたりを払っている。
「どっちが勝つの？」
頭では葛西だと思っている。何しろ探索者中で十一人しか存在しない、第四層を生き抜いている戦士なのだから。それでも、その推測が危うく感じられるほどに鍛冶師の肉体の印象は強烈だった。しかし同じく前衛を勤めている野村の回答は迷いがなかった。
「勝ち負けは葛西に決まってるよ。心配なのは葛西がきちんと手加減をできるかどうかだけど」
言葉の最後に審判の開始の声がかぶる。
審判の開始の声に続いて千代田の野太い咆哮があがり、すぐに木剣の打ち合う音にかき消された。
葛西が両手に持った木剣を右、左と千代田に打ち下ろしていた。身長は葛西のほうが低かったが、それはもう打ち

下ろしているとしか表現できないほど彼我の意識の強弱ははっきりしている。千代田はやはり心得があったのか、防戦一方ではあったが身体への直撃は免れているようだった。

「うわあ、うわあ、うわあ、うわあ」

葛西が左右から木剣を振り下ろすたび、今日子の唇からはただそんな言葉が漏れていた。強い、とは聞いている。今日子自身もアマゾネス軍団で最下層を歩いている身であり、仲間の戦士たちの闘いを見ているのだ。だから鬼気迫る切り合いは見慣れているはずだった。しかし、これは。

数度、乾いた軽いものがぶつかり合う音が響いたあとはそれに重なるように苦鳴が響いていた。とうとう押さえ切れなくなった葛西の木剣が、勢いを殺されているとはいえ千代田の両腕に当たるようになってきたのだ。

あーあ、やっぱり葛西は手加減なんてできないか。野村がため息を漏らした。

「ひいっ」

それは大人の男には珍しい、もはや悲鳴だった。それがきっかけになったか葛西の木剣が止まり、すり足で二歩下がるとぴたりと青眼に構える。

「終わりにしますか？」

問いかけは静かだった。千代田は恐怖に彩られた表情ながらしかし戦意をどうにか振り絞るように咆哮する。葛西はその怒声にも眉を動かすことなく小さく一歩を踏み込むとその手から木剣を叩き落した。そのまま落ちた木剣を蹴り飛ばす。

「終わりにしましょう」

千代田は両手を見下ろしながらがくがくと頷いた。傍目にもわかるほどに、手袋に包まれた掌は震えている。

声援に軽く手を上げながら帰ってきた葛西に思わずあとじさると、葛西は不思議そうな顔をする。どうしたい今日子さんや。

「えーと、ごめんなさい」

葛西はぎょっとした顔をした。それはそうだろう。被害を受けた覚えもないのにいきなり謝られたら誰だって面食らう。それはわかっていたが、今はただ葛西が怖かった。

地下にあって自分も張り詰めている時だからこそその鬼

気に耐えられるのだ。それなのに、早起きしておむすびを作りホッカイロを用意しヒマなときのための文庫本まで選んで迎えた楽しいお休み気分に、いきなり地下にふさわしい気迫を見せられたら、なまじ弛緩していただけにショックが大きすぎるというものだった。

夫はそれを感じたのかもしれない。ペットボトルの水を飲んでいる葛西の後頭部を軽くはたいた。吹き出す音とともに吐き出された水が床に滴る。

そして今日子は総毛だった。この状態の葛西くんにこんなことしたら、私は明日から未亡人になってしまうかもしれない。大げさではなくその恐怖があった。

「いったいなあ、何すんのさ」

ツナギで口元をぬぐいながら葛西が夫に抗議する。その言葉には険はなく、少しおかしいなと思った。

「怖いんじゃお前は。嫁が泣いただろうが」

え？　と明らかにうろたえた表情で覗き込まれる。俺、何かしたか？　大丈夫か？　その顔を占めている心配の色に、ようやく安堵することができた。慌てて手を振る。いやごめんなさい！　葛西くんが悪いんじゃなくて、あんまり顔が怖かったから！

「俺、顔が怖いのか？」

しまった。しかし言ってしまったことは取り戻せない。夜道では見たくないね、と続けてから吹き出した。葛西もつられて苦笑いをする。

こういう人なんだ、と実感した。評判では最精鋭部隊に属する戦士たちにあって上位に位置するわけではないのに常に一目を置かれている理由がわかった気がする。いつもかなる時でも地下の気迫と緊張を持ち出せるなら、それは地上では否応なく弛緩してしまうほかの戦士たちには驚異に映ることだろう。

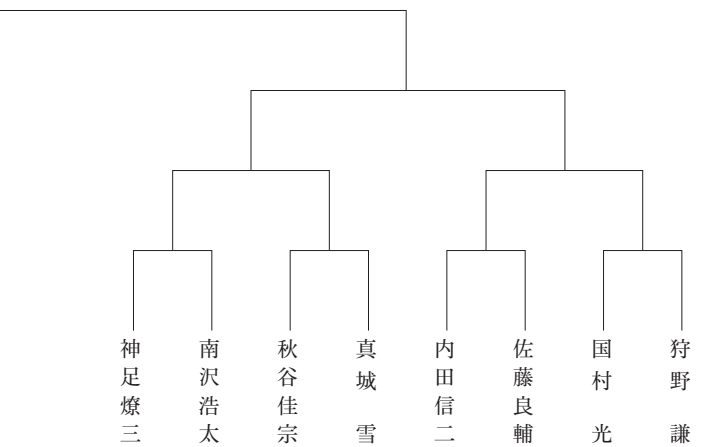
でもまあ、と手袋を脱いでその匂いをかいでいる姿を眺めながら思った。行儀の悪いところを見られたと気づいた男はばつが悪そうに手袋を顔から離す。最後のこわばりがその間抜けな姿で溶けていった。

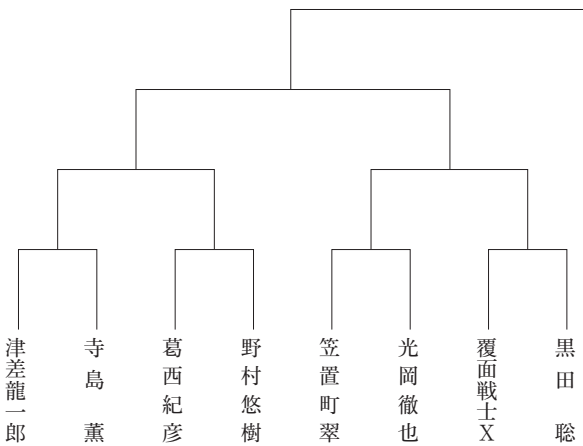
でもまあ、頼まれている件は断る事にしよう。

こんな物騒な空気をいつでも出せる男の恋人なんて、自

分には絶対に勤まらないだろうし、はっきり表現するなら嫌だ。自分が嫌なことを人に勧めるわけにはいかない。

第四章　第三回戦


神足燎三
南沢浩太
秋谷佳宗
真城雪
内田信二
佐藤良輔
国村光
狩野謙


津差龍一郎
寺島　薫
葛西紀彦
野村悠樹
笠置町翠
光岡徹也
覆面戦士X
黒田　聡

「はーいお弁当ですよー」

広げたレジャーシートは赤と黄色と緑と青、遠足でよくある使われるものだ。その上に正座した笠置町葵は三段のお重を次々に開けた。中には小ぶりなおむすびが詰め込まれており、おお、と車座から喜びの声があがる。それじゃベスト16に残っている人たちから！　という言葉に二人ほどが傷ついた顔をした。

「でもまあ二人とも相手が悪かったよ」

とりなすように言ったのは児島貴だった。確かに真壁啓一、青柳誠真ともに初戦の相手がいきなり精鋭四部隊の戦士ということで、負けも仕方ないところだったろう。数十秒で負けた真壁はともかく青柳は優勝候補の一角である野村悠樹と二分に及ぶ長期戦を繰り広げた。野村は二回戦で第一期の戦士の一人をほんの数秒で下しているから、青柳の実力は十分すぎるほど証明されていることになる。ちなみに真壁が敗退した相手である小笠原幹夫は第二期の戦士の一人津差龍一郎にこれまた長期戦の末に敗れた。それも、真壁との戦いで小笠原が組み打ちを披露していなければ小笠原が勝っていただろうとは衆目の一致するところだった。一方では同じく第二期の戦士である佐藤良輔がスムーズにベスト16まで残っていたり、組み合わせの運不運が大きく出た印象がある。

もちろんベスト16まで残る戦士に実力で足りないものなどいない。

Aグループ
津差龍一郎（二期／四層）対　寺島薫（一期／三層）
葛西紀彦（一期／四層）対　野村悠樹（一期／四層）

Bグループ
笠置町翠（二期／三層）対　光岡徹也（一期／三層）
黒田聡（一期／四層）対　覆面戦士X（不詳）

Cグループ
神足燎三（一期／四層）対　南沢浩太（一期／四層）
秋谷佳宗（一期／四層）対　真城雪（一期／四層）

Dグループ
内田信二（一期／四層）対　佐藤良輔（二期／二層）

国村光（一期／三層）対　狩野謙（一期／三層）

と、この街の戦士一八〇人近いメンバーのうち、実力で上位四十人を挙げれば全員間違いなく、二十人を挙げても大半が名前の入る顔ぶれだった。やはり運だけでは行けるところにも限度があるのだ。

「それにしてもさあ」

と、常盤浩介（ときわこうすけ）がトーナメント表を眺めながら呟いた。

「鈴木さんってやっぱり強かっ――いてえ！」

その手を叩いたのは双子の姉、笠置町翠（かさぎまちみどり）だった。割り箸の袋という単なる紙で叩かれたはずなのに常盤の腕は真っ赤になっている。本人が正体を明かすまでは『覆面戦士X』でしょ、とたしなめる。

常盤は素直にすみませんでしたと苦笑した。

「で、どう？　勝てそう？　翠は」

一回戦で負けて窮屈なツナギも脱ぎ捨てた真壁がさばさばと訊く。まだ悔しそうな青柳との対比がおかしい。翠はベスト8はきっと大丈夫とうなずいた。問題はその後だ。開催側に確認したところ、賞品は累積するとの回答を得ている。つまり優勝者は温泉宿泊券とミラコスタとUSJなのだ。であれば、本命はUSJチケットだったが優勝を狙いたい。しかしなあと腕を組んだ。

「黒田さんと鈴木さんって、組み合わせ次第ではどっちも優勝するくらいの人だから。そこ勝っても次は野村さんが来るからねえ。正直しんどいなあ」

先ほど手をはたかれた常盤がじっと視線を当てるが気づかず一つおむすびを口にほおばった。

あと一時間で午後の大会を開始するとアナウンスが告げた。翠はうなずくとごろりと寝転がった。

「真壁さんどうせ午後は暇でしょう？　三十分経ったらアップの相手お願いね」

失礼な物言いもまったく気にせず真壁は笑顔でうなずく。ほんとにこの人は姉の相手がうまいなーと思いながら、通りすがりの落合香奈（おちあいかな）がおむすびを取りやすいように重箱を掲げてやった。

昼休み　落合香奈

上機嫌の原因は両手に一つずつ握られたおむすびである。かつて主婦だったこともありこの街にあっても宴会のとき以外は常に自炊している自分だったが、こと料理の腕前に関してかなわないと思う探索者が二人いる。そしてこれはそのうちの一人が作ったものだった。

一人は精鋭四部隊の一角にて戦士を務める葛西紀彦（かさいのりひこ）だった。本人に確認したところの彼の経歴は、小さな定食屋の次男坊として生まれ子どもの頃から親の真似で料理をし、長じて高級ホテルの厨房に入ったというものだった。本人は追い回しでろくに料理なんか作らせてもらえなかったと言い、年齢を考えればそれが自然なのだが皆で集まって料理をする際などにその姿を眺めてみると、本人の手際が優れていることは当然としても、他の有象無象たちを指示する効率には思わず舌を巻くものがあった。精鋭部隊の罠解除師として戦闘時の一瞬の判断と指揮をゆだねられている自分からするとこの男はもしかしたら罠解除師として全体を統括した方がいいのではないかと惜しく思えるほどである。

そしていま一人落合がかなわない、と思う相手が理事の娘である笠置町葵（かさぎまちあおい）である。こちらは技術ではなく味付けの問題だった。とにかく薄味で、食材の長所をその出来に関わらず精一杯引き出してやろうとしている気遣いが感じられる。さすが農家の娘はうかつに味付けをしない方がおいしいものばかりを食べてきたのだろうか。といっても肉体労働である農家では汗で失った分だけ塩分の濃いものが食膳に並びそうだが、あの両親にとっては農業は難しい職業であってもしんどい労働ではないのかもしれない。ともあれその味付けはなんだかほっとさせてくれる、作り主のやさしさをを感じさせるものなのだ。それに加えて双子の姉が栄養士としてそばに控えている。食べる人間が味でも栄養でも思いやられている幸福感がその皿にはこめられていた。

その娘のこしらえたおむすびは、彼女の手のひらにふさわしい小さなものだった。整った三角形で持ち手が汚れないようにと最小限の海苔が巻かれている。てっぺんには包

まれている具がひとかけらだけ乗せられており、行儀悪く割らずとも具を知ることができた。落合の右手にあるおむすびは焼きタラコで、左手は梅肉である。梅干は実家から送られてくる自家製らしい。

小さい理由は手のひらのサイズだけのことではないだろうと落合は思っている。あの人懐っこい娘は食べる人のことを考えて小さくしたのだ。一つでも多くの味を愉しんでもらえるようにと。

食べるのがもったいないなと思いながら歩く視界に一人の男の姿が入った。その男は手にふたを開けたカップラーメンを持ってぼんやりと立っている。落合と同じく第一期の戦士の一人で、名を内田信二（うちだしんじ）という。彼女よりはまだ若く童顔ということもありしばしば忘れるが、現在の最下層を徘徊する際精鋭部隊にあって長く剣を振るってきた男である。もちろん今回も参加しており、ベスト16にも見事残っていた。そのためにまだ厚ぼったいツナギでその身を包んでいる。

「内田くん、何してるの？」

呼ばれてふりむき、内田は苦笑した。カップラーメンを買ってきたんですけど、ポットのお湯がまだ沸かないんです。

そりゃ難儀ねえと笑ってから彼の足元にあるビニール袋を眺めた。中にはこの街唯一のコンビニで売られているおむすびや菓子パン、ペットボトルのお茶がつまっている。午後もチャンバラをするというのにこんなもので力が出るのだろうか？

あっちの方でさ、とおむすびの角で示された方角を内田も眺めた。

「葵ちゃんがおむすびを重箱に三段くらい作ってきてたわよ。そんなの食べてないでおすそ分けしてもらいなさいよ」

内田は落合の両手のおむすびにしばらく視線をとどめてから、たくさんあったんですかと質問を投げてきた。その顔には遠慮はない。彼もまた理事の娘の性格を知っているのだ。売り切れで申し訳ない顔をされることはあっても自分のおむすびを食べたい人間を門前払いすることはないと断言できた。じゃあめぐんでもらってこようかな、とコン

ビニのビニール袋をリュックの中に入れようとした顔がいぶかしげに曇った。
「あれ？　着信とメールが来てる」
そして何かを考え込むような視線を向けてくる。落合はわけがわからず首をかしげた。不意に一つのことに思い至った。
「内田くん、ゆうべ電話で話してた彼女さんには今日のことは伝えて――」
言葉が途切れたのはその表情が事情を雄弁に伝えていたからだ。血の気が引いた肌色のまま、落合にむけて何かしゃべろうとして口を閉じたり開いたりしている。
「やばい、落合さんやばい」
ようやくそれだけが搾り出された。
「ばか！　私に言い訳する暇があったら彼女さんに電話して土下座しなさい！」
は、はい！　と慌てて携帯電話を耳に当てる姿に苦笑しながら、電話するためにこちらをはばかり、向けられた背中を眺めていた。三歩以上離れた自分にすら電波が通じた瞬間の大声が聞こえてきていた。ベスト16にまで残る歴戦の背中が小さく丸められる様子に思わず吹き出しそうになる。
うん、ごめん、うん、ごめん、いま行く！
内田が発した言葉はそれだけで、若者は電話を切ると落合にかまわず走り出そうとした。意識して鋭い声を発し、その動きを押しとどめる。振り向いた顔は明らかに焦っていた。
「ここから急ぐならバイクでしょ。お弁当邪魔になるだろうから私が片付けてあげるわよ」
「すみません！　ついでにリュックもヨシムネさんに預けてもらっていいですか？」
ウイ、と首を傾けて承諾の意思を示すと、今度こそ内田は脱兎の勢いで駆け出して行った。
電話口の女性の声は怒っていた。しかしその場に待っていた。内田が法定速度を無視して駆けつけた時も待っているだろう。待たされた、という経験は彼女の胸にに内田への強い義理を生むはずだ。人間は、自分が受けた恩と同じ

ように相手に与えた恩にも価値と執着を感じるものだからだ。内田が必死に謝って場を納めれば二人の仲はより親密になるだろうと想像できた。くすくすと笑う。

さて、と床の上のビニール袋に視線を落とす。よかった。おむすびと一緒に飲むお茶が欲しかったが両手がふさがれたままコンビニに行くわけにもいかないと思案していたところだったのだ。他の菓子パンやら食べ物は、部隊の仲間である大男にあげれば喜んで食べるだろう。片方のおむすびを口にくわえるとビニール袋を拾い上げた。

津差龍一郎　対　寺島薫　①

先ほどから左の手のひらを握っては開きと繰り返している。その都度に肘のすぐ下に痛みが生まれるのは先刻の試合で木刀の一撃を受けた部分だからだ。袖を捲り上げれば息を呑むほどの内出血を見ることができた。その影響も深刻ながら、しかしそれとは別に何かが指の動きを阻害していた。妙な倦怠感とでもいえばいいのか。以前経験したことがあるようだがそれがいつのことなのか思い出せない。

寺島薫（てらしまかおる）は軽くかぶりを振り、手の開閉を再開した。

その手が影にのまれる。見上げるとなじみの深い顔が笑顔を向けていた。

「おう。笠置町さん」

笠置町（かさぎまち）翠（みどり）は屈託なく正面にぺたりと座り込んだ。この娘もまだ勝ち残っているので明るい緑色のツナギである。その瞬間に答えに思い当たった。

「橋本さんだ」

翠はあたりを見回した。そして一角に視線を落とすとほんとだ、と呟いた。

「なんだ？　いまいるのか？」

教官たちは今日は非番だと聞いていた。だから戦士である自分たちの師も今日は訓練場にいないと思っていたが。

「あそこにいますよ――って寺島さん、橋本さんを見かけたから名前を呟いたんじゃなかったんですか？」

いや違う、と寺島はまた物思いに沈み込んだ。左手を覆

う倦怠感の記憶が蘇ったからだ。それは教官に手ほどきをしてもらった時にさかのぼる。

壁に貼られた模造紙には『迷宮街最強トーナメント』と大書されているが、本当に『最強』を探すのであればそのトーナメントに書かれている名前からでは見つけられない。それは事業団の理事である笠置町隆盛もしくは戦士たちの教官である橋本辰のいずれかにふさわしい呼称だった。勝負は終わってみるまでわからないと言われ、どんな達人でも調子の悪い時はあると言われるものの、その二人の際立った力だけは揺らぐものではないのだ。

理事である隆盛に稽古をつけてもらったことはなかったが、教官の橋本は自分が認める相手を鍛えることがあった。そして寺島はそれに含まれていた。普段は明らかに手加減されて動きを直されるだけだったが、ある日橋本は珍しいことを口にした。

――たまには本気を出してやろう。

絶対的強者に容赦をしないと言われて寺島は昂揚した。全てを出し切り何一つ見落とすまいとした意識はしかし一瞬で刈り取られた。気がついたら訓練場の脇に転がされており、短く見積もっても四時間以上気絶していたのだ。

その場を見ていた黒田聡によれば、ものすごくゆったりした打ち込みが、浅く肩に入ったのだという。ぶあついツナギのお陰でアザすら残さなかった程度の打撃は、しかし寺島の全身を震わせて昏倒させたから驚いたと黒田は笑った。ちなみに彼もまた切りあった記憶もなく意識を失い、しかし失神は三時間弱で済んだという。そのあたりは基礎体力の違いだろう。

ともあれ、いま寺島の左腕に沈んでいるものはその昏倒から醒めたとき全身を覆っていた倦怠感と同じものだった。

「あー、そういう経験ありますよ」

事情を聞いた翠はうなずいた。彼女はもう一人の強者である理事の娘であり、幼い頃から理事に剣術を教わっている。その稽古の時だという。

「お父さんが言うには、あまりに強烈な衝撃とか能力差とかを身体が実感しちゃうと『もうダメだ』と勘違いしちゃ

うんだそうです。ダンプカーが身体すれすれに通り過ぎたら硬直するようなものだって。お父さんの剣もいくらなんでもダンプカーほどの危険はないですけど、その分殺意みたいなものがあるから」

「つまり怯えるってことか？」

多分、と娘はうなずいた。

「さっきの長船さんの木刀が当たったところですか？」

さすがに目ざとい娘だった。

「以前橋本さんにやられた時は、軽く木刀を当てられただけだった。今回の彼のは思い切り打たれたものだ。その違いは大きいけれど、原理は一緒のような気がする」

翠は顔を引き締めた。つまり、長船さんは橋本さんとかお父さんとかと近いレベルにいたってことですね。

「俺で止められてよかった。俺がムリなら君が止めるしかないと思っていたんだよ」

二人が同時に想起した人物は長船梓（おさふねあずさ）という。日本剣道の全国大会でベスト4に入っている達人だった。その肩書きの意味はもちろん承知しているし、実際に目で見て実力はわかっている。それでも彼の打撃が教官と同じ被害をひきおこしたと知って改めて寺島は背筋の寒くなる思いだった。

「私じゃ止められませんでしたよ、きっと。なんでもありは私にはまだ難しいみたいです」

それでも、と翠は笑顔になった。

「準決勝では私が勝ちますからね！　長船さんに勝った寺島さんに勝てば、私が上だってことになるんだから」

屈託ない笑顔だった。そりゃ準決勝まで残らないといけないな、と呟くと寺島はその場に横になった。

津差龍一郎　対　寺島薫　②

まさか手加減されているのか？　と津差龍一（つさりゅういちろう）郎は呆然として思う。とはいえ戦況が彼に有利というわけではなかった。これまで何度も絶体絶命と思いながらもなぜか決めとなる切込みだけが遅く、無我夢中で耐え切っているだけに

過ぎない。そんな劣勢の中でなお手加減の存在をあやしむのは、敵手の動きと攻撃とで鋭さの落差が激しいからだ。

ベスト8を決める三回戦の第一試合である。津差の相手は寺島薫（てらしまかおる）という、この街でも屈指の剣士だった。彼はその剣道経験者に特有の上体がまったく揺れないすり足を駆使しながら津差の周りを移動していた。その横移動はあまりに速く、対応するために身体の向きを変えるだけの動きでも隙が生まれてしまう。

そして、斬られる。見えているのに対応を迷うような角度から忍び込んでくる剣先を力づくでなぎ払った。こちらが力んでいるためか寺島が力をこめていないのかその衝撃だけで常に直撃は避けることができていた。しかし逸れた切っ先は幾度か身体にめり込んで、現在では小さな痛みの多重奏をかなでている。

技術では及びもつかない。それはこの前の試合である小笠原幹夫（おがさわらみきお）との対峙においても実感したことだったが、目の前の男とはもはやまぐれすら発生しないほどの差があるように思える。

――しかし。

予想外に強い力で切っ先をはじかれたことでしびれたのだろうか？　寺島が少し距離をとった。好機であるべきその瞬間であってもこちらから攻められないことが二人の間に広がる差を証明している。津差は奥歯をかんだ。

実力差は明白だ。さらに自分がこの街で生きてこられた理由が体格からくる膂力と体力にあることもよくわかっている。しかし、勝敗が生死と無関係のこの場にあってはあくまで一人の剣士として戦ってみたかった。

それにしても、先ほどからの寺島の様子には不審な点がいくつかある。一つは妙にキレの悪い木刀の舞いであり一つは意識が散漫になる瞬間が幾度も見られることだ。特に、鋭い切り込みの直前に気が揺らいでいるように思えた。正直なところ、その予感があるからこれまでこらえられているようなものだった。

わからない、が常態じゃない。

それを自覚しているのかもしれない。寺島の表情に苛立ちが生まれると、突然彼は棒立ちになった。予想外の無防

備な体勢に思わず警戒の度を強める。しかし寺島はそんな津差を気にもしていないように大きく息を吐くと、再び腰を落とした。つまり気軽に仕切りなおされたのだ。それでも自分は攻めることはできなかった。わきあがった怒りは自分の無力に対するものだった。

次だ。覚悟を決める。次に寺島が気を散じたらこちらから攻めに出る。

津差龍一郎　対　寺島薫　③

断じて劣勢ではない。しかし寺島薫（てらしまかおる）の心には色濃い焦りが生まれていた。原因の一つは思ったよりも左腕が使い物にならないことであり、もう一つは観客の顔ぶれの中にあった。

長船梓（おさふねあずさ）。前の試合で寺島が下した剣の達人が観戦に来ているのだ。試合は自分の勝利に終わったとはいえこの大会から長船が得るものはないように思える。ではどうして自分の試合を見に来るのか。

動機はわからない。しかし不甲斐ない勝ち方はできないということだけはよくわかる。剣術で格上だった彼に対し自分は何でもありを挑むことで勝ちを拾った。長船にしてみれば不満の一つも言いたくなるだろう。だからこそ、この試合は綺麗に勝利して認めさせてやりたい。その意地が必殺の機会を探らせ幾度かの勝利を見送らせていた。

でかいんだよな、この男。

津差龍一郎（つさりゅういちろう）はおそらく迷宮街に起居し勤務する人間の中でもっとも有名な男だろう。街を歩けば遭遇するその巨躯は二メートルを超えるのだ。しかも骨格も大きいらしく、小山を思わせるほどの筋肉を搭載している。津差という名前は知らずとも「あの大きなひと」という表現でこの街の住人には通じるだろう。だから大きさは知悉しているつもりだったし稽古をつけたことも何度もある。対処はたやすいはずだった。

しかし、必殺を期して改めて眺めるとその巨大さは大変な困難だと思い知らされるのだった。

手数を多くして切り刻むのであれば苦はなかった。いくら頑丈でも身体の末端は鍛えられない。少し強く小手を打てば木剣を取り落とすし、その上で上半身のどこかを叩けば体勢は崩れる。しかしそんな勝ち方を見せることはためらわれた。

気にするまいと自らに言い聞かせながらも、相変わらず客席にいる男の反応をうかがってしまった。この長い展開に焦れて嘲っているのでは？　そんな不安がある。

だから津差の動きに即座に対応できなかった。一歩を踏み出してからようやく津差に攻め込まれたことに気がついた。そうか、と教えられた気分になる。これは試合なのだ。津差から攻めるということも十分ありえることだ。こちらの技術に防戦一方なのかとばかり思っていた。油断していた。

そう自分を戒めつつも、しかし巨人の動きは明らかに遅すぎる。踏み込んで腰の回転とともに右の突きを放つつもりだろうか？　左肩が前に差し出されている。そして突きを受けたら自分でも失神することがわかった。

有効打じゃない剣は打ちたくなかったが仕方がない。

腰の回転が上半身を伝わる中、寺島の木刀の切っ先が前に出された津差の左肩を突いていた。これで回転は歪められエネルギーは減殺される。たやすく避けられる速度にまで落ちるだろうし、そもそも軌道はそれて命中しないだろう。向かってくる切っ先が自分の肩よりわずかに上に向いていることを見て取り、寺島は意識して視線を遠くに置いた。津差の身体の位置をすべて頭に叩き込み、この突きをやり過ごした瞬間に至近距離からの面を放つ。これまではその長い腕に阻まれていたが、右腕が伸びきる突きの直後であれば飛び込めるだろう。

切っ先が大変な音を立てて顔の脇を過ぎていった。回転を殺したのにこの威力とは、恵まれた体格のなせる業かあるいは自分の左腕の不調で衝撃がそれほどでもなかったか。おそらく両方だろう。

右突きの伸び切る瞬間を待とうと床を踏みしめた両足が浮いた。

何が起きたのかわからなかった。切っ先が通り過ぎていっ

たはずの左肩が後ろに引っ張られていく。
なんだ？　何が起きた？
力強い手に左肩をつかまれ振り回されているような。視界に自分のブーツが見えた。右足だけだ。左足はどこにいった？　すでに身体感覚では自分の姿勢がつかめなくなっている。
原因がわからないまま寺島薫は宙に浮いていた。

野村悠樹　対　葛西紀彦　①

おおっ！　と部隊のリーダーである星野幸樹の驚きの声が聞こえてきた。午後の大会も始まり、ベスト8を決めるここからは一つの会場だけを使用して試合を行う。自衛隊／探索者合同作業は慣れたもののこの街だったがそれでも記録的な効率で土嚢を詰まれた見物席、その作業の指揮をとった星野は隊員を戻した後も見物するつもりらしい。なしくずしに仲間の戦士である葛西紀彦のセコンドについていた。
「どうしたんですか？」
精神を調えるために閉じた目を開かず、それでも好奇心に駆られて質問する。今の試合、津差が勝ったぞ！　という言葉に驚いて目を開いた。会場の中央では大の字で荒い息をしている津差龍一郎と木刀を杖代わりにして膝をついている寺島薫の姿があった。
そんなバカなと思う。確かに津差は最近になって精鋭四部隊の一つ魔女姫の部隊に加わった優れた戦士だが、それでも正式な剣道を学びそれを長い年月において地下で研鑽してきた寺島には遠く及ばないだろうと思っていたからだ。長いあいだ第三層を探索している寺島と自分たちとの差は単に仲間に恵まれるかどうかであり、現に越谷健二をうしなって次の前衛を探したとき真っ先に声をかけたのがこの男だったのだ。
始終優勢に翻弄した寺島だが有効打が打ち込めず、津差の不用意な踏み込みにようやく勝負をかけた。津差が突きに威力を乗せようと前に出した左肩を打ち、そのため進路

がそれた津差の突きは見事にかわしたものの、避けたはずのその切っ先がサイズが大きめのツナギの布地をひっかけるとは想像の外だったろう。その強力な膂力でなかば吹き飛ばされたのだそうだ。寺島のセコンドは肩を打った時点で致命傷ではないのかと抗議したが審判役を仰せつかった橋本辰はあっけなく「他の奴ならともかく津差が肩くらいで止まるわけないだろ」と切り捨てた。

その判定もそうだし、そもそもかわしたはずの突きがたまたま大きなサイズのツナギにひっかかる幸運もそうだ。もちろん寺島の攻撃をしのいで耐えたことは評価に値するが、葛西にとっては実力よりもそれらの幸運と雰囲気とでも言うべきものの方が恐ろしい。それらは実直に力を積み重ねて生き延びてきた自分たちには望めない生来のものだからだ。

三原さんもそうだったな、とかつて伝説の位置にいた戦士を懐かしく思い出した。どれほどの苦難においても「あっぶねー死ぬかと思った！」と言いながら帰ってくる壮年の男。生き延びること、勝つことに対して妙な説得力を持っていた男。そういった実力以外の天稟とも呼べる要素こそが今後エリートと呼ばれるために必要なものではないのかとうらやましく感じる。

ちらりと応援席の中ごろに視線を移した。一人の男が隣りにいる赤い髪の若者に今の試合の解説をしてやっている。真壁啓一。素質も成長性も自分よりはるかに上でありながら、簡単にその能力に見切りをつけた男。あの男ですら「そろそろ潮時」というのであれば、努力と運だけでこれまでやってこれた自分の潮時はもう通過してしまっているのではないだろうかといつも思わされる。自分はどこまでやっていけるのだろうか？　いつまで生きていられる？

こつん、と頭を叩かれた。見上げると星野が苦笑している。考えを読まれたらしい。さすがは年上で、組織の指揮に慣れているというところか。

「お前はお前のやるようにしろや。人のものうらやましがるのもつまらんぞ」

そうだ、当面の敵はほかにいる——視線を試合場の反対側に向けた。野村悠樹はいまの結果を気にした風情もなく

左手に木剣をたらして跳躍している。その剣は常日頃使うものよりも細く短く、この戦いは空手の技を総動員してくることがそれだけで明らかだった。左手の剣、右突き、左右蹴り――橋本審判は野村が繰り出してくる攻撃全てに殺傷能力ありと認めるはずだ。正直なところ分が悪い。

が、ここを勝てれば自分にもまだ先がある気がする。一度しっかりと目を閉じ、そのまま跳躍した。両足の裏が大地を掴み直立し、自分の派手な登場に対するどよめきが静まってから目を開いた。

野村悠樹　対　葛西紀彦　②

静止した状態から二メートル弱の跳躍、そして屹立。全身に気をみなぎらせてこちらを見つめてくる葛西紀彦（かさいのりひこ）の視線に対し、お前は真城さんか何かか？　と胸の内で毒づいた。そして慌てて平常心を自分に言い聞かせる。野村悠樹（のむらゆうき）は軽く腰をひねり右拳で空中を突いた。空気を叩くパン！という音にぎょっとして会場が静まる。それには気づかずに突きの速度を高めていった。皮の鞭を振ったような、異様な甲高い音が会場に響き渡る。これはチャンスなのかもしれない。

同じ時期に探索者になり、しかし違う境遇を歩んできた。空手との複合剣技で早い段階で名を知られ上位部隊に引き抜かれた自分と、いくつもの部隊の壊滅に立ち会いながらも被害を最小限に、本人は重傷を負いながらも何度も後衛たちを守り抜いて信頼を培い少しずつ部隊をあがってきた葛西。対照的だったればこそなんとなしに気があい、訓練も自然と一緒に行うようになっていた。そしていまだ勝ったと思えたことがない。

突きは当たる。蹴りは頭をなぎ払う。そうして体勢を崩し首筋に剣をあてることもできる。そしてまいったと言われる。傍から見ていれば実力差は歴然と思えたことだろう。しかし野村自身はといえば「悠樹の器用な戦い方にはついていけん」と悔しそうに床を叩くその姿を見て、何がまいっただこの野郎という憤りを感じずにはいられなかった。人

間の壊し方を学びそれを実地で体得するためにこの街に来た自分だからこそ、相手を壊すためにどの程度の打撃が必要なのかわかる。そして葛西に関してはどの程度の打撃があればいいのか結局わからなかった。突き？　蹴り？　訓練の場でならともかく地下での殺し合いであったら、自分が与えたどの打撃だってこの男を止められるものではない。その寒々しい自覚がある。

勝つなら簡単だろう、とはセコンドについた女戦士の言葉だった。その顔をじっと見る。勝つだけで満足できるならとっとと勝っておいで。部隊のリーダーでもある彼女は言外にそう伝えていた。そう、勝つなら簡単だ。しかしせっかくのこの舞台、さんざんプレッシャーのかかった中でなら自分はもう一段高いところに行けるかもしれない。これはチャンスなのかもしれない。

「殺してきます」

呟きは小さかったから二人にしか聞こえなかった。神田絵美はぎょっとした顔をしたが女帝はにんまりと笑った。そして既に準備している葛西に向かってヘルメットかぶれ！と叫ぶ。そのセコンドについている星野幸樹も何か納得したようにヘルメットを手に取った。彼も歴戦の戦士なのだった。

ヘルメットをかぶせられ頭を抱え込まれた。すぐ近くには上気した整った顔がある。黒豹の毛皮の色できらめく瞳にはまぎれもない殺気がこもっていた。こういう場ですらかっちりと紅の引かれた唇が何かをつぶやくと、かき回された空気が甘い香水の刺激と「ぶっ殺せ！」という単語を運んできた。小さく「おす」と返事をする。

「ぶっ殺せ！」

今度は大きな声。先ほどとは違う理由で会場が静まった。

「おす！」

「ぶっ殺せ！」

「おおす！」

「ようし行って来い！」

訓練場のツナギには衝撃に強い生地が使われている。言葉と同時に背中を叩いたその掌は、そんなツナギを歯牙にもかけず野村の骨に髄にと揺さぶりをかけてきた。これが

意志の、覚悟の力だ。洗練された破壊の技を磨いてきた自分にもっとも足りないもの。それを手足に込めることができれば、眼前の覇気と覚悟の塊を倒すこともできるだろう。葛西とぴったりと視線を合わせる。もう悪いイメージはまったく浮かばない。

野村悠樹　対　葛西紀彦　③

息子の部屋にあるどんな格闘漫画でもサウスポー相手は苦しむものだったが、訓練場でしばしば打ち合っていた葛西紀彦にはそのハンディはないようだった。裂帛の気合を篭めた切込みが矢継ぎ早に繰り出され、どちらかといえば押されているのは野村悠樹の方だった。空手の手技足技を絡めた戦法が得意な野村だったが、最初の右ハイキックを葛西がガードせずに頭で受け止め反撃してからは迂闊に出せなくなってしまっている。空手技を出すならば一撃で絶命させうるものでなければならず、そして自分の技はまだ目の前の男の命を刈り取るに値しないと思い知らされたのだった。戦士としてよりはるかに長い時間を一人の武道家として精進してきた野村には身を灼くような屈辱のはずだ。それでもさっぱりと空手技を捨てて剣術で打ち合うその姿には張り詰めた覚悟が感じられる。意地でも最後は空手の技で決めるはずだ。今はその気力を練っているに過ぎない。

ベスト8を決める試合からは審判をおおせつかったものの正直なところ退屈だろうと思っていた。訓練場の教官である橋本辰にしてみれば誰も彼もがまだまだ未熟、そんな中でこともあろうに『最強トーナメント』とは！　と苦笑を抑えられない。現にいたずら者が自分の名前を書き込んだところ、大半の出場者が青い顔をしていたらしい。とんだ最強もあったものだ！

しかし、と目の前の二人を眺めて思う。技量はまだまだ、しかしその意気だけは名に恥じないと。

葛西の木剣が右にそれた。おっと！　それは誘いだぞ野村よ。無視するか？　虎穴に入るか？

虎子を得ることにしたらしい。よし！　それでこそ男！

思わず嬉しくなった。

渾身の右中段蹴りが再び葛西のわき腹に伸びた。葛西はまたこれを腹筋だけで受けきるだろう。そして反撃する。今度は逃すまい――。

しかし、予想に反して葛西は左手を木剣からはがし脇腹を護っていた。その蹴りの勢いで身体が揺らめき、自身も耐えようとせずに跳躍を重ねたためその身体は三メートルほども宙に浮いた。空中でトンボを切り身体をねじり、膝立ちに着地する。視線は追い討ちに備えて野村をきっと見据えている。その顔にはしかし隠しようもない驚き。自分がわざわざ作った隙に飛んできた狙いどおりの蹴りを、まさか身体が意思に反して防御するとは思わなかったのだろう。

野村は追い討ちをかけようとはしていなかった。そして、何か嬉しそうな顔で葛西を見つめていた。

葛西が驚きから醒めにっと笑った。こちらもいい笑顔だった。

橋本はうらやましくなった。遠州のもとでの修行を終えてからこの仕事につくまで、自分が並外れて強いこととそれを振るう機会が与えられないことがどれだけ彼を鬱屈とさせたことか。この二人、この二人のような関係が築ける誰かを自分が得ていたら、もっと違った（なにがどう違うのかは想像もできなかったが。なにしろ十分幸せな人生なのだから）、そう、もっと朗らかな何かが自分の人生を彩っていたかもしれない。しかし彼が若者と呼べた頃には迷宮街はなく、今ではもう心配させることの許されない人間を少なくとも二人背負っていた（三人目も来月生まれる）。

剣士二人が大きく息を吐いた。そして伸びをしながらゆっくりと開始線に戻っていく。それぞれのセコンドに立つこれまた顔なじみの戦士たちを交互に眺めた。その二人もまた晴れやかな表情をしていた。まったくうらやましい奴らだな。

開始線で向かい合う。場内がしんと静まる。

ほんの一瞬だけ動きがあった。そして止まった。

場内の物音も止まっていた。

「あ、あの。審判。判定は」

ためらいがちのアナウンスが入る。その声で、橋本は余韻に酔っていた自分に気がついた。ぼりぼりと頭を掻く。

「あー、俺が決めてもいいんだけどさ」

視線の先では二人が彫像のように微動だにしない。葛西の剣はぴったりと野村の首に。野村の右拳は葛西の胸の真中に。

「お前ら、自分たちでどう思う」

時が止まったような二人に問うた。それをきっかけに二人とも何事もなかったかのように直立した。

「俺の勝ちです」

「俺の負けです」

返答は同時で、そういうことだよとアナウンスの女性を振り向いた。

「勝者、葛西紀彦！」

思わず立ちすくむほどの歓声と拍手だった。圧力すら伴って四方から降り注がれるその音、その中で負けた野村悠樹のセコンドである女戦士が満面の笑顔でとびついている。自衛隊の士官である男も同じ表情で仲間の肩を叩いていた。

まったく、うらやましいぞ、お前ら。

しかしこれはこれで悪くない人生かもしれない。こいつらを導いていくというのは。

光岡徹也　対　笠置町翠

最近センサーが鋭くなったと笠置町翠（かさぎまちみどり）はひそかに誇っている。とはいえこれまでは気にしなかったことを気にするようになり、その正誤率は三〇パーセントくらいなのだが、これまでのゼロからならば大変な進歩だろう。そしてそのセンサーによれば目の前の二人はクロだった。

この二人、できている。ほら親しげに笑いあったりして——どうよ？　視線を応援席に向けると双子の妹が何か吼えていた。うん？　しゃんとしろ？　そりゃ私もＵＳＪチケットは欲しいけど、直前にあんな熱戦見せられた後じゃちょっと相手に不足がありすぎるってものでさ。まあいいや。体力を消耗せずに勝とう。うん、出小手一本だな。

開始の声でいきなり切りかかろうとしたのだろうか、しかしその動きが止まった。止められた。翠はすこし感心する。飛び込んだら切られることくらいは気づけるらしい。さすがは第三層に達している戦士だ。名前はなんと言ったっけ？

最近少しだけ剣が上達した気がしている。剣技や体力ということもさておき、対面する他者の気の満ち方が読めるようになってきたと思う。それを翠は潮の干満にたとえて理解していた。実力があっても潮が引いている時にはそれは発揮できないし、満ちているときは一〇〇パーセント近く発揮できる（ちなみに実力以上の力なんてものはこの世にはない。満ちている状態をみな気づけないため、限界を低く設定しているだけだ）。一対一なら、と目の前で気勢を上げている剣士を冷静に眺めた。一対一ならば相手の潮を見抜き自分の潮をそれに合せられれば有利に戦える。相手の方が実力が上でももっとも潮が引くタイミングにこちらの満ち潮をあてて、そこで勝負にかかればかなりいい勝負になる。こうして第一期の戦士たちにもこの二日負けがなかった。相手が格下ならばさらに話は簡単だ。同じようにこちらの干満を調えれば手出しすらできないだろう。そしていまそれが実現していた。

さあどうする？　と恋人もちの剣士に胸の中で問い掛けた。あなたはいつ踏み込んでもやられるって気づいてるよね。でも彼女さんはわかっていないよ。そして会場も。会場が変化を待ち望む潮もまた満ちつつあった。勝敗がかかっている自分達はそんなものに惑わされたりはしない。しかしセコンドは？　自分のセコンドである男は自分の判断を信頼しているから余計なプレッシャーをかけてきてはいなかった。しかしあの娘、事業団職員の娘だったろうか？彼女は体格差と性別から恋人の勝利を確信し、場内の雰囲気から勝敗を早くつけてほしいと願っている。その愛に満ちた声援は目の前の剣士の背中を強く押しているはずだ。

対面する自分そして決着を期待する会場と恋人。二つのプレッシャーにはさまれた彼を可哀想に思う。

可哀想な男は耐え切れないように気合を上げると切りかかってきた。へえ、それでも自分の潮はわかるのねと感心

し、翠はそっとその右手親指にあたる部分を打った。木剣が乾いた音を立てて転がった。

そしてその結末に呆然としている戦士の顔に、内心で語りかける。あなたの敗因は実力不足以前に恋人からの信頼不足だよ。言い換えれば恋人が敗因ってことかな。そして眉を寄せる。

あれ？　すると私の勝因は彼氏がいない――

そこで思考を強制終了し、歓声に手を振った。あぶないあぶない。

鈴木秀美　対　黒田聡　①

高田まり子は困っていた。アナウンス嬢（嬢？）を引き受けたもののこの『覆面戦士X』の扱いはどうしたものかと。相手が自分の部隊の戦士で迷宮街でも屈指の一人である黒田聡である以上、視野の狭いお面はもうつけていられないだろう。であればその正体を明らかにする儀式が必要なのだが、もしかしてそれは自分が「おおっと！　仮面の下から現れたその素顔は!?」などとわざとらしい盛り上げをするということなのだろうか。それは絶対に自分ではムリだ。新人社員だったとき、セーラー服を着て踊らされるそれだけで恥ずかしくなって社員連中の前で足をもつれさせて転んだ（そしてスカートがめくりあがった。だから結果的には大成功だった）経歴は伊達じゃないのだ。名前を読むだけならともかく、アドリブなんか絶対にしらける。まずい。

おぼれるものはわらをも掴む。のこのこと訪れた一本目のわらはひょっとこのお面をかぶっていた。

「ねえ秀美ちゃーん」

甘えた声でその肩に手を伸ばす。

（痛い！）

感電したような感覚。しかし電流が空中を走っているはずもなくもちろん単なる錯覚だった。しかしどこからそれはもたらされた？　それともまさか、彼女のまわりの空気が本当に変質しているとでもいうのか？　心を落ち着け、

再び手を近づけると、ある程度で必ず指先にしびれたような悪寒を感じるのだった。土嚢の段差に腰掛け、上体をだらりと下げて額を膝に乗せた脱力した姿勢からは恐ろしいほどの集中を見て取れた。

この子ほど強くてもうちのクロの相手は油断ならないのね、と少し嬉しく思う。

そして声をかけるのは断念した。迂闊に邪魔したらひどい目にあわされる気がしたからだ。

で、私はどうすればいいのよ？　泣きたい。

鈴木秀美　対　黒田聡　②

二本目のわらは相手をしてくれた。どうしたらいいかな？

という言葉に黒田聡は一瞬の虚を突かれた表情の後に苦笑をもらした。そうだなあ、確かにあの子が振ったネタだからあの子がケリをつけないといけないんだけど――なに？　鈴木さん余裕ないんですか？

手の痺れを思い出しながらうなずく。びりびりくるくらい張り詰めてるよ、あの辺り。視線を試合場の向かいに送ると未だお面をつけたままの鈴木秀美は相変わらず両膝に額を預けた姿勢で微動だにしない。そしてその周り一メートルくらい誰も近寄らない空間ができあがっていた。

「なんだか蚊取り線香を炊いてるみたいですね」

黒田の感心しきった声にうなずく。と、二人が見守る中で立ち上がった。そして――おそらく初めて目を開いて気づいたのだろうか――わずらわしそうにお面を外して捨てた。二人は顔を見合わせる。

「取っちゃったよ」「取っちゃいましたね」「若いってすごいね」「まったくです」

ともあれ、本人がネタを放り投げたのならわざわざ外野が盛り上げることもない。高田まり子はアナウンス席に駆け戻った。

『それではただいまよりBグループ第二試合を開始します。赤、黒田聡。白、覆面戦士Xに代わり、代打鈴木秀美』

待ちくたびれていたのだろう。湧きあがる歓声に会場が

どよめいた。ほっとしながらも、なあんだと思う。正体はもう明らかだったし、会場の人間は『地下限定最強戦士』と『美少女天才剣士』の戦いにしか興味なかったのね。焦って損した。

現金なもので、ほっとすると最後の手段として考えていた口上を披露したかったなという気分になるのだった。

鈴木秀美　対　黒田聡　③

開始線で向かい合うと敵手である黒田（くろだ）聡（さとし）の意識が全て自分に向いたのだとわかった。全身のうぶ毛が総毛立ち毛根が痛いくらいに敏感になっている。毛穴の一つ一つが開いていくのが感じられた。奥歯の震えを必死に抑えながら、ああこれだと懐かしい思いでその感覚を愛でた。

仲間を失ってから一ヶ月たち、既に悲しみに泣くことはなくなった。まだ次の恋を探そうとは思えないけれど大検の専門学校では同年齢の友達ができて楽しくやっている（たまに今泉の名前が出て複雑な気分にさせられるが）。だからそろそろ探索者として復帰しても良かったはずだった。なにしろ今は学費と生活費を全て父からの仕送りに頼っているのだから。それができないでいるのは一つの壁を乗り越えられないから。

青鬼から三度の斬撃を食らい、それでも先を急ぐために本格的な止血を拒否した戦士の姿が決心を揺るがせている。その男の当時の恋人は自分の後悔に対して「あいつはそれを望んだんだから」と理解を示したいたわってくれた。しかしそうだろうか？　あの時彼の足を止めさせ止血をさせるそういう選択肢があったのではないだろうか？　たとえばその女性――女帝と呼ばれ誰からも一目置かれる実績を持つ――であればその戦士も従ったのではないだろうか？　いや、本心では先を急ごうとも無視し得ないほどの迫力をどうしてもてなかったのか。いや、そもそも格闘の能力では圧倒的に自分が勝っていたのにどうして力ずくで組み伏せなかったのか。

兄はそれらを人間の力と表現した。それまでの人生が培

う背骨の力であると。それにおいて自分はその戦士にとって取るにたりない存在だったからその行動を掣肘することができなかった。そしてみすみす死に追いやってしまった。今ではそう理解していた。

もちろん悔いるのではない。悔いても死者は帰らないし、明らかに彼はそれを望んでいたから他人の後悔は彼の死を侮辱することになる。だが、同じ状況にはもうなりたくないとも切実に思っていた。そのためには誰かの生命の危機においてその場を制圧し、死なせないための最善の行動ができるほどの人間の力、それを身につけなければと思うのだ。次にあの戦士に出会ったら止血できるという自信、先に進むために自分に必要なのはそれだった。

しかし、どうしたらそれが身につくのだろう？　わからないままに過ごしていた今朝、この大会のことを知った。巨大な名誉を目の前にして本気になるであろう一流の剣士たちの名前を見て期待したのだ。彼らと打ち合えば少しは背骨の力が育つかもしれないと。そして今、『地下限定』であっても最強の誉れ高い黒田を目の前にしている。まだ開始の声もかかる前でありその口もとにはこちらを気遣うかのような笑顔が浮かんでいるというのに大変な重圧にさらされていた。彼を中心とした空間がまるで液体か何かのように重さすら感じられる。怖い。

私はきっと負けるだろう。試合は。こんな重圧の中で相手になるものか。実力以前の問題だってば。

開始線につけという審判の声がした。

それを引き金にさらに重圧の密度が増した。ああ、一分もたないなこれは、と醒めた頭で感じる。

しかし負けるまでの十秒でも三十秒でも、絶対に気合では負けたりしないぞ。両刀をきゅっと握り締める。

鈴木秀美　対　黒田聡④

心の中で何度冷や汗をぬぐったことだろう。笠置町（かさぎまち）翠（みどり）と手合わせしていわゆるサラブレッドたちの実力はわかっているつもりでいたが、それでもここまで切り込みを無効

にされるとそら恐ろしい気持ちになる。

ほら、まただ。この街のどの戦士であっても必中間違いなしのその渾身の打撃を軽く（とはいえ恐ろしい腕力だ！）弾きまるで精密機械のようなもう一刀が襲い掛かってくる。なんとかそれに対応できるのは、その動作が理想的だからだ。自分が想像し得る最高の動きを覚悟していればそれに大差ない反応が返ってくる。だからこそ対応できた。これでもしも悪手を混ぜられたらもうお手上げだったろう。しかしそれは目の前の少女もかっているはずだ。どうしてそれをしない？　ぎりぎりの精神戦の中、ちらりと敵手である鈴木秀美の瞳を盗み見る。もしかしたら自分の切り込みもこの娘の対応できる限界であり、悪手を混ぜる余裕がないのかもしれない。それならば消耗戦もできるが。

盗み見た瞳からは何も窺うことはできなかった。

このまま持久戦で体力勝負に出るか？　しかし今の切り合いですら自分の技術では限界に近い。このまま続けたら精神の消耗からミスをするのは自分のような気がする。視界に葛西紀彦の姿が入った。実直なあの戦士だったら躊躇なく乾坤一擲の勝負に出ることだろう。その思い切りの良さは自分の主義ではなかったが、このままジリ貧になるよりは学ぶべきかもしれない。やるか。反射的に繰り出された木刀を弾いた。

大きく振り込み右手めがけて木剣をふりおろす。しかしこれは誘いであり、予想通り弾かれた勢いを利用して身体を回転させた。コマのような回転力、さらに踏み込んでいたこともありもう片手の木刀がツナギで滑るのが感じられる。切られたか？

打撃は浅く審判のコールはない。そして懐にもぐりこんだ。懐は小太刀の間合いである。そこに踏み込む恐怖に震えながら、心の中で雄たけびを上げてくじけそうになる勇気を奮い起こした。あとは力任せに突き飛ばし、馬乗りになればそれで終わる。マウントポジションを取れば腕力の問題なのだ。そして鼻と鼻がぶつかる距離でもう一度瞳を覗き込んだ。

軽く肩を押しただけで離れた。離れ際の引き面を首をひねってかわす。肩を叩いたこれも浅いと判断された。

今の目――距離をおきながら、両刀を脇にたらしたままの娘を注意深く見つめながら思い起こした。今の目、意識があったか？

じりじりと距離をおいたまま、鈴木を中心に弧を描く。常に自分を中心線に見据えたまま娘は身体の向きをあわせていく。そのまま外の光が彼女のヘルメットの中身を照らすところまで向きを変えさせた。やっぱりだ。その顔は静謐でとても戦っているように見えない。ただ殺気に反応して身体に染み込んだ技術で対応しているだけだ。目の前の娘はまさに機械とおなじだった。問題は、我から選んで入神したのかこの試合の間に気を失ったのか――考えるまでもない。悪手を混ぜれば自分に勝てることがわかっているのに使わなかったことが、その状態の不利を示している。

つまり目の前の娘は試合中に気を失ったのだ。しかし自分が放射する殺気が倒れることを許さず引きずられるように木刀を振りつづけた。それはこの娘の小さな身体にとってどれだけの負担だったことか想像もできない。どうして自分は気づいてやれなかったのだろう。何のための年長者か、と愚かさを呪った。木剣を投げ捨てて走り寄った。

警戒するべき殺気が消えたとわかったのだろうか、両刀がその手からこぼれ落ち、膝から力が抜けた。倒れる。

寸前に抱きとめ、小手の指先を噛んで脱ぐ。そして額に手を当てた。ぎょっとするほどの発熱が感じられた。

「タンカ！」

落ち着かないようにざわめく会場を見回す。「どけ！」と女の声に人垣が裂けた。丁寧に抱き上げタンカに横たえた。

運ばれる娘の口元には満足げな微笑。きっと大事には至らないだろう。あとは任せろ、という真城雪（ましろゆき）の頼もしい顔にほっと安堵する。

『黒田聡の痴漢行為により、勝者鈴木秀美！』

絶妙なタイミングのアナウンスに吹き出した。

南沢浩太　対　神足燎三　①

大丈夫なのかな、と真城雪は心配に思う。あと五分後に自分の試合が迫っているというのに南沢浩太の顔には緊張も気迫も見られない。まるでこの大会自体をどうでもよく感じているように見えた。そもそも参加したのだって津差龍一郎に続く一八九センチ一二五キロのこの巨人がお祭りには必須だという真城の意思で引っ張り出したのであり、でなければ今日もずっとアパート（一人で2DKを占拠しているが、ここまでの巨躯だとそれでぴったりに思える）でフランス映画のDVDを観ていたことだろう。これまでは相手にも恵まれ、本人も精鋭四部隊の一角を担うだけの実力で順当に勝ってきていたが今度の相手は違う。初日に探索者試験をパスして以来中断なく地下に潜り生き延びつづけてきた戦士の中の戦士だった。こんなんで大丈夫かな、と見ている側がやきもきしてくる。

もっとも、地下においてもこのように静かな顔で怪物を文字通り蹴散らしているのだから心配することもないのだろうが……。そこに土嚢を階段状に積んだだけの観客席から仲間の罠解除師である落合香奈が降りてきた。彼女は事業団と契約を結んでトーナメントの記録部隊を指揮している。この試合だけはセコンドにつくつもりだろうか？

「ナミー！　がんばれ！」

思い切り力を込めたはずの手のひらも、あまりに巨大で肉厚な背中相手ではさすっているように見える。南沢が彼女をふりむき静かにうなずいた。この巨大な体躯とは裏腹にこの男は人付き合いが苦手に思えた。気が弱いということではなく、相手をどう扱っていいかわかっていないような。真城としても緊急時以外で目を見て話された記憶がない。

その割には、と二人を交互に眺める。香奈にはきちんと目を見て話すんだよな、ナミーは。フランス映画ファンで仲良しだからかな？

「ナミーさあ、USJに行きたいんだけど私。どうせペアじゃ持て余すでしょ？」

おっと青田刈りかよ、ていうかすごく失礼だなお前と苦笑した。まさかそれを言うためにカメラマン役を放り出し

て降りてきたのではあるまいな。それにしてもここで勝っても次は自分（勝ち抜けばだが）と当たるのだからディズニーシーと言わなかったのはいい判断だ。香奈もちゃんとわかっとると一人うなずく。

うんと南沢はうなずき落合は嬉しそうに笑った。しかしそこに、ちょっと待て誤解しないでと訂正が入った。

「二枚あげるんじゃない。一緒に行くならだよ」

落合がきょとんとした顔をする。あたしはもともとそのつもりだけど？　という返答に南沢は試合場を向いた。斜め後ろから眺める頬は、心なしか朱が走っているようにも思える。

用意せよとアナウンスが響くとそっぽを向いたまま南沢は立ち上がった。常に地下では行動をともにしてその大きさには慣れているはずの二人だったが、それでも圧倒的な筋肉の塊がすぐそばで立ち上がると押されたような気がして後じさった。

「勝ってくる」

木剣を握っていない右腕を少しあげ、落合の顔の前で強く握り締めた。どうやら気合が入ったらしい。

南沢浩太　対　神足燎三　②

で、十分に気合がはいっているけどどうなのよ勝算は？　と落合香奈は女帝と呼ばれる女戦士に訊いた。真城雪は苦笑する。やっぱり勝利を信じているわけではなく、可能性への青田刈りをしただけだったのだ。ひどい女だな。

「難しいわね。もともとナミーは器用でもずるがしこくもないし。あのおっちゃんは最悪の相性じゃないかな」

開始の声とともに南沢浩太は腰を落とした。両足のかかとを軽く浮かせ、膝はほぼ直角になるほど体勢が低い。その結果、緩く膝を曲げている神足燎三よりもさらに低い視線になっていた。そしてじりじりと間合いを詰めていく。対する神足は姿勢の低さで張り合うことをあきらめたかのように背筋を伸ばすとその南沢を中心に弧を描いて歩きだした。右手の木剣をくるくると回転させているのは普

段の癖だ。それが空気を切り裂く音が聞こえるほど観客も静まり返っていた。

相変わらず神足は円を描いて歩き、中心となった南沢もそれにあわせて身体の向きを変える。その図は神足が包囲して攻める機会を探っているようにも見えるし、南沢が必殺の隙を狙っているようにも見える。どちらであるかは結果が決めるだろう。

ナミーは本当に素直だからねえ、と真城がつぶやいた。傍から見ててバレバレの誘いでも反射的に——

その言葉が終わらないうちに南沢が跳躍した。きっかけは、弧を描いて歩く神足の両足がほんのちょっとぶつかり歩調が乱れたことだ。

たった二歩で三メートルの距離を詰め、完璧な踏み込みで胴をなぎ払った。分厚いツナギでも素人相手なら腰骨が折れる一撃だった。神足は避けようとしない。

しかし刀身は唸りをあげて空を切った。南沢の飛び込みと同時に神足も軽く跳躍し前方に両足を投げ出し自由落下で床に座ったのだった。飛びのいてかわすことは予想していただろうが、まさか位置はそのままに身長が座高に変わるとはさすがに思っていなかったに違いない。気づいても木剣は戻せなかった。

ヘルメットぎりぎりに通過する木剣を確認してから神足は剣先を南沢の喉に伸ばした。ふてぶてしいまでにゆったりした動き。

——乗っちゃった。まあ、そこらへんの罠なら噛み破るんだけど、あのおっちゃんとの相性は悪すぎるわね。

「勝負あり！」

深く大きく息を吐き、神足が床に大の字になった。その胸は大きく上下している。自分よりも四〇キロは確実に重いだろう物体の跳躍に逃げることなく立ち向かったのだ。それは精神的な疲労として彼を蝕んでいた。

対照的に南沢はあっさりと立ち上がり、神足に向かって右手を差し伸べた。神足が手を振って断りどっこいしょと身体を起こすのを見届けると、開始線へときびすを返す。そしてちらりと落合を見て、一瞬だけすまなそうな表情を浮かべた。

「うわ、今のツボ入った」
思わずの呟きに真城が視線を投げる。
「今のナミーかわいかった。きゅんときたよ。びっくりだな。あんなでかいのに」
真城はもの言いたげな色を浮かべながら苦笑している。落合はその表情にはかまわず腕組みをした。平和に過ごす予定だった巨人をこのチャンバラ大会に引っ張り出したのは彼女なのだ。
「仕方ないなあ、ＵＳＪくらいならおごってやるか」
その結果食事などはおごらせるはずだ。無意識にせよその計算があることを真城はわかっている。ひどい奴だな、お前と胸の中で苦笑した。
まあ、それでいい。思わずこぼれる笑顔とともにタオルを渡すと南沢は怪訝な顔をした。彼にしては負けてどうして二人とも笑顔なのか要領を得ないだろう。

自分の肉体の威圧感はよくわかっているから普段はことさらゆっくり歩くようにしているし、穏やかに話すようにしている。それだからこそお子たちもじゃれついてこれるのだ。自分のような人間がせかせかと動いていたら誰だって危うきに近寄らずを採用するに決まっていた。だからスーパーの通路を歩く早足は例外であり、そして客たちは恐れおののいたように津差龍一郎の前に道をあけた。
急ぎ足の向かう先は薬局コーナー。カウンターに両手をつくとすみませんと声をあげた。奥からちょいとお待ちよと返事がもたらされる。大作りな顔がいぶかしげにしかめられた。今の声、どこかで聞き覚えがないだろうか？
「はーいはいはい、……と。いちばん似合わないのが来たね」
中村嘉穂は物怖じもせずに巨人の顔を見上げて笑った。そして一拍おき覚えてないかい？　と問い掛ける。餅つきの時に一度会ってるんだけどね。
凝視する視線がひるがえり、あ、ああ、覚えてますと津

差は答えた。
「で、なんだい？」
あ、いや、と気を取り直す。この前栄養剤を調合してもらったと聞きました。そう答えたらのっぽの女薬剤師はあけすけな笑みを浮かべた。
「ちょっと、前に真壁って子にも言ったけれどあんたの年齢で女喜ばせるのに薬に頼っちゃいけないよ。地力ありそうなんだからそれで勝負おし」
下品な物言いに戸惑う。以前真壁から渡された栄養剤、そのあまりの効果に驚いたところ薬剤師の独自の調合だと聞いた。現在訓練場で行われているトーナメント、ベスト4を決める次の相手にはちょっとかないそうもない。だからその薬剤師に集中力を高めたりするドーピングを期待したのだが……説明しようかと一瞬思い、それを打ち消した。
「そうですね。反省しました。——ところで中村さんは温泉はお好きですか？」
「この国で温泉嫌いのおばちゃんはいないよ。そしてあたしも立派なおばちゃんさ」
二七〜八と思っていたがもう少し年上なのだろうか？あるいは若返りの秘薬でも調合しているのかもしれない。まあ津差にとっては年齢などどうでもよかった。大切なことは目の前の女が最初に言っている。
そうだ。女を喜ばせるのに薬を使ってはいけない。
温泉好きか——戦意が昂揚してくる。

真城雪　対　秋谷佳宗　①

試合場の一角に秋谷佳宗（あきたによしむね）が姿を現した途端に女性の歓声が沸きあがった。それはどうも「ヨシムネ先生」と呼びかけているように聞こえ、笠置町（かさぎまち）翠（みどり）は疑問に思う。先刻から自分たちの一段下に座っている二人のうち、試合を控えていない方の肩を叩いた。野村悠樹（のむらゆうき）は振り返った。
あそこの暴徒はなんですか？　指差した先を見ずとも疑問の内容はわかったらしく、秋谷さんの生徒さんたちだよとこともなげに答えた。今ひとつ理解していない顔を見て、

社交ダンスのと付け加える。
「秋谷さんの前職はバレエダンサーなのさ。それが嵩じてこのあたりの市民さんを集めて社交ダンスの教室も開いているらしいよ。事務棟の小会議場で日曜日にドタバタやってるのを見たことないかな？」
おお、と一つ隣りで真壁啓一（まかべけいいち）が納得したような声をあげる。普段モルグに起居して暇なら街をほっつき歩いている彼は知っているのだろう。基本的に出不精で、街にいる時は部屋で音楽を聴いている翠にはわからないことだ。今日は勢ぞろいして師匠の応援に来たらしいなと野村は目を凝らした。黄色い声援をあげる集団には若い女性も数人見られる。品定めでもしているのだろうか、と視線を横に滑らせたら仲間の戦士も同じように注視していた。野村の身上は良く知らないが、真壁は誠実で魅力的な恋人がいるのに。男とはどいつもこいつもこういう救えない生き物なのだろうか？
すごい人気だなあとしげしげと秋谷の姿を見やる。バレエと言われて納得できるその四肢は細いけれど強靭そうで、ヘルメットから覗く面長の顔は決して美男子とはいえないが、この大舞台と声援にも淡々としている表情が妙に頼もしく感じる。これならば人気も出るだろう。
「よくマンガなんかではダンスをやってる人間は格闘技が強いですけど、あれってどうなんでしょうね？」
真壁の言葉には野村より先に隣りで精神を集中していた葛西紀彦（かさいのりひこ）から返事があった。短く「強い」と。漠然としたイメージから動作を創るという点で千変万化する戦闘とダンスは非常に似通っているという。だから、踊りを人に教えられるほどの秋谷は当然強い。その言葉に真壁は腕を組んだ。じゃ、真城さんとだったらどっちでしょうね？
葛西の返答はすぐにはもたらされなかった。笠置町さんはどう思う？　その質問に翠も即答はできない。真壁が呟く前から考えていることだったが、同じく華麗で確実な動きであり最下層を歩くだけあって判断力も優れている。筋力では秋谷が優勢だったがそもそも筋力をそれほど必要とする展開になるとも思えない。仕方なく回答を先延ばしすることにした。

「うーん……野村さんはどう思います？」
空手家の回答は遅滞がなかった。
「そうだな。真壁くんはどう思う？」
「うわ！　振り出しに戻った！」
質問した当人なのに、と真壁が苦笑する。野村のスルーパスはさすがに冗談だったようで、そうだなあ、ともう一度呟いた。
「そうだなあ。秋谷さんはずっとリーダーになってもおかしくない実力と判断力だと言われていたけど、これまで部隊を率いたことはなかったよな」
これは新しい視点だぞ、と翠は空手家の横顔を見つめた。実力が何より大切なのが地下での行動だったものの、実力だけで全てを決する短絡的な考え方が支配するわけでもなかった。助かるために、助けるために、一瞬の判断が確かであり、なおかつ全員を従わせるだけの説得力と意思の強さを備えることがリーダーの条件である。翠の部隊においても通常時の作戦立案は翠と妹が行っているものの、緊急時の決定は青柳誠真（あおやぎせいしん）という年長の戦士が下しているのだ。
秋谷は誰からもリーダーとして十分と認められながら、本人の性格によるものかそれとも最後の最後で周囲が躊躇したのか、まだ部隊を率いたことがないという。対する女帝真城雪（ましろゆき）は、かつて他者の部隊の一員だったことがあると頭で知ってはいたが、第二期の人間全てにとって彼女が誰かの下風に立つとは想像できないほどの存在感を備えている。
まったくもって説得力がないが、と野村は前置きをした。
「真城さんが勝つ場合は貫録勝ちというか迫力勝ちになると思うし、秋谷さんが勝つ場合は拍子抜けするくらいスマートにあっけなく勝負がつくんじゃないかな。で、どっちが勝つかは俺にはわからんなあ」
翠も葛西も同意してうなずき、真壁もなんとなく野村のいいたいことはわかったようだった。視線を移した試合会場に、シマウマ模様のツナギを身にまとった真城雪（ましろゆき）が姿を現した。さっきよりもさらに大きな女性の声援が沸き起こる。街の外からもファンが押し寄せているのかもしれない。女帝は集中で心なし青白い顔を険しくさせたまま右手の木剣を天に向けて伸ばした。それは一般的な練習用のもので

あり普段使っているものよりも短い。真壁が小さく「長いの用意できなかったのかな。大丈夫かな」と呟いた。

翠は黙ってご覧なさい、と小声で制した。

「真城さん本気で勝ちにきてるよ」

真城雪　対　秋谷佳宗 ②

口紅を直すためのコンパクトの小さな世界を一人の男が占めた。ぴんと背筋が伸ばされたその立ち姿は優雅で、これから自分が対面する困難をいやがおうにも思い起こさせてくれる。閉じたコンパクトをタオルの上のポーチに戻すと、ふうと息を吐いた。そして左肘を折り曲げながら肩の位置に上げ、胸を開くように思い切り振る。同時に右足は地を蹴っていた。先ほど秋谷佳宗（あきたによしむね）に目の前で見せられたバレエの旋回を再現しようとしたのだ。

肩と腰が回転するなかでぎりぎりまで視点は一箇所にとどめ、限界の直前で回転方向に首を回した。確かにこれなら相手から視線が切れる瞬間は最小限で済むだろう。それにしても、一回転で自分はバランスを崩したのに秋谷はきっと蹴り足を追加することで何回転でもまわり続けるのだろう。直立する能力では明らかに秋谷が勝っている。足技で体勢を崩すのは難しそうだ。

「真城さん」

当の秋谷から声をかけられた。これから自分と戦うというのに声に余裕が感じられるのはさすがである。

「何やってるんですか？　真城さんを前にしたら旋回なんて使いませんよ」

真城は返答をしなかった。現時点で秋谷ができる動作をなぞることで、自分との差を知りたかったなどと説明するのは億劫だったからだ。その代わりにもう一度やって見せておくれとリクエストをかけた。

秋谷はいやな顔をせずにその場で回転した。くるりくるりと六回転である。その背後を陣取った老若さまざまの女性たちから歓声と拍手が沸き起こった。

「バレエのシューズじゃないからまあこんなものでしょう

かね」
ありがとう、と笑顔を向けてもう一度回転した。
世界から音がすべて消え去った気がする。その中でただ重心と速度だけを意識して回転を重ねていく。納得できた時点で足を地につけた。
視線を秋谷に向け、再び礼を言うと元ダンサーは心なしこわばった顔でうなずいた。真城は満足だった。今は五回転だろうか？　回数よりも重心の整え方を身につけたことが嬉しい。試合開始直前で秋谷より劣っている点を一つ修正できたのだから。
「俺が勝ったら」
秋谷の言葉に意識を現実に引き戻された。
「俺が勝ったら、バレエをやってみてください。絶対にもったいないですよ、真城さん」
「いいわよ。負ける気はないけどね」
秋谷はヘルメットを取り、両手で頬を叩いた。後ろのご婦人たちが身をすくめるような大きな音を生んだ打撃はその浅黒い肌にもはっきりわかる赤い痕を残している。
「気合が入りました。手加減なしで行きますよ」
「ええ？　してよ。トーナメントは長いんだからさ」
二人は顔を見合わせて笑った。

真城雪　対　秋谷佳宗　③

小さく跳躍をする。着地音が隣りに立っている人間でも拾えないであろうその動作は、しかし確かに跳躍だった。秋谷佳宗（あきたによしむね）の得意とする動きである。人間はその限界まで高く跳ぶことや遠くへ跳ぶことには慣れているが、その高さや距離をどれだけ小さくするかという身体操作は普段意識しないし得手ではないものだった。それを秋谷は特に訓練してきた。傍から見て爪先立ちを繰り返しているようにしか見えない動きであっても確実に跳躍であり、それはつまり自分の全質量をエネルギーに変換できる状態ということなのだから。
第三層に降りてしばらくした頃、怪物を殴り殺すには細

い自分の筋肉をどうやって補うかと考え、たどり着いたのがこれだった。動作の自由を奪われない程度の小さな跳躍を極意として、移動する自分の質量を全て剣先に乗せるというもの。

着想は目の前の女性から得た。その女性は早々に、確か第二層に挑む時点で自分の性別と体格から生まれる弱点を直視して訓練を開始したのだ。その美貌と異性交遊の奔放さしか知らなかった秋谷は慧眼に感服したのを覚えている。その後、二人の剣術は別方面へと別れていった。男であり身長も一八〇センチ程度の秋谷はそれほど跳躍による慣性を必要としなかったし、何より敵中に飛び込むという行動を追及するほどの精神力をもてなかったからだ。どうして女帝は恐れずに敵集団に飛び込めるのか、それでなお生きていられるのか今でも不思議に思っている。とりあえず彼女は自分よりはるかに度胸で勝るのか、あるいは自分とは違う何か、勘なのか運なのかわからないがそういうものの加護があるのだろうと結論していた。

それが今日わかる。勇気ならば自分にはきっと手に入らないものなのだとあきらめがつく。運でもそうだ。しかし勘の類ならば自分にも身につけられるはずだった。勘とは意識せずに行われる状況判断のことなのだから。トーナメントをのぼりつめることよりも、いまこの一戦を経験できることのほうが嬉しかった。

跳躍は続く。しかし、少しずつ高さを加えていった。どこまで高くなるのか、という興味をこめた視線が自分に集まるのを感じる。完全に注目を集めた瞬間、突然そのまま前へと跳んだ。

静寂の直後に地響きともいえる驚きの声が沸きあがった。試合場を囲む枠線から跳躍した彼は、いわば助走なしのはずなのに三メートルになろうかという距離を超えたのだから。しかし一番反応を知りたい女性は楽しげに笑うだけだった。彼女が頼みとしている跳躍の距離にあって劣っていると見せつけられたにも関わらずに、だ。こちらの過剰なパフォーマンスを気にせずに、木剣をかついで歩いてくる姿に却って気恥ずかしさを感じてしまった。

「勉強させていただきます」

言葉は届かなかったろう。しかし女帝は穏やかに微笑んだ。その威厳と美しさに思わず見とれる。

真城雪　対　秋谷佳宗　④

どうやら私の今回の相手は人間ではなくてバッタだったらしい。目の前で見せられた跳躍の衝撃がそんな非現実的な空想を呼び起こした。あれはどうかしている。切り合いにおける重要な武器としての跳躍を熟知しているからこそその距離の異常さがしみじみと理解できた。しかも秋谷佳宗（あきたによしむね）はバレエをたしなむ男だ。バレエダンサーには空中であれこれ動くのが得意そうだという印象があり、跳躍して高さの有利を得る戦法でも分が悪そうに思える。暗澹たる気分になった。

地道な切り合いでいくか？　経験で比べれば同程度であり反射神経などの素地は自分が勝っていると思う。射程距離と筋力は明らかに劣るだろう。

まあいいか。瞬時に思いなおす。他人どころか自分の命すらかかっていないこの状況で普段の戦法を放棄するような弱気は許されるものではなかった。自分のやり方で戦い、勝てなければそれはそれというものだろう。少なくとも何か得るものはあるはずだ。木剣を一振りして床に垂らしたまま視線を合わせた。その目は澄んでおり何も窺えない。雰囲気のある男だな、と悔しく思う。

開始の声でも動かなかった。秋谷も同じく様子を見ているらしい。自然とそのまばたきに注目した。

まばたきとは結構時間の長いものだ。まぶたが本当に降りている時だけを考えればまさに『瞬間』と呼ぶにふさわしい間でしかないが、閉じ始めたと身体が認識すると視覚の処理を脳が休んでしまう人間がほとんどなのだ。その結果、一秒の何分の一かわからないが確実に視覚では対応できない空白の時間が生まれる。まばたきの間隔が単調な相手はすなわちまばたき自体に気を使っていないということを意味するから、タイミングを推測して行動を起こすことは極めて有効な手段だった。

もっとも他人に勧めたことはない。出し惜しんだのではなく、自分の視覚情報処理の能力が際立っているからこそ相手との位置関係や動きを掴みながらまばたきまで気を配ることができるのだと理解しているからだ。

ぱちり

一つ呼吸を混ぜる。秋谷は動かない。

そして地を蹴った。通常相手の視覚が生きているときに動いた場合に特有の表情の変化はまだ秋谷の顔には表れない。自分は行動を起こしているのに相手は変わらないという違和感は、この戦法を試し始めた当初は慣れずに恐怖を生んだものだった。今では作戦が奏効したという昂揚をもたらしている。そして秋谷がこちらに気づいた。

その後の行動はさすがに探索の最前線を歩いている男のものだった。秋谷は瞬間移動としか思えないはずの自分の前進をありのままに受け止め、避けようとはせずに体当たりを選んだのだから。そのために袈裟懸けは浅くなるだろう。しかしこちらには一歩を踏み込んだ慣性が味方している。体重の軽い女とはいえぶつかり合いで負けるとは思えなかった。であれば浅いとはいえ打撃を与えた自分が展開を握れることは明白だった。明白のはずだった。

予想通りに木剣の半ばが細いが頑丈な肩にぶつかり止められた。そのまま勢いを殺さず頭を下げ、ヘルメットを胸板にぶつける。ぐらりと上体が揺れた秋谷を見て、冷静に右に飛ぼうとした。横に飛んで自分の間合いに戻り、さらに秋谷の木剣からは遠い位置を取れる。勝利の文字がちらりと脳裏をかすめる。

その動きに気づけたのは卓抜した視覚処理能力のおかげだったろう。真城の眼には、自分の顔に向けて繰り出される秋谷の左肘がはっきりと見えた。その動きには迷いはなく、顔面への直撃は免れない軌道にあることが見て取れた。その事実が、今まさに把握しようとしている主導権も勝利への道筋もすべて忘れさせ、彼女は顔を守るために腕を上げていた。寸前で間に合った左拳はしかし勢いを殺しきることはできず、押された拳が自分の頬にめりこむ。痛みを感じたと思ったら秋谷は離れていた。とりあえず距離をおくことにしたらしい。

「女の顔を狙うなんてひどいじゃないのよ！」

思わず出た声は自分でも驚くほど甲高く震え、必死な色をにじませていた。そして惨めに実感する。自分は命を切り合いの中に晒す選択をしそれを後悔していないというのに、顔が傷つくことは受け入れられないのだ。それは女だからか秀でた美貌のためかわからない、しかし戦士としてあまりに情けない心の動きではないか。

必死な声と表情が、おそらくすべての観客に意外の念を呼び起こしたのだろう。観客席がしんと静まりかえった。その中で秋谷だけが気にもせずに却って諭すような表情を浮かべていた。大丈夫ですよ、と彼は肩をすくめた。

何が大丈夫なんだ！　かっとなる。女の顔を殴ろうとしておいて！

「真城さんの魅力は顔なんかじゃありませんから」

反論の言葉はそれで封じられた。あ、えーと、そうかな、でも、いや、ありがとう、と口の中で呟いた。

完全にわからなかった。その衝撃と、もう一つの強い感情が秋谷佳宗（あきたによしむね）の身体を震わせている。どうにか表には出さないでいられただろうか。

振り返って考えても何が起きたのかわからなかった。ただ、一足一刀の間合いまであと三歩あったはずの距離が一瞬で縮められていたのだ。瞬間移動としか思えない出来事である。それにしては——意識を観客席に向ける——観客たちは自分のように驚いていないようだった。となると自分の目の前で動きながらこちらの意識に残さない、ということだろう。注意が切れた一瞬を狙われたということか。同じことを訓練場の教官にはしばしばやられるが、それと同じ理屈なのだろうか。木剣の切っ先を自分の胸に凝らす、緊張感にあふれた美貌を眺める。

真城雪（ましろゆき）。女だてらに際精鋭部隊の一角を率い、自身も必ず名を挙げられる優れた戦士でありながら美貌でも並ぶもののないスーパーレディにはどんな秘術を繰り出されても納得させてしまう不思議な説得力があった。

とにかく、と二歩下がった。バレエダンサーとしての経験は与えられた空間の広さを把握する能力をはぐくんでいる。白線の位置を確認せずとも自分の後ろにどれだけの余裕があるか間違えることはない。

とにかく、目の前の女性は自分にとって奇襲になる動きができるのだ。それは認めるしかない。もう一つの発見とあわせて心に叩き込んだ。

もう一つの発見とは、顔を狙ったときの反応である。あれほどの美貌だからかその性別ゆえか、うろたえたと表現した方が適切なほど大げさにかばい、動揺したのだ。先ほどの肘打ちは反射的にしてしまったものであり、こんなお祭りで目の前の美貌を壊していいはずがないことくらいはわかっている。だから実際に攻撃をしかけるつもりはない。しかし脅しなら有効なのだ。

木剣を握りなおした。背を伸ばす。両方の肩甲骨を背骨に寄せるようにして胸を張ると、ゆっくりと息を吸い込み始めた。吸気はあくまでも肺までしか達しないが、それでも腹に、肺に、胸に、肩にと酸素がゆきわたることをイメージする。それを三度繰り返すと全身が温かくなった。

彼女に対する利点は三つある。一つは身体のサイズ、一つは下半身の強靭さ、一つは顔に対する脅しが効果を発揮すること。それを中心に戦いを進めるべきだろう。

突然彼女に向かって走り出した。一足一刀の一歩手前で上段に振りかぶり跳躍する。真城が驚いた表情をしたのはその動きはあまりに隙が大きいため、ほとんどの戦士が採らない斬撃だったからだろう。

俺なら違う。秋谷には自信があった。俺が勢いをつけた跳躍の速度はまともな人間に対応できるものではない。

女帝も反撃はできなかったようで、木剣の切っ先を左腕で支える形でこちらの切込みを受け止めた。渾身で大上段から体重をこめて振り下ろした木剣は彼女の膝を曲げるほどの重さがあった。美しい顔が力をふりしぼっているのがわかる。

間髪をいれずに今度は小さくふりかぶり、袈裟懸けに切り下ろした。こちらもすんでのところで受け止められる。

休みは与えなかった。右、左、右、と全く力を緩めずに

木剣を振り下ろす。真城もすべて受けてはいたが反撃はできず、さらに姿勢が下がりつつあった。

真城の顔が苦しげにゆがんだ。すでに十秒以上はこちらの木剣を防いでいるのだ。当然その間は呼吸などできない。先ほどたっぷりと全身の筋肉に酸素を蓄えた自分とは違って彼女には準備ができていない。そのため、軽い酸欠になりかけているのだった。今だ、とこちらも息苦しさを感じつつこれまで両手で握っていた木剣から右手を離し、軽く真城の顔に向かって繰り出した。

腕を使って大きく顔をかばうという予想は裏切られ、真城は後方に跳ねた。背後への動きにもかかわらずに長い跳躍に観客席から驚きの声が沸く。しかし秋谷にとっては明らかに短かった。真城の顔はすでに真っ赤になっている。酸素を使い果たした筋肉は思うように動いてくれないのだろう。もう動けないはずだ。

呼吸はさせない。秋谷も追うようにして距離をつめた。自分はまだあと二秒は息をせずに動ける。ここで勝負をつけてやる。

真城雪　対　秋谷佳宗　⑥

全身の力を振り絞って稼いだ距離がまたゼロにされたのを見て、真城雪はもうお手上げの気分になった。秋谷佳宗という男を甘く見ていたつもりはなかったが、三つのもので完全に負けているのだ。サイズと筋力と精神力とで。跳躍に次ぐ跳躍によって打撃力を増す戦法は、地に足をつけて斬り合うより無呼吸でいる時間の割合が長い。だからこそ常に全身に酸素を取り込むような呼吸法をヨガの心得がある高田まり子から習っていた。そのため実践において酸欠にはならずにこれたし、秋谷が深呼吸をしていなかったら逆に自分が有利になったはずだった。準備は二人とも同じだったはずなのに、しかしはっきりと差が出たのは酸素をためる筋肉というタンクの容量の差なのだろう。そして次々とやってきた木剣が打ち下ろしの形になったのはサイズの差であり、それを受け止めるしかできずさらに膝を曲げられたのは筋力の差だった。

しかしそれよりも、と秋谷の接近を奇妙なスローモーションを眺めるように見つめながら思った。また、顔を殴られ

そうになって逃げてしまったのだ。今度は明らかにフェイントだと気づけたのに身体が反射的に逃げた。

この街での戦いの日々で、女であることの不利をずっと感じ続けていた。しかしそれはあくまで体格的なものであり、判断力と技術を磨くことですべて克服してきた。その自負が彼女の自信になっているのだ。しかし今回のこの恐怖感はもっと別な、克服する方法すら思いつけないほど深く刷り込まれたものであるように思える。

悔しい。

その気持ちが、すでに酸素が尽きていた筋肉に活力を与えたのかもしれない。木剣を両手で大きく振りかぶり、闇雲に振り下ろした。

秋谷が驚いた表情をして一歩飛び下がった。止められなかった木剣の先が床を叩く音が聞こえた。

ようやく距離と時間がかせげた。ほんの少しの間だったが、それで十分だった。夢中で息を吸い込むと、肺の周りに熱が生まれ、心臓の鼓動が聞こえてくるような気がした。耳が熱くなる。

そして両腕の木剣に突然の重さが生まれた。思わず取り落としそうになり、慌てて握りしめた。何が起きたのか、と視線を上げて凍りついた。

木剣の上、切っ先の近くに秋谷が直立していた。真城が使っている木剣は両刃だから、立つその幅は一センチもないというのに。真城に木剣を落とさせるために、このダンサーは綱渡りよりも細い場所に乗ったのだった。

ちょっと嘘でしょ。こんな、マンガじゃあるまいし。

会場の驚きの声は地響きのようで、それが、目の前で起きていることが夢ではないことを教えてくれた。つまりこれは現実で、自分は間合いの中に秋谷に入られたうえに両手をふさがれているのだ。

木剣を離すか？　迷わず却下する。女である自分が素手になって、それから何ができるというのか。

期待したように木剣を落とさなかったためか、秋谷がゆっくりと左足を上げ始めた。体重は変わらないはずなのに、乗っている足が一本になったからさらに重さが増したような気がする。

その足をどうするつもりよ。まさか――

ブーツの裏が見えた。それは自分の顔に向かって来ていた。信じられない思いでそれを眺めている。まさか、蹴るの？　女の顔を？

頭の後ろで何かがはじけた。視界が赤く染まる。

ふざけんな！　脳裏に自分の怒号が響き渡る。

誰が逃げるか！　私は真城雪だぞ！　負けるか！

この間合いで秋谷に顔を蹴られたら昏倒するだろうし、その傷はいつも利用している大阪の整形外科医でも消せないかもしれない。でも、絶対に情けなく逃げたりはしないぞ。そう心に決めた。試合は自分の負けでいい。秋谷は自分より強かったのだから仕方がない。しかし、顔をかばう心の弱さには絶対に勝ってやる。

顔の寸前でブーツの裏は止まっていた。これも脅しだったのだ。しかし安堵は感じなかった。覚悟を実際に試すことができずに悔しいとすら思う。

真城は上体を乗り出し、静止しているブーツの底に顔を押し付けた。同時に木剣を握る両手にも力を込める。秋谷が乗る土台を押し返す動きと調子をあわせ、顔面を使ってブーツの底を押した。スリップをきかせるための溝が頬にめり込んで痛い。

「ふんにゃあ！　にゃーっ！」

口の半分がブーツで抑えられているために、気合の声も思わず間抜けな音になってしまう。しかしそれだけの甲斐があったのだろう。制動が失われた秋谷の身体が大きく崩れている。腰に力を込めて、顔面と木剣をもう一押しした。

秋谷は驚いた表情をしていたが、無理のないことだった。これまで効果があった顔面へのフェイントがきかなくなっただけならばまだしも、いわば『顔で足を殴られた』のだから。足の裏に向けて全力で顔をぶつけていくなどと、男であってもやれるかどうか。それは先ほどまで殴られそうになると逃げ出していた女の行動とは絶対に思えないものだ。その驚きと焦りのためか、蹴ろうとしていた左足が暴れ、それが真城の頬を蹴り飛ばした。その打撃は真城の上体を大きく揺らめかせる。しかし両足で踏ん張った。

秋谷が墜落した。空中での動きには慣れているからだろ

う、しっかりと後頭部を守るように身を丸めている。しかしすでに木剣はその手から離れていた。大きな音とそれより大きな歓声が起こる。

真城は距離をつめ、まだ混乱している秋谷の顔に木剣を突きつけた。秋谷は目を見開き荒い呼吸で自分を見上げている。

「真城さん、顔は怖いんじゃなかったんですか」

顔の半分にはブーツの痕が残っているだろう。それに、秋谷の蹴りはおそらく青あざも残しているはずだ。しかし、それがどうかしたかという気分だった。

「んー？　だってさ、ヨシムネが言ってくれたんじゃない」

何をだろう？　といぶかしげな表情をやさしく見下ろす。

「ほら、さっき。私の魅力は顔なんかじゃないって言ったでしょ。だったら別に顔を守る必要はないからね」

そしてにっと笑った。秋谷の浅黒い顔に感嘆の念が生まれた様子をいい気分で確認し、そして審判を眺めた。

勝負ありの声に続いて身を震わせるほどの祝福がふりそそいでくる。それを全身に浴びながらそっと目を閉じた。

しばしうっとりと大音量に身を任せた。

真城雪　対　秋谷佳宗　⑦

名前を呼ばれた黒田聡（くろださとし）がびくりと身を震わせた。彼もまた戦士であり、その実力をして優勝候補の筆頭に位置づけられている男だったがそんなことを忘れさせるほどの迫力がその言葉にはあったのだ。

「救急箱！」

続いて神田絵美（かんだえみ）の唇から発された命令に、黒田は返事もせずに走り出していった。怯えているのは彼だけではなく、神田はもう一人身をすくませている女をじろりと見上げた。

「にゃあじゃないだろお前は！　女の顔をなんだと思ってるのよ！」

真城雪（ましろゆき）は思わず両目を閉じて首を縮めていた。神田と真城とは同じ部隊であり、常の主導権は真城が握っている。しかしこの二人には二年の年齢差があり神田が年上だった。

いざというときにはその年齢差がものを言うのかもしれない。

「ご、ごめんなさい」

自分の身体を自分の判断で乱暴にあつかっただけの女はしかしおとなしく謝った。悪いことをしでかして反省しているというより剣幕に圧倒されただけのように見える。

周囲に立つ見物人を蹴散らさんばかりの勢いで届けられた救急箱を抱えると、神田は自分より二〇センチ以上高い場所にある顔をにらんだ。

「お座り」

おとなしく正座した真城の前に、神田は両膝をそろえてつく。小柄な神田と大柄な真城とではこうして初めて高さがつりあうのである。まずはミネラルウォーターをハンカチに含ませて乱暴に頬をぬぐった。秋谷のブーツの裏についていた汚れなどをふき取っていく。顔が揺れないように、蹴られていない左頬を乱暴につかんだ。

「いたいいたいいたい！」

「我慢しなさい！」

しゅんとしておとなしくなった顔をさらに乱暴にぬぐい、しげしげと右の頬を眺めた。

「蹴り自体はエラの骨で受けたみたいね。あざができてるけど、これならちょっと厚めにファンデ乗せとけばそんなに目立たないか――なに？」

小声で名前を呼ばれて顔を近づけた。

「くちのにゃかきったみたい――てぃっしゅちょうら」

「ひゃあ！」

蹴られたときか顔を足に押し付けたときか、口の中の皮膚を自分の歯で切ったのだろう。飲み下すわけにもいかず口内に溜まるに任せていた血液が口の端からこぼれていた。神田はそれに驚いてのけぞったのだ。

声を上げる前に、黒田がちり紙の束を差し出した。おそらくポケットティッシュの袋を破いたそのままのものだろう。真城は顔をしかめながら紙に口を当てて血を吐き出している。神田は一つ息をついた。常日頃見ほれている顔が足蹴にされたときには頭に血がのぼったが、痕が残るような心配はいらないように思える。口の中の出血も皮膚を切っ

ただけであって歯が折れたわけではないようだ。
「それにしても、ヨシムネめ。やっていいこととわるいことの区別もつかないのかしらあの子ったら」
そうだそうだ、と頷くリーダーの頭をこずいた。お前もだという気持ちを込めてじろりとにらむ。女帝と呼ばれている女はふたたび首を縮めた。
それを眺めて大きくため息をついてから、目を凝らしてその顔を見つめた。そこにあるのは試合を経験する前と同じ造作で、違う人間の顔に思えたからだ。少なくとも本人は何かすっきりして、今の試合に満足している（自分の剣幕に怯えてはいたが）ように見えた。
まあ、いいか。
そう思いなおすと神田はハンカチを裏返してリーダーの口の端から垂れた血をぬぐってやった。端正な顔をした娘は甘える子供のようにされるがままになっている。

内田信二　対　佐藤良輔　①

浮き立った気分で会場に戻るとちょうど部隊の戦士である佐藤良輔が直立で精神を集中しているところだった。驚かせてやろう、と右拳を握りしめてその背中に向けて繰り出すと、まるで漫画のようなタイミングで佐藤は屈伸をした。くすくすと笑い声は同じく部隊の仲間たち。さすがは！　と彼らから声援が飛ぶ。さすがは強運の戦士！　その言葉に佐藤は嫌そうな顔をした。俺は運だけじゃねえよ！
内田さん倒してそれを証明してやる！　その気勢は向かいのセコンドにも聞こえたのか、土嚢に腰掛けていた西谷陽子、小笠原幹夫から拍手が届けられた。その意気やよし！
という彼らの態度こそが下馬評を（そして実際の実力差を）明快に示している。津差龍一郎はよしがんばれと肩を叩いた。
佐藤は二日目に試験に合格した、第二期ではもう古い部類に属する戦士だ。試験会場で岸田という戦士と意気投合し、津差と部隊を組んだ。初期の六人のうち、残っているのはもう三名しかいない。自分と魔法使いの内藤海とこの

佐藤だけだ。最初のメンバーがまったく変わっていない笠置町部隊のような例は異常なのであり多かれ少なかれ顔ぶれは変遷を経ている。

いつ頃からだろう、佐藤が強運の戦士と呼ばれるようになったのは。確かに強運としか思えないような出来事がいくつもこの男には起こっていた。急襲した怪物たちが守っていた罠、そこに戦闘中で勢いあまって突っ込んだがなぜか作動しなかった。彼と一緒にちょっと人気の店に行くとまず並ばずに座ることができる。彼がぴあで徹夜すると二〜三列目の中央のシートを取ることができる。京都市中のある商店街のくじ引きで、たった一枚の券で見事一等のプラズマディスプレイテレビを当選させた（それはいま一〇万円で売られ笠置町姉妹の部屋にある）。一つ一つを見ればどこにでもあることだと皆は言う（津差は不満だ。彼は年賀はがきの切手シートすらほとんど当たらない）が、一人に重なればそれは珍しいことなのだった。

そしてその強運は今回も生きている、と皆は言う。ベスト8は確実と呼ばれていた人間ですら、組み合わせの運不運によりぽろぽろと食い合うトーナメントにおいて佐藤の相手はここまですべて第二期の戦士だった。これが強運ではなくてなんだろう？　ということだ。ちょっと待ってくれ、と津差は苦笑を抑えられない。お前たちはそう言うが、目の前で精神を集中している男もまた第二期の戦士だということを忘れてはいないだろうか。皆は強運という華々しい文字をうらやましがることにかまけて大事なことを見落としている。この男の実力が、既に第二期の戦士にあたることを幸運と思わせるレベルになっているということを。ここだぞ、と部隊のリーダーとして思った。相手は第一期の戦士でも最精鋭の部隊に属する内田信二（うちだしんじ）。彼を倒せるならそれはもう運の問題ではないと皆が認めるだろう。ここだぞ。

「お前、勝つ気でいるのか？」

心の中の思いを隠して驚いたようにいう。集中していた佐藤は憤然として振り向いた。

「当たり前でしょう！　ツキだけなんて思われてたまるもんか。勝ちますよ！」

「って言っても相手は内田さんだぞ。真壁を一回りスケールアップした相手だぞ。おまえ訓練場で真壁に勝ったことないじゃないか」
「うう、うるさいな。そういう津差さんこそさっきまで葛西にびびってたくせに。ドーピングで回復か？　かっこわりい」
「やかましい！　俺のこの気合は自前だよ！」
「でしょう？」
不敵な笑いだった。
「俺も気合が入ってますよ」
頼もしい！　津差は嬉しくてにやりと笑った。
「まあ負けるにせよ俺たちが恥ずかしくないようにしてくれよ」
変わらずの減らず口に、佐藤はとうとう吹き出した。
「ええい！　内田さんのセコンドはあっちだぞ！　出て行け！」

内田信二　対　佐藤良輔　②

強運の戦士という呼称に誰よりも違和感を感じているのは本人である佐藤良輔（さとうりょうすけ）だった。違和感である。反感ではない。この街にいて運も実力のうちという言葉が事実であることを痛感しない人間はいないし、おそらくほとんどの人間は運とは才能の一種だと、本人に帰属し無意識に発揮する才能の一種だとうすうすわかっていた。だから強運の戦士と呼ばれること自体はありがたいと思っている。違和感を感じるのは、ほかならぬ自分の身にその呼び名が与えられることだ。
これまで幸運とは無縁の人生を送ってきた。不幸といってもいいと思う。もちろんこの時代の日本に生まれたことが、世界のほかの土地に生まれることに比べてどれだけの幸運かはわかっているつもりだ。しかし自分たちの幸運はこの国に生まれ国民になった時点で尽きたのではないかと思っていた。母が双子を産んだために体を壊し亡くなり、男手一つで兄妹を育て上げようと奮戦した父親もまた息絶えたとき二人はまだ十歳だった。それだけでも自分を不幸

と思っていいものではなかっただろうか？　親戚じゅうの親切で高校まで出してもらえた二人はアパートを借りて働き始めた。二人で身を粉にして働いて、暮らしには困らなくなった。しかしそれだけだ。穏やかで安らかな生活に参加するための何かは見つからず、いつしか兄はどちらか一方でも幸せにと思いつめるようになっていた。そんなさなか、妹に恋人ができた。

兄の目から見てもその恋人はいい男だった。名前だけは知っていたある巨大な会社に勤める男だという。時は来た、と紹介された晩に郊外の安アパートの自分の部屋で泣いたのをまだ覚えている。父親が亡くなってから初めての涙は生まれて始めての嬉し泣きだった。あとは、あとは自分と妹の人生を切り離すことだ。とはいえ妹の人生に暗い影をもたらしてはならず、妹は自分だけ幸せになることを決して受け入れないだろう。何か、早急に自分も身を立てられる手段はないだろうか。そう探したところで迷宮探索に出会った。

幸いにして妹の恋人は迷宮探索と関係の深い商社に勤めていた。彼に頼んで事業団の職を得たと口裏を合わせてもらった。もちろん彼は自分が探索者になることに最後まで反対したが、それでもしぶしぶ承諾してくれた。そうでなければいけない。恋人とその兄とを秤にかけて兄を取るような男に妹を任せられるものか。そして佐藤は試験に合格した。最後の一時間は朦朧として記憶がない。

それから自分の身に起きたことは誰が見ても幸せとしか思えないことだった。自分も信じられない思いで日々を眺めている。それでも、たった三ヶ月のその幸せだけでは自分の不運に対する絶対的な信頼は覆らないのだった。あるいはだからこそ、幸運の女神は自分にまとわりついているのかもしれない。

今、佐藤は幸せだった。妹はすっかりだまされている。まだ若い恋人が会社で力を持っているはずもなく、その一存で兄に職を与えられるわけもないのだが、巨大な会社の名前と慣れない（そしてこれまでずっと願ってきた）幸せが納得させてくれたようだ。時々京都にやってきては「迷宮探索事業団の事務員」である兄の家に泊まっていく。い

つまで経ってもスーツが似合わないねと笑いながら、それでも2DKのアパートに貧しげな様子がないことに満足しつつ、恋人との暮らしを嬉しそうに語ってくれる。恋人はできないの？　と心配してくれる。佐藤は幸せだった。

そして、あれだ、と視線をトーナメント表に移した。そこにはベスト4の賞品として『ホテルミラコスタ優先宿泊券』とあった。非の打ち所のない、まさに彼が幸運を運んできたかと思える妹の恋人、その唯一の欠点は仕事が忙しくて先々の予定がなかなか立てられないことだと妹が話してくれたことがあった。ミラコスタに泊まってみたいのだけど、彼の都合がつかないから予約が取れないのだと。

視線が『優先』の文字に引き寄せられて動かせなかった。どのくらいの『優先』かは知らない。だが、もし三日前でいきなり宿泊できるほどの『優先』であれば二人はどれだけ喜ぶことだろう！

津差にはああ言ったが、本心では運でもなんでもいい。絶対勝つ。

みんなの視線が痛い気がする。ここから出て行きたい。あとは自分のアナウンスだけ、という状態で皆が自分を待っている。わかっている。自分はこの紙を読み上げなければならない。自分に責任はない。でも、くそう、おのれ、あの男。高田まり子はマイクのスイッチを入れた。指が震えている。仕方ないと思う。

『次のカードに先立ちまして、内田信二からのメッセージをお伝えします』

場内が続きを待って静まった。私は悪くないよ。本当だよ。泣きたい。くそ、あの野郎。ちくしょう。地下で見かけたら焼き殺してやるぞ。絶対だバカ。

『ええと――ごめん！　彼女との約束忘れててすっげー怒ってる！　棄権するんであとヨロシク！　――だそうです』

轟音。怒声。スイッチを切っていないマイクがそれを拾い、慌ててマイクの頭を抑えた。ああ、助けて、誰か。マイクを抱え込んで放送席に突っ伏した。

それがしん、と静まった。恐る恐る顔を挙げると、会場

の中央に自衛隊の迷彩服を着た男が立っている。
星野幸樹は職業柄かよくとおる声で話し始めた。
「内田がみんなに迷惑をかけて本当にすまないと思っている。内田の不始末は俺の不始末、俺が責任をとって佐藤の相手をしたい。見てるだけでもつまらないしな。それで許してもらえるだろうか」
大歓声は場内の気分がまたまた一変したことを示していた。手を挙げて応える星野に後光が差している気がする。マイクを握って言葉を発した。
『カードを変更します！　星野幸樹対佐藤良輔！』
場内をゆるがすホシノコールに和したい気持ちだった。
星野さん、ありがとう！　ガッツポーズのまま固まり呆然としている男の姿が視界に入ったがもちろん意識には残らなかった。

星野幸樹　対　佐藤良輔　①

とことこ歩調を乱したものはもはや怒号とも呼べるサイズの音の塊であり、そして爆発的な大歓声だった。何事だよ、と鯉沼今日子は小走りに進む。ベスト8決定戦からは統一された試合場、最前列から二段目に自分の席は確保されていた。そこに席をもてるのは自分も夫も探索者の最精鋭部隊に所属しているからだ。この街では探索者の間に公式な上下はなく、そのぶんいろいろ曖昧なもので序列を決していた。その最たるものはもちろん年齢だったがそれと同じくらい探索の進度も影響力をもった。その点で自分たち四人は最上のヒエラルキーにおり、今回の席次にもそれは現れている。もっともその一群の中にはこれから試合を控えている葛西紀彦もいるのだから当然といえば当然だった。
ともあれ、と今日子は夫の隣りに座りこんだ。何やってるのよ星野さんはと夫に問い掛ける。鯉沼昭夫は自分の部隊のリーダーを苦笑しながら見やり、返答より前に秀美ちゃんの容態は？　と問いかけた。

「診療所に運んだときはすごい熱だったんだけど、ついて少ししたら完全に引いた。具合が悪い、というより黒田さんのいじめに対処するためにオーバーヒートしたんじゃないかな、あれって。いまはよーく眠ってるわ。起きたらとりあえず部屋に帰すって先生は言ってた」

そうか、と夫は頷いた。戦っている黒田聡にはなかなかわからなかった鈴木秀美の異変を真っ先に感じ取ったのがこの男である。第四層の戦闘においては常に治療術師は仲間たちの体調に気を配らねばならず、もはや彼らは視聴覚にたよらず各人の体調を察するコツを見出していた。その感覚は迷宮内部でしか鋭敏にならないのだがそれでも目の前で高まっていく気合の中一番に気づいたのはやはり治療術師だったのだ。危険を察した彼が隣りにいた妻にその旨を確認し、妻が女帝とともにタンカを用意したといういきさつだった。

で、何があったの？　と重ねての問いに手早く事情を説明される。今日子は腑に落ちない点を口に出した。内田の不始末は俺の不始末って、あの二人って仲良かったっけ？

「いやあ」

夫は平然と否定した。どちらかというと佐藤さんの方が星野さんの弟子と言っていいんじゃないかな。

「たぶん見てるだけじゃ物足りなくて混じりたくなったんだよあの人。秘密兵器も寺島さんに撃墜されちゃったじゃないか」

なるほどねえ、と今日子も納得しつつ苦笑した。星野家とはお互い招きあい（回数が全然違うって？　うるさい！）食事をご馳走する家族ぐるみの付き合いをしていた。星野家のお姫様である由真とは「今日子」「由真」と一緒にお風呂に入るほどの親友でもある。だからその主の人となりはわかっているつもりだ。それにしても佐藤さんはかわいそうに。内田さんがいなくなるあたりまでは強運の戦士だったのにね。

「ここまでかな？」

「どうだろうね」

そう言って結論を保留する声は夫の隣りにいる野村悠樹である。その隣りの葛西に敗れた彼はもうツナギを脱ぎ捨

てて気楽な格好だった。
「わからないよ。途中から出てきてUSJチケットをかっさらうほど星野さんは鬼じゃないし、であれば佐藤さんはやっぱり幸運の戦士だと思うな」
葛西も夫もうなずいた。今日子一人が理解できない。
「つまりだ。星野さんを一言で表現すると――なんだろう?」
夫の質問に葛西が即答した。
鴨川会長。
「あー、なるほど。うまいな」
野村が感心したように手を叩いた。今日子はもちろんわからない。
いやだから、誰よそれ? しかし二人は納得したように深く頷く。

星野幸樹　対　佐藤良輔　②

「こりゃ離婚だな、鯉沼くん。まさか鴨川会長を知らない嫁だなんて」
野村悠樹の言葉にまったくだと葛西紀彦がうなずく。いやいや、と鯉沼昭夫は慈愛のこもった目で妻を見つめた。知らなかったのは仕方がない。これから学べばいいさ。今夜はずっと木賃宿で『はじめの一歩』を読んでくること。いいね。
「……マンガ?」
「名作だ」
「……私の方こそ実家に帰りたくなってきたよ」
まあともかく、と葛西が説明を始めようとしたとき、会場でも開始の号令がかけられた。それまで憮然とした表情で立っていた佐藤良輔が同時に表情を改め、激しい勢いで切りかかっていく。その通りだ、と野村は思った。身体能力はもとより戦闘経験でも心身の消耗でも佐藤が圧倒的に不利、であるなら手数を多くしてまぐれ当たりを狙うしかなかった。そして星野幸樹もそれを正確に予期している。星野が勝つ気ならば勝敗は一瞬でつくだろう。他の意図があれば違う展開になる。

右、左、左、足、右、左、全ての攻撃をきわどいところで抑える星野の表情には余裕がなく、傍目には佐藤が優勢に見えた。佐藤もそう感じているはずだ。自分の攻撃はかろうじて防がれているものの、気合では圧倒していると思っているはずだ。それもそのはず、間断なく繰り出されるその攻撃に一つとして威力気力ともに不十分なものなどなく観客たちはよくできた殺陣を見ているかのように息を呑んでいた。

うわ、おしい、うわ、と小さく呟く友人の妻を見やって野村は感嘆をあらたにする。星野に対してだ。

鴨川会長ってのは——と葛西が中断されていた説明を再会した。鴨川会長はそのマンガで主人公が所属するボクシングジムの会長なんだけど、ミットの置き場所が非常にうまい。選手たちはそのミットめがけて打ち込むだけで自然と綺麗なフォームと急所を打ち抜く正確さを身につけることができる天才的なトレーナーだ。星野さんは総合力で最強クラスにいるお方だけど、それよりも何よりも訓練の相手を伸ばす才能では群を抜いている。

「勉強になるって意味では神足さんとタメ張るな。もっとも神足さんは次から次へとこっちの想像を裏切ることしてくるって意味だけど」

野村の補足に葛西はうなずいた。今日子がいぶかしげな声をあげた。じゃあいま、星野さんはわざと打たせているってこと？

そのとおり、と葛西。相手にだけわかる微妙なスキを見せてそこに打ち込ませることで自然とフォームと太刀筋を矯正しているんだ。

「たしか、星野さんは剣道をやっていたのじゃなかったか？あれもそのたまものか？」

その言葉に野村は苦笑した。

「自衛官だし、確かに有段者だったと思うけど、格闘技をやってるとそれだけで強いって考えるのは素人の悪い癖だな。剣道の経験云々じゃなくて、星野さんは性格的に育てるのが向いていてその勉強をしているからあれほどになったんだろう。俺に言わせりゃ、お前らが太刀筋や動作の正確さについて気にしなさすぎなんだ」

耳が痛いねと葛西は苦笑してから、ともかく、と会場を眺めた。佐藤さんの気迫は実戦と変わらない。訓練だとわかっていたら星野さんの授業も効果が薄れるのはしょうがないけど、この状況だったら全部が血肉になるんじゃないか？　佐藤さんにとっては大会の勝ち負けよりも重要な、今後生きていく上で最高の経験をしていると思う。おそらく星野さんはやるだけやったら打たせて佐藤さんを勝たせるつもりだけど、これで国村さんとの戦いが面白く――言葉は野村の驚き声で中断された。

審判が手を挙げている。佐藤の方に。

野村が呆然としたように葛西、と呟いた。

「いま星野さん打たせたか？」

いや、と葛西が首を振る。まだ稽古続けるつもりだった。いまの瞬間、佐藤さんは明らかに星野さんの予想を越えてたな。

こりゃちょっと面白くなってきたよ、対国村戦。そう野村は呟き、予想外の結果に割れるような歓声の中で驚きの表情を喜びに塗り替えた星野と、それに深く頭を下げる佐藤を微笑んで眺めた。

鯉沼が立ち上がった。どうしたの？　と妻の問いかけに「もうちょっと面白くしよう」と笑む。ちょっと境内まで連れていって、体力を回復させてくる。ルール違反はわかっているけどそもそもあのオッサンがしゃしゃり出た時点でいらん体力使わせてるわけだからな。仲間としてケツは拭かないとね。ぱちりとウインクをした。

国村光　対　狩野謙　①

これまで背が高い人のことを羨ましがったことはなかった。三峰（みつみね）えりかは身長一四四センチであり女性の平均身長ですら一六〇センチに達しようという現代ではその意識は奇異と人には思われるだろう。だがそれが実感なのだから仕方がない。成長が止まった中学時代からは歩いていける距離にある中高一貫の女子高だったし、そもそも地方都市の生まれだった。大学に通うため千葉にやってきたものの

親類が所有しているマンションの一室に住みそこから大学には歩いていけた。つまり三峰には背の高い人間と押し合いへしあいするという経験がなかったのだ。そういう経験がなければことさら身長を意識したりはしない。母も背が低かったために台所には脚立は当然あるものなのだと思っている。

でも、と人の群れの中、男性の名前を叫びつつ歩きながらようやく背が低いことのデメリットを感じはじめていた。人の動きを読むことに慣れない自分だから行き交う人々とぶつかってしまうのは仕方がない。それは謝ればいい。でもぶつかる場所が相手の肘だったりするとそれはもう言葉を失うほど痛いのだった。そのうえこっちが謝らなければならない。なんで自分がこんな目に。半泣きになりながら名前を叫ぶ。

「国村さーん！　国村光（くにむらひかる）さーん！　試合が始まりまーす！　国村さーん！」

うわ！　人の流れが開けたと思ったらスーツ姿の男性が寝転がっていた。顔にはキングファイルをかぶせている。この会場でスーツ姿、そして人込みの中で寝ているその精神力に少し驚いたがそんなことはかまっていられない。ひょいと（スカートだったが）またぎ超えて再び名前を叫んだ。

「え、えーと、三峰さん？」

名前を呼びかける言葉にさては？　と喜んで振り返るとそこにはツナギに身を包んだ探索者が立っていた。死体の売買以外で会話をしたことのないその顔はしかしはっきりした一つのイメージとともに三峰の心に焼き付けられている。そのためにちょっと身をひいたがその男――黒田聡（くろださとし）という――は気にしていないように国村さんを探しているの？　とおそるおそる訊いてきた。

そうです、とうなずいて情報を期待する視線を送る。男の顔はさらに困惑が深まったようだった。なんだか怖い人じゃないのかな？　と三峰は緊急時とはいえ意外に思う。彼女が聞いていたこの男のイメージとは、色魔。自分の同期にあたる技術者のうち二人の娘がその毒牙にかかり、それを憤った男が（探索者の戦士は喧嘩がご法度であるにもかかわらず）顔を二倍くらいの大きさに腫れさせられた。

その話を聞いてからは常識の通じない人間だと思っていたが。だから探索者たちと、とりわけ女たちと友情を感じさせる会話をしている姿を意外に思いつつも敬遠してきたのだった。それがいまここにいる。できれば避けて通りたいが、しかしこの男は国村光の居場所について情報をもっているようにも見える。逡巡はしかし一瞬で破られた。黒田が下を指差したからだ。

「――これ、国村さん」

え？　と見下ろしたそれは確かにスーツ姿だった。国村はこれまで二度の試合を経ているはずだった。当然ツナギを着ていると思っていた。しかしそこに、ビジネスバッグを枕にして顔のうえにキングファイルを広げ、胸の上にノートパソコンを置いて寝ているのはどこから見てもサラリーマンだった。それも、平日の美術館でよく見かける怠けている途中の。

国村さーん、と声をかけながら黒田が肩をゆする。う、う、うあ、と返事があってファイルが落ちた。それまで顔にくっついていたそこの個所にはよだれのあとがくっきりついている。あ、仲間だと嬉しく思った。

「国村さん、試合みたいですよ」

ぱっちりと目を開いたその顔はなるほど戦士らしい引き締まったものだったが目の下のクマと青々とした無精ひげ、だらしなく緩められたネクタイがその容貌を台無しにしている。サラリーマンはサラリーマンでも、テレビの中ＪＲ新橋駅前でよく見かける顔だった。

その眼球が二人を捕らえたようだった。そして立ち上がった。三峰はその動作に違和感を感じる。何がおかしいのかわからないけど、何かおかしい。国村は一つ伸びをすると、両腕をだらりと垂らし膝を軽く曲げて、一度だけ身体をゆすった。そして黒田に次の相手は、と尋ねた。代わりに三峰が応える。狩野謙（かのうけん）さんです。

「狩野？　誰？」

黒田は苦笑した。さすがは幽霊探索者ですね。狩野さんは確かこんどのゴンドラ警備から正式に星野さんのところに加わる第一線の戦士ですよ。説明に国村は笑顔を返し、じゃあ行こうかと歩き出した。黒田が慌てて後を追う。

「ちょ、ちょっと国村さん。アップとかしないんですか？　スーツは着替えないんですか？」

そんな、相手がお前だってんならともかく大げさな。振り向いた無精ひげの口元が歪んだ。

国村光　対　狩野謙　②

メールでこの祭りの事を知り、夕べは一睡もせずにプレゼン資料を作った。それは本当は、今日一日かけて作ろうと思っていたものだ。なんとか完成し、頼み込んで一時間早く出社してくれたアシスタントに業務指示を出してから、新幹線車内では他の案件への下調べに没頭した。過去の製品の説明書部品をデータベース化することで新しい製品の説明書の雛型を簡単に作れるその新機能、担当者の反応にはそれなりの手ごたえを感じている。三月が下期予算の〆であり、担当者はそのシステムを発注したいものの社内予算が獲りにくい時期になりつつあった。どれだけの予算を分捕れるかは、自分が担当者に提供する資料で決まる。これまでは担当者に対して製品を売り込む関係だったものが、これからは担当者とともに予算を勝ち取る関係になる。このフェーズが国村光にとっては大好物だった。ここで担当者に苦労させればさせるだけ実際のシステム運用時の問題解決に協力的になってくれる。難産の子ほど可愛いというのはコンピュータシステムでも当てはまることだ。

ともあれ昨夜から睡眠時間はゼロだった。試合と試合の合間も寝るつもりはなかった。しかし身体は無理をわかっていたらしい。気が付いたら眠ってしまっていた。

準決勝までは怖い相手とあたることはなさそうで、だったら準決勝の前に十分ほど眠ればいいだろう。そう考えて海外の技術情報サイトを見始めた、つもりだった。しかし寝転がってディスプレイを読もうと思ったあたりでもう正気ではなかったのだろう。痛恨の熟睡の結果、時間があればツナギに着替えるつもりだったが果たせずにあいかわらずのスーツのまま試合場の一角に姿をあらわす羽目になってしまっている。

ベスト8決定戦から試合場が一つに絞られたらしく、雛壇状に積まれた土嚢の上に観客が並んでいる。もともと週末しかこの街に来ない自分にとって親しい知り合いは多くないが、それでも探していると第二期の探索者の顔が見えた。彼は熱意をもって自分に教えを請うている。師としてちょっと下手なところはみせられないな、と思いながらさらに視線を泳がせた。

あ、やばい。

動揺をまったく表さずに視線はゆっくりと観客席を舐めていく。しかし背中には汗がにじみ出ていた。心臓が強く打つ。

やばいぞ、あの相手。ええと、狩野だったか？

一瞬だけ見たその表情は、おそらく自分のスーツ姿に憤って強烈な怒りを瞳に湛えていた。小手の上からでもわかるほど強く木剣を握り締めながらもその腕、肩には硬さが見られない。強い意思を胸に宿し、それでいて身体は最高の動きを実現できるようにリラックスしている。彼のことを「第一線級の戦士だ」と黒田聡（くろだ さとし）は評した。そのときは笑って聞き流したその言葉だったが、いざ目の前で見せられると手に汗がにじむ。

あー、どうしよう。普通にやって負けるとは思わないけど、ツナギ着てなきゃきっと骨とか折れる。いや当たりどころ悪けりゃ俺死ぬぞおい。ていうかあいつ怒り狂って俺のこと殺してもいいやという気分でいないか？　きっとそうだぞ。うわー、ちょっといやな流れになってきたな。

アナウンスが自分の名前を読み上げて、反射的に笑顔で手を挙げた。この期に及んでスーツ姿の自分に場内は大興奮だった。しかも俺、ヘルメットもつけてないだろう。これってもう自殺と言ってもいいものだろうな。どうするか。謝っちゃうか？　謝ってツナギとヘルメットをつけるか？

しかし、と思い直す。そもそもこんな段階で相手の打撃を受ける余裕は自分にはないのだった。徹夜あけの自分が優勝するには少なくとも準決勝までは体力を温存して進まないといけない。それで全霊をふりしぼって二試合、それが限度だった。優勝できないのならわざわざ会社をサボって来た甲斐がない。全ての行動原理に優勝を置いたらする

べきことはあっけなくわかった。

口元に笑顔を浮かべて、真壁という教え子に手を振ってやった。視界の端っこで対戦相手の周りの空気がかげろうのように揺れたような気がした。いまの最善の方法は、あおってあおって一撃で息の根を止めることだ。わざとあくびをする。

さて、勝てるならいいけどもしもあいつの力が俺の予想をほんのちょっとでも越えていたら、俺はどうなってしまうのだろうか。瞬時に脳裏に描いた自分の敗北風景は複数あったが、驚いたことに自分は全て白目をむいていた。瞳孔まで開ききっている気がする。

あー、俺死ぬのかな。泣きたい思いを必死にこらえながら、態度だけはふてぶてしく伸びをした。

国村光　対　狩野謙　③

殺してやる。そこまで考えて狩野謙（かのうけん）は愕然とした。自分のその危険な感情はどう考えてもこの空間にふさわしいものではなかったから。不自然なものだったから。どうしてそんな気分になった？　胸の奥にわだかまる土色の感情はそのままに自分の心を眺めかえした。スーツ姿でやってきたから？　それもある。だがそれだけではない。試合が始まるこの場にあってなお余裕綽々としているその態度にプライドを傷つけられたのだ。

どうして奴はあんな行動をとれるんだろう？　部隊内に学生が一人いるために日曜日には必ず潜っている自分は、土曜日に潜る国村光（くにむらひかる）とは訓練場で出会ったことはなかった。だからその実力のほどを知らない。知っているのは評判だけだ。第一期募集の二日目に登録した最古参の戦士の一人で、平日は名古屋の会社に勤めている。その戦闘能力に対する評価は他の戦士たちとは趣を異にしていた。他の戦士たちはあくまでも強弱優劣のベクトルで表現される。しかしこの男だけは違う。皆が一様に口にする表現は「違う」というもの。それが何のことなのかはわからない。

違う。不気味な響きだ。しかし彼の部隊がまだ第三層に

いることも確かだった。常識を外れて強力な戦士であるならば、たとえ土曜日だけであろうとも仲間にしたいという部隊はあるはずだ。その誘いがかかっていない（応じていないだけかもしれないが、その可能性は低いと思う。この街には深く降りたい人間と安定して稼ぎたい人間がいるが、稼ぎ口があるのにわざわざやってくる彼は前者と考えるのが自然だったし現に第三層まで降りている）ところを見る限り、最精鋭の戦士たちと実力は同じかそれ以下ということになる。であれば、自分にこれほどの余裕を示せるはずがないのだ。

おかしいな。開始の声を受けて一歩踏み出した。これは擬態か？　まず考えたのがそれだった。自分の神経を逆なでし、不用意な一撃を引き出すための。一歩を進む。国村は相変わらずとろんとした目をちらちらと観客席にやっていた。先ほど手を振った方向。誰か気になる人間が来ているのだろうか？　もう来歴の古いこの男のことだからこの街にいいところを見せたい相手がいたところで不思議はない。試合にあってなおそちらに気が割かれるほどの相手であっても不思議はない。自分を見下しているならば。

一歩進む。いわゆる一足一刀の間合いに到達した。一歩の踏み込みで攻撃が相手に届く間合いだ。その瞬間、国村の両目がこちらに向けられた。そして固形かと思われるほどの圧力が自分の足を、手を、首を、何より心を揺さぶった。

さすがは第一期の最初からいた戦士だった。週に一度潜るだけとはいえ、それでも自分たちの半分近くのキャリアは積んでいるのだ。耳鳴りすら感じるプレッシャーの中、しかし狩野は疑問に思う。同じ戦士ながら惚れ惚れするような気迫のなかにそれが揺らぐ一瞬がある。誘いか？　目をこらして眼前の男を見つめた。その気配を感じたか揺らぎは消えてなくなり、気を取り直したように重圧が再び吹き寄せてきた。誘いではなかったらしい、とまたこちらも待ちの姿勢になるとしかし、再び重圧が揺らぎ始めるのだった。しかもそれが、今度は少し長い。

目の下のクマ。生あくび。寝癖。無精ひげ。こちらを挑発するかのような態度。それでいて間合いに達すると剥い

た牙。

合点がいった気がした。この男はいま疲れきっている。このトーナメントが開催されると決まったのは昨夜の北酒場でのことだ。時間にして七時半ごろ。それから彼に電話で知らせて駆けつけたとしたら、今日のぶんの仕事はどこで片付けたのだろう？　クマ。生あくび。寝癖。無精ひげ。昨日の夜だ。どれくらいの仕事量があったのか知らないが、ぱっと見てわかるほどにこの男の昨日の睡眠時間は少ない。だから、できるだけ手数を少なく勝とうとしている。

心底は読めた。ではどうする？　この試合を勝つだけならば長期戦だが、体力に余裕がないのは自分も同じことなのだ。強運の戦士と呼ばれる男に運を吸い取られたか、これまでの自分の相手は全て第三層に到達している戦士たちであり相当に消耗している。ここでさらにこの男と長時間の斬りあいをしても次の強運の戦士には勝てるだろう。しかしその次はつらくなる。相手が短期決戦を狙って罠を仕掛けるならばそれでいい。それを噛み破って勝ってやる。目に力を集めて睨み据えた。引きずられるように国村の緊張も高まった。そのこめかみを流れる汗さえもはっきりと見えた。

二撃だ。一撃は浅く手を狙う。当然それはかわされるだろうが、予期して初太刀を浅くしておけばその後の切りこみははじける。その後鎖骨を折ってやることにしよう。罠とはいえそれまでの態度は腹に据えかねていた。

国村の気が揺らいだ。

「隙」

怒号。そして青眼に置いたまま踏み込んだ。

「あり！」

この言葉を、狩野は軽い催眠術の一つだと思っている。相手に意識を集中していてなおかつ「本当に」隙があったとき、それを見透かされたように指摘されると人間は納得してしまうものだと。自分には隙があるのだと。だからすぐには動けないのだと。神足燎三（こうたりりょうぞう）という最古参の戦士の一人がよくこの言葉を使い、どうしてか動けなくなる自分を省みて達した結論がそれだった。それは正しかったらしく、国村の目に浮かぶのは驚き、焦りそして、諦め。心の

中で快哉を叫んだ。当然これは自分の目に表れて、それがまた国村を打ちのめすだろう。手――呆れたことに小手すらつけていない――を狙った剣先が空を切った。これは予想通り。あくまで視線は国村の目に置いたまま、視界の端で木剣を握った拳の行方を追っていた。だからその拳があっけなく木剣を放した様子も目の当たりにした。

衝撃的な光景だった。武器を放すことは地下では死につながるのだから驚くのも当たり前のことだ。だから視界の端のその情景を信じられず、首を捻じ曲げてまじまじとそちらを見やってしまった。

まずい、と思った瞬間には顔の下半分、頬骨と鼻を覆うように大きな手で掴まれていた。強い力で締められてあごが開く。ヨガの脱力ではあごと舌の力を抜くことを重視するように、無理やりにせよかみ締める力を阻害されて全身から力が抜けた。それにしても、これは、人間の力か？

涙がにじんだ。

す、と左眼の下に当てられたのはボールペンの先端だった。眼球を脅かされる恐怖よりも先にどうして左眼なんだよと愕然とした。自分は右で剣を振るっている。そして、利き目と利き腕は一致することが普通だった。だから、目を潰すならば利き目である右を潰そうとするはずじゃないか。しかし左利きで生まれて両親に矯正された自分は、ありとあらゆるものを右でこなしながらも利き目だけは左だったのだ。それを知らず、どちらでもよいがたまたま左眼にボールペンの先を当てたのか？　それとも、先ほどからの自分の動作から利き目を左と判断したのか？

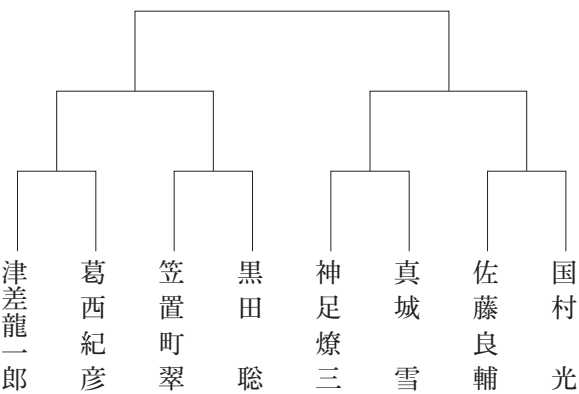
「悪いけどさあ」

静かな声が聞こえた。その顔にはぐったりと疲労の色がにじんでいた。

「あんた目の前にして隙なんかつくらない、いやつくれないよ。――ああしんどかった」

審判が終了を告げた。

第五章　準々決勝


津差龍一郎
葛西紀彦
笠置町翠
黒田聡
神足燎三
真城雪
佐藤良輔
国村光

おやつタイム　笠置町翠

かすかにつりあがった目尻、小さな鼻と口は女性を誉めるベクトルで分類するならば「かわいい」よりも「美しい」と言わせる形をしていた。かたちを少し整えるだけの眉毛はくっきりと濃くつりあがり、それが全体にきつい印象を呼び起こしている。ともすれば生まれそうな険を抑えているのは明るめに脱色した髪の毛であり、前髪が冬の空気にもてあそばれ揺れていた。両目は閉じられている。誰でも目を閉じたら不安になるだろうし、それは普通まつ毛と目尻の揺れに現れるものだったが、かすかにうつむいて目を閉じるこの娘はまるで眠っているかのように不安を表に出さない。向かいに座る男を心から信頼しているのか、あるいは何かに集中しているのか。対する男はこれもまた静かな視線をじっとその顔に注いでいた。それは女を気づかうようでもあり何かを見定めているようでもある。膝の触れる距離で向かい合いながらも甘い雰囲気のない男女だった。

女の名前は笠置町（かさぎまち）翠（みどり）、男の名前は真壁啓一（まかべけいいち）。総勢三〇〇人以上になる探索者のあいだでも有名人に挙げられる二人だった。だから通り過ぎる人々が視線を投げていくのだろうが、それよりも二人の体勢に問題があるのかもしれない。訓練場の壁に作られた外への通用口、その一つのコンクリートの上にあぐらをかいて向かい合った二人は、それぞれ手を前に出していた。手のひらを下に向けた二人の手は空中で重ねられている。真壁の左手が下、少し間をあけて翠の右手。

真壁の頭と肩がほんの少しだけ揺れた。

翠が手を胸元に引いていた。

見ているものがあれば、真壁が下になっている自分の手を引き抜き持ち上げ、上から翠の右手を叩こうとしたのがわかったかもしれない。翠が――目を閉じているにも関わらず――それを察知し手を引くことで叩こうとする手を避けたのだとわかったかもしれない。しかしそれを看破するには相当な注意力と反射神経が必要だった。二人の動きはそれほどに速い。

「もう一度」

翠の静かな声。真壁はうなずいて左手を差し出した。そ

の上には翠がまた右手を浮かせる。今度は間髪いれずに叩こうとした真壁の手はまたかわされた。
「いいんじゃない？　次は右でやってみる？」
感嘆と喜びを隠せない真壁の言葉に娘は目を開いて微笑んだ。うなずこうとする動きが止まったのは遠巻きにして二人を眺めている一団が視界に入ったためだった。つられて真壁の視線も動き、それを気づいたかこれまで遠慮していたらしい一団が駆け寄ってきた。
ぎょっとしたように二人に身を引かせたものは、この街では珍しいその一団の装束である。おそろいの紺のダッフルコートは前を止められておらず、その下からは冬用のセーラー服が覗いていた。一団はあぐらをかいたまま硬直する二人の前に展開すると、真ん中の、少し背の高い女の子が口を開いた。紅潮する頬は寒さだけのことではないだろう。
「あ、あの、テレビ見ました！」
二人のうちどちらに声をかけたのかは一目瞭然で、男は翠を面白そうに眺める。セーラー服の一団（軍団？）の視線を浴びて顔が強張った翠はただ、あ、ええと、う、と上体を隣りの男の背中に隠そうとしていた。
ＮＨＫのテレビ見ました！　真城さんていう方と切り合っているの見ました！　私たちとそんなに年が変わらないのにものすごく強いので驚きました！　お名前はなんておっしゃるんですか？　おいくつなんですか？　あとで稽古つけていただけませんか？　まだ勝ち残っているんですか？
矢継ぎ早に繰り出される質問に翠は硬直した笑顔を向けたまま、じりじりと這いずるように真壁の背後につこうとする。その動きに苦笑しながら真壁は一団のもといた場所を眺めた。そこには黒い合皮でできた荷物が並べられていて、立てかけてある棒状の袋を見るまでもなく、彼女たちはどこかの学校の――おそらく女子高の――剣道部なのだと想像できた。そういえば、時計はもう三時を過ぎていた。この祭りをどこかから聞きつけ、見稽古にやってきたというところだろうか。
迷宮街を紹介したＮＨＫの放送があってからこちら、真城雪（しろゆき）という美女のファンはたまにこの街を訪れてはいたがそれは真城がモデルも顔負けの美貌でありぴんと伸びた背

筋のりりしい女だからだ。翠もまさか自分にファンがついており、それが今日大挙して現れるとは夢にも思わなかっただろう。

「困るなあ君たち。サインは事務所を通してもらわないと」

真壁がとりなすように言い、その言葉で呪縛が解けたか翠が全身をその背後に隠す。両肩にかかる小さな手の感触から、おそらく肩越しに一群を覗き見しているのだろうとわかった。目当ての女に比べて三才は年若いはずの娘たちの間から「わあ、かわいい」という歓声が漏れた。背中がうろたえる波動を伝えている。

「とにかく、こいつはこれから試合が——準々決勝の二試合目だけど——あるから、それが終わるまではちょっと静かにしてやってくれないかな。大会の後だったらみんな道具を持っているみたいだし、空いたところで稽古をつけてあげるから」

わあ！　と笑顔の花がいくつも開いた。不満をこめて背中を小さく何度もこづく拳に苦笑する。笠置町翠って名前だからぜひ応援してやって！　と言うと一群は礼儀正しく頭を下げ、何が楽しいのか笑いあいながら立ち去っていった。荷物を担いで訓練場の入り口に歩き去る姿を見送ってから翠に振り返る。さきほどまでは静謐のなかにもぴんと気の通っていた顔は、いまはぶざまにうろたえていた。

「ちょっと動揺したね。また左手で何度かやろう」

う、うん、と真壁の左手の上に右手を差し出し、目をつぶり、数秒後には痛い！　という声が響いた。白い手の甲に真っ赤に浮き出たあとをさすりながら泣きそうな顔は痛みだけのことだったろうか。翠ってさ——真壁が呟いた。

「ひょっとして誉められるの苦手？」

うん、ちょっとね。情けなさそうに肩を落とした。やっぱいなあ、あの子たち応援に来るのかなあ。

大声援でしょうそりゃ。平然としたその言葉に頭をかきむしり、脱力したように真壁の肩に額を乗せた。

おやつタイム　真城雪

ゆったりと曲が流れている。

音の悪いテープレコーダーから最大音量で流れるその曲を取り囲むように人垣ができていた。ほとんどは女性で、年齢は大学生くらいから中年までさまざま。彼女たちは大きな輪になって一様に中心を見つめていた。視線の先を曲にあわせて動き回るのは一対の男女。右手と左手を結び、男の左腕は女の腰に回されている。向かい合う身体の間には何もない空間と緊張感が生まれていた。どこにでもあるダンスの風景がしかし異様な印象を与える原因は二人のいでたちだろう。男は灰色のセーターにジーンズと黒いロングコートだが女はシマウマ模様のツナギだった。

輪をつくる女性たちはその瞳に羨望と嫉妬と――驚嘆を抑えられずに二人の踊りを見つめていた。彼女たちは趣味でダンスを習っているからわかるのだった。目の前の男はともかく、経験がないと言っていた女の優雅さが。その女性は最初にいくとおりかのステップを教えられただけで、自分たちではかなわない世界に達していた。

男がつないだ腕をふり、女の身体を放り出す。女は綺麗な足さばきで男の腕から逃れしかし手は離さず、二人の腕が伸びきると反動のままに男の懐に戻った。おお、と見物人からどよめきが起こった。

音楽がやんだ。女は男の顔を見上げて微笑んだ。彼女は名を真城雪（ましろゆき）という。端正な顔立ちながらも鉄製の剣を担いで最前線に立つ戦士としてこの迷宮街で勇名をとどろかせていたこの街の権力者の一人だった。現在は剣術トーナメントのベスト8にも残っていた。対する男性はそのベスト8を決める試合で彼女に敗北を喫したこれまた戦士で、秋谷佳宗（あきたによしむね）という。周囲をとりまく女性たちに日ごろ社交ダンスを教えるダンサーでもあった。

「うん、勉強になるねえ、踊りは」

「やはり真城さんはセンスがいいですよ」

あと三十分程度でベスト8の試合が始まるこの時期になって、別に真城は遊んでいるわけではなかった。いまさら素振りをするのも泥縄に思えるとて、戦った誼ということで秋谷にダンスの指南を頼んだのだった。戦いは自分が勝っ

たとはいえ、目の前の男の体さばきには学ぶところが多いと実感したからだ。簡単なステップを教えてもらい姿勢を正して踊ってみると、なるほど人間の身体の操縦というのは努力すればするだけ余地があるのだとわかる。

今度は、と秋谷が言った。今度は少し難しくしてみますか？　音楽抜きで、俺が好き勝手にテンポを変えてリズムをとって踊ります。ついてきてください。

真城はきりりと表情を引き締めうなずいた。彼女の次の対戦相手はそのすぐれた身体能力のみならず予想をはるかに外れた奇妙な剣法で有名な古参戦士だった。剣力技量が同じ程度である以上、考えて対応していては負けてしまう。相手の意図を肌で感じ即応する能力、地下でなら極限まで研ぎ澄まされるその感覚を地上においても本調子に近づけるための工夫だった。ありがとうね、と小さく呟くと秋谷は返事代わりにステップを開始した。

最初はつっかえつっかえ、しかし三分もすると二人の動きは躍動的でありながら調和がとれていた。二人を囲む視線にはもう嫉妬は見られない。

おやつタイム　佐藤良輔

自分の耳には全て同じ音に聞こえ、自分の目には全て同じ動きに見える。それでもその男が一度一度うなずいたり舌打ちをしたりしていることから、そこには戦士たちにしかわからない違いがあるのだろう。訓練場側壁に設けられ、内部と外部をつなぐ通用口のコンクリートの一つに腰掛け、的場由紀（まとばゆき）はぼんやりとそんなことを考えた。目の前では先ほどから佐藤良輔（さとうりょうすけ）という戦士が鉄の剣を使って素振りしている。もちろんそれは刃を潰してあるものだがそれでも三キログラムにならんとする鉄の塊が空気を切り裂く音があたりを圧していた。相手の右肩へ振り下ろすその剣筋は、先ほどの試合で彼が勝ちを拾ったものだ。どうしてそればかり練習するのか？　という問いかけには「せっかく覚えた形を忘れないように」という答えが返ってきた。

「佐藤さんはまじめですよね」

今は別々の部隊に属していたが佐藤とは迷宮に来た当初は部隊を組む仲間だった。第二期探索者の中でも屈指の戦士である津差龍一郎（つさりゅういちろう）に率いられたその部隊、下へ下へと

向かうよりもしたいことを見つけて袂を分かった。今は同じ意識を持つ二人の探索者とともに、新規参入者のサポートのような性格の部隊を率いている。袂を分かったとはいえそれは相談と合意の上のことで、今でも津差部隊のもと仲間たちとは仲良くしているし、ことに目の前の年下の戦士とはアパートが同じ棟であることもあってたまには余ったおかずなども分けてやっていた。

「でも、今からそんなに練習して次の試合に響かないんですか？」

素振り音の間の返答は短く、勝ちますよ、とだけ。それはさすがに説明不足と思ったか、鉄剣の先を地面に突き立てて振り返った。

「国村さんは確かに格上ですけど、優勝するつもりでここに来ています。俺に勝つのは当然、視線はいまその先にいる真城さん神足さんのいずれか、そしてその先の黒田さんか笠置町さんを見ています」

自分は相手の眼中にいない。その事実を淡々と語るそこには意地もプライドもないように見える。一方で俺は優勝を見ていませんから。俺はただ、次を勝てればいい。

次？　ベスト4ですか？　どうして？

「賞品がホテルミラコスタの優先宿泊券なんです」

佐藤のよどみのない返事と笑顔を見て、的場の顔がほんの少しこわばった。そのことは彼女も知っている。東京ディズニーシー内部に建てられたホテル・ミラコスタの『ペア』宿泊券である。そんなにチケット欲しいんですか、と内心を悟られぬように水を向ける。再び素振りを開始していたその音の間、欲しいですときっぱりと簡潔に返事がもたらされた。

どなたと行かれるんですか？

「棚田さんです」

照れもためらいもない返答に必死に記憶をたどったが思い浮かぶ顔はなかった。棚田？　探索者？

いえいえ、と振り返った顔は苦笑している。妹の婚約者です。ミラコスタには泊まりたいのに仕事が忙しいから予約が取れないのだそうで。『優先』宿泊券があれば行かせてやれるかなと思いましてね。

「あ、そうだったんですか」
声にはほっとした響きは現れていないと思いたい。まあ少なくとも目の前の男が何か感じ取っているとは思えなかった。それはそれで少し腹が立つのだが。じゃあ、ベスト8のUSJチケットは誰と行くんですか？
「いやあ、別に相手もいないし金券ショップで売りますよ。――あ、なあんだ的場さん」
鉄の剣を肩に担いで再度向けられた顔はにんまりと得意げ、それに的場は動揺した。チケット欲しかったら仰ってくれればいいのに。行きます？　どなたか誘われて。なら差し上げますよ？
的場は曖昧に笑った。それをどう受け取ったか、また空気を裂く音が再開された。的場は一つ息を吐いて、視線を訓練場の壁沿いに走らせる。壁沿いに四つある通用門の一番入り口寄りである視線の先には二人の男女が並んで座っていた。
「佐藤さんはまじめですよね」
ため息とともに呟く。そして朴念仁だ、と心の中で付け加えた。視線の先にいる男女は同じく第二期募集の初期に合格した戦士たちだった。ベスト8に残った女性のほうが、恋人であり部隊の仲間である男の肩に額を乗せていた。仲むつまじいその姿が無性にうらやましく感じられる。

おやつタイム　国村光

大盛りください！　という言葉はその服装に対して三峰（みつみね）えりかが想像していたものとはアンバランス、しかしそれは嬉しい違和感だった。小さな割り箸を両手で握りしめる顔はにこにこと期待に満ちておりそれは例えば一〇年前の大晦日に自分がお寺の片隅で甘酒をもらったときと同じ表情なのだろう。セーラー服のスカートからは（冬だというのに！）膝小僧が見えているというような話ではなかった。太ももが半分ちかく見えるその丈は、お前それ平地を歩くときも抑える必要があるんじゃないのかと心配になる。頑張ってようやく膝上だった自分の女子高時代とは隔世の感

があった。でも、と具だくさんの芋煮汁を渡してあげた笑顔にほっとした。うん。ジョシコーセーといっても違うのは外見だけなのだろう。

昼前から仕込み始めた芋煮汁はここに至ってついに完成し、配給に並ぶ列はこの街にいてはなかなか見られないものだった。作成段階でちょっとしたいざこざ（西谷と笠置町という二人の魔女、そして南沢という戦士が醤油か赤味噌か白味噌かでにらみ合った）もあったものの無事に解決（三人を追放し、日ごろ木賃宿の掃除をしてくれている女性に味付けを一任）して現在に至るというわけだ。

おいしいおいしいと背後からはしゃぐ声は笠置町葵（かさぎまちあおい）のもの。先ほどまで「醤油の芋煮なんて信じられない！」と言っていた彼女はこれで二杯目を堪能している。この街は、としみじみと思う。この街はわかりやすい人間が多いなあ。このために自分が電話した上司は、材料費にちょっと援助をもらえないかとの打診を予想通りに叱り飛ばした。そんなものいちいち訊いてくるな。芋煮ってことは豚か？　牛か？　牛か、だったら毎日但馬の牛肉が入ってたはずだな。あれ買い占めろ。もうなんというか、自分が台本を渡したのではないだろうかというくらいに想像のままだ。恐縮してみせながら笑いを抑えるのに苦労した。

生死を親しいものとして身近に感じている探索者たちは往々にして意思表示がプリミティブになるとはある若者の日記に書いてあるし、それを読んで同感したことでもある。しかしそれだけではなく、その探索者の周辺にいる自分たちもまた（おっと！　自分はそういえば探索者の一人なのだった！　タダ飯が食べられなくなって久しいので忘れていた）単純な行動になってしまうのだろうか。まあ、常日頃接している人間がわかりやすい行動しかしないのであればこっちでわざわざけれんを効かせることもないのだから当然といえば当然なのかもしれないが……。大きな幼稚園みたいなものかこの街は、とこちらは白味噌派でありながらうまそうに舌鼓を打っている巨人をちらりと盗み見た。うん。大きい。

「大盛りで！」

と嬉しそうな声に視線を列に戻した。小柄な三峰の視線

の高さにはツナギの胸元があった。違和感を感じたのはそのツナギの内部にはぱりっとしたワイシャツが覗いているからである。アンダーウェアはつけない人？　それとも重ね着？　さむがり？　と視線を上げた先にはベスト8に駒を勧めている戦士の顔があった。国村光という彼は週末探索者と呼ばれる珍しい人種である。平日は迷宮街の外できちんと定職についており、週末の過ごし方として迷宮探索を選んでいる。おそらくアンダーウェアは名古屋の彼の自宅にあるのだろう。それにしてもと少々呆れながら紙椀に大盛りをよそってやった。

「余裕ですね。練習とかしないんですか？」

国村は目を丸くした。余裕？　そんなものありませんよ！　昨日の夜から菓子パンだけしか食べてなくて、今朝は野菜ジュースだけなので腹が減ってるんです。

先ほどよりも無精ひげが濃くなっている気がした。本当にわかりやすいなこの街は。しみじみと思う。

おやつタイム　神足燎三

罠解除師である若林暁は――当然というべきなのだが――戦士たちの実力の差というものがわからない。この剣術トーナメント、自分の部隊の前衛は三人ともがベスト8に残っている。喜ぶべきその事態はしかし意外らしい。目の前の神足燎三、そして優勝候補筆頭の黒田聡は不思議ではないらしいが、津差龍一郎という最近加わった巨漢がここまで残ることは少なくとも戦士たちには予想外だったらしいのだ。

自分には、と津差の広い背中を思い浮かべる。津差さんこそが優勝候補の筆頭なんだけどな。しかし誰もが口を揃えて大健闘と言うからには彼の実力は劣っているのだろう。彼には判断できないことだったが確実にそこに序列は存在するのだ。しかし、そこから外れているのが目の前の男だった。

「おっちゃんて強いの？」

そう戦士に問い掛ける。たとえば同じ部隊の黒田に。黒田は間髪いれずに言うだろう。強い……と思う、と。

誰でもそうだ。訓練場で対したものはおそらく自分の対戦成績を脳裏に描いて強い、と即答する。そして数秒自分と神足との戦いを思い返すと今度はおそるおそる「……と思う」と付け加えるのだった。

これってすごいことなんじゃないだろうか。ペテンにせよなんにせよ、名だたる戦士たちのほとんどを手玉にとって実力を測らせないのだから。しかし目の前で寝ている姿からはまったくその凄みは伺えないのだけれど。

「おとうさーん！」

聞き覚えのある声に背後を振り返った。やって来ていた高田（たかだ）まり子が自分に気づき、あら、と口元に手を当てる。その才能と穏やかで控えめな挙措から『魔女姫』の呼称を奉られていた部隊のリーダーは、リーダーの任を離れて目の前の男といるときは「お父さんお父さん」と甘える傾向があった。それは誰にも知られたことだったけれど、さすがに三才も年下の男に見られたら気恥ずかしいのだろうか。

神足は本をずらして高田を見た。そして穏やかに笑う。相手をペテンにかける時の邪悪は陰をひそめた暖かい笑顔だった。

今度は娘と対戦だねお父さん。勝てる？

魔女姫の言葉に若林はもう一人神足に懐いていた女性を思い出した。真城雪（ましろゆき）という名前の女戦士、女帝と呼ばれこの街に君臨する女性もかつては神足に「お嬢」と呼ばれ可愛がられていた。真城が他の部隊から弾き飛ばされた女性を集めてアマゾネス軍団を作り一国一城の主となってからはそういうやり取りはないが、別に疎遠になったのではないと若林は見ている。女性が多い部隊でありかつ最精鋭という重圧をこなすには威信も必要になってくるから軽く扱う男の存在は邪魔だとお互いがわかっているのだろうし、まがりなりにも二五年生きている若林は、状況が変わったからといってお互いへの態度を変えられない関係というものがあることくらいは知っていた。ならば距離を開くしかない。しかしもともとつながりが深いだけにこころの距離は開かない。

「どうだろうなあ」

考えもせずに神足は答え、視線を本に移した。高田はに

ここにこと笑っている。もうずっと雪と練習でも打ちあっていないでしょう？　返答はない。

「久しぶりの娘とのデート、楽しんできてよね」

一年と少し前、真城がアマゾネス軍団を組んだ際に神足には二つの選択肢があったのだと言われていた。その頭脳のキレと胆力から一部隊を任されつつあった魔女姫あるいは女性の不遇に憤ってアマゾネス軍団を立ち上げたお嬢、娘のように可愛がっていた二人のどちらを補佐するか。どのような判断があったのか誰も知らず、ただそれからずっと真城と神足が親しくしているところを見たものはいなかった。もしかしたら、魔女姫にも父親のような男を独り占めしたという罪悪感があるのかもしれない。自分がここにいることを忘れてその顔は無邪気に嬉しそうだ。

「そうだなあ」

神足は本を脇に置いた。

「まあ、俺たちは剣を振って飯を食ってるいわばプロだ。見に来てくれた客が楽しんでくれる試合にしなきゃいかんだろうな」

不敵な笑みだった。

おやつタイム　葛西紀彦

迷宮街唯一の飲食施設は街の北側に位置することから『北酒場』と呼ばれている。いつからその名前が付けられたのか誰も覚えていない。髪の長い女が似合うかどうかも議論が分かれている（いま一番その店に似合う女は大柄でショートカットの美女だったからだ）。宿泊施設はそれぞれ『木賃宿』、『宮殿』と呼ばれていたが由のないことではない。木賃宿は一階部分がそのとおり江戸時代の木賃宿を思わせる雑魚寝のスペースになっているからだ。またこの建物は『モルグ』と呼ばれることもある。二〜三階は二段ベッドを並べたスペースで、それを死体安置所と見立ててのことだった。建物自体、迷宮街ではモルグとも木賃宿ともどちらで呼ばれても通用するが、「木賃宿に泊まる」とはこの建物の一〜六階のいずれかに泊まることをあらわし

たが「モルグに泊まる」という言葉は二あるいは三階のみに泊まることだけを意味した。安宿が木賃宿なら高い宿は『本陣』と呼ぶのが妥当のような気がしないでもないが、まあ木賃宿に比べてイメージをかきたてないのかもしれない。

　このようにいろいろな通称がある街で、二つ不思議に思われていることがあった。一つは探索者の武器防具の受け渡し、簡単な生活用品を取り扱う道具屋にひねった通称がなくそのまま道具屋と呼ばれていること（正式名称は探索用物品販売所である）、そしてこの訓練場に名前がついていないところだった。耳障りな高い音を立ててブーツとこすれあう床板も、壁に並んでしつらえられている外部との通用口も、それら全てが想起させる懐かしい感覚はまさに体育館。ここで運動するたびに、どうしてこの建物を誰も体育館と呼ばないのか葛西紀彦は不思議に思っている。ここまであからさまに体育館のようでありながら誰もそう呼ばない。もしかしたら自分も知らない不文律があって呼ぶことを許されていないのではと少し不気味に思い使用を控えながらも、みんなそんな遠慮をなんとなく感じて口に出さないのかなという気もする。ともあれ『訓練場』で何一つ不自由はないのだが。

　葛西の顔は前後左右に移動していた。しかし上下動がほとんど見られないために、何か移動する台座に乗っているのではないかと見るものに思わせる。しかしあくまでその移動は自分の足腰で行い、中腰にした膝と腰が上下動を上半身に伝えないように完璧に吸収していた。それは強靭な足腰だけでは不可能で、この動作を目標にして訓練を重ねなければ到底実現できない芸当だった。しかし二人の見物人はそれに気づかず鯉沼今日子はふわとあくびをした。

「もう一〇分動きつづけてるよ、葛西さん。そんなに黒田さんの相手は心配？」

　視線だけを友人に送って口元に笑顔を浮かべる。彼の次の対戦相手は津差龍一郎という巨人であり、黒田聡と対戦するのはその試合に勝ってからだ。つまりこの女は自分の勝ちを確定とみなしている。やっぱり下馬評では自分か、と焦るでもなく再確認した。

そう。全探索者のうちでもずばぬけた体格を誇り第二期戦士の中でも総合力では屈指の相手とはいえ、これまでの修羅場の量では自分とは比べ物にならない。こと第一期の最精鋭同士の戦闘であればともかくよもや津差に遅れをとることはあるまいと、前の試合で寺島薫（てらしまかおる）が不幸なハプニングで姿を消したことで葛西は非常に有利になったというものが大多数の一致した意見だった。

確かに実力で負けるとは思わない。もちろんその膂力は大変なものがあったし動きも巨体を思わせないくらいに速い。しかし経験が足りなかった。どこを攻めどこを守ればいいか一瞬迷い、その一瞬を取り戻すためにさらに考える悪循環が見てとれた。たぶん来月にはいい勝負になるだろう。なんといっても第四層での戦闘の経験を積み始めたのだから。しかし今はまだ自分の方が上だった。それはわかる。けれど。

小笠原幹夫（おがさわらみきお）と寺島薫という二人の戦士を幸運に助けられたにせよ打ち破ってきていることも事実だった。そしてそれがこの上なく不気味に感じられる。小笠原はその後の寺島、野村（ここは葛西になった）、黒田（もしくは笠置町）、神足（もしくは国村あるいは真城）というんざりするようなトーナメント表を勝ち抜くために体力をなるべく温存しようとし、消耗戦に持ち込まれそうになって焦ったところをまぐれ当たりの一撃で敗れた。寺島の敗因はもう言いがかりとしかいいようのない、かわしたはずの剣先がツナギにひっかかったというものだ。そこにあるのは何か大きなものの作為とすら感じられる。津差は勝つべきだという大前提が世の中に植えつけられているような。

「あれは一体なんだろうな」

足を止め、友人である鯉沼昭夫（こいぬまあきお）を見下ろして問い掛けた。もちろん彼は不得要領を表情で示す。

「津差さんだよ。小笠原さんも寺島さんも、津差さんとやりあったら十本のうち九本は取れる人たちだ。それが、小笠原さんは状況が悪く寺島さんは運が悪く負けた。津差さんにはそういう『勝って当たり前』なオーラがあると思わないか？」

それは明らかに対戦前の感傷がもたらす弱音と響いたは

ずだが、予想に反して鯉沼は笑い飛ばすことをしなかった。
「サラブレッドってあるよな」
鯉沼が伝えたかったのはこの街だけで通用する意味だ。競走馬ではなく『人類の剣』とよばれる特別な存在の血縁で、幼少から超常の力を身につけるように厳しい訓練を課されてそれに耐えてきた者たちのことだ。既に確認されているだけでも五人のサラブレッドが第二期から参加していた。彼らは往々にして技術に優れ、血筋のためか身体能力も自分たちよりも上に思える。彼らが秀でているものは生と死を分かつ判定に直接作用するものであるがために、探索者たちは賞賛と羨望をこめて彼らをサラブレッドと呼んでいた。
「たしかに笠置町さんたちも久米さんもすごいと俺は思う。けれど、冷静に考えるとそれほどすごいか？　と思うこともある。だって彼らはあの化け物めいた人たちの血を引いて、さらに生まれてからずっと鍛えられているわけだからな。だったら俺たちより強いのは当然だろう。なのに、少なくとも、俺は久米さんには同じ治療術師としてそれほどの畏れは抱かない」
葛西はただその顔を見下ろしている。鯉沼は続ける。
「本当に恐ろしいのは――貴晴みたいな」
鯉沼が挙げたのは精鋭四部隊の一つを率いる湯浅貴晴（ゆあさたかはる）の名前だった。これには同じく治療術師であるその妻もうなずくのを見て続けた。魔女姫みたいな、三原さんみたいな、山之内さんみたいな、弓香みたいな、尾崎みたいな、国村さんみたいな、伊藤さんみたいな、真壁くんみたいな、そして一拍置く。
「津差さんみたいな」
そう、と葛西はうなずく。俺たちと条件は大差ないのにその才能も成長速度も常軌を逸している人間こそが自分たちが意識すべき生き物なのだと思えた。彼らは自分たちと何が違うのか？　学べるところはあるのか？　俺たちもそうなる可能性は？
「ない、というのが私の結論」
あっさりと口をはさんだ女を、その夫も友人も呆気に取られて見つめた。ムリだってば、弓香になろうとしたって、

と最精鋭の一人であり、数日前に全ての治療術を習得した娘は笑った。弓香は――思い出す表情には胸の痛みがうかがえる。その名前に蘇る笑顔は、もう地上では見ることのかなわないものだった。

「弓香はやっぱり別格だったよ。同じ治療術師として見てね。だってあたしの半分の時間で追い抜いていったんだから」

きっと――と少し言葉を選ぶ。

「きっと、弓香とか湯浅さんとか津差さんは、ドラクエやファイナルファンタジーの登場人物なんだよ。あたしたちはウィザ――おっと、ウルティマオンラインのキャラクタだと思おう。世界を救うとかはとりあえず肩に乗せないで、できることをしよう。できることをするだけの物しか与えられていないんだからさ」

で、とりあえずチミのできることの中には、あのでっかいのを倒してあたしたちにペアチケットをプレゼントするというのがあると思うがどうだね？　ひょうげた物言いに葛西は何か気が楽になったように笑った。おかしなことに、隣りに座っている夫も同じような表情だった。男って――と今日子はひとつ新発見をした気分になる――この年になっても自分が主役じゃないといやなのかな？　二人ともそんな柄じゃないのに。まず第一に主役の顔じゃないだろうお前たちは、とは思っても口には出さない。

あげるのはどうだろうな。とりあえず二枚で三万円からだな。葛西は床の木剣を取りあげた。目の前の空間に向けて右袈裟、左袈裟と交互に振り下ろす。見ている後衛二人が気づかないうちに、当初は右腕だったそれが左腕に持ち変えられていた。左右の斬撃には一秒だって遅滞は見られなかったのに。

剣先がぴたりと空中に止まった。その表情にはもう迷いはなかった。

おやつタイム　黒田聡

影が手元を覆ったその瞬間の足音が、普通の身長のもの

よりほんの少しだけ遠かった。なんだいナミー？　と黒田聡が顔もあげずに問い掛けたのはそれが理由だった。人影はうろたえたように揺らぎ、気を取り直して近づいてくる。そして低い落ち着いた声が降ってくる。練習しないのかと思って。

「ああ、そうなんだけど――ちょっと落ち込んでます」

何が？　という声は南沢浩太の隣りに立つ落合香奈のものだった。彼女は女性にしては身長が高く一六〇センチはこえている。しかし細身であることも手伝って、一九〇センチになろうとする巨漢の横では子どものように見える。ああ香奈さんちょうどいい、と黒田はやはりしょんぼりした顔で笑いかけた。鈴木さん、元気？

「もう目を覚まして部屋に戻ったって連絡あったけど」

夕方から大検の専門学校だから、どうせ賞品はもらえないし閉会式はサボるんだってさ、という言葉に黒田は少しほっとした。そうか、家に帰ったからって安静にするってわけじゃないんですね？

なあに？　と落合は目を丸くした。そのこと気にしてたの？

「当たり前でしょう。香奈さんは俺のあだ名をご存知ない？」

「色魔」

この返答は二つ同時にもたらされた。し、し、と黒田はしばし呆然とする。二人の顔を数秒見比べてから、何も聞こえなかったかのように話を続けた。

「現代における最後の騎士、全ての女性の味方であるべきジェントルマン黒田聡さんがですよ、あんなに高い熱出すまで女の子をいじめてたなんてさ、もうなんというか、父ちゃん恥ずかしくて涙が出てくらあ、って親父が生きてたら言ったはずだよ。がっかりだな。信じられないよ」

え？　と南沢が怪訝な顔をした。黒田、お父さん亡くなったのか？

「いやまあまだ生きてるけどね」

とにかく、と黒田はごろりと横になった。あわてて落合がスカートを抑える。

「次も笠置町さんだろう？　また娘みたいな年齢の女の子いじめるのかと思うと……。リタイヤを真剣に考えてしま

うってわけですよ」
　でも、と南沢の言葉は相変わらず静かだった。
「笠置町さんは実戦経験も多い。鈴木さんのようにはいかないだろう。下馬評では彼女に軍配を上げている声もあるのを知らないのか？」
「ならいいんだけどね」
　相変わらず黒田の顔は憂鬱で、もしかしたらこの男は冗談を言っているのではないかもしれないと思ったらしい男女は顔を見合わせた。黒田は目をつぶった。いろいろな物音が直接皮膚を震わせているような気がする。
　南沢が長身だといっても、影の長さはそれほど変わるものではないはずだ。影の高さと足音の距離に全身全霊を込めて待ち構えていたとしてもそんなかすかな差異に違和感を感じられるはずもないだろうに、グローブをほぐしながらどうしてそんなことに気づけたのか？　あれからだ。鈴木秀美が入神してその精確無比な斬撃をかわし耐え打ち込むことを繰り返したあの一分あまりを経て、自分の感覚が少しだけ鋭敏になった気がする。今まで越えられなかった壁を超えるくらいほんの少しだけ。
　笠置町翠は確かに強力な剣士だった。最近では訓練場で打ち合っても五分にしのぐのが精一杯だった。だから自分の方が分が悪いという評判もわかる。直前の相手が評判のサラブレッドだっただけに消耗していると思われているからだ。でも、なんとなく自分が違うものになった気がしている。
　なんだか負ける気がしない。

おやつタイム　津差龍一郎

　視線は赤いリンゴに注がれている。それは自分の大きな手のひらと長くて太い指とで半ば以上隠されていた。手のひらも指も筋肉は緊張し膨れ上がり果物に伝える力の大きさを伝えていた。だから近寄ってきていた人間の感想は当然といえた。太田憲は無遠慮に、もしかして津差さん握力ないですか？　と問いかけた。

津差龍一郎は視線を林檎から外し、部隊の罠解除師である男を見上げた。力を抜かれた肘から先は一回り細くなったように見える。別に鍛えているわけじゃないからな。剣を振り回す程度の力があれば十分だと思っているよ。

でも、と言葉をはさんだのは大野ふみという娘だった。津差や太田と同じく第二期の初期に登録した罠解除師で現在は的場由紀、相馬一郎という仲間とともに通称『年長組』を編成していた。力の限り下へ下へ、ある女戦士が象徴するその挑戦心を探索者の本分とするならば彼女がいる部隊はそれに外れており、第一期登録で第二層にくすぶっている者たちと同じと思われていたが、津差は違うと感じていた。

的場と大野という二人の女性、そして第二期でも優秀な戦士である相馬が中心になって編成したその部隊は固定メンバーがその三人しかいない。あとは三人が見つけてきた挑戦心に溢れしかし仲間に恵まれない者たちでできあがっていた。本人の口から聞いた事はないがその目的は、探索のために価値ある新参探索者が初期に仲間に恵まれないために死ぬことを防ぐためのものだと思っていた。第二層までと明言する『年長組』の三人にとって、今回の価格変更は損でしかない。しかし三人ともが率先してゴンドラ導入ならびに買取額の変更に賛成しているのだ。探索を進めることをあきらめ、くすぶっている人間にはとれない態度だろう。

「今の仲間の長塚さんは林檎握りつぶしますよ。津差さんより小さいのに」

そりゃ長塚さんて人がすごいんだよ、と津差は取り合わなかった。

「次は葛西さんですね。勝てますか？」

太田の言葉に津差は笑った。

「勝つつもりで全力でやる、としか言えないな。やっぱり彼は格上だからね」

そして先ほどの葛西紀彦と野村悠樹の試合を思い出した。古流空手の使い手であり噂では緑龍を蹴り殺したとも言われる野村が下馬評では有利だった。津差もそう思っていたから足技の対処法を考えたものだ。しかし開始直後、にわ

かには信じられない光景を目の前に見せつけられた。一瞬の隙を逃さない武道家の面目躍如たる右蹴りを、葛西は避けず首の筋肉だけで受け止めたのだった。ばかな、と思わずにはいられなかった。あれをくらったら自分は——まあ死にはしないだろうが——気絶する。というか泣く。おそらく、ボブサップか何かでも膝をつきそうな一撃だった。それを身長一八〇センチに満たない葛西は平然と受け（なんて精神力だ！）耐え切ったのだ（どういう筋肉してるんだ！）。そんな葛西を前にして自分の体格が何の慰めになろう。

笠置町姉妹の妹からもらった林檎をすぐに食べようと思い、ふと思いついて握りつぶそうと力をこめた。いや、少し違う。握りつぶそうという二の腕屈筋の力とちょうど釣り合いを取るように伸筋も解放し、全力を込めながら表面に痕すら残さない高度の筋肉操作をできるかと試したのだった。それができれば何か変わるような気がして。

それは簡単にできた。しかし何が変わるということでもなかった。

『準決勝第一試合を開始します。津差龍一郎選手、葛西紀彦選手』

立ち上がり、手の中の林檎を見下ろした。両手の中指と親指を上下へタのくぼみに当てる。一瞬後に林檎は真っ二つに裂かれていた。呆然とする二人にそれぞれ半分ずつ渡し、とりあえずやるだけやるしかないかと試合場を囲む観客の群れを眺めた。

おやつタイム　三峰えりか

この倍率で大丈夫です。その思いを込めて三峰（みつみね）えりかは傍らに立つ女性を見上げた。彼女は三峰の師匠にあたる魔女で、高田（たかだ）まり子という。落ち着いて整った容貌の女性だった。高田は三峰の膝の上に開かれたノートパソコンのディスプレイを眺め、三峰は目の前を流れるその髪に一瞬見とれた。

それに、これだ、とその髪に見え隠れする輝きを眺めて

思った。ピアスについているのはラピス・ラズリだろうか？
あくまで貴石であり宝石ではないその碧い輝きが、この人の漆黒の髪と肌にものすごく似合っている。この人はどうして、身につけている飾り物が全て似合うんだろう？
三峰が不思議に思う点の一つだった。だって、洋服のセンスがいいとはあまり思えないのだから。
この女性はそろばんか何かを習っていたらしく暗算が速い。ベスト8に残っている各人にこれまで賭けられた金額と倍率を掛け合わせて、どうしても胴元である自分に赤字が出ないように最後の計算をしていた。数秒のあと魔女姫と呼ばれるその女性はうなずき、ポケットからおもちゃの鈴を取り出した。
鳴らした鈴の音に、周囲にたむろしていた探索者たちが視線を向けた。ぐるりと彼らを見渡してから、大声で終了と叫ぶ。
「はーい、もうトトカルチョは打ち切ったからね！」
じゃあ倍率を書いてきて、と命じられて三峰は立ち上がった。向かう先は、壁に貼られたトーナメント表である。ぞろぞろと足跡がついてくる気配を感じてなんとなく気恥ずかしくなる。そしてトーナメント表を見上げた。
それはまさに見上げた、だった。自分が手を伸ばしても、一番下に名前が位置している黒田のところにはなんとか書き込めるがそれ以上は届かない。背後の期待を感じながら必死で周囲を見渡した。
脚立が欲しかった。自分の台所には必ず存在するそれがいま必要だった。しかし、ない。だったら誰がどうやって、こんな高い位置にあるトーナメントに勝ち抜きの朱筆を書き足していったのだろうか？
「南沢！」
呼ばれた先で男が立ち止まり、こちらを眺めていた。先ほど芋煮の味付けで激論を交わしていた男性だった。
三峰さんが紙に届かないから、お前が代わりに書いてくれ。その言葉に赤面しながらも、近寄ってきて差し出された手のひらにオレンジの油性マジックを渡そうとした。そしてしげしげと手のひらを見つめた。三峰にとって男の手のひらとは二通りの大きさしか記憶になく、目の前にある

ものはそのどちらとも違うものだったからだ。自分の父親と現在の恋人が身長一六五センチ程度で同じくらいの大きさであり、その前に交際した男が一七五センチあまりでそれより少し大きかった。その二種だけである。研究室や今の職場では手よりも受け渡しをする物品の方が重要だったから、大きさに意識を向けはしないものだ。

だから、南沢浩太（みなみさわこうた）という目の前の戦士の手のひらの大きさ分厚さはまるで自分が子供になったかのような錯覚を呼び起こした。しかも、これまで知っていた三つとは全く違って筋張って力強かった。

あの、三峰さん。マジックを。

おそるおそるという言葉に我に返り渡した。そしてトーナメント表の端から読み上げていく。それは以下の内容であり、そのたびにどよめきの声が沸きあがった。

津差龍一郎　三〇・二倍
葛西紀彦　八・三倍
笠置町翠　八・六倍
黒田聡　三・九倍
神足燎三　三・七倍
真城雪　四・七倍
佐藤良輔　一三六・一倍
国村光　五・二倍

自分だったら飛び跳ねても届かない高さであっても、南沢は苦労なく数字を書き記していった。全て終了してマジックを返される。頭を下げてから、南沢さんはトトカルチョは参加されているのですかと質問してみた。巨人は穏やかに笑うと首を振った。

その篤実な振る舞いを自分と比べてなんだか恥ずかしくなる。自分は真城雪（ましろゆき）に一万円張り込んでいたからである。目の前に立つ大型の草食獣の印象がある男と自分とが、なんだか別の生き物のような気がして不安になった。

あの、と声をかけたら立ち去ろうとしていた巨人が立ち止まった。口元に笑顔を浮かべながら、視線は少しそらされているのを感じる。

「あの、脚立って今まで乗ったことありますか？」

ありますよ、となんでもないような返答が返ってくる。

この街に来る前の職場は天井が高くて、蛍光灯を取り替えるのに必要だったから。

「ありますよね！　そうですよね！」

なぜだかわからずにしかし嬉しく感じ、三峰は胸にノートパソコンを抱きしめた。不得要領の巨人になんでもないんですと笑顔をひらめかせると元気よく走り出した。

津差龍一郎　対　葛西紀彦　①

この着想をどこから仕入れやがった？

葛西紀彦（かさいのりひこ）は振り下ろされる木剣を受け止めながら疑問に思った。右手一本で振り下ろされた木剣はそれでも大変な威力を伝えてきて、受け止めるには片腕で柄、そして切っ先を肩や二の腕に当てなければならないほどだった。それでも受け流そうとして怪力に巻き込まれるよりはマシだ。これでもしも、とぞっとする。これでもしも、第一期の戦士たちや理事の娘の半分も器用さがあったなら畳み込まれて終わっているだろう。そのルール違反と叫びたくなるほどの膂力。経験と技量の不足を単なる筋肉がカバーすることがあることを葛西は実感していた。

それに、と続いて伸ばされる左腕を跳び下がってかわす。これだ。右の木剣で丸太で殴ったような衝撃を伝え、こちらの動きを止めたと思ったらすぐ左腕で捕まえに来る。捕まえる腕は最初からひねられていて、もしもつかまれたらそれをもとにもどす動きでこっちの身体など簡単に揺さぶられるだろう。とても切り返せるとは思えない。こんなやり口をどこで見つけやがった、このシュワルツネッガーめ。

た、と、た、と流れるような足さばきで距離をおく。津差は追い討ちをかけずにその場で低く腰を落とした。くそう。追ってくれば仕留めたのに。

もうずっと前のことだ。酒が入って第二期の戦士たちを品定めしていたときに二〇三センチもある津差には及ばないものの一八九センチと二番目に背の高い、そして津差が来るまでは最大サイズだった戦士が言ったことを思い出し

た。

津差さんはコンプレックスを感じている、とその朴訥な戦士は言った。その対象は同じ第二期の戦士のうち、第一期の自分たちですら端倪すべからざるの実力を備えていた高坂新太郎、そして体格的なハンディがあってもスピードと反射神経で群を抜いていた真壁啓一だった。別格である女剣士を除き第二期では最強と目されているその三人の中でももっとも高い評価を受けながら、彼は残りの二人に対してコンプレックスを抱いているというのだった。自らが鍛え上げた運動能力で自分と並ぶ二人に対し、津差は「結局俺はでかいだけ」という劣等感を感じているのだと。

その劣等感をいかにもバカげているとする南沢浩太の言葉は当然だ。死ぬの生きるのいう場所では強さに理由なんか必要なく由来による価値付けなんか誰も行わない。そんなことを気にして誰にも真似できない体格というメリットを殺すのであればそれは罪悪ですらある。そう態度で示す南沢を眺めながら、この誠実で頼りがいのある巨漢が気づいたということは、多分この男もそのコンプレックスを経験したことがあるのだなとそのことに驚きを感じたものだった。

そのときは部隊の違う津差の戦い方を気にする必要はなかった。だからその言葉を思い出したのは先ほどの寺島薫戦の様子を友人の戦士に詳しく聞いたときである（葛西は集中のために目を閉じていたが、その戦士はしっかりと試合を見ていたのだ。その後自分と対戦したのに）。技量では自分をしのぐ先輩戦士に対して津差は無謀にも剣術の勝負に出ようとしたのだという。自分にも同じように技術比べを挑んでくれれば消耗せずに勝てるような気がしていた。

その期待は目の前で深く腰を落とした姿勢と、隙あらば捕まえようと伸ばされる左手に裏切られてしまった。先ほどの寺島戦がきっかけかどうかわからないが、どうもこの巨人は自分の体格も受け入れて勝つよう宗旨替えしたようだ。もちろんそれは探索者という同僚としては喜ぶべき心境の変化だが、どうせなら自分に負けてから改心してくれればよかったのに。十分な距離をおいて背筋を伸ばし、息

をついた。

それを隙と見たのだろうか。低い姿勢のまま津差が突進を開始した。いい目だが、しかし動きが遅い。冷静に考えながら両膝をたわめ、低い姿勢からすくいあげる木剣を受け止めた。こちらの木剣の切っ先を床につけ、刀身を腿で支える体勢は磐石だったから強烈な打撃も全て受け止められた。

左腕が捕まえに来るその一瞬早くたわめた膝を解放した。腕を避けるために下がるのではなく、さらに低い場所から津差の顔に肩を当てるように。肩がヘルメットの下にめり込み巨きな上半身がゆらめいた。その隙をもって悠々と距離をおく。再び腰を落とした津差の鼻から大量の血がこぼれおち、観客席から悲鳴が上がった。

まずい。あそこでもう一本打ち込んで終わらせるべきだった。

顔面に肩を入れたくらいでは捕まえる腕は止まらないかもしれない、その心配から一撃離脱にした。その判断は間違ってはいない。顔に衝撃を受けたらしばらくの間は、少なくともこの試合の間は恐怖心に悩まされるはずだ。だから、顔に打撃を与えるだけで離れる判断は正しいものだった。しかし、離脱してから振り返って、実はいま勝負を終わらせる好機があったことを認識した今となっては、終わらせるべきだったと悔やまれた。

先ほどのすくいあげる切込みを受け止めたとき、木剣がいやな音を立てた。津差を中心にしてふらふらと歩き、切っ先を何度か床にぶつけた。振動の伝わり方が木剣に予想通りの異常が起きていることを伝えてきた。

木剣に亀裂が入っている。

いくら怪力でも新品ならば折れることなんて考えられない。これまでずっとここで使用されてきた疲労がいまこの試合で現れたのだろう。よりによってどうして、この試合で。やっぱり俺たちは主人公キャラには勝てないのか？奥歯を強く噛みしめる。

しかし口元には自然と笑みが浮かんでいた。それならそれで燃えてくるってものさ。

津差龍一郎　対　葛西紀彦　②

折った。津差龍一郎は確信していた。

自分の鼻の骨も折れているかもしれないが、と止まる気配も見せない鼻血を思い切り噴き出しながら懸命に笑いを押し殺す。逆流してきた血が口の中にたまり、それを床に吐き出した。その大量の出血に観客がどよめき、最前列を――その服装の迫力で――陣取った女子高生たちが悲鳴をあげた。

左をこちらに向ける半身になりながら自分を中心に弧を描いてすり足に歩く葛西紀彦の顔をじっと見つめた。その視線がちらりと床の上に吐き出された血に向かう。そして自分の顔を見る。半身にしてこちらに差し出している左肩にべっとりと自分の血がシミを作っていた。

隙を捕らえたはずの攻撃はやすやすと受け止められ鼻を潰された。顔の下半分を真っ赤に染め、口の中には血がたまり定期的に吐き出さねばならない津差はまさしく絶体絶命に見えることだろう。先ほどから葛西の表情が変わり、口元に浮かんだのはまさしく肉食獣めいた微笑である。それは半ば以上勝利を確信し、最後のツメを探っている表情だった。そこからは自らの得物の不調には気づいていないことが読み取れた。

先ほどの一撃、自分にとって最高の踏み込みですくいあげられた刀身は簡単に防がれた。そのうえ捕まえる手の動きの裏をかかれ体当たりを顔面に食らった。それでもなお津差の手の中に残る感触は、自分の打撃が相手の木剣を折った、少なくとも亀裂を入れたという事実を伝えてきている。そして、葛西が木剣を調べるそぶりを見せないところから彼がそのことに気づいていないのは明白だった。

口の中に血がたまる。葛西の目は冷静にそれを測っている。血を飲み下すなどできるものではないからたまれば吐き出さなければならず、その一瞬は明らかに隙が生まれる。そのタイミングを見計らっているのだ。それはわかっているし防ぎようのないことだった。なぜならこちらがどう警戒しても否応なく血はたまり、いつかは吐き出さないといけないものなのだから。まとまった量の血がべちゃりと床の上に広がる。その凄惨な音にいつしか会場の物音は途絶

えていた。いずれ吐き出さなければならないものだ。その瞬間に隙ができるものだ。ならそれで裏をかいてやる。

口の中にまた血がたまり始める。もう三度吐いており、葛西は完璧に自分の口腔の容量を掴んだと思っているはずだ。だから、次に吐き出そうとしたら攻撃をかけてくるはずと確信があった。血が口の半ばまでたまる。これまでは吐き出していた血液量、それはまだまだ津差にとっては耐えられる量だった。吐き出すそぶりに見えるよう、首を少しかしげた。

葛西が地を蹴った。やはりタイミングをうかがっていたこの男は予想外の速度でもう間合いのすぐ外まで迫っていた。そして津差は血を吐き出さずに耐えた。いぶかしげな表情に勝利を半ば以上確信しつつ津差は木剣を横殴りにないだ。これまでと同じように葛西が柄と二の腕で受け止めようとする。その木剣はあっけなくも刀身の半ばで折れた。

やった！

いない!?

二つの思考は時をほとんど同じくしたものだった。木剣の折れた柄側だけがゆっくりと落下していく目の前の世界には対戦相手の姿はどこにもない。耳がとらえた足音は自分の斜め左後ろをまわりこんでいた。左膝を裏から軽く蹴られた。身体の操作を全くできないままに上体ががっくりと下がる。葛西の手が自分の肩にかけられ、ふくらはぎをブーツが踏んだ。登られる。しかし身体は動かせない。

右腕の上腕部に何か棒状のものが当てられた。

ようやく左腕が動き始めた。

ヘルメットを引き起こされ、喉が露出した。

左腕が自分の背後にいる人物のツナギを掴んだ。

喉に何かが当てられた。

左腕の筋肉が膨れ上がった。

背中を押して飛びのけようとする感触があった。

左腕は掴んだツナギを逃がさない。

自分のツナギがなぜか首を圧迫した。

左腕は掴んだものを地面に叩きつける。

首に対する圧力が強くなった。

視界が真っ暗になった。

津差龍一郎　対　葛西紀彦　③

思い切り床に叩きつけられた男はしかしその音がもたらすイメージに反してすぐに跳ね起き、巨人を抱き起こすとその鼻の下に耳を当てた。ほっと息をついたところを見る限り柔道などで落ちたような状態らしい。審判が勝者を告げる声に軽く拳を振り上げた。どよめきの中、がっしりした男二人がタンカで巨人を運ぼうとし（サイズが大きすぎたため）あきらめ、二人で足を一本ずつ持って引きずっていった。

まだ観客席はどよめいている。橋本駿（はしもとしゅん）も身体の震えを止めることができなかった。なにが起きたのかわからない、しかし小兵の勝利は非常な感動をもたらした。

前の集団は近所の女子高の剣道部のようだった。彼女たちにも今なにが起きたのかわからなかったらしくお互いの顔を見合わせていた。そして一人が隣りに座っている男性に結局どういうことだったのか、と尋ねた。その男性は——気楽な服装をしていたが、頑強な体格とぴりっとした雰囲気が迷宮街の人間であることを、おそらくこの大会に出ていたことを教えていた——シンプルに「葛西が津差さんよりも格段に強かったってことだ」と答えた。

でも、なにが起きたんですか？　あの大きい人は気絶したから負けたんですか？

「いや、違う。投げ飛ばす一瞬前に葛西の剣がきちんと津差さんの首に当てられてる。しかもその上葛西は受身を取って残心も完璧だった。どこからどう見ても葛西の勝ちだ」

目の前の女子高生たちは、わざわざこんなところまで見稽古に来るくらいだから相当練習を積んでいるのだろう。それでも見えなかったのだ。自分にもわからなかった。

「ええと、すみません——」

質問をした女子高生の一人が続ける。おじさんはそれがわかったんですか？　剣道の経験はどれくらいあるんですか？

「俺？」

怪訝とした顔。俺はここに来たのが一年半くらい前で、剣を振るようになったのはそれからだよ。この街でそれだけ生き残っている戦士ならみんな気づけるさ。ところで俺

はまだ二六だけどおじさんなのか？

あ、ごめんなさいと女子高生の頬が赤くなる。他のメンバーはみな憧れをこめてその男を見やっていた。たぶん自分と同じ視線なのだろう。

今年の正月、目の前であの巨人を見た。津差龍一郎（つさりゅういちろう）というその男は巨躯にかかわらず動きが洗練されており、剣道の府大会でベスト4になった程度でうぬぼれていた自尊心をこなごなに打ち砕いた。常識外れのサイズのお陰があったにせよ、人間というのはこれほどまでに圧倒的な存在感を持つことができるのか。それを知ってからは嫌だった練習にも精が出るようになった。まだまだ成長期であるから身体が大きくなるようによく食べ運動するようになった。そして、父に教えられて今日またやって来たのだ。目標であるあの巨人をもう一度見るために。

そしてその敗北を見た。一般と比べたら大柄とはいえ、まだ常識の範囲内にいる男に完璧にやられたらしい。そしてその経緯を見切っている男はたった一年と半の生活で素人がその次元まで到達したのだという。

なんで一八歳からなんだ。

歯噛みしたい気持ちになる。まだ高校生にもなっていない自分には、あまりに遠い。

でも、高校を卒業したらここに来てやる。そして自分もあの巨人を倒すんだ。心に誓った。

津差龍一郎　対　葛西紀彦　④

で、結局、と児島貴（こじまたかし）は二人はさんで隣りに座る男に顔を向けた。今、一体なにがどうなったんだ？　剣の折れた先がツナギにひっかかって首吊りになったのはわかったけど、それが勝因か？

「ちがいます」

真壁啓一（まかべけいいち）が答えた。その前に葛西さんは津差さんの右肩直下の筋と首に刃を当てます。津差さんだったら喉を掻っ切られても余力だけで人を投げ飛ばすくらいはできそうですが、葛西さんはきちんと受身を取ったからどう考えても

葛西さんの勝ちですね。それにしても、葛西さんがすごいのは剣が折れたのに動じずに次の行動に移ったことです。やっぱり最精鋭の戦士は違いますね。

「いや、気づいてたよ」

じっと試合場を眺めていた笠置町（かさぎまち）翠（みどり）が口をはさんだ。

葛西さんのショルダーアタックの直前、普通に剣と剣がぶつかったんならありえない音がしてた。気づかなかった？

真壁が首を振る。その目には前の娘に対する賞賛の色が浮かんでいる。

そのあと葛西さん、ふらふら歩きながら三度剣先を床にぶつけたでしょ。あそこで確認したんだよ。だから折れることを想定して踏み込んだんだし、折れた柄の方を津差さんの視線の高さまで放り投げてるでしょ。人間って、目の高さに何かが上がってきたら自然とそっちを見ちゃうもんだよ。そういうのも考えてるんだよ。

「なるほど」

真壁さんもよく見たけど、と徐々に誇らしげで憎たらしい表情になる。真壁さんもキャリア浅い割にはよく見たけど、それでも剣で私とどうこうなろうと思っちゃいけないな。真壁は苦笑した。

「いや別に翠にかなうと思っていないけどね」

そして、復活したね？　という確認に翠はうなずいた。

「いいもの見せてもらった。燃えてきた」

良かった、と真壁は翠の頭をそっとわしづかみにした。そして一方に顔を捻じ曲げさせる。手の中の綺麗な形の頭蓋骨がびくりと震えた。彼女の視界の中央には何人かの人間が映っているはずだ。セーラー服を来て、足の上にダッフルコートをかけている彼女たちは次の試合に出る翠を期待をこめた視線で見つめていた。翠と視線があったことを知り、いっせいに手を振る。

「おもしろいなあ、翠はほんとうに」

真壁はしみじみと言った。

翠はからくり人形かなにかのようにぎこちなく手をふりかえした。その顔は再びこわばっている。

笠置町翠　対　黒田聡　①

「おつかれさまですー、ってドア開けっ放しでいいんですか？」

それどころか窓まで全開じゃないか。

訓練場の一角、魔法使いの教官である鹿島詩穂（かしましほ）の部屋は室外と同じ冷気に満たされているようだった。京都の冬は厳しいというのに。

「ああ、いいんですそのままで」

この部屋の主である鹿島が高田を見やる。その顔はかっかと火照っているようだった。その脇でとろんとした目をしているのは理事の笠置町茜（かさぎまちあかね）。鹿島はまだブラウスを身につけていたが、こちらはTシャツ一枚きりだった。

「――え？　だんぼうは？　って二人とも、もしかして暑いんですか？」

おそるおそるの言葉には同時にうなずきが返された。まりちゃんもここに座ればわかるわよ、とげんなりした顔で理事が椅子を指差した。おとなしくそこに腰掛けたら途端に温度が上がった気がした。

気温ではない。自分の体温が、だ。そして原因も瞬時に察しがついた。目の前に積み上げられているくすんだガラスのような石の山、そこから伝わってくる何かが自分の身体の芯をほてらせている。いや、ほてらせているなんてものではない。これは病気のときの発熱に近い感覚だった。

明後日にはゴンドラ設置作業が行われ、そのための鉄柱やゴンドラそれ自体、ゴンドラを守る防護柵やタラップなどが怪物に壊されないよう迷宮内部の空気に侵されないように迷宮特産の石を使って保護することが決定していた。この石は今は亡きある探索者が見つけたもので、迷宮内部の正体不明の物質、現在では便宜的にエーテルと呼ばれているそれを自動で集め、接触している物質にまとわりつかせる機能をもっていた。これを使用した鉄剣は通常のものよりもはるかに剛性が高く強度に優れていることからゴンドラの器具に使えるだろうと推測されたのだった。

しかし圧倒的に総量が足りなかったため先日まで訓練場教官と理事による部隊を編成し連日のように地下で探索していた。その成果が現在目の前の新聞紙の上に広げられて

いる石の山である。
　石といっても純度か大きさか、エーテルを呼び集める機能には優劣があるようだった。それを判断するには一つ一つ地下にもっていかなければならない。しかしそれは危険ということで地上でもその効果の強弱を感じ取れる素質を持った人間で選別することになった。午後からずっと作業をしていた理事と教官だったがそれでも終わらないということで、探索者中では唯一その才能を備えている高田が急遽雇われたのだった。
　才能があるとは、石の特性に対して体が敏感に反応してしまうということだ。大量に積まれたものは必要以上にこの三人の血肉を活性化させていた。
　この二つを触ってみて、と鹿島が二つの石を手に握らせた。その差はほんのわずかなものだったが、手を通じて腹に与えてくる衝撃のようなものに確かに違いが感じられた。それが境界だから、段ボール二つ用意してそれより強いのと弱いのに分けてくださいね。
　うん、とうなずいて山に手を伸ばした高田に鹿島が問い掛ける。いまは剣道大会をやっているんですよね？　誰が勝ち残っていますか？
　ええっとね、私が見たのはベスト8が決まるところまでで、と石をまた一つ拾い段ボールに投げ込む。津差さん、お父さん、クロ、葛西さん、雪、国村さん、翠ちゃん、ええと、佐藤さん。これが勝ち残ったメンバーだよ。その言葉にあら、と鹿島が驚いた。寺島さんが負けたんですか？
「うん、驚いたけどね」
　それから視線を理事に移した。お嬢さんがんばってますよ。次はクロとです。
「あたしの子にしちゃよくやってるわね」
　大して興味もなさそうに石の山に両手をかざし、次の瞬間にはひょいひょいひょいと五〜六個の石を摘み上げては段ボールに入れている。一つつまんでは集中している二人とはまったく仕事の速さが違っていた。そういうところでも、二人は持って生まれた才能の差を感じてしまう。またそんなことおっしゃって、と鹿島は笑顔を向けた。
「翠ちゃんのこと信じていらっしゃるのでしょう？」

信じてるわよ、私に似てるってことを。あの子はずっと父親に叱られ叱られしてきたし、私に似て融通の利かない堅物だからああいう華やかな舞台は苦手だと思うわよ。ま、ここまでだわね。

「ちょっと待ってください。茜さんに似て堅物っておっしゃいました？」

高田がその袖を引く。ちょっと詩穂！　ムリしないで！

しかし教官は動じず、視線で高田に語りかける。いや、いくらなんでも今の暴言は許せません。この人自分を堅物って言ったんですよ！　といったところか。

「あの子まじめだわよ？」

理事の顔は明らかに質問の意図をつかんでいないことを示していた。だって、夏休みの宿題なんていつも七月中に終えちゃってたんだから。

いやだからですね、茜さんに似てっていうからには、茜さんも夏休みの宿題を七月に終えたってことですか？

いやそれは——と言葉につまる。いくら親子っていってもそこまで似るなんてなかなかないわよ。第一さ、休みに宿題があること自体がおかしくないの？　おかしいでしょう？　私と翠はね、そんな些細なことじゃなくて他のたくさんのことで似てるのよ。ええと、……苗字とか。

苗字ですか。呆れて物が言えない。

「ああ、ええと、うん。ちょっと暑いわね。こう暑いと、なんだか風邪引いて学校を休んだときのこと思い出すわね。風邪引いたらよく桃の缶詰食べたわよね。待っててちょっと買って——」

言葉が途切れ部屋には二人だけになった。

「とんでもないね」

「とんでもないですね」

鹿島がため息をつく。

「理事、Tシャツだったよね」

「あの方はスーパー一つぶんくらいの空間だったら平気で気温を変化させますよ。明日はきっと、空調が壊れたって言われて業者の方が呼ばれると思います」

笠置町翠　対　黒田聡　②

え？　と笠置町（かさぎまち）葵（あおい）は座ったままの仲間を見やった。双子の姉はもう試合場に向かって観客席を座る人々の間をすり抜け下ってゆく。真壁さん、翠のセコンドについてあげないの？

「いや、いらないでしょう」

真壁啓一（まかべけいいち）は苦笑して手を振った。いくら動揺してても黒田さんを目の前にしたら普通に戻るよ。普通に戻ったんなら俺の出る幕はないって。さっきの光岡さんとの試合でよーくわかった。これから起きるのは『あなたの知らない世界』だよ。

この男は……。葵は心中で頭をかかえる。肝心なところで女心がわかっていない。東京の恋人さんも大変だわこれじゃ。ともあれ正面突破は無理として、いちばん効果のありそうな方法を試すことにした。脅しだ。私と翠はね、と言葉を選ぶ。

「お父さんに鍛えられてきたから中学校までずっと代表リレーの選手だったんですよ。もちろん翠とかけっこしたら私が負けるんですけど、それでもお互いがアンカーになっての対戦成績は私の七勝〇敗。翠は期待されるのとちやほやされるのがすごく苦手なんです。スイッチ入ると、どんな大舞台でも自分で切り替えできない子なんです」

いやそれにしたって——反してあげられる言葉を押しつぶす。

「地下で生きるか死ぬかなら切り替えますよそりゃ。でもこれは結局は模擬戦でしょ？　自分での切り替えはむりだし、切り替えできなかったら負けますね」

「か、かといって俺だって、どうすりゃ切り替えられるのかわからないけど」

どうやら罪悪感を感じ始めた（今更か！）顔にかまわず続ける。

「いや、私だって真壁さんができるなんて思ってません。それに、こんな大会、切り替えできなくて負けたって別にたいしたことじゃないし、ベストコンディションでも相手が黒田さんだから負ける可能性のほうが高いと思います。だからいいの、切り替えしなくても。——私に限ってはで

すけど」
　葵に限って？
「うん。今あの状態で負けたら、翠はきっと真壁さんを恨むと思うな」
　笑顔が凍りついた。
「真壁さん、この街にあと六日もいなきゃいけないんですよ。そのあいだ翠にずっと恨まれてて――生きてこの街から出ていけると思います？」
　言葉の終わりを待たずに真壁は立ち上がっていた。ちょっと謝ってくる。そう言って座る客たちの間を縫って歩き始めた。

笠置町翠　対　黒田聡　③

　あ。黒田聡は試合場の向かいに立つ女戦士の異常に一見して気づいた。
　笠置町さん、ガチガチになってる。
　落ち着きなくゆれる視線も、背後の声援のたびにびくりと震える肩も意外だった。どうしたことか、笠置町翠の立ち姿からはこれまでの試合で見られたふてぶてしさが消えてしまっている。なにがあったのだろう？
　なにがあったのかわからない。が、これは自分には幸運なことだ。先ほどの戦いで一つ抜けた実感があったために、あのサラブレッドとはいえ負けない自信はあった。それでも苦戦は免れえず、それはあの娘に負担になるはずだ。先ほど対戦相手を引きずり起こしても切り合いを続けてしまった事実が心に重くのしかかっていた。しかしああも身体がこわばっているならばすぐに終わらせることができるだろう。そして、自分は最高のコンディションで準決勝に臨める。天才剣士がお面をかぶって参加していると知ったときにはどうなることかと思ったが、この大会はきっと自分の優勝で終わるのだろう。
　ひょい、と座る女子高生たちを飛び越えて見慣れた男が翠の脇に立った。いきなり飛び越えられたことに仰天している女子高生たちに能天気な笑顔をひらめかせた男は真壁

啓一（けいいち）という。黒田の知る限り、あのサラブレッドに対して唯一支配力を及ぼしていると思われる戦士である。黒田は少しいやな予感がした。コインランドリーから洗濯物を持ってあがった木賃宿の屋上で、ぽつんと西の空に雨雲を見つけたときのような。

真壁に向けて勢いよくふりむいた翠の頭がかすかに揺れた。彼女は慌てたように顔を片手で抑える。なんだろう？

次いで真壁が自分を指し示した。翠が鼻をつまみながらこちらを見た。その瞳はまだ不安げに揺れている。

真壁が自分自身を指差し、翠は真壁の顔を見上げた。そしてまた指さされる。二度目の視線からはかなり動揺が抜けているようだった。黒田の心象の風景では上空ではどうやら風が強いらしい。雨雲がどんどんこちらに向かってきている。真っ黒な雨雲が。

さらに真壁が自分を顔を向かせ、にっと笑った。さっきまで晴れていたのに、足元にくっきりあった影がほとんど判別できないくらい薄れていた。

そしてこちらを指差し、翠の背中をぽんと叩いた。一体どんな魔法を使ったのか、女剣士の瞳にはもう動揺は見られなかった。それどころか常の生意気さ、ふてぶてしささえもどこかに拭い去られた光はまっすぐに自分を貫いている。ぽつりと頬に水滴があたったような気がして、本当に手袋で顔をぬぐった。

笠置町翠　対　黒田聡　④

翠、と呼びかけるその声は耳鳴りのような歓声（それはなぜか音程の高いかわいらしい声援だった）を圧して届いてきた。抗うことができずにそちらを向くと、見覚えがあるような男の顔があった。なぜだか無性に敵意を掻き立てられる。こっ、この野郎――

しかし怒りの言葉が歯垣を漏れる前に鼻に強い衝撃がもたらされた。鋭い痛みに混乱する。なんだ？　何をされた？

手早く目の前の男が何かを自分の鼻の穴に突っ込んだ。チリ紙を丸めたもの？　片方だけ？　鼻血が出たのか？

視線を下に落とすと足元にいくつかの血のしずくが垂れており、少し視線があがった真壁の腰の高さ、背景に女子高生たちの愕然とした表情が見えた。

どうやら。混乱する頭で納得する。どうやらこの野郎が指で私の鼻をはじいたらしい。鼻血が出るほどに。

「翠」

攻撃をしてきた相手なのに。なぜかその声には抗えない。示す方向をおとなしく眺めた。試合場の向こうには男が一人立ちこちらを油断なく伺っている。その雰囲気が、背中に電流を走らせた。どうして自分はこの剣呑さに気づけなかったのだろう？　疑問に思うと同時に納得している自分がいる。少なくとも先ほどの自分は平静ではないことには気がついていた。

そしてまた名前を呼ばれ振り向いた。仲間の戦士がこちらを見つめている。あれが敵だ。その言葉にうなずいた。そして男が自分自身を親指で示した。ここに味方が一人いる。もう一度うなずく。

「今気にするのはそれだけだ。おさらいしよう」

そして自分の対戦相手を指差す。

「あれが敵」

うなずいた。黒田聡（くろだ さとし）がどことなく不安げな表情をしている。

「これが味方。というか道具と思っていい」

その言葉にうなずく。真壁啓一（まかべ けいいち）がにっこりと笑った。

その笑顔にほっとした。

さ、がんばっておいで！　ぽんと背中を叩かれる。それが引き金に自分の神経が研ぎ澄まされていくのが感じられた。大変な騒音をすべて聞き取りながら、それらに心が動かされない。ただ一つだけ、片方鼻がふさがれていると息がしづらいな、それだけをちらりと思い次の瞬間には忘れた。

さて、どうやって勝とうか。

『緑コーナー、笠置町翠！　黒コーナー、黒田聡！』

歓声が高まる。マイクのスイッチを切ると、真城雪は小さく身震いした。

うわあ気分いい！　さっきからこのアナウンスしてみたかったんだ！

さいですか、と神田絵美は苦笑した。その様子はとても次に試合を控えているとは思えない。自分の前のマイクを確認してからどちらが勝つ？　と質問をした。迷宮街最強の女戦士は間髪いれずに回答する。「強いほう」

「で、どっちが強い？」

これまた反射的に地下では黒田、地上で互角と答える。

「じゃあクロの勝ち？」

そうとばかりも限らないのよ、これが。真城は腕を組み、二人をじっと見比べた。その横顔はやはり歴戦の戦士のものである。

「翠ちゃんああ見えて精神的に不安定だからね。不安定で振幅が激しいからこそ、集中にも何段階かあってさ。真壁がセコンドについてうまく視野をコントロールしている効果は大きいんじゃないかな。あれで翠ちゃんはクロの動きと真壁の声だけ気にすればいいから、普段の実力の何割か増しで考えた方がいいと思う。実際――」

と一転して真剣な表情になった。

「今あそこにいる翠ちゃんだったら、正直私は勝てる気がしない。身体能力がほとんど一緒だからね」

「セコンドの差か……そういえばクロには誰もついてないね」

そんなもの必要とするほどヤワじゃないもの、あいつは。真城は笑った。

「普通の会社員みたいに月曜は十割、火曜は九割、水曜は八割……っていうタイプじゃなくて、三六五日ずっと八割の力を出す男だからね。だからこそ、翠ちゃんがすごくいいコンディションの今ならかなりきわどい勝負をするんじゃないかな」

ふーん、とうなずいた。常日頃前衛として敵意とぶつかり合っている人間にしかわからない呼吸なのだろう。

「そういう盛り上げを真壁くんはわかってやってるの？」
いや違うよ、という女帝の表情はうらやましげだった。
「これが相性ってやつで、真壁が何かするとそれは全て翠ちゃんのためになる、っていう関係なのさ。真壁は翠ちゃんに対して何か特別な行動はしていないはずで、まあ仲がいいからかなり優先順位は高いだろうけど少なくとも他の人間へのやり方と翠ちゃんとで意識して変えてるってことはないと思う。でもそれなのに真壁の行動は必ず翠ちゃんのツボにはまるようになってるの。さすがに逆は違うみたいだけど、世の中のほとんど全ては自分にそうしてくれる誰かも、自分がそうしてやれる誰かも見つけられずに終わるんだからあの二人は幸せものだね」
そう言ってひとつ息を吐くと、真城は天井を見上げた。パイプ椅子がいやな音を立てる。だから私はこだわるんだ、あの二人をくっつけることに。
ともあれ、と視線に光がこもった。
「翠ちゃんの本日最高の瞬間がここできた。もう翠ちゃんはあとは下がるだけだし、今の翠ちゃんとあたるクロは勝っても抜け殻になるよ。どっちが勝つにしても多分葛西くんに負ける。葛西くんには私は相性がいいからね。温泉ガイド買わなくちゃ！」
その前に神足さんでしょ、という言葉は思っても口に出さなかった。女帝のビッグマウスも明らかに普段とは違っていることを、長いつきあいの神田はわかっている。

笠置町翠　対　黒田聡　⑥

これだったんだ。あまりの苦しさに涙をにじませながら縁川（よりかわ）かんなは思った。先ほどから一回の攻防が終わるたびにあたりから起こる咳き込む音、なんだろうと思っていたが自分がそうなってようやくわかった。
今回は男性の方から攻めた。右上からの振り下ろし、それが止められるや身体ごと回転して左から胴をないだ。回転する際に伸ばした左腕が翠さんの注意を一瞬だけ奪い、体重と遠心力がこもった木剣を受け止めたものの、軽いそ

の身体はふわりと浮き上がってしまった。しかし追い討ちをかけようとする男性にカウンターで合わせるように右の上段蹴り。会場全てを震わせた音は蹴りをブロックした腕の衝撃音ではなく、全身でこらえるために男性が踏みしめた右脚の音である。すごいなあ、と感動で視界がうるむ。自分と大差ない体格の蹴りなのに、一八〇センチを越える男性があんな踏ん張りをしないと耐えられないなんて。

脚をすらりと伸ばしそれをしっかりと受け止めた二人の視線があって、翠さんはゆっくりと右脚をそのまま宙に差し上げ、静止した。足の裏が完全に天を向いているその姿勢はまるでサーカスか雑技団のようだった。そして脚を下ろした。男性の目の前に。男性は木剣を脇に挟んでおり、両手のひらを上向きにして腰の高さで組んでいた。

翠さんの右足がそこに乗せられる。

はっ！　という二人の気合は同時。組んだ両手を思い切り跳ね上げる男性と、その限界点で組んだ手から跳び上がった翠さん。ぴったり息のあった二人のパフォーマンスの成果は空中高く浮かんでいるしなやかな身体だった。そのまま空中で足を上に頭を下にの一回転をし、さらに半ひねりまで入れる。二メートル以上の高さにまで跳び上がったというのに、着地音はほとんどなかった。ブーツの裏が床とすれるバスケの試合のような音もしない。ネコの落下を思わせた。

翠さんが背筋を伸ばし、ゆっくりと木刀を身体の脇に振り下ろした。それをきっかけとして拍手と喝采が鳴り響いた。

男性と一度こぶしをぶつけ合うと、再び開始線まで歩いてゆく。そこまで見届けてようやく、かんなは息を吸い込もうとしたのだった。あまりに長い時間息を止めていたための大量の吸気は肺を驚かせてしまったらしくごほごほと咳き込む。そしてわかった。これだったんだ、と。

目の前の女性には今月の初めのテレビからずっとあこがれていた。姉が物好きにも参加している迷宮探索、その特番があると聞いてチャンネルを回したのは姉がもしかしたら映らないかなと思ったからだった。しかし開始直後、二人の女戦士の稽古を見てかんなは電撃に打たれてしまった

のだった。そこにいるのは自分が常日頃こうありたいと思っている理想だったから。動きが大きくトリッキーな女性の木剣を受け止め受け流し、隙あらば切り込みながらもそれは自分が学んでいる剣道の基本を一歩たりとも踏み外していない。激しい戦局では剣筋が乱れてしまい、県大会の上位校の選手たちでもその傾向はあったから、常に美しい太刀筋というのは夢物語でしかないと思っていたその意識を打ち砕いたのだった。残像だって見えそうな動きで立ち回りながらも雑な打ち込みがまったくない。私はあの人になりたいんだ。そう思った。

さっそく姉に、あれは誰なのだと訊いた。姉はその番組を見ていなかったが心当たりはあると言った。迷宮街でも女戦士は少なく、さらに美しい女戦士は二人しか思いつかないと言ったからだ。

「笠置町――なんとか。うん、下の名前忘れた」

この野郎すぐ調べろ！　ていうか紹介してお姉さま。お願い。

その言葉に「いいよ！」と言われて電話を切られたのが放送の夜、しかしずっと音沙汰なく怒り心頭に発した何度目かの催促電話に「そういえば明日お祭りやるらしいよ」と思い出したことだけで許してやる気になった。すでに録画して部員たちには見せてあったから部員たちも練習を休んで見稽古することに異論はなかった。

しかもお話もできちゃったし。その上稽古もつけてもらえるって言うし。

試合開始までに十分有頂天になっていた気分だったが、試合が始まってすぐにさらにそれを超えてしまった。目の前にいるのはテレビの画面に映っていた女性とはまったく違う別物だったからだ。収録があってからさらに上達したのかもしれない。そんな人にこれから稽古をつけてもらえる！　かんなは幸せだった。

ざわ、と会場がどよめいた。かんなは興奮のあまりにバタバタと足を踏み鳴らした。落ち着け！　パンツ見える！

どこかで聞き覚えのある声がする。でもそんなことはどうでもいい。目の前ですごいことが起きつつあるのだから。

開始線で翠さんが腰を落としている。木刀を左腰にそえて、右手で柄を握る。膝をたわめ姿勢はかすかに前傾していた。視線は斜め下に向かいおそらく男性は見えていない。それなのに背筋には怯える風もない。

居合だ。

笠置町翠　対　黒田聡　⑦

剣士なんか大嫌いだ。

迷宮街では自分たち前衛職は幾通りかで呼ばれている。一つはもちろん戦士であり、前衛と呼ばれ、剣士と呼ばれる。それらは基本的には同じ用途で使用されるが剣士だけは特別な意味をもつことがあった。きちんと剣道もしくは剣術の訓練を受けた人間に対する尊敬をこめる場合だ。

いわゆる剣道の経験者なら珍しくはないし、剣士とわざわざ呼ばれることもない。現在その呼称を受けているのは三人だけ、寺島薫と鈴木秀美、そしてなんといってもこの笠置町翠である。膂力にすぐれそれだけに力づくになる傾向があるためしばしば剣筋に乱れが見られる寺島、小太刀を両刀で使うことからいわゆる正統派の剣士のイメージとは遠い鈴木とは違って眼前の娘にはまさに剣豪の雰囲気があった。

こいつらの何がいやかって言うとだな。胸の中でぶつくさとひとりごちる。

構えたところに踏み込むのがすげえ怖いんだよ。

腰を落とし斜め下を見つめる視線は半眼。攻めようのないその姿に気をくじかれ、安全と思われる距離をおいた。腰に手を当ててじっと眺める。もちろんどこを探しても自分の実力で見つけられる隙などはない。俺、しくじったらたぶん死ぬ。やだなあ、地上で死ぬことになるなんて。

そのまましばらく攻めあぐねているとなんだか息苦しくなってきた。なんだこれは。思い切り深呼吸するが、閉塞感はまったく変わらなかった。ちなみに目の前の娘の張り詰めた雰囲気も変わらない。

なんだろう？　ちらりと視線を観客席にやって、その視

線が常に観客と重なることに違和感を感じた。全員が俺を注視している？　これか？　この視線か？

この膠着状態を打開しろっていうプレッシャーか？　これは。

周囲の目なんか気にしない性格のつもりだった。しかしここまで会場中の期待を感じるとさすがにしんどい。でもこれは、と思い直す。これはチャンスではないだろうか。自分がこんなにしんどいのなら、まだ若い目の前の娘もそうとうきついはずだ。であれば先に彼女が音をあげる。その一瞬で切り込めばいい。心を決めたらすっとプレッシャーが弱くなった。

息を吸い込み、ため、ゆったりと吐き出す。

いつしかその回数を数え始めていた。

三〇回目。

そこで我に返った。いまの状態ではおそらく一分間に六～八回程度しか呼吸していないはずだ。つまりもう三分以上経っていることになる。おかしいな。笠置町さんはどうして平気なんだろう？　ちらりと視線をセコンドに当てた。

そして愕然とした。

真壁の野郎！　文庫本読んでやがる！

真壁啓一（まかべけいいち）というセコンドの戦士は、戦況の停滞に気づかずにいるかのようにあぐらをかいて文庫本を広げていた。

指示出せボケ！

心の中で罵って、なるほどなと納得する。観客は全員そう思っているはずだ。二人が膠着していて、観客の重圧が二人にかかる。それは一見正しい数式なのだがその二人が戦士とセコンドというのでは調子が狂ってしまう。観客は今こう思っている。自分がひしひしと感じているように、びびるな攻めろ黒田、と。そしてのんびり本読んでんじゃねえ攻めさせろ真壁、と。その結果、実際に戦っている娘に向かうべき重圧がかなり軽減されていた。汚ねえよ、二対一だなんて。

大きく息を吐いた。そして木剣を青眼に構える。

腕の骨を折られる程度は覚悟して、居合より早い突きを決めるしかなかった。それができないとは思わない。しかし、怪我をさせないように寸止めできるだろうか？　もし

顔に怪我などさせてしまったら。額に汗がにじんだ。
「笠置町さん、ごめん」
予想外の言葉に翠がすっと視線をあげた。
「顔に傷とかつけたら責任とるんで」
翠は笑った。すっきりしたい笑顔だった。
「なにが起きても恨みませんよ。今日のこの一試合のために剣を学んできた気がします」
精一杯の脅しだったのに！　この剣道キチガイめ！
ちくしょう。知らねえぞバカ。傷つけたら責任とらせてやる。真壁に。四の五の言ったらその時点で命日だ。一歩踏み込んだ。

笠置町翠　対　黒田聡　⑧

双子には常識では考えられないシンパシイがあると鉄腕ダッシュか何かで言っていた。そこまで大げさなものではないが、笠置町翠（かさぎまちみどり）もたまに実感することがあった。双子の妹がいま嬉しいのか悲しいのかなんとなく想像がつくのだ。あとで確認してみると、これがどうしてなかなか馬鹿にできない正確さを誇っていると思える。
ともあれ最近は穏やかで暖かい幸福感を感じることがよくあった。妹が年下の恋人と一緒にいるときだろう。それをかみしめながら、妹をかわいそうだなと思うのが常だった。自分はその幸福感に加えて大事な半身ともいえる妹がいま幸せであるという姉妹としての幸せも感じられるのだから。それを味わわせてやれなくてすまない、とたまに思うことがある。
今は？　葵。神経の全てを目の前の男に集中させながら心の中で語りかける。
今この幸福感はあなたに伝わっている？　あとで訊いてみたいのだけど自分の性格からして無理だろう。とにかくいま自分の身を浸しているこの感覚が、距離を越えて彼女に届いていると信じたい。
女として男に案じられる感覚、こんなものを感じたのは初めてだった。整った容貌だから恋人もいなかったわけで

はないが、これまでのどの男もこんな幸福感を与えてはくれなかった。それが一度に二人も。対戦相手と、背後で文庫本を読んでいるセコンドと。二人に同時に身を案じられてつかの間幸せだった。

対戦相手がまた一歩踏み込んだ。あと四歩で一足一刀の間合いになる。

でも、黒田さんの気持ちはとりあえず大きなお世話だからさ。なんといっても自分は対戦相手なのだ。案じられてどうする。絶対に、手加減なんてさせてやらないんだから。息を細く長く吐き出した。あと三歩。

切っ先から剣気とでも表現するべきものが伝わってくる。それによれば相手の姿勢は青眼。こちらの居合の軌跡は読めるだろう。渾身の力を振り絞れば一太刀めを防ぐことはできるだろう。しかしその手段はとらず、真っ向から撃ち合うつもりでいるらしい。身震いした。それでこそ勝負だ。あと二歩。

頬をつたった汗が左ひざに落ちた。ツナギの繊維にあたるその音すら耳は捉えた。あと一歩。

全ての音が消えた。

そして、ゼロ。

踏み出す脚、ひねる腰、走る腕、全てがこれ以上を望みようもない速度だった。

それよりも速く、剣気の塊が自分の喉をめがけて近寄ってきた。自分の渾身の居合ですら、この強さの結晶のような男の前では遅いのだ。しかしそれは負けを意味していない。

必死に首を右に倒す。ぞっとする空気の塊が首のすぐ脇を通り抜けていった。

かわした！　そして、切っ先ががら空きの胴、肋骨のすぐ下に迫った。鍛えぬかれた腹筋があるから背骨が折れることだけはないだろう、しかし内臓が破裂しかねない一撃のはずだ。ちらりとすまないと思い、なぜか視界がそのまま斜めに倒れた。心なしか暗くなっているような気がする。

なんでよ！　混乱する。当たってない！　当たってないのに！　身体が――

それでも首脇からぞっとする何かが伝わってきて、身体

の動きを止めていた。身体を動かす中枢が怖気づいているようなもどかしさだった。

血の一滴を流すこともなく笠置町翠はその場に横倒しになった。

笠置町翠　対　黒田聡 ⑨

渾身の自制心で文庫本に落としていた視線、しかしその戒めを破らせたのは何か途方もない寒気だった。

なにが、起きた？

わからない。だが、ゆっくりと流れる世界の中で硬直したかのように横に倒れていく翠の身体だけは認めることができた。あの倒れ方は、なにかまずい。その思考が終わるより早く真壁啓一（まかべけいいち）は立ち上がり、試合場の白線を踏み越えていた。審判の橋本辰（はしもとたつ）が自分に向かって怒鳴っている。知るか。

黒田聡（くろださとし）は虚脱したように突きを伸びきらせた姿勢のままでいた。もう追い討ちをかける意思も余裕もないらしい。

警戒せずに黒田に背を向けると不自然に倒れた娘を抱き起こした。その両目は焦点が合っていない。胸がざわめいた。

軽く揺さぶるとようやくその瞳に意思の光がきらめいた。さすがに瞬時に状況を察したようだった。

「なんで出てくるの！　まだやれるのに！」

真壁は安堵しつつも混乱した。そうなのか？　自分よりも一段高いところにいるこの女剣士がそう主張するからには自分は邪魔をしたのだろうか？　それでも——強い思いを視線にこめた。睨みつけてくる眼光が一瞬たじろいだ。あきらめろ。意識して気楽に言い放つ。

「俺をセコンドに許した時点で負けだったってことさ」

その言葉が終わるより前に支える手への重みが増した。気を失ったのか眠っているだけか、とにかく真壁はタンカと叫んだ。自分でも明らかに上ずっているとわかる声だった。

神足燎三　対　真城雪　①

不自然に倒れた娘が息を吹き返すのを確認し、真城雪（ましろゆき）は試合会場に戻った。あまり人のことばかりを気にしてもいられない。次は自分の試合であり、相手は自分と同格以上の位置にいる戦士なのだ。ごめんよ、ごめんなさいねと声をかけながら土嚢の斜面を登りきると、階段状に積まれた土嚢に囲まれた試合会場の様子が一望できた。そして眉をひそめた。

「おっちゃーん、何やってるのさ」

試合場に一人、観客から遠巻きにされていた神足燎三（こうたりょうぞう）はその言葉に顔をあげた。そして笑顔になる。

「お嬢！　お前も手伝え！　舞台を作るぞ！」

舞台？　これまではもちろん何も置かれていなかった白線の内側にはあちこちに土嚢が散らばっており、白線の外側にはこれからばら撒くつもりなのだろうか、大量の土嚢が準備されていた。配置は不規則で、四つほど並べられているものもあればいくつか積み重なって小山になっているものもある。また物好きなと苦笑して試合場に入っていった。そして一つの土嚢をひょいと踏み越えてみる。

眉をひそめ、もう一度またいでみた。そして試合場脇に積み上げてある予備の土嚢を放り投げている男を眺めた。

「おっちゃん。ちょっと歩いてこっちに来てみてよ」

神足はいぶかしげな顔をすると、それでも断らずに土嚢をまたいでこちらに歩いてきた。その動きをまぶたにとどめてから自分が踏み越える動きと重ねてみる。

あれと同じだ、と思い出すのはかつて愛した男に教えられた趣味だった。ボルダリングという、垂直の壁に人工的に設置した突起を手足で保持しながら登っていくスポーツである。ほんの数センチの手足の長さが動きを大きく左右することがあるとその時に知ったのだ。あれと同じだ。この土嚢の高さはそれほどのものではない。ほとんど気を使わずに目の前の男がまたぎ超えることができるくらいのものでしかない。それでも自分にはちょっと意識しないと足をとられる高さだった。絶妙だな！　と自分の不利を理解しながらも感心してしまった。さすがは探索者一の食わせ物である。彼我の足の長さまでも計算に入れてこの障害物

を設置したに違いない。
　動きだけで意表をつくのではなくまさか地の利そのものを自分によいように作り変えるとは思わなかったわ。その規格外の発想がなんだか誇らしく感じた。やっぱりこの人はこうじゃないとと思う。
「あのさ、おっちゃん。すごく歩きづらいんだけど、これ」
「そんなの努力でカバーしろ」
　あっさりと苦情を却下されて苦笑した。神足はさらに続ける。
「迷宮街の外からもお客さんが来ているようだし、斬りあいの妙を味わえるほど経験がある人間ばかりとも限らない。せっかく来てくれたんだからわかりやすい闘いにしないとな。それにはこういう障害物の間をお嬢がぴょんぴょん飛び回る絵もいいだろう。お嬢は歩きづらいと文句を言うが、俺は、この舞台はお前さん向けだと思うぞ」
　その通りだ。あちこちに置かれた土嚢は一つ一つが彼女が跳躍する際の足場になってくれるだろう。平たい地面を蹴る場合とこのような足場を蹴る場合とでは跳びやすさも距離も明らかに違う。またぎ超えるなら神足が有利、またぎ超えようと思わなければ自分が有利。実際に戦う身としてもたしかに面白いことになりそうだった。
　じゃあ手伝え、と言い残して神足は土嚢の山に向かった。あいよう、とその後を追う足を止めて一度眺め回した。
　そして目を閉じる。即座に脳裏に映し出された風景は、この試合場を上から見下ろした図だった。自分のいる位置だけはぼんやりと何も映っておらず、あとは土嚢が散らばっている。こころを読み取って正確に描きだす機械が存在するならばその位置がいま現在の並び方と寸分たがわないことがわかるだろう。
　迷宮街に来た頃世話になったあの戦士、彼はこの超能力とも呼べる力を知っていただろうか。外からわかるわけもなく、口に出したことはないはずだから知らないだろう。知っていたらこのような舞台は作らないはずだ。
　サッカーの中田選手も同じ才能をもっていると聞いたことがある。視覚情報を上空から見下ろしたように再構成できる特殊能力である。鳥瞰した映像を今の視界と同時に見

ることができれば、各人の位置関係がとてもよくわかるのだった。彼のパス技術の一端を担っている特殊な情報処理能力は、自分の地下での戦闘においてもかけがえのない武器だった。これがあるからこそ跳躍で威力を増す無謀な剣術で戦うことができるのだから。

その自分には、試合場に散らばる土嚢の位置が手にとるようにわかった。滅多に動くものではないために戦っている最中にいちいちその位置情報を更新する必要もない。土嚢ひとつの高さも理解して、どう足をあげればまたぎ越せるかも覚えた。つまりもう、自分はいちいち足元を見る必要はないのだ。あの戦士とは違って。

策士が策におぼれたよ、おっちゃん。土嚢をかかえて嬉しそうに見回している中年男に意地悪く胸のうちで語りかけた。

いわゆる土俵際にあたる外周部分の土嚢は意識してしっかりと積むようにした。女帝真城雪（ましろゆき）が迷宮街に誇るその強靭な足腰で跳躍しても、足場となる土嚢が動いてしまうようではいけないからだ。密集しすぎと思える場所の土嚢を抱えては、攻撃（おそらく会場の誰もが想像しない距離から行われる自分の攻撃は、もう襲撃といっていいものになるだろう！）に重要と思える地点を固めていった。オセロは四隅を取ることが大事、となんとなしに思いながら振り返る。そしてぎょっとした。

それはやりすぎだろう、と思ったそこにあるのはもはや壁。一番初めに意識に残った四つ並べて積まれていた土嚢は、この壁のための布石だったらしい。試合会場を斜めに分断する長さは対角線の三分の一はあり高さはきっと一・五メートルを超えている。

「えりか！」

かつては商社の研究員として三峰さんと呼んでいた呼称は彼女が探索者の仲間になった夜から心安いものに変わっ

ていた。呼ばれた三峰えりかは「はーい！」と答えると会場に走りこんでくる。ちょっと、この向こうに回ってみて。小さな研究者はその言葉に嫌そうな顔をしたが、しぶしぶといった風情で回り込んだ。その姿はすべて土嚢の壁に隠れてしまった。

真城の背後からくすくすと笑い声がする。なるほど、結構積んでるねと呟いていたら壁の裏側から名前を呼ばれた。なあに？

「そっちが見えますよ」

「え？」

腰をかがめる。声の場所から推測したその位置、確かに腰をかがめると向かい側が見えるように隙間が作られていた。真城の身長で直立していたらまず気づかなかっただろう。もしもこれを知らないで闘いに臨んだとしたら、こちらは相手の場所を感じ取れず向こうはわかったはずだ。ちらりと視線を神足燎三に送る。迷宮街最古参の戦士はしくじった、という苦笑を浮かべていた。

「よく見つけたえりか。偉いぞ！」

ほんとですか？　と無邪気に嬉しそうな声。女帝はさらに油断なく周囲を見渡した。この分だとほかにどんな罠があるかわからない。まったく、試合前から疲れるおっちゃんだわ。

神足燎三　対　真城雪　③

橋本辰ははじめ試合会場を間違えたのかと思った。訓練場教官としての日報作成のためにもらった時間は三〇分だけであり、まさかこれほどの土木工事が可能な時間だとは思わなかったからだ。これほどのことができるのは部下を使った星野幸樹くらいだろうと思わせる建造物がそこにはそびえていた。

「これはいくらなんでも危ないんじゃないのか。倒れるぞ」

自分の胸元まである壁を眺めて次の試合の出場者二人に言う。真城雪はまったくですと苦笑したが神足燎三は気にもせずに倒れますなあ、危ないですなあとぼけるだけ

だ。女戦士の顔を見てもそのことは了解しているようだった。

なるほど。倒せるし、倒れた時に壁の向こうでしゃがんでいれば埋まる。そして埋まれば動きが止まる。それも作戦のうちか。面白いな。

「しかしこれでは審判がしづらいな」

言い捨ててその壁に向かって跳躍した。右足を前に伸ばした姿勢、二人には蹴りを放ったように見えたろうか、背後から息を呑む波動が伝わってくる。崩すつもりだと思ったのかもしれない。

しかし橋本には破壊の意志はなく、右足の親指が土嚢の壁にできたわずかな足がかりにかかるや足の甲の力だけで身体を上に持ち上げた。横に飛んでいたエネルギーがそのまま直角に向きを変え、身体が上昇する。その動きの不自然さに比べれば音もなく土嚢の上に着地したことは不思議でもなんでもなかったろう。さすがに呆然とする戦士二人を見下ろした。

「お前たちが勝手に会場を作るなら、俺も勝手にルールを追加させてもらう。この試合中、俺をここから降ろすな。この土嚢が崩れて俺の高さが下がったらその原因を作った奴を負けにする」

二人の顔から驚きが薄れ、さらに愉しそうな表情が浮かんだ。この二人はよく考えて闘いを組み立てるタイプだった。条件が増えれば増えるほど闘志をかきたてられるのかもしれない。互いに顔を見交わし、いちど拳をぶつけ合うと自分の剣を取りに戻った。そして開始線につく。開始線の間を土嚢の壁が走っているのでお互いの腰から下は見えなくなっていた。

二人の準備が整うのを見届け、視線を放送席のマイクに投げた。神田絵美（かんだえみ）が背筋を伸ばした。

試合を始める！　アナウンスを！

神足燎三　対　真城雪　④

五度攻撃をしのいだ。それはもうしのいだ、と言ってい

いありさまだった。舞台を作ったのは自分が有利になろうと思ったからではない。そもそも神足 燎三（こうたりりょうぞう）はこのトーナメントに優勝しようなどとは思っていなかった。特にチケットが欲しいわけでもなく名誉など必要としておらず、ただ実力が自分に劣る者たちに負けてやる義理まではないから、結果としてここまで勝ち残っているに過ぎない。だから舞台を作ったのは対戦相手である真城雪（ましろゆき）に説明したように、趣向をこらして見ごたえのある、客が喜ぶ闘いをこの二人でなら実現できると思ったからだ。地下での戦力としてならば自分が上でも、一個の戦士としてならほぼ同格と認めている娘、ここで負けてもかまわないとは思っている。

それでも見せ場も作れずに負けるのはちょっと情けないだろう。しかし、まさかここまで一方的になるとは思わなかった。

足場を得た女戦士の跳躍は普段訓練場で眺めているものに比べて倍以上の速さで懐に飛び込んできて、しかも剣先はそれに負けずに緻密にこちらの木剣をかいくぐろうとしてくる。しのぎ、クリンチで止めるのが精一杯だった。さらに狡猾なことに飛び回りつつも戦場を壁の近くに移すことを許さない。壁を崩したら負け、そして勢い余って衝突する可能性は自分の方が高いと知っているのだろう。

さらに威力を増した剣先をなんとか二の腕に沿わせた刀身で受け止め、思い切り押し返した。ちらりと彼女の足元を見て数歩横に歩く。その場所ならば足場になる土嚢がないのでそれほど警戒しなくていい場所だった。

それにしても、と釈然としない。自分が動くたびに足元を確認しているようにあの娘もその動作が必要なはずだ。まさか場所を全て覚えられるとも思えないし、もし覚えられているとしても現在地との相対的な距離は確認しつづけないといけないはずだ。そして確かにあの娘もちらちらと視線を足元に投げている。それはそうなのだが、どうにもその回数が少ないように、時間が短いように思えた。あれはどういうことなのだろう？

考えている余裕はなかった。今わかっているのは、どういう理由か知らないが目の前の娘は自分ほどは足元を気にせずに戦えるということ。であれば場所を移動しなければ

ならない。左手には場外の線、右手には中央部分を走る土嚢の壁がある。壁のあたりはもともと散らばっていた土嚢がすべて積まれているために、自分にとっての障害物、相手にとっての発射台となる厄介な土嚢は少なかった。やはり自分の地の利はあそこにあるのだ。

す、と一歩右に進む。しかしそれを抑えるように女帝が速いすり足を行った。やっぱりだ。お嬢め、視線を下に投げずに土嚢を踏み越えやがった。一瞬、一瞬だけ視線が下に落ちればそこでいたずらを仕掛けられたのに。それで勝ちが転がり込むことはなかっただろうが、壁の近くにまで戦場を移すことはできたはずだ。しかし女帝は土嚢の壁を背中におきこちらをとどめる気持ちがありありと表れていた。舌打ちをこらえた。

仕方ない。無理が通れば道理が引っ込むらしい。腰を落とし膝をたわめた。つっこもう。

やっぱりこの舞台は自分にうってつけだった。相手が探索者屈指の食わせ物であり実力的にも最強レベルの探索者だとしても地の利が自分にある以上恐れる必要はない。壁を利用して何を目論んでいたのか知らない——おそらく、自分にしかわからない覗き穴でこちらの位置を知って壁を崩して埋めるつもりだったのだろう。危ないことを考えやがる——が、それも壁に近づかせなければ怖くはないのだった。この勝負、もらった。真城雪（ましろゆき）は確信していた。慢心でも過信でもない、ぎりぎりの場所で命のやり取りを続けてきた人間の直感である。

それは向こうにもわかったはずだ。だからこそ、その動きは全て注視しなければならない。

神足燎三（こうたりょうぞう）は一つ息をついたようだった。そして、何かを決意した光をこめてこちらを見やる。その上体が深く沈み、膝がたわめられた。分厚いツナギの上からでもその太ももが膨れ上がったことがわかった。

地を蹴った。自分にではなく、横に。真城はあっけにと

られてそれを見やった。予想外の動きだったからだ。どうする？　追うか？　いや、遠く距離があるのに相手に合わせて直感で動くのは危険だ。

神足は試合場の隅でこちらを振り返った。そして木剣を両手で八双の形に抱えた。

獣の咆哮が響き、そのまま走りこんでくる。避けるか？　いや、迎え撃つ。振り下ろす木剣をかわしながらの逆袈裟だ。結局のところは剣をいかに操るか、そこで勝敗が決することになるのだ。世界から音が消え、動きが緩慢になった世界で突進を見据えた。あと七歩。

あと五歩。突然その男が消失した。しかし混乱することはない。真城の眼はしっかりと、こちらに向けてスライディングした動きを捉えている。ちょっとタイミングが早かったね、と思う余裕まであった。

真城雪には誰にも話していない特殊能力がある。通常の視界を上空から見下ろしたように再構成する処理能力がそれだった。それは自分が進む先に土嚢があるかどうかを常に教えてくれて、そのために――演技のために視線を送ることがあっても――真城は歩く際に土嚢の位置を気にする必要がなかった。だからこの舞台はアドバンテージなのだ。

それはとても得がたい能力だったが、女帝はそれを自分の進むところに土嚢があるかどうかを判断するようにしか使っていなかった。だからスライディングを追って動く視線がその進行方向に積まれた土嚢を発見したとき、あ、こんなところにあったんだとなぜかのんびりと考えた。

神足の足先がその土嚢にぶつかった。前へ滑るエネルギーが行き場所を失い、反動で神足の身体が浮き上がる。

え？　なんでこの高さにおっちゃんの顔があるの？

呆然としているのは一瞬のこと。伸ばされてくる突きを身をよじってかわした。このままではぶつかる。ぶつかれば組み伏せられる。そうしたら負けだ。ならば。そんな思考の断片に従い、腿に力をこめた。

全力で後ろに跳躍する。背後にはもちろん壁があるが、これはもう賭けだった。悔しいから左足の膝から先を思い切り振りぬいた。つま先が肋骨に食い込む感触と、苦悶の表情を確認した。よし！

背中が土嚢の壁に激突する。盛大に壁を崩しながら必死に審判の姿を探した。彼は平然として自分を見下ろしている。足場がくずれても別に慌てる必要がないからなのか、それとも真城が崩した箇所では彼の土台に影響を与えないのか。後者であってくれれば自分の勝ちだ。前者ならばここまでである。

土嚢の壁を破壊しながらもともと壁があった場所の向こう側に転がった。間髪をいれずに跳ね起きると近くに転がってきた神足の木剣を手にとった。自分には少し重いが使っていたものは場外に出てしまっている。唯一の得物を抑えた自分の勝ちだった。

そう。実感が湧きあがり、不覚にも喜びに震えた。自分の勝ちだ。審判の橋本辰(はしもとたつ)はまだ残っている土嚢の上で自分を見下ろしている。自分が使っていた木剣は遠く転がっている。神足は土嚢の壁のあたりで四つん這いになって苦しんでいた。もしかしたら肋骨を折ったのかもしれない。とにかく自分の勝ちだ。

思わず涙ぐんだ。ようやく、ようやく自分は師を超えた。

アマゾネス軍団を結成した晩、一緒に酒を飲みながら今後の関係のあり方を話し合った。この街におけるアマゾネス軍団の価値を確信していた二人はまったくこだわりなく、今後は疎遠になることを合意した。しかし自分は実はふっきれていなかったのかもしれない。慕うというのではなく、いつか越えなければならない壁という意味で目の前の男を求めていたのだ。それが今日かなう。一歩踏み込んだ。

走りこまれてからの出来事には歴戦の女戦士もさすがに混乱していた。壁が崩れなかった幸運には感動すら覚えていた。肋骨への蹴りは自分にしても会心の一撃だと誉めてやりたい気分だった。そして試合はもう勝負がついたのだと思っていた。だから神足の行動が理解できなかった。

彼は四つん這いになりながらごく自然に崩れた土嚢の壁の下に手を差し込んだ。そこは真城が最初に試合場を眺めたとき意識に残った四つ並んだ土嚢だった。そして神足は何か棒状のものを引き抜き自分の方に伸ばした。

全ての動作はゆったりとしており殺気のかけらもなく、真城は対応するきっかけをつかめなかった。

そして木剣の先端が首筋に当てられた。

神足燎三　対　真城雪　⑦

「まさにペテン師の面目躍如ってところね」

高田まり子は土嚢を一つどけてしみじみとそう呟いた。

拾いあげた刀身が天井の蛍光灯の光を反射してきらめく。

疲れた、と言い残してとっとと横になってしまった神足燎三の代わりに二戦士の仲間たちが片付けをしているところである。土嚢の下から高田が発見したのは木製ではない、全員が地下に携行する本物のナイフである。さっきから片付けている面々が驚きの声をあげているのも、同じようなものを発見しているのだと推測できた。まさに準備は万端だったのだ。

「いや、まり姉。それはきっと本命じゃなかったと思いますよ。ちょっとこっち来てください」

部隊の戦士である黒田聡に呼ばれてなあに？　とそちらへ歩く。二つ並んだ土嚢をまたぎ越すまでもないと、奥に位置するものに足をのせた。途端にその土嚢が力なく潰れた。

「きゃ！」

あ、それもだ、と黒田の声は平然としている。

土嚢の袋に砂ではなくて新聞紙が詰められているのがいくつもあるんです。多分神足さんの本命はこっちでしょう。真城さんが発射台にしようと足を踏み込んだらまり姉程度じゃ済まずにすっ転びますよ、こりゃ。いやあ、としみじみとうなずいた。

「俺が相手しなくて済んで良かったと心から思います。なんとか国村さんで止まってくれればいいけど」

佐藤良輔　対　国村光　①

迷宮街のスーパーにはいくつか他の店ではあまり売られていないものが並んでおり、しかもその回転率が早いこと

がある。そのうちのひとつに猫じゃらしの棒があった。子どもの頃ドイツで暮らしていたことのある探索者が「マルタみたい」と評したことのあるこの街は、それは言い過ぎだとしても野良猫が比較的多かった。しかも雑種ではなくほとんどが血統書をかつては持っていたような美猫ぞろいである。

猫が歩いていればじゃらしたくなるのが人間の業というものであり、ためしに猫じゃらしの棒を仕入れたところなんと五〇本が半日で完売してしまったのだという。そして今も（なにしろ安いものでもあるから）よく売れて隠れた利益のもととなっていた。

もちろん野良猫たちはもとから野良猫だったのではない。もともとはこの街の住人に飼われていたものでありこの街独自の理由である死別で飼い主を失った者たちである。しかしその同僚たちは死別した仲間に対する哀れみの念をそのままこの小さく愛らしい生き物に対する憐れみの念に置き換え、引き取ることはしなくても決して邪険には扱わず、この街の野良猫たちは総じて人間を恐れず恰幅がよくなっていた。

ちなみに野良犬はいない。野良犬はさすがに危険だとして事業団から「保健所に引き渡すか、誰かが面倒をみること」という通達が出されており、死後の面倒を想像されるためほとんどの探索者が飼いたがらないからだ。

津差龍一郎（つさりゅういちろう）を先頭に笠置町翠（かさぎまちみどり）、真壁啓一（まかべけいいち）と第二期のベスト3に挙げられる戦士たちがお目当ての人物を見つけたとき、彼がじゃらしているのもそんな野良猫の一匹だっただろう。目的の相手である国村光（くにむらひかる）はさすがに厚ぼったいツナギに着替えてはいたものの相変わらずベンチの脇にはノートパソコンとA4サイズのファイルを広げていた。しかし今は視線をもう大人のアメリカンショートヘアーに注いでいる。右手にはオレンジ色の細長いプラスチック棒、その先端にはピンポン球サイズの毛玉が付けられていた。毛玉の色は灰色で、ネズミに見立てているのかもしれない。プラスチック棒は細くしなやかで国村の手の動きに合わせて振幅大きく揺れていた。

少し汚れたアメリカンショートヘアは何かおくれと言い

たげな顔でベンチに座る国村を見上げつつも視線の端には常に揺れる毛玉の動きを捕らえているようだった。時々上半身（前半身？）の筋肉がぴくりと動くものの、飛び掛るには微妙な距離らしくなかなか実行に移さない。

「あの猫には悪いが一気にいくぞ」

津差が小声で残りの二人にささやいた。先ほどの試合では鼻に打撃を受けて大量の出血があったが骨折などはしていなかったようで、いまは両方にチリ紙を詰めるだけで止血されていた。何かを注視する表情で手を挙げ、その動きを制した翠の右の鼻の穴にもチリ紙が見える。三人いて三つの鼻の穴に紙が詰められているのはめずらしい光景だった。

見守る三人の前で毛玉が揺れている。猫がそれを気にしている。飛び掛る寸前に毛玉は彼（あるいは彼女か）の射程距離から微妙に離れるらしい。それで気をそがれた彼は再び国村を見上げる。しかしまた視界の隅で毛玉が揺れる——そんなことを何度繰り返しただろうか、津差が呆れたように「煮え切らない猫だな」と呟いた。

違う。あれ、国村さんがわざとそうさせてる。

わけがわからないと言いたげに見つめる二人に答える翠の顔は真剣で、視線はベンチに座る会社員から離さなかった。あの子がとびかかろう、とする直前に引いてるんですよ国村さん。かといってあきらめてどこかに行こうと思わせない程度には興味をかきたててる。人間相手でも難しいのに、猫ですよ猫。私も親戚の家の猫と遊びますけど、あれはちょっとムリだな。飛び掛ってくるのをかわすのはできるけど、飛び掛る直前にそらすのはムリ。そして津差を見上げた。

「やめましょう。国村さんを疲れさせる程度の攻撃なんて全部いなされます。やるなら殺す気です」

津差はきなくさい顔をした。ベスト4進出者が三人決まり、すべては第一期だった。それは妥当な結果のはずだったが第二期の戦士たちとしては悔しい。そして第二期戦士最後の砦となった佐藤良輔（さとうりょうすけ）の対戦相手は優勝候補にも名を連ねている国村光だった。通常ならば格上の相手である。卑怯は承知、少しでも援護射撃をしようと仕事で疲れたサ

ラリーマンに三人がかりで闇討ちをかけ疲れさせ、あわよくば不戦勝を狙ったのだった。

「どうしたい。三人そろって」

背中が問いを発し三人ともがぎょっとした顔をした。その言葉にも猫は改めて顔を見上げたりはしなかった。意識の全てが攻撃距離ギリギリで揺れている毛玉に向かっているのだろう。しかし跳びかかれないでいる。津差が緊張を解いた。

「いえ、佐藤を勝たせるために闇討ちしようかと思いまして」津差が正直に答えた。

「佐藤くんを勝たせる？　やめとけ、ムリだから」

返答はあっけなかった。猫は相変わらず毛玉を気にしている。

佐藤良輔　対　国村光　②

剣術トーナメントで訓練場の建物を全て使われてしまう今日は、教官たちにとっては降ってわいたような休暇の日となるはずだった。しかし自分には石の選別という仕事が文字通り山積みであり、罠解除師の教官である洗馬太郎と治療術師の教官である久米錬心はこれ幸いとゴンドラを作っている工場がある大阪に飛んでいってしまった。同僚たちが相変わらず働いていることに恐縮したのか戦士の教官である橋本辰は剣術試合の審判を引き受けたらしい。みんなのんびりすればいいのに、と鹿島詩穂は苦笑するが、自分以外は出払っているからこそその異音が非常事態だということに気づけたのだった。

前方右手側にある洗馬の事務室から鋭い呼気と何かが空気を切り裂く音が聞こえてくる。コンビニのビニール袋を床に置き、念のためポケットから白い碁石を取り出して握りこむと洗馬の教官室のドアノブを掴んだ。内部の音は変わらない。

一拍置いて乱暴に開いた。「きゃ！」という若い女性の声が起き、同時に熱い空気が流れ出してきた。それはまるで夏の午後三時のアスファルト上を思わせる温度である。

「何をしているのですか？」

持ち主の控えめな性格に似てほとんど物が置かれていない室内は、さらに事務机を脇に寄せられていることで中央にがらんと空間が作られていた。そして、赤々と燃える二つの石油ストーブがその空間を暖めている。

中央では厚手のジャージを身につけた男が自分の登場にも動じずにゆったりと突きや蹴りをくりだしている。それを、壁に寄せた椅子の上から娘が眺めていた。男の名前は知らなかったがこちらはわかる。確か――的場由紀（まとばゆき）――といったはずだ。非常に筋のいい治療術師ということで以前教官の久米から紹介を受けたことがある。その的場は暑さで少々ぐったりしたような表情で鹿島を見やった。佐藤さんの試合がもうすぐなのでアップの仕上げをしているんです。

洗馬さんは今日はお留守だと聞いたのでお借りしています、試合が終わったら片付けますので、とはその佐藤という男のセリフだった。左右ストレート、左右フック、左右アッパー、左右前蹴り、左右横蹴り、左右後ろ蹴り、左右ハイキックとゆっくりと一定のペースで続けているその足元には汗のしずくが散らばっている。

「まあ洗馬さんは今日はお出かけですから元通りにしていただけるのならば構いませんが、アップと言ってもこれはやりすぎではありませんか？」

今日は寒いですからね。最初からギヤをトップに入れるためにはこうやって暖かいところでじっくり身体を温めたほうがいいんです。そう佐藤が言うと、そうらしいです、と的場が相槌を打った。

「的場さん、暑いでしょうからいていただかなくても結構ですよ」

ハイキックを繰り出しながらの佐藤の言葉。的場は微妙な表情をし、珍しいしここで見てますと答えた。鹿島はぴんときた。教官業などをやっているが彼女はまだ二八歳なのだ。そういう嗅覚はきちんと備えている。何も言わずに一度廊下に出て、自分が持ってきていたコンビニのビニール袋を拾い上げた。中には箱入りのアイスがある。

「的場さん、バニラとあずきと抹茶とチョコ、アイスはど

れがお好きですか？」

　的場は怪訝な顔をしたが、それでもあずきと答えた。怪訝な表情も仕方ないだろう。この部屋は例外的に高い気温に設定されているが、あくまでも建物の外は冬の京都なのだから。アイスを持ち歩く人間がいるなんて思えないはずだ。

　箱の封を一つ開け、あずきのバーアイスを取り出して渡してやる。ありがとうございますと的場は嬉しそうに笑った。でも、どうしてアイスなんか、それもこんなにたくさん？

　今日はこの建物はいろいろあるみたいですよ。そう言って笑った。空気を切り裂く拳の音は淡々として途切れがない。

佐藤良輔　対　国村光　③

　苦戦はしないだろう。国村光（くにむらひかる）は当初そう思っていた。

　猫を相手に心を落ち着かせていた先ほど、第二期屈指の戦士たちが三人のこのこと雁首そろえてやってきた。丁度いいところに、と彼らに次の対戦相手である佐藤良輔（さとうりょうすけ）について訊いてみたのである。

　その三人の言葉を考えれば対面するこの男が自分がてこずる相手だろうとはまったく思えなかった。いわく、剣術では笠置町（かさぎまち）翠（みどり）に劣り、速度では真壁啓一（まかべけいいち）に劣り、筋力では津差龍一郎（つさりゅういちろう）に劣ると。もちろんこの街の戦士の大半がそう言われているし、自分だって実際のところはそうだと思う。しかし、本人がそう自覚しても周囲はなかなかその分水嶺を判断できないものでありましてや断言など滅多な差ではできない。

　たとえば理事の娘に対して「俺と君とどっちが剣術では上？」と問い掛ければ即答で「私です」と返ってくるだろう。それは彼我に圧倒的な差があるからだ（そしてこの娘に可愛げがないからだ）。しかし残りの二人にそれぞれ問い掛けたらどうか。なかなか「自分だ」とは言えないに違いない。自分ならばなおさら、そうでなくても第一期から

生き延びて名を認められている戦士たちにはそれだけの実力があるのだ。

しかし佐藤に対しては各人ともに「自分が上」と言ってのけた。これはつまり、目の前の男が少なくともフィジカル面では自分よりもはるかに下とみなされていることを意味している。だから軽い気分で（というよりも、そのあとに続く食わせ物との試合に対する重い気分で）会場に向かった。そして対戦相手を見て期待が裏切られたことを感じた。

そこにいるのはやはり歴戦の戦士であり、そして何より自己管理が上手な男だった。あったまってるなー、というのが印象だ。その身体がである。この寒い冬空で最初は野良猫と二人、その後は来客三人を交えて話をしていた自分はまだまだ身体が冷えている。次の試合へのアップも兼ねてこの試合で調子を上げていこうと思っていたが、どうやら敵さんははじめから万全の調子で来るらしい。

やっかいな奴だな。心の中でぼやくと眼をつぶり、軽く身体をゆさぶった。中国武術を一日だけ学んだときに盗んだ、筋肉を弛緩させて血流を促進する身体の動きだった。まず四肢の先端に血が届き、だんだんと肩や腰、太ももといった分厚い筋肉の表面にも熱を感じる。準備の程度では五分とはとても言えないけれどもともとの身体能力が違う。最初の一分をしのげばあとは問題なく勝てるだろう。

それにしても、とちゃっかりと佐藤のセコンドについている三人組を眺めた。彼らは俺を油断させるために佐藤に対して低い評価を下したのだろうか？　それならそれでいい。しかし、もしもその言葉に本心が混じっているのなら、あとで注意しなければならない。目の前の男は理由は知らないがこの試合だけに全てをかけている。そして完全にピークをここにもってきている。目的を明確にし、欲を出さずそれだけを遂行する。そういう現実的な思考法は、才能に恵まれたあの三人では自然には身につけられないものと思えた。

強運の戦士というあだ名も由のないことではないだろう。自分だったらあの三人よりも高い評価を目の前の男に下す。もちろんそれと勝敗とは何の関係もない。勝負は俺が勝つだろう。それが、十分に温まった状態での身のこなしを

じっくりと見ての国村の結論だった。

佐藤良輔　対　国村光　④

「さて解説の真壁さん、どうですかこの試合は」

笠置町翠（かさぎまちみどり）が巨体をはさんで一つ向こうに座る仲間に話しかけた。真壁啓一（まかべけいいち）は雰囲気たっぷりにそうですねえ、と答える。

「実力で考えれば大きな開きがありますが、佐藤選手はかなりコンディションがいいように見えますね。対する国村選手はほとんどアップもできていない状態です。国村選手の身体が温まる前に佐藤選手が攻めれば勝敗はわからないでしょうね」

「やっぱり節穴だね真壁さんは」

「……自分でふっておいて一刀両断ですかこの鼻血女。おっかねーな」

「は、はな……自分で殴っておいて……」

まあまあ、と二人の間に座る津差龍一郎（つさりゅういちろう）が笑顔を投げ下ろした。翠ちゃんは佐藤と打ち合ったことはなかったんじゃないか？　あいつは午後から訓練をする奴だったから。ええ、との返事に津差は頷いた。つまり、翠ちゃんのその判断は目の前の佐藤と普段の国村さんを比べたもの？

そうですけどと翠は怪訝な表情を浮かべる。普段の佐藤さんは知らないけど今の動きを見ればどの程度かはわかります。剣術だって同時期にスタートした真壁さんより上ってことは絶対にないでしょう？　だったらあの状態でも普段の真壁さんや津差さんと互角程度、国村さんはまだまだ遠いですよ。

「よし、じゃあ賭けようか」

津差の声に対して右側から真壁が「国村さんに三千円」と、左側から翠が「国村さんに五千円」と返事を返した。

よし、八千円だなと津差は自信たっぷりに笑った。二人はわけもわからずにその大造りな笑顔を見上げている。

佐藤良輔　対　国村光　⑤

初め、という声と同時に目の前の若い戦士が地を蹴った。そうだ、と闘いの場でありながらも国村は教師の思いでその動作を見守っていた。そう、俺は身体がまだ本調子じゃない。お前の渾身の動きにカウンターを当てられるような状態じゃない。そう判断したなら様子などは見ることなくただがむしゃらに、それでいて慎重に攻めるんだ。

試合場の対角に彼が登場してからたった数十秒だが、国村光は佐藤良輔という若い戦士を好きになっている自分に気がついていた。他人からは理解不可能と言われるほどの体さばきを実現してなお、国村は天才という存在が大嫌いだった。彼が好きなのは自分を過大評価も過小評価もせずにただ可能性だけを信じている瞳である。この街でもたびたびそのような瞳に出会い、実戦の機会が少ない彼にとって訓練の時間は非常に大切だったにも関わらずその瞳に頼まれるとついつい指導してしまうのだ。もしかしたら教師に向いているのかも——何!?

彼の好む色をたたえた瞳が少しだけ大きかった。最初の跳躍の勢い、それまでに判断していた身体能力の限界から予想していた一度目の着地点よりわずかに前にいることを示していた。

わずかな距離、しかし迎え撃つものにとっては絶望的に大きな距離。

なんだ？　何が起きている？

わけもわからないまま、自分が試合前に予想していた限界を超えている運動をただ目で追っている。地を掴んだ佐藤の左足はすぐに切り込めるように十分に力を蓄えていた。何かまがまがしいもののように木剣が自分に向かっている。しかし防御の動きはその予想外の速さと鋭さに比して悲しいほどに遅かった。

これは、いったい——？

木剣がヘルメットに触れる直前に首をねじることができたのは考えての行動ではない。探索が開始されてからずっと死線をくぐってきた経験が身体に命じたものだった。それで何とか深刻な怪我は避けることができそうだった、しかし。

考えるよりも早く、頭部をないだ衝撃をそのままに自分から倒れこんで距離を稼いだ。着地から回転そして跳躍と、頭の中に入れている場外ギリギリまで慌てて避ける。その見事な逃げっぷりを見て、若い戦士は追い討ちをあきらめた。そして審判を眺める。国村も同じ人物を見た。

あまりの驚きに極限まで研ぎ澄まされていた聴覚が誰かの呟きを拾った。ほんの囁き声だった。

「翠ちゃんは開始前の動きしか見ていなかった。国村さんもそうだろう。でも、あの動きは佐藤の全力じゃなかったんだよ。わざと抑えて動きを悪く思わせたんだ」

なるほど、そうか。自分は良く知らない相手を見くびりその報いを受けたのか。傍からならかわしたと見えるかもしれないあの頭部への一撃、食らったからこそわかっていた。これまでの闘いの日々でもっとも自分に打撃を与えた攻撃だったと。真剣だったら絶対に死んでいた。おそらく死体は顔の判別もつかないのではないか。

だが判定は下っていない。国村は怪訝に思い審判を見つめた。審判は表情で今の一撃が無効であると伝えていた。なぜか苦渋の色も混じっているように思える。おいそりゃミスジャッジだろ——今のはどう考えても俺の負けだ。若い戦士は何も言わないのか？　移した視線は燃える戦意に迎え撃たれた。

明らかに誤りの判定で勝利を逃した若者は、しかしまったく動揺していないように自分に視線を置いていた。あとの試合を考えないピーキングからしてこの試合だけ勝てばいい事情が何かあるのだろうと思っていた若者の動機は、実は違うものかもしれない。もしかしたら——

もしかしたら、この場で自分に全力をぶつけるためにここにピークを持ってきたのかもしれない。もしそうならば、なんという光栄だろうか、そして自分はその思いにどんな応え方をしたというのだろうか。ろくに準備もせず、試合を観て備えることすらしなかった。世界で一番の卑怯者になった気がする。惨めだった。

ぎゅ、と木剣を握り締める。今からでも許してもらえるなら全力で相手をしよう。そうなったら試合は自分が勝つはずだ。悲しいが、実力差とはそういうものなのだ。しか

し勝負は別だ。この場での勝負もそうだし、もっと人として重要な何かにおいても自分は目の前の若者に負けたのだ。そのことは一生忘れない。忘れられない。

佐藤良輔　対　国村光　⑥

しんと静まり返る中を橋本辰(はしもとたつ)は大の字になっている若者のもとに歩いていった。序盤の試合は知らないが彼が審判をするようになってから初めて明らかにそれとわかる怪我だったからその沈黙も仕方がないのかもしれない。しかしそれを圧して空気に含まれるのは勝者への憤りと憎しみだったろう。それらを一身に浴びる国村光(くにむらひかる)はまったく動じる様子もなく敗者を見下ろしていた。彼の姿で激戦を示すものは緩やかに上下する胸板のみ。それは対戦相手の佐藤(さとう)良輔(りょうすけ)の様子とはまったく対照的だった。

投げ出された佐藤の右腕が二箇所で曲がっていた。通常通りに肘で、通常とは違い肘と手首の間で。地面と接するツナギが黒くにじんでいるのは、おそらく折れた骨が皮を突き破ったのだと思われた。開放性骨折だろう。

うわあ、と小さな声が聞こえて視線を上げる。客席の一角倒れている戦士のセコンドに当たる位置にいる青年がもらしたものだった。彼は、一人挟んで隣に座る娘と同じように中央の巨漢の腕にしがみついていた。津差龍一郎(つさりゅういちろう)という名のその巨人は倒れている戦士の仲間にあたる。目の前で行われたものがたんなるいたぶりにしか思えず、倒れたまま一言のうめき声も発しない若者の姿にすっかり平静を失っていた。実力的に同レベルにいる二人の第二期の戦士がすがりつくことでようやくその動きをとどめているのだった。

この男は今の勝負を見切れていないらしい。それに比べれば抑えている二人のほうが、まだ何が起きたのか理解しているのだろう。会場を見回す。剣呑な光を視線にたたえているものは第二期の戦士もしくは後衛だけだった。戦陣を長く経験している第一期の戦士たちはさすがに目の前のやり取りに気づいているのだ。

「くっそぉおおおおっ！」

突如の大声は橋本の足元からで、さすがに驚いた。続いてミラコスタがー！　という叫びが続く。

ミラコスタ？　聞きなれぬ言葉に視線を上げると巨人の表情が視界に映った。戸惑っているその身体はもう暴れようとはしていないらしく両隣の顔はほっとしている。この怪我人が何を言っているのかわからないが、どうやらバカの暴発は免れたらしい。

ミラコスタ、ミラコスタとうめきながら運ばれていった（境内で治療術師の治療を受けるのだろう）戦士を見送ってからようやくアナウンスが国村の勝利を告げた。熱狂的とはいえないがしっかりとした祝福の声がかけられ手を上げてそれに答える国村が、ふと視線を自分に向けた。

「橋本さん。どうして私の負けにしなかったのですか？」

それは小声だったから誰にも聞こえなかったろう。橋本は同じくひそめた声で答えた。

「佐藤の気迫はあれが頂点に達していた。お前と戦うためにあそこまでもってきたのなら、気の抜けたお前に勝ってもうれしくないだろうと思ってな。どうせ佐藤が次の試合に出ても抜け殻だから、あいつにはいい経験を、試合は順当にお前の勝ちでいいだろう」

未熟者ぞろいの探索者たちの中で、国村光だけは認めていた。剣術は未熟で才能もないが、その身体能力はおそらく人類の剣たちを超えるだろうと思っている（津差龍一郎が筋力だけならどの人類の剣よりも強いように、それは別段珍しいことではないのだ）し、戦士ではなく教師としてだったら十分人類の剣に認定されるレベルにまで育て上げられるだろうと思っていた。人類の剣は月額十万円の維持費用の代わりに一人は後継者を育成しなければならない。天性の才能をもって生まれたために剣士としての他者を認めきれない自分にとって、国村こそがノルマを果たすための道だと思っていた。

境内にあたる方角を眺める。エーテルの豊富なそこでは今頃あの戦士の治療が行われているのだろうか。そしてふと、ミラコスタとは何か？　と国村に尋ねた。

ベスト4の賞品ですよ。東京ディズニーシー内部にある

ホテルの優先宿泊券なんです。
それを聞いて苦笑した。同感だったのか国村も吹き出した。私はてっきり私と全力で戦いたかったとばかり思っていました。照れたように笑っている。
実力の次元が違う相手に本気を出されて始終翻弄されながらも、一分足らずの短い時間の中で三度すばらしい打ち込みを見せた。それは本人の実力からはまったくかけ離れていた水準だったのだ。普段から愚直に素振りを繰り返しその上で集中力を極限まで高めた人間だけがようやく出せるような、本人には上出来の一撃である。もちろん国村にしてみれば十分対応できるものだったが、それは地力が違うだけのことだ。相手がいて防戦をしながらそのまぐれでしか出ないような打撃を三度も繰り出す普段の鍛錬は十分すばらしいものだった。よほどの執念と感服していたのだが、それがまさか、単なる遊園地の優先予約券のためだったとは。愉快を感じて低く笑うと、もう少しはっきりと国村も笑っていた。
どうやら鍛え甲斐のある人間が二人になったらしい。にやりと唇の端をあげると、背を向けて歩み去ろうとしていた背中に声をかけた。ミラコスタとやらの券、佐藤に譲ってやれ。
国村は愕然として振り向いた。ちょっと待ってください！私にだってそのチケットは貴重なんです。東京は遠いしなかなか先の予定が――
「国村」
言葉をかぶせると勝者は沈黙した。実力差とはそういうものなのだ。
「この会場には息子が来ているんだ。恐喝をするような父親を見せたくない。だから譲ってやってくれ」
国村はなおも抗弁しようとし、言葉を捜し、ぐ、と黙り込んだ。そしてしぶしぶうなずく。実力差とはそういうものなのだった。

佐藤良輔はぐったりと目を閉じていたので、初めは空耳かと思った。相馬一郎が方向を変えなかったのはそのためである。

だから、空耳ではなく本当に彼が口を開いたのだと知ったのは彼がいらいらと自分のコートを揺さぶったからだ。

なんだ、と顔を見やると顔色の悪いながらもはっきりした声で「境内へ」と呟いた。相馬は目を剥いた。前を行く二人の女も歩きながらちらりと視線を送ってきた。

探索者が怪我をした際に向かう場所は二箇所あった。一つは境内と呼ばれる訓練施設の一角である。人為的に地下のようなエーテルの密度を再現しているこの区域にあって術師たちは地下と同じように術を使うことができた。そのために常は鍛錬の場として使われ、治療術も使用できるために自然治癒に任せようと思わない外傷はここで治療術師の世話にかかることが多かった（もちろん探索者ではないものに対する治療は厳禁されている）。治療術師の教官が実際に治療のアルバイトも行っており、料金は観光地で販売されている絵葉書だった（ツケもきいた）。

ちなみにここを訪れる一番の症例は口内炎である。歴戦の探索者もこれだけは耐えられないのだ。

もう一つは世間一般と同じもので、迷宮街の南部にある診療所である。入院施設が小さいここは建物こそ小さいが外科の器具は充実している。地下での怪我は保険がかからないためできるだけ探索者は術による治療を望んだが、それでも繁盛していた。頭部への打撲はやはり念のため精密検査をする必要があるし、関節部への骨折を元通りにするには整骨の知識が必要になるからだ。だから相馬も診療所へ佐藤を運ぼうとしたのだ。街を巡回する乗り合いワゴンがなかなかこないので、自転車の後ろに乗せるかと思っていたところだった。

「ダメですよ、佐藤さん！」

相馬より早く的場由紀が反対の声を上げた。

「開放性の骨折をしているんです。私じゃきちんと骨を戻せないかもしれません。いちど診療所で止血と縫合、骨を整えてギプスで固めてもらわないときちんとくっつきませ

ん！」

そうだよ、と相馬も同意した。

「痛いのはわかる。でもここで変に骨をつないだら一生ものじゃないか。だから診療所まで我慢してくれよ、な？」

「境内へ行ってくれ！」

言葉はしっかりしており、思わず相馬は足を止めた。数歩行き過ぎた的場と、同じく部隊の仲間である大野ふみが明らかに苛立たしげな表情で身体ごと向き直った。

的場さん、と静かに見やるその表情は穏やかで痛みにくじけたわけではなく、的場は押されたように上体をそらした。

「うちの幌村さんは複雑骨折でも術だけで直しますよ。治療術にはそういう方法もあるんじゃないですか」

なんだ？　相馬はわけがわからなかった。幌村幸という、的場の後釜として佐藤の部隊に加わった若者のことは聞いている。東大を中退してきたとか、素質だけなら湯浅貴晴という探索者随一の治療術師を凌駕するなどという噂があった。しかしそれがなんなんだ。幌村はここにはいなくて、お前を治療するのは的場さんなんだ。新しい仲間を引き合いに出して、古い仲間をけなすつもりなのか。怒鳴りつけてやりたくなった。

「幌村さんにこういう骨折を治してもらったことがありますよ。確かに手際はよかったけど、的場さんならもっとうまくできると思いました」

それがどうだっていうんだ。地下だったら緊急だから、術だけで治すという選択肢も有効だろう。しかしここは地上なのだ。二つの道のうち、安全で確実なものを選ぶべきではないのか。

「でも、もし失敗したら――」

「いつか、地下でやらなきゃいけない時が来ますよ。その時の相手は誰になると思ってるんですか」

脂汗を浮かべている横顔を眺めて、そうかと思い至った。的場、相馬、大野は深く潜ることを放棄し、やる気のある新参探索者の最初の数回をサポートするための部隊を組んだ。骨折の可能性が高いのはやはり接近戦に従事する前衛であり、自分はその三人のうちの一人だった。つまり的場

が初めて出会う難しい骨折治療の患者は、自分あるいは新参者ということだった。そして、自分ではないだろうという実感もある。今更第一～二層で、それほど危険な怪我はしないという自信があるからだ。つまり怪我人は新参者である可能性が高い。

「来たばっかりの人が重傷を負ってじたばた動くだろうに、ぶっつけ本番でうまくいくと本当に思っているんですか。半分が新参者の部隊で、とりあえず止血だけして診療所まで連れて行こうなんてことができると思っているんですか」

経験が浅いとは苦痛に弱いということとほぼ同義だった。怪我に恐怖し苦痛にうろたえればそれだけ身体は震え治療しづらくなるのは当然である。この男は――膝が折れて力が抜けかけた佐藤の身体を慌てて支える。

この男は、気力だけで立っているこの場にあってなお自分を練習台にして治療術の経験を積めと言っているのだ。

「的場さんは新参の人たちを守るためにこの街にいるわけでしょう。だったらその為のどんな機会も逃しちゃいけないんじゃないんですか。俺のことだったら気にしないで。間違ってくっついたらもう一度折りましょう。何度でも折りましょうよ」

そんなこと、と口に手を当てる的場の顔は数歩離れた距離からでも明らかなほど震えている。見かねてこれまで黙っていた大野が口を開いた。

「由貴ちんのことを思ってくれるのも嬉しいけどさ、佐藤さんの怪我だって――」

でも俺は。搾り出すような声に大野の言葉が途切れる。

「的場さんは一発で治してくれるって知ってますけどね」

的場の表情から不安と恐れが消えた。それを見て、呆然と佐藤の横顔を見る。そこにあるのは苦痛を微塵も感じさせない、男でも思わずほうけそうないい微笑だった。なんでこんな状況で笑えるんだ畜生。

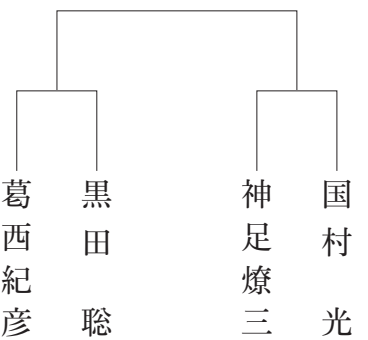
「やります。境内に」

相馬はこくりとつばを飲み、佐藤の肩の下で体勢を立て直した。その耳に弱々しいささやきが届いた。

「ごめん、相馬さん。歩くのがつらい。負ぶってもらえま

せんか」
相馬は何も言わず、怪我した腕をかばうように佐藤の身体を背に乗せる。
第二期の戦士たちの中での序列で、常に自分はこの男の上にいたつもりだった。笠置町、津差、真壁、自分、塩崎、佐藤、青柳。そのつもりでいた。何を見ていたんだ俺は、と奥歯をかみしめる。
なるべく背中を揺らさないように腰に意識を集めた。

第六章　準決勝


葛西紀彦
黒田聡
神足燎三
国村光

葛西紀彦　対　黒田聡　①

準決勝を前にしても身を包む空気には変化が見られない。ゆったりとしたそれは黒田聡が後衛から好かれる大きな要因ではあったけれど、それでもその空気のまま訪れられた面々はうろたえたようだった。同じく準決勝を目前にして、土嚢で作られた段差に座ったまま精神統一に余念のない葛西紀彦を取り巻くその仲間たちは呆れる思いを表情に隠せないでいる。まさか試合の直前にそのセコンド群ともいうべきところにやってくるとは。気づいてか気づかずか黒田は、やはり呆れ顔を浮かべている口ヒゲの男に声をかけた。星野さん、ちょっとお願いがあるんですけど。

なんだ？　と気さくな星野幸樹だったが、続いての返答にはさすがに顔をこわばらせた。

「ちょっと葛西くんを鉄砲で撃ってもらえませんか？　頭でいいです」

ざわ、と身を引く動きに同調しないのは心を静めている男だけである。警戒するより先に混乱した様子で星野がもう一度言ってくれと促した。

「どうやら聞き間違えたようなのだが――」

その返答に黒田は勝手にしょんぼりとする。やっぱりダメですか。

いや、ダメも何も――口ごもる星野の様子を野村悠樹は興味深く眺めていた。星野とは一度も同じ部隊になったことはなく、友人である葛西が頭ごなしに怒鳴られる姿を見て一から十まで怖く隙のない大人だと思っていたからだった。

「頭を撃ったら間違いなく殺人になるぞ」

そうですか、と黒田は残念そうだ。やっぱり死にますかね、葛西くんでも。当たり前だろう、という皆の苦笑に黒田は意外そうな顔をした。

「そうは言っても野村さんのハイキックを頭に受けて平気で戦ってましたよ、この人」

ついで治療術師の鯉沼昭夫にあれから治療したか？　と問い掛ける。少なくとも私はしていませんという返事を聞いてほらごらんと一同を見渡した。俺も試合は見てました。あの蹴り食らったら緑龍だって死にますよ。人間だったら

もっと安定が悪いから却って吹っ飛ばされて死にゃしないだろうけど、それでもそれから試合を続けられると思いますか？

確かに、と星野は表情を改めた。当事者の野村と後衛たちは試合を続けた以上それほどの打撃ではないのだと受け止めたらしいが客観的に判断できる星野ならわかる。目の前の戦士の言葉通り、あそこで試合が（悪くすると一人の健常者としての人生も）終わってしかるべき蹴りだったのだ。葛西がそのあとダメージを残しつつ戦っていたのであればまだそれは葛西のタフさを印象づけたのだろうが、まったく影響がなかったその後の展開は皆の意識の中でその蹴りを「なかったこと」にしてしまっていたらしかった。

「確かに、あれは今考えると不自然だな」

「でしょう？　で思ったんですけど、私が無意識にエーテルを利用しているように葛西くんも実は死なないとかそういう特技があるのではないかなと。何しろ何度も部隊を壊滅から救ってる人ですから。で、まあ鉄砲で頭撃ち抜けばそれで死んだら私の不戦勝ですし、生きてたらかないっこないから私、棄権しますから。というわけでぜひとも星野さんにはこれから数十年ほど刑務所に行っていただきたく」

いただきたく、じゃないだろと星野は笑って了解した。なるほど。黒田は葛西の異常なタフネスについて自分から何かヒントを得られないかと思って来たのだった。そして星野には漠然とした解があった。しかしそれはわざわざ試合の直前に教えてやることでもない。

「自分で掴むんだな。葛西は今日これまでの試合で一つ壁を越えたが、お前は限界を抜けたように見える。これくらいでいいハンデだろう」

そんな、と未練な顔に話を聞いていた面々が吹き出した。しかし黒田は表情を明るく改めた。

「じゃあ、取引しましょう。ヒントでも教えていただけたら由真ちゃんが成人しても私はちょっかいかけないということでいかがですか？」

星野は笑顔を浮かべた。それは魅力的は取引だな！　との言葉は目の前の美男子の噂が耳に入っているのだろう。その笑顔のままで続けた。

「そういう冗談はやめたほうがいいな。長生きしたいならな。俺は由真のためなら親だって殺せる」

笑顔は変わらず、しかし葛西がぎょっとしたように顔をあげ星野を見つめた。何か感じ取ったのかもしれない。

葛西紀彦　対　黒田聡　②

「ああもう！　とんでもねえな黒田さんは！」

段差に腰掛け膝に額をつけていた男が突然叫んだ言葉はそれだった。鯉沼今日子はびっくりして葛西紀彦を見やる。近くにいた人間が多かれ少なかれ驚いた顔をしている中、葛西はそれには気づかず苦笑いのまま隣りに座る野村悠樹を振り返った。

「さっきから頭の中で闘い組み立ててるんだけど、一度も勝ってねえよ。鈴木さんと笠置町さんに連勝するくらいだから当たり前だけど、はっきり言って勝ち目なし。こりゃもう棄権するか？」

野村は曖昧な表情を浮かべた。第一期の中でも選りすぐりのエリート戦士たちといえども実力差は確かに存在する。葛西がこれから対戦する黒田聡はエーテルを無意識に利用する天才を差し引いても十分上位に位置したし、葛西はそれに比べたらかなり格下とみなされていた。数量化できるものでもないからずれはあるにせよ一般的な認識とすれば以下のような分類になった。

分類不能……国村光、神足燎三
最上級……星野幸樹、黒田聡、真城雪、寺島薫、野村悠樹、鈴木秀美
上級……南沢浩太、秋谷佳宗、笠置町翠、内田信二
標準……葛西紀彦、小笠原幹夫、月原浩、光岡徹也、狩野謙

だから常識的に考えれば黒田の勝利はまず間違いのないことだったろうし、そもそも格上の野村を下した時点で金星と言わねばならないはずだった。鯉沼今日子にはその理解があったから、弱気な言葉を吐きながらも余裕がありそ

うな葛西の様子が不思議だった。もうあきらめて、開き直ったのだろうか？　それとも少し違う気がする。

「勝ち目がないにしては余裕だな、お前」

同じ疑問を抱いたのだろう、野村の問いに葛西はきょとんとした視線を送る。勝ち目はないよ。勝ち目はないけど、これはたかがお祭りだぜ？

そりゃそうだ、と今日子は腑に落ちる。熱戦続きのこの大会、勝者に捧げられる名誉は大変なものだろう。だから友人である戦士もそれを目指して必死になっているのかと思っていたが、案外と冷静らしい。そりゃそうだ。地下での生き死にではなく単なるお祭りなのだから、勝ち目がなかったところで――思考は葛西の言葉にさえぎられる。

「たかがお祭りなんだから、黒田さんが死ぬまでやるはずないだろ？」

いやな沈黙が落ち、その場にいる四人がその顔を見た。若い戦士はその沈黙にも気づいていないようだった。

「イメージした結果では、どれも俺は死んでるけど黒田さんも手足二本は折れてるんだ。俺は死ぬまでやるつもりだけどあの人はそこまで踏み込んでくるかな？　俺が死ぬ前に棄権するんじゃないか？」

その顔は東から日が昇るといったような当たり前のことを話しているように聞こえる。本当に死ぬまでやるつもりでいるのではないのかと思えてくる。まさか、まさか――これはただのお祭りでしょう？

不安になって視線を移した先、野村が憮然とした顔で「お前とはもう二度と試合したくない」と呟いた。

葛西紀彦　対　黒田聡　③

自分の名前を呼ぶ声に笠置町翠は放送席のほうを見やった。そして視線は笑顔のすぐ下にそれた。感じたのは、納得。かつて家に遊びに来た真壁啓一と妹の葵が珍しく手に手を取り合わんばかりに同感していたこと、それがようやく彼女にも理解できたのだ。

「パンチラとおっぱいポロリには老若男女を問わずに魅了

する魔力があるよね」というバカらしい主張だ。
　そのときは力説する二人に感じた嫌悪感そのままに（認めたくないが多分真っ赤になって）嫌がっていたものだったが、いまこうやって迷宮街屈指の美女である真城雪（ましろゆき）がパイプ椅子に座るそのスカートの中に布地（色は秘しておこう）を見つけると、なんだか得したような気分になるのだった。
　ともあれ年長者に呼ばれたのだから立ち上がり、試合場の白線に沿って対岸に歩いていった。何ですか？
「いよいよ準決勝でしょう！　それには絵美やまりや陽子みたいな素人じゃなくて、私たちレベルの放送席が必要だと思わない？　素人がいくらビックリしたり解説したって、そんなやられキャラのコメントに価値はないからさ。私が実況やるから、翠ちゃん解説やりなさいよ」
　あ、面白そうと一瞬思い、しかし考えを振り払った。自分も先ほどの試合が終わってからツナギを脱ぎ膝上までのスカートにはきかえているのだ。土嚢なら足を折り曲げることで視線を防げるがパイプ椅子ではそれもできない。パンチラには老若男女を魅了する魔力があるのは認めるが、「見たい」とは思っても「見せたい」とは思わないのだった。
「大丈夫、笠置町さん」
　これまで主にウグイス嬢を務めていた神田絵美（かんだえみ）が得たりとばかりに毛布を差し出した。見れば彼女も座ったら危険な長さのスカートだった。この女性はきちんと心得ているらしい。
「じゃあ、面白そうだしやってみようかな」
　そう言って微笑むと女帝の隣のパイプ椅子に腰掛けた。一瞬の遅滞もおかずに毛布を膝にかける。視線を前方に向けると真壁が明らかに悔しげに指を鳴らすそぶりをしていた。まったくわかりやすいなあの男は。
　どうかした？
　くすくすと笑う翠をいぶかしんだか、隣に座る女戦士が尋ねてきた。いえいえ。なんでもありません。説明するほどのことでもないと首を振る。ついでというわけでもないが、隣に座る女性が正面にサービスしていることも教えな

い。先ほど悔しげだった仲間に手を振ったが彼は顔はこちらにむけたまましかしその合図にも気づかないようだった。その尊敬に値するほどの集中力は地下でしばしば見せるレベルだった。

抑えようとしてもくすくす笑いが止まらない。そんな娘を女帝は怪訝な表情で眺めている。

葛西紀彦　対　黒田聡　④

真壁くん、というその言葉には距離にしては大きく、かすかな苛立ちが感じられた。もしかしたら何度か呼ばれていたのに気づかなかったのかもしれない。真壁啓一はバツの悪い思いで傍らに立つ黒田聡を見上げた。なんですか？

「津差さんがどこに行ったか知らない？」

「佐藤さんの様子を見に診療所に行ってそのままですね。そういえば遅いな。寄り道してるのかな？」

津差さんに御用ですか？　という問いに試合を控えた戦士は残念そうにうなずいた。診療所か。ちょっと戻って来れないなあ。

「どうかしたんですか？」

うん、と黒田は思い直したようだった。俺が次にやる葛西くんのことなんだけど、勝つためのヒントを何かもらえないかなあと思ってね。その言葉に当然真壁は怪訝な表情を浮かべる。同じく優れた剣士である真壁は二人の間にある身体能力と剣術の距離がわかるのだった。何か不安なことでも？

「不安って……不安に決まってるよ。野村さんの蹴りを頭に食らって生きているような人間と戦う身になってみればいい。何発打ち込んでも勝負ありと言ってもらえないんじゃないか？　でもあの化け物ぶりには、星野さんに確認したんだけど何か種明かしがあるみたいなんだ。俺はハト派だから彼と一緒の部隊になったことがなくて、さっき戦った津差さんだったら何か思い当たることはないかと思ってさ」

真壁は考え込んだ。そう。彼もまた違和感を感じていたが、やはり野村悠樹――格闘マンガに出てきそうな古流の

空手の師範だという――の蹴りを耐えている葛西は異常なのだ。皆が納得しているようなのでこの街ではそれが普通なのだと思っていたのだが。そして真剣に考えた。彼は二度、葛西と地下に潜ったことがあるのだからその謎を解く資格はあるに違いない。

「あ」

「あ」

発見のつぶやきは真壁、黒田両方の口を同時にもれた。こういうことかも知れませんと先輩の剣士に自分の推測を伝えようと向いたとき、しかし黒田は立ち上がっていた。そしてごめんちょっと待っていといいながら試合会場の向かい側へと歩いていく。

真壁が見守る中で黒田は放送席に座る真城雪（ましろゆき）に話しかけた。笑顔で一言二言会話してからおもむろに机の上にある模造紙を取り上げ、マジックで何か文字を書いたようだった。それをそのままスチールの机の前面に垂らす。『特別実況　真城雪』と書いたその白い模造紙は、座る女帝の下半身を膝まで完全に覆い隠していた。

楽しげに女帝がその模造紙を覗き込むその隣で仲間の女剣士が意地悪そうな顔で自分を見つめていた。仕方なく苦笑してみせる。ほかにしようがないじゃないか。

「……あーあ」

残念、と思いながら隣りに戻ってきた男を見上げた。そして、ごめんなさい俺じゃちょっと検討もつかないですと答える。黒田は残念そうにうなずき、腕を組んだ。

葛西紀彦　対　黒田聡　⑤

『俺より前に後衛の死者は出さない！』

なんだ？　このアナウンスは。

突然響き渡った拡声器の音をさすがにいぶかしみ葛西紀彦（かさいのりひこ）は顔を上げた。すぐ脇にしつらえられている放送席でマイクを握り締めた美女がこちらを横目で見ていた。ぽかんとして見ていると彼女はにやりと笑い言葉を続ける。

『そして俺は絶対死なない！　だから後衛から死者は出さ

ない！』

ああ、と苦笑した。ずっと前、救援に駆けつけた真城雪（ましろゆき）に対してこう言って胸をはったことがあったからだ。自分が覚えているのはその環境があまりに苛酷で、それを生き延びたからにはもう死なないと信じられる思い出だったからだ。

まだこの街に来て半年くらいだったころ、それまでの部隊がある女性をめぐった仲たがいから分裂し、経験の浅い代打を加えて降りた第二層のことだった。主軸となる戦士が頭部を強打して昏倒し、救援として分裂のもととなった真城が駆けつけるまでの二時間、パニックに陥った部隊を実質彼一人で守りきった事があった。数度の敵襲をすべて一人で撃退するその地獄のような時間、負傷はしてもそれは苦行から開放してくれるような致命傷とはならずに失血で朦朧とする意識の中で葛西は悟った。自分はあきらめがわるいのだと。戦士としての優れた能力などない自分でも、しぶとく守り望みをつなぐことだけはできるのだと。

アナウンスにしんとなる場内、マイクの声だけが流れる。

『救援要請を受けてもその地点まで到達する所要時間が三時間を越えるようならば普通は救援を出しません』

葛西は目を閉じた。先ほどまで消えずにわだかまっていた不安感が消えていく。実力では完全に上の相手、どこをどう取ってもコンプレックスしか感じない相手であっても自分はただやれることを最後までやるだけだ。

『しかし二つの場合では別です。一つはこの街のアイドルであるワタクシ真城雪が遭難者に加わっている場合』

どっと笑い声が起きた。ブーイングがないのは人徳だろう。権力かもしれない。

『そしてもう一つは、この男葛西紀彦がメンバーにいる時です。この男がいる限り所要時間三時間は手遅れじゃない！　四時間は望み薄にもならない！　五時間だと逆に自力生還されて恩を売るチャンスを失うかもしれない意味で危険なのです！』

大げさな。アホか、と立ち上がり屈伸をした。

『五島部隊、尾崎部隊の二重遭難、三原部隊の捜索活動とこれまで地下では何度も過酷な状況が起きてきました。し

かし、それを耐え切って後衛に一人も死者がいないのはこの男がいるから！　最精鋭の後衛一二人にアンケートを取れば確実な頼りになる男ナンバーワン！　女性探索者五〇人にアンケートをとれば確実な抱かれたくない男ナンバーワン！　星野部隊からはいぶし銀葛西紀彦の登場です！』

張り詰めるべき気分をすっかりほぐされて大笑いしながら、なるほど、抱かれたくない男ナンバーワンだったのかと納得した。道理でこの半年ほどずっと女に縁がないはずだ。すっと試合会場の向かいに視線を送ると、『抱かれたくない男』のランクインだけはどんな集団に参加してもありえないだろう美男子が苦笑していた。

全国のもてない奴の代表としては、やっぱり負けるわけにはいかないな。これから試合する相手がいやそうな顔で自分を見つめている。

葛西紀彦　対　黒田聡　⑥

「真壁くん、ハンマーないか？」

え？　何ですか？　と怪訝な顔に向け、放送席を親指でさした。あの人にマイク持たせてるとどんなこと――

『いつも限定つき戦士でした！　地下でなら最強！　女が見ていれば最強！　身体能力なら最強！　カラオケボックスなら最強！　山ほどの最強の称号をうけながらも誰一人その実力を本当に認めてはいませんでした！』

――言われるかわからないからハンマーでも投げつけて昏倒させようかと思ったんだけど――

『それは実力に不安があるからじゃない！　認めるのがシャクだから！』

――もう遅いみたいだ。

『長身で美男子！　家は資産家！　次男！　恋人は常時複数！　車はレトロなＭＧ！　ありとあらゆる意味で恵まれたこの男ですが、肝心の剣士としての評価は常に限定つきでした！』

――あーあ、でもまあ真城さんには恨みを買うようなこ

としていないし、まだマシかな。その言葉に真壁啓一はふと考え込んだ。そして試合を前にしているとは思えない余裕を漂わせている男に話しかけた。そういえば、黒田さんて探索者の女性は毒牙にかけないんですね。

『今日こそは限定解除を狙う！　鈴木秀美、笠置町翠と名だたる剣士を切り伏せてきた実力を今こそ示せるか！　魔女姫の部隊からは伝説の色魔、黒田聡の登場です！』

「君、ひどいこと言うなあ。色魔ってのはあんまりだよ、真壁くん」

「いや俺そっちじゃないです。俺が言ったのは毒牙です」

ああ、えーとまあどっちもどっちだよ。憮然とする。そしてヘルメットをかぶった。

最近はないけれど俺も昔は探索者と付き合うこともあったんだよ――あ、思い出した。視線は葛西の上にとどまっていた。何をですか？　という真壁の言葉にうん、とあいまいにうなずく。そういえば。

「葛西くん、俺にとっては恋敵だったんだ。その女ももういないからずっと忘れてたけど、あの頃は悔しかったんだ。いつかぶっとばしてやるって思ってたんだ」

両足を広げ背はまっすぐ、両腕を左右に広げた。右手の木剣は直立して微動だにしない。

そして空気が震えた。

美男子ののどから漏れたのは肉食獣よりもなお凶暴な何かの吼え声を思わせる咆哮だった。その場にいるすべての人間がぎょっとしたように、恐怖を感じたように美男子を見つめていた。例外は審判と対戦相手だけ、あとはみな魂をわしづかみにされているかのような不安げな視線を送っていた。

たっぷり十数秒して吼え声は唐突に途切れた。そして何もなかったかのように両手を下ろし腰をひねって真壁を眺める

「よし。やばくなるくらいなら棄権しようと思ってたけど、ちょっといけるところまでいってみよう」

にやりと笑う。普段と同じゆったりした笑みだが真壁は押されたように上体をのけぞらせた。

葛西紀彦　対　黒田聡　⑦

開始の声を耳の後ろのほうで聞いた気がした。それほどのスタートだった。視界の真中で普段どおり余裕のあった顔がこわばる。地下では比較にならず地上においても実力が上の相手だ。いくらいいダッシュを切れたところで勝利はまだ見えないところにある。それでも、一つのことだけは教えてやれるはずだ。自分の覚悟の量だけは。葛西紀彦（かさいのりひこ）は姿勢を低く、ネズミか何かのように走る。

目の前に立つ黒田聡（くろださとし）の先ほどの試合は当然見ていた。理事の娘である剣の天才との闘いは静と動が劇的に変化するもので時には争い時には協力して一つの演舞を作り上げていた。それは二人ともの戦闘におけるセンスの良さ、相手を認める気持ち、何より余裕を示していた。そしてそれよりも、その演舞を作り上げた二人がそういった華のある闘いを好み実現するだけの資格がある剣士たちだということも感じさせた。

地下でならともかく、地上のこの四角いマスの中では自分は笠置町翠（かさぎまちみどり）に劣る。それは誰もがわかっていることだ。当然目の前の男も知悉していることだ。だったらこの男はまたもや闘いを演出しようと考えるかもしれない。

でも、それはできない。この勝負はアンタの女性ファンを増やしもしないし綺麗な終わり方にもならないし、勝敗だってアンタの思うとおりにはきっとならないだろう。これからここで起きるのは殺し合いだ。少なくとも俺はそのつもりだ。

開始の声から一秒もかからずにあと一歩で間合いに入る。黒田の顔はこわばり腰には力が入っているが木剣を持つ右腕はまだ準備ができていないようだった。一発目は右からの逆袈裟で行くぞ。もちろん当たりはしないだろうが目は覚ましてもらう。

剣先がかつんと床に触れた。先ほどの試合で、この音が相手の意識を奪うと知ったから試しに混ぜてみた小細工だった。

第二期の戦士は惑わされた音にもさすがに黒田は動じない。そしてその目に嫌な予感がした。

ぐん、と腰がたわめられる。ゆったりしているはずのツ

ナギが膨れ上がる。斬撃を中断し思い切り右に飛びのいた。
風？　屋内で？。
何か巨大なものが身体の脇を通り抜けた気がした。一瞬あとに最後に残った左足が何かにさらわれた。身体がひっくり返され、コマのように旋廻しようとする。その勢いは肩から地面に墜落したあとも何度か身体を回転させた。土手の斜面をころがり落ちる時のように方向感覚を失いながら視線は必死に黒田の姿を探す。さらに詰め寄ろうかとうかがう眼光と一瞬絡み合い、そのためかはわからないが彼は追い討ちをあきらめたようだった。
回転がとまり跳ね起きる。吐き気すら起こすほど混乱させられた三半規管を必死になだめようとしながら目の前の男を見つめた。アンタ剣士だろうが！　いきなりサッカーボールキックかよ！　蹴られた足はまだ痺れている。
何故だかわからないがためらって追い討ちはしなかったようだ。けれど一つのことは思い知らされた。この男はこの試合に華など求めていない。自分と同じかそれ以上の覚悟はできているらしい。認めないわけにはいかなかった。

黒田聡は軽い吐き気を感じていた。何かおかしい。今日になっての連戦でかつてないほど鋭敏に研ぎ澄まされた感覚が教えてくれたかすかな違和感、床を転がり完全に無防備だった敵手に対する追撃をやめさせたのはそれだった。このまま突っ込むのはまずいと直感したのだ。
目の前に立つ葛西紀彦を注意深く眺める。突然の回転で目が回っているらしく、腰を低く落としたままこちらの様子をうかがっていた。今がチャンスだ。奴はロクに動けないはずだ。今踏み込めば、踏み込め、踏み込めってば。
なぜ踏み込めない？
開始からの動きを思い出した。審判の声に対する反応速度、そのあとのダッシュ、逆袈裟の剣筋、全てがさすがは精鋭部隊の前衛だったしある種の伝説を打ち立てている男といえるレベルであり、しかしそれだけのことだった。真壁啓一ならばさらに早いタイミングで行動を開始するだろう。秋谷佳宗ならばもっとダッシュは早いだろうし、笠置町翠や寺島薫の逆袈裟なら自分の足をへし折る太刀ゆき

の速さのはずだ。タイミング、脚力、剣速すべてで高いレベルを成し遂げたのはたいしたものだが、集中の次第では珍しいことではない。目の前にいるのは歴戦の戦士なのだ。

しかし何か違和感を感じたのだった。それがわかるまでは迂闊に近づけないと思う何かが。

（これがマンガや小説だったら――）

葛西が軽く頭を振った。かすかに揺れていた視線がついにぴたりと自分を捕らえる。木剣を脇構えにしながらすり足を開始した。やる気は十分らしい。舌打ちをこらえる。

（さゆりの言葉を思い出してヒントを掴むんだけど――っと！）

今度は間合いに入るや同時の右袈裟だった。左手を刀身に添えてようやく受け止めた衝撃はかかとにまで突き抜け、さらにかみ合わせた木剣から大変な力が伝えられてくる。歴戦の戦士の脚力を全て乗せて押し付けられる刀身はもう逸らすこともいなすこともできなかった。やればできるかもしれないとは思うし鈴木秀美（すずきひでみ）だったらコロコロ転がしそうだが、いくら感覚が鋭敏になったとはいえ技術まで上がったわけではないのだ。ムリは禁物である。

「葛西くん、力で俺に」

ぐ、と腹に力をこめた。至近にある顔色が変わった。もしかしたら、自分が押し気味だと思っていたのかもしれない。

「かなうと思うなよな！」

両手を解放すると文字通り葛西の身体は跳ね上がった。葛西の身長はたしか一七八センチ。自分が一八三センチでそれだけでも大きな違いがあったが、それだけではなく黒田は膂力には自信があった。津差龍一郎（つさりゅういちろう）や南沢浩太（みなみさわこうた）のような存在自体が反則の相手でなければ力では負けないと思っている。

押しやり態勢をくずし、十分すぎるほどの追い討ちのチャンスだったがやはり見送った。積極的に飛び込む足を封じられたようなそんな感覚がある。種明かしせず、自分で納得せずに試合に臨んだのは致命的な失敗だったのかもしれなかった。真壁！　あのむっつりスケベめ！　あとで女帝

にいいつけてやる！

恐怖か？　違うと思う。鈴木秀美の小太刀の間合い、笠置町翠の居合、自分が踏み込んできたそれらの地獄に比べたら目の前の男は技術でも身体能力でもまったく脅威に感じられない。あれを乗り切ってきた自分がここで恐怖するはずがない。

しかし自分は躊躇しているのだ。踏み込むべき隙を全て見逃している。格下であるべき相手に苦戦している。何がなんだかわけがわからない。そこで容赦なく葛西が一歩距離を縮めた。震える奥歯を強く噛んだ。

葛西紀彦　対　黒田聡　⑨

擬態か？　葛西紀彦（かさいのりひこ）の心にまず浮かんだのはその可能性だった。最初のダッシュに対しての反応、キャプテン翼にも出られそうな破壊力のキック、袈裟懸けを余裕を持って受け止めた技量と見かけからは全く信じられない（津差より上なんじゃないのか？）膂力などなど、今のところ勝利をもぎ取るためのどんな要素でも黒田聡（くろだ さとし）の方が分があるのは明白だったからだ。次の試合を睨んだ上で消耗戦を避けようとしているのだろうか？　なんとなく違うような気もするのだが他に考えられなかった。それほどまでに攻め気が感じられない。

消耗を避けるなら先に打ち込ませて後の先を取るつもりか、あるいは神足燎三（こうたりりょうぞう）ばりのペテンにかけるつもりなのか——後の先を取られるほどの実力差があるとは思えない。しかしぎりぎりまで研ぎ澄まされたこの場で自分をたばかるような奇策を持っているとも思えなかった。というより、全く手の内がわからないのだ。こんなことならもっと訓練場で打ち合っておくべきだったと後悔したが今更に悔やんでも始まらないのはもちろんだ。

そういえば、どうしてお互いを稽古の相手に選ばなかったんだろう？　いつも自分が打ち合っている野村悠樹（のむらゆうき）とタイプが似ているからだろうか？　もっと何か理由があったような気がするが思い出せない。ただ、いつ頃からか会話

もすることがなかったような。多分彼のほうから避けるようになったのだが——ふっと脳裏に浮かんだのは白い顔。ああ、そうか。苦笑し、そして我に返ってぎょっとした。いま、たっぷり二秒近く俺は考え込んでいなかったか？どうして彼は打ち込んでこないのだろう。消耗戦を避けたかったら千載一遇のチャンスだったはずなのに。改めて敵手の顔に焦点を結ぶと、黒田も好機を逸したことを知ったのだろうか。苦い顔をしている。

本当にためらっているか、念入りな罠なのか。迷いは一瞬だった。罠だったならば自分よりはるかに上だったというだけのことだ。木剣を強く握り締めた。先ほどの試合の教訓を生かしわざわざ新品を選んできたものだった。

呼吸を深く、規則正しく整える。意識してまばたきの感覚を均一にする。まさか黒田が自分のまばたきを測っていることもないだろうが、相手の情報を得ようと本当に集中している人間はそういった細かなことまで無意識に探っていることを彼は知っていた。それをあてにしたフェイントももしかしたら効果があるかもしれない。できる準備はすべてする。その上でならば最悪の結果も平然として受け入れられる。探索者ならば当然の心構えだと思っている。すとんと腹が据わった。

五回目の呼気を終えた瞬間、それまでのまばたきで目をつむるタイミングで地を蹴った。黒田は当然動じず、四肢を緊張させた。ためらっていたのか？　やはり罠だったのか？　不安はもはやなく、ただ平静な心で切りかかった。

右胴を受け止められるのは計算通り、恐れていた切り返しはやってこなかった。さらに右から首筋、これはさすがに弾かれてその動きのままくるりと旋廻し木剣が降りてきた。かまわずに懐に飛び込み軽く肩を当てる。黒田が飛びのく動きのため、肩を軽く叩いた木剣はツナギで勢いを殺されほとんど痛みをもたらさなかった。当然有効打には認められない。

下がった場所で再び黒田は腰を落とした。その待ちの姿勢は相変わらずで、今度はより積極的に距離を詰めた。

悪い予感はどちらに感じたのだろうか。

先ほどまでの迷いが失せていたその瞳だったろうか。

あるいは、何を考えたか自分の目の前に放り投げられた木剣が描く放物線だったろうか。

いずれにせよ葛西が感じた驚きと躊躇は貴重な一瞬をその行動から奪った。

飛んでくる木剣を反射的に弾いたとき、葛西はツナギの肩と内股がつかまれていることに気がついた。

「正解をありがとう」

静かな声。そして気合とともに軽々と身体が肩の上にまで持ち上げられ、葛西は混乱した。俺だって八〇キロはあるというのに！　化け物かこのやさ男！

「迷っても仕方ないんだな、戦いの場では。それよりは覚悟を決めて飛び込むことのほうが大切なんだな。大事なことを教わった。ありがとう」

そして背中から板張りの地面に叩きつけられた。視界が暗くなり、意識が戻ったとき、黒田が自分の胴の上にまたがっているのを見た。

この位置関係は一般にマウント・ポジションと呼ばれている。

勝利の昂揚は一秒も続かなかった。もちろん鋼の自制心があるからではない。歴戦であればこそ、お互い武器を持たない状態で寝転がった相手の上にまたがっている自分の有利はよくわかっていた。あとは参ったするまで殴るだけ。いや、物わかりがよければ上に乗られた時点で負けを認めるだろう。自分だったらもう降参するはずだ。何しろこれは所詮試合で祭りなのだから。ほら早く降参しろ――と、ここまでがコンマ七秒くらいの思考だったから確かに一秒間に満たなかった。そして下になって絶望的なはずの葛西紀彦の右拳が上に乗っている黒田聡の左の頬に食い込んだのがその瞬間だった。黒田の上体はぐらりと脱力したように揺れ、鼻血が大量にこぼれた。間髪をおかずに今度は葛西の左拳が顎を跳ね上げた。

いてえ。

なんだ。

何が起きてるんだ。

勝負は終わりじゃなかったのか。

混乱する中で、ああ、人間は考えているときに殴られると思考が途切れるんだなと冷静な発見をしている自分もいた。やむことなく顔面に伝えられる衝撃はその都度脳裏の言葉を中断させ、本人も気づいていなかったが論理的な思考力も少しずつ削っていった。どうして有利であった自分が殴られなければならないのか、そこをいぶかしむことすらできず間断なく加えられる顔面への衝撃と激痛に心が屈しようとする。

殺される、と思った。

ふざけるな、と思った。

「いっ――てえなこの野郎！」

怒声とともに全力で顔を殴りつける。馬乗りになる自分を半ば以上持ち上げつつ浮き上がっていた葛西の胸、肩、後頭部が同時に床板に叩きつけられる一撃だった。しかしそれでも動きは止まらず両方の頬にまた衝撃が加えられる。

なんでだよ。どうしてマウント取ってる俺よりもお前のほうが手数が多いんだよ。テレビじゃこれで勝負ありじゃねえか。プライドの皆さんに申し訳ないと思わないのかお前。必死になって顔を、肩を、喉を殴りつけるがそれよりも多い回数自分の上体も揺れる現状に恐慌状態に陥った。だめだ。信じられないが、殴り合いだと俺が負ける。俺のパンチじゃこいつ死なないよ。このままじゃ殺される。

右手が自然に葛西の左襟首を掴み、左手が右の奥襟に当たる部分をとった。締め技なんて高校の柔道の授業で先生がやっているのを見たのが最初で最後のことだ。これで効果がなければ多分自分は死ぬ。ただただ腕に力をこめた。

上になっている自分が襟に手を伸ばしているのだ。当然葛西の顔面への殴打は止んでいた。しかしそれは、単に両わき腹に対象を変えただけともいうものだった。グローブがわき腹にめり込むたびに先ほどの芋煮が逆流しそうになる。やめろ。吐くぞこの野郎。いいのか。お前下になっているんだぞ。

いいんだろうな。まったく気にしないんだろうな。俺を殺すことしか考えてないんだよこいつ。帰りてえ。腹筋と手首の筋肉に全神経を集中させながら黒田は叫んでいた。いい加減に！

わき腹への激痛は容赦なく続く。本当に締めは効いているのか？　力が増しこそすれ衰えているとは全く思えない。

「くたばれってんだてめえ！」

叫びはもう悲鳴のようだった。

唐突に葛西の両腕が床に落ちた。同時に審判の「やめ」という合図が響く。黒田はほんの少しだけ腕の力を緩めた。まだ掴んだ襟は離さない。

審判の橋本教官が葛西の顔の上にかがみこんだ。手を離せ、黒田。葛西はもう落ちている。その言葉にほっとして指の力を抜こうとするが、どうしても手は離そうとしない。頭ではわかっているのに身体が命令を拒否しているような感覚だった。

「もういい」

大きな手が肩に置かれた。もう大丈夫だ。こいつがまだ生きていても、俺は殺されないですむ。肩に置かれた手のひらがそんな安堵感を伝えてきて、ようやく指はほどけた。そのまま身体を右に倒す。受身すら取らずに床板に倒れこんだ。

「勝者、黒田！」

審判の声と歓声が遠くに聞こえた。黒田ってのは誰のことだろう？　と疑問に思う。俺以外にもこの街の戦士にいたのだろうか？

まさか俺じゃないよな。とても勝ったような気になれないのだが。

葛西紀彦（かさいのりひこ）　対　黒田聡（くろださとし）　⑪

いわゆる「落ちた」状態にある葛西紀彦だったが、教官が少し触っただけで息を吹き返した。しかし焦点は定まらず、何度か目の前で手を振った橋本辰（はしもとたつ）はあきらめたようにとりあえずそこら辺に寝かしておけ、と土嚢の見物席に座る戦士たちを手招きした。そして、開始線でその姿を眺めていた黒田聡の側の手を上げる。再び拍手喝采が起きたが黒田はそれに応えようともしない。

黒田は頭を小さく揺らしながら、運ばれていく葛西を見

送っていた。焦点がさだまらない。俺、ちょっと殴られすぎたかも。えーと、こういうときは頭を高くして寝てるといいんだっけ。次に試合があるものへの治療術の使用は認められていないから、決勝戦まであと三〇分程度の時間でなんとか回復しないと。ふらふらと自陣に戻った。先ほどまでは部隊のリーダーがいてくれたが彼女もどこかに行ってしまっている。今になってもセコンドなど必要とは思っていなかったが、必要ではなくてもこう疲れきって戻ってきた自陣が空だと少しだけ落ち込むのだった。さつきさんに無理やりお願いしてついてもらえばよかった——いや、あの人にそばでしゃべられたら吐くか——とりとめもない思考の中、とりあえず戻っては来たものの次に何をすればいいのかわからずぼんやりと立ち尽くしていた。

「黒田さん。気分が悪いなら寝た方がいい」

誰の声だろう？　発言者を特定するより前に、その相手が自分の疲労とダメージを気遣って声を低くしている配慮が伝わってきた。視線を向けるとそこには真壁啓一（まかべけいいち）の姿があった。そしてずいぶんと低い位置には三峰（みつみね）えりかも自分を見上げている。部隊も違うし一方は探索者ですらない彼らの気遣いが素直にうれしかった。そんな自分に弱気だな、と苦笑する。

あれ？　俺、真壁くんになにか言いたいことがあったんじゃないか？　不思議に思ったものの考えるのが億劫で、というよりも試合中のことを思い出そうとすると頭痛がするので思考を中断し、勧められるままに板張りの床に横になった。

「息苦しいですか？　ご自分の名前はわかります？　今日が何日かは？」

技術者が見つめてくる。その真剣な顔に感謝してまじめに答えた。少しほっとしたようだった。吐き気はありますか？　少し、とうなずく。それよりも、試合中の記憶がまったくないんですけど。

三峰の顔が少しくもった。うーん、私も応急処置なんて知らないし。でもトイレまで歩かせるのは危険よね。ねえ真壁くん、ちょっと放送席あたりに吐くためのビニール袋とかないかな？

「そうですね、探してき――」

言葉は少し途切れ、探してきます、と言い直すと真壁は立ち上がった。なんだろう？　と残された二人も視線を放送席に移し、そして同時に「あ」とつぶやいた。黒田は視線をすぐに天井に向けた。そこには特別に準決勝から解説と実況に加わった女戦士が二人いたのだが、解説の笠置町翠（かさぎまちみどり）が膝からかけていた毛布が床に落ちてしまっていたからだ。その結果、黒田は目をそらさなければならないような状態になっている。真壁もそれに気づいたのだろう。

見守るうちに真壁は放送席の翠に何か話しかけたようだった。そして、テーブルの上の模造紙を取り上げてサインペンで何か書く。それを彼女の座る前面に垂らした。模造紙には『特別解説』と大書してある。隣りに座る真城雪（ましろゆき）と同様、これで不心得者が正面からスカートの中を覗こうとしても模造紙に阻まれ落胆するはずだった。顔を真っ赤にして小さくなっている翠をそこにおいて、真壁がこちらに戻ってきた。

「いいとこあるのね、真壁くん。で、ビニール袋とかはなかったの？」

真壁はぽかんと口をあけた。ビニール袋？　ビニール……

「もういっぺん探してきます！」

あの子ったら、と苦笑して視線を戻した三峰に黒田は先ほどよりしっかりした声で話しかけた。

「三峰さん。どうやら記憶障害は治ったみたいです」

「あら。よかったですね！」

「真壁のおかげかな」

怪訝な顔に続ける。

「この野郎真壁、って思ったら芋づる式に記憶がよみがえりました。感謝すべきなのかもしれないなあ。言いつけるのは勘弁してやるか」

三峰は要領を得ない顔で自分を見下ろしている。散々殴られた自分はいまひどい顔だろうに、この人はぜんぜんおびえないんだなとちらりと感心し、黒田は目を閉じた。しんどい試合だった。

しんどい試合だった。真壁のおかげでよみがえった記憶は自分が勝利に終わったというのにいまさらのように全身

を恐怖で震わせた。衝撃の一つ一つが痛みすら伴って、まるでメリーゴーランドのように何度も蘇る。これじゃ休もうにも眠れやしない。

やっぱり言いつけることにしよう。

葛西紀彦　対　黒田聡　⑫

うわ、ヒゲ。開けた視界に映っていた星野幸樹の顔を見て葛西紀彦がまず呟いたのはその一言だった。星野をはじめ周囲を取り囲んで心配していた視線たちがほっとしたように和んだ。

負けましたねー、とからっと笑って葛西は身を起こした。鯉沼昭夫の物問うような視線に首を振る。大丈夫。殴られた程度だから治療の必要はないよ。クビはあざになってるだろうけど。あんな細い身体で恐ろしい力だった！　その割には殴られたほうはそれほど痛くなかったけど——黒田さん、素手のケンカは苦手なのかな。

野村悠樹は曖昧な微笑を浮かべた。少し前、酔って探索者同士のケンカをしてしまったとき、その夜の自警団だった黒田聡に鎖骨を折られたことがあったのを思い出したのだ。自分が泥酔していたとはいえその一撃は相当場慣れしたものだった。美男子で物腰は温和なほうで、アナウンスによれば資産家の息子らしいが実際はもっと物騒な経歴をもっているだろうと推測していた。そこで星野に向き直る。試合前に黒田さんが訊きにきたことなんですけど。

星野の表情が少し険しくなった。由真のことか？　野村は気おされてのけぞった。

「いやそうではなくて。葛西を拳銃で撃ったら死ぬかどうか、です」

その言葉に葛西がぎょっとした顔であとじさった。肩がすぐ後ろにいる鯉沼今日子の鼻にぶつかり悲鳴があがるが葛西は気づいた様子もなく目の前で交わされた剣呑な会話を注視している。

「ああ、その件か」

星野の雰囲気は途端にやわらぎ、一転して険しい表情で

野村を見つめた。野村の顔が再度こわばる。
「こういうことが答えだろうな」
当然野村はわからないようだった。途方にくれたように葛西を見やるがそちらにも要領を得ていない表情を見出しただけだった——改めて見るとかすかに青あざが残っているが、馬乗りになった怪力の人間のパンチを受けたとは思えないかすかな跡である。あんなに殴られてこれだけで済んでいる人間だったら、俺が蹴り殺せないのも無理はないか、そんな納得を感じた。
「科学的に解明するのは商社のおちびさんの出番を待つしかないだろうが、おそらく葛西は相手の距離感を少しだけ狂わせる体質なのだと思う。葛西」
はい、とぴんと伸ばした背筋は自分のリーダーの空気がまだぴりぴりしているからだろう。この人が出場していたらどうなっていたのだろうと野村は思った。剣技や体術や体力という以前の問題として、貫禄だけで圧倒され勝ち負けになれない人間が（第一期にも）少なからず現れそうだ。自分も実力を出し切れるかどうか危ない。
続く星野の質問は奇妙なもので、葛西の回答は珍しいものだった。すなわち
「お前、平熱は何度だ？」
「え？　三七度八分くらいですけど。俺、なんだか高いんですよ」
おかしいよそれ！　という声は鯉沼今日子のものだ。彼女はすかさず葛西の額に手を当て、うわっ汗気持ち悪い！　と手を引き戻した。その失礼な行動に夫が苦笑しつつも自分は確認しようとしないのは、治療術師である彼は普段身体に触れているから知っているのだろう。ともあれ若妻は確かに熱いと認めた。星野は続ける。
「おそらくこれは身体障害の一種なんだろうな。発熱が四十度を越えると危険というから、葛西は普通の人間よりも発熱できる余地がないことになるわけだから。とにかくどうして葛西の身体が熱いのかはわからんが、人間が自然に推測する熱量よりも少しだけ熱いということになる——これがまず人間の肌の感覚に違和感を与える」
他にもいろいろあるだろうと続けた。おそらく、気功や

らオーラやらというオカルトでしか説明できない体質も葛西は備えているはずだ。さらにこいつほど向かい合ってうんざりするタイプの戦士もいない。その結果、俺たち前衛のように実際は視覚だけではなくあらゆる感覚で距離を測っているような人間は、視覚以外の感覚からの情報によって視覚がゆがめられる。葛西の実体よりもほんの少しだけ近くにいるよう感じられてしまう。その結果、ほんの少しだけ踏み込みは浅くなり、打撃はほんの少しだけ真芯からずれる。ミートポイントが一センチずれてもスタンドに運べるのは金属バットを使っている高校野球までで、プロじゃむりだ。野村も蹴りの芯から三センチずれたらもう人は死なないだろう」

「少なくとも葛西は死にませんね」

そして腕組みをする。まったく信じられないとその態度は示していた。それはそうだろう。実際見えているというのに、他の情報によって視覚がゆがめられることがあるなんて考えることすら不自然な出来事である。視覚に頼って暮らしてきただけにその感覚の正確さに対する信頼は大きいのだった。視覚とは所詮網膜に映った光線を脳が映像として構成しているのだという事実、それゆえにほかの情報に簡単に影響を受けるものだという事実は、知ってはいても納得はできない種類のものだった。

しかし負けたとはいえ葛西の顔は黒田聡という怪力の男に殴られたとは思えない軽傷であり、それを説明する理由としては星野の意見以外には提示されていない。それに、先ほどの自分との試合を考えてもあの蹴りを受けて試合を続行できた不思議に関しては芯をずらされたと思えば納得もしやすい。

「じゃあ黒田さんは」

「斬ったり刺したりできない武器で葛西と闘うと考えたらあれしかなかったろう。黒田は知らずに勝ち残る唯一の方法を採ったわけだ。生き残るためのセンスというか、悪運というか、とにかくたいした奴だ」

星野の視線に釣られてその場の全員が、寝転がって天井をぼんやりと見ている黒田を眺めた。試合が終わって少し経ったいまその顔はさらに腫れ上がり原型がわからないほ

どになってしまっていた。それでも次に試合を控える彼は治療術の助けを受けられない。そんな状態であってもそばにしゃがみこむ真壁啓一と三峰えりかに言葉を向ける時には笑顔を作ろうと努力していることが見て取れた。

「すごい人でした。これまで単なる色男かと反感もってたけど、やりあって初めてわかった。もっと前に稽古をつけてもらえばよかったな」

ぽつりと葛西がつぶやいた。

「でも、今日はいいや。今日はもう、戦うのが怖いな。次のトーナメントは早くても明日以降で」

懲りない、あきらめない奴だ。相変わらずだな、ともはや苦笑するしかない空気の中で野村は納得した。

星野がトーナメントに出馬したとして、きっとその進撃を止めるのはこういう男なのだろうと。

神足燎三　対　国村光　①

両腕は軽く曲がり顔の前に挙げられている。それを振り下ろすと同時に膝がたわみ、腰の位置が全く前後することなく垂直に下に落ちた。落ちるといってもその速度はあくまでゆっくりと、その人間が制御している動きだと見ていてわかる。

落ちる腰は速度の変化なく静止した。その位置は深い。腿と地面とが水平になるまで降りて、しかし腰自体はかかとの上から前後せずに、またかかとは地面から浮き上がっていなかった。見守る佐藤良輔にはありとあらゆる格闘技の経験がなかったが、それでも漫画くらいは読んだことがある。ある中国武術を題材にしていた少年漫画では、その足の形と同じ態勢を馬歩と呼んでありがたがっていた。いわく、数十年の修行の末にようやくモノになるその武術の入り口にして出口（少なくとも仮免試験）なのだとか。もちろん佐藤にはその姿勢が中国武術の見地から正しいのかどうかはわからないが、それでも静止するその姿勢が安定し、美しく、その横顔に打ち込む自分がまったく想像で

きないことだけはわかる。

同じように前触れも遅滞もなく腰があげられた。背中は相変わらずピンと張り、膝を軽く曲げたところで再び静止する。男の名前は国村光（くにむらひかる）といった。この街ではもう数人になってしまった第一期でも最初の三日間に登録した最古参の戦士であり、現在では平日をサラリーマンとして休日を探索者として過ごす『週末探索者』として有名な男である。最古参の探索者であることも週末探索者であることもこの街では珍しいと思われることだったが、明日からその名はより名誉な評判に上書きされるだろう。すなわち迷宮街最強の戦士の一人と。

もとより評価が低かったわけではない。週に一回の探索でありながら腕を鈍らせることもなく第三層の激戦を生き抜いている時点で誰しもが端倪すべからざるの思いを抱くところであり、最精鋭四部隊の全ての戦士たちが異口同音にその能力を認めることで、その実力に対する他の戦士たちの疑問は圧殺されていた。それでも、土日だけやってきて訓練場でも精鋭部隊の戦士たちとばかり打ち合っている彼の実力を大多数が実感する機会はほとんどなく、根強い不信はあったのだ。彼は本当に強いのか？　というものが。

それは完全に証明された。名古屋から危うく不戦敗になりそうなほど時間ぎりぎりで駆けつけた初戦は進藤典範（しんどうのりひろ）で第二期では有望な戦士とはいえ格が違ったが、その後は狩野謙（かのうけん）、そして自分だった。最精鋭部隊へスカウトされるほどの戦士と第二期では数少ない自警団に選ばれる自分。確かに評判どおりの実力があるのならば二人を下すことも納得できないことではないだろう。しかし、ともに圧勝するというのは生半可の実力では考えられないことなのだ。この会場にいて疑問を持っていた全ての戦士が、看板に偽りのなかったことを実感しているはずだった。そして実際に立ち会った佐藤もそのうちの一人だった。名前と先輩戦士たちの態度のみから恐れていた相手の実力を実感し、腕の骨まで折られてしかし彼は感動していた。勝てなかったことは（正確に表現するなら目指していた紙切れが手に入らなかったことは）非常に悔しいことだったがそれを補って余りある充実感に満たされている。

そして疑惑のすべてぬぐわれた目で単純なスクワットを眺めてみればそれは普通の人間が思い描くものとはまったく別物なのだった。足首ってのはそこまで曲がるものなのか？　と思わずにはいられないほど前傾する脛、自分と同じ程度には大柄な身体が下がっても膨らむ様子が窺えない太ももの筋肉、まったく力が入らずにそれでも凛とした緊張感を見るものに与える背筋、そして何よりその動作の速度が異常だった。

早いのではない。遅いのでもない。意識せずに思いのままに繰り返されているのであろう上下運動は、しかし動作の開始から終了までまったく速度の加減が見られないという点で佐藤の常識を逸脱していた。どんな列車だって駅のホームを出るときにはゆっくり動き出すように、人間の動きも最初からトップスピードを実現することなどできはしない。それは物理原則に反するはずだった。これだと先ほどの試合を思い出す。面と向かったこの男は、「あ、動き始める」と思うことすらできなかったのだ。他の戦士だったら動き始めを実感し動作の最速点にいたるまで猶予が（もちろん格上の相手だったらそれは猶予と呼べる時間にはならない）あるものだったが、この相手は違ったのだ。そのときの感覚は「あ、動いてたんだ」というものに近かった。

もちろん目の前の男も生物なのだから、トップスピードまでの加速をゼロに短縮できるはずがない。しかしその間隔は佐藤の手に余るほどに短く、そうである以上ゼロ秒と同じ意味を持つのだった。ゆったりした準備運動を見るだけで現段階での格の違いというものを思い知らされていた。

だが、現段階での話だ。

そう。こんな格の違う相手、この街に来たその日に対していたとしたらおそらくわけもわからずに切り伏せられていただろう。だが今は、どうしてかなわないのかその理由がわかる。本当にわかっていないとしても推測はできている。そのぶんだけ自分は上達したのだし、まだまだ自分の能力に限界を感じてはいなかった。

「佐藤くんさあ」

動作には乱れなく問い掛けられた声になんですか？　と

応じる。
「そんなにミラコスタに行きたかったの？　あの女の子と？」
　あの女の子？　鸚鵡返しに呟いて数秒考え、しかしあの女の子が思いつかずに佐藤は首を振った。いや俺のためじゃないですよ。妹とその彼氏にあげたいと思って。妹の彼氏が忙しいから前もってチケット取れないんですよ。
「ああ、俺もそうだ」
「噂ですけど、ゴールデンウィークは一年前から埋まるとか埋まらないとか。だからベスト4狙ってたんですけどね。まあ実力が足りないのだから仕方ない」
「あきらめられるのか？」
　あきらめるも何もと佐藤は苦笑した。手に入らなかったんですから。俺の実力でベスト8ってだけでも大健闘ですよ。そして、USJチケットは的場さんが欲しがってたからあげることにしようと呟いた。
「そうか、そうか」
　国村は少し嬉しそうだった。あきらめられるなら、それがいちばんいいな。うん。それが一番いい。
　その上機嫌の意味が良くわからず佐藤は相変わらずの動きを眺めていた。優雅とすらいえる筋力トレーニングがふっと過去のある映像を脳裏によみがえらせる。日本舞踊をやっているの、と慎ましやかに笑ったその女性の振る舞いもまた洗練されていて、サワーのグラスを持ち上げる動作すら美しかった。
　ふっと東の方向を眺めた。もうずいぶんと暗くなっている山々の向こうであの女性は今も暮らしているのだろうか。たった一度だけ食事をしただけでこの街を去っていった彼女は元気でいるだろうか。USJチケットも、あのひとがいたら誘ったのになと少しだけ惜しく思った。なぜだか晴れ晴れとした国村の表情には気づかない。

神足燎三　対　国村光②

笠置町隆盛（かさぎまちたかもり）は真壁啓一（まかべけいいち）を最後まで認めなかったな。神田（かんだ）絵美（えみ）がそのことを懐かしく思い出したのは、なぜだか目の

前に寝転がる中年を眺めてだった。男は名を神足燎三（こうたりりょうぞう）といい、初日に登録して生き残っている唯一の探索者であり精鋭四部隊の一角、魔女姫の部隊で彼女を守る戦士である。最強トーナメントと名づけられた剣術大会で実力どおりに勝ち上がり準々決勝を迎える彼は、しかし視界の端でゆったりと準備運動をしている対戦相手とは対照的に両腕を頭の下に組み目をつむっていた。アナウンス嬢の役目から解放され、さてなじみの中年に激励の言葉でもかけてやろうかとやってきたらこの有様だった。このひと、次が出番だってわかっているのかしら？　肩透かしを食わされた気分になる。

　理事と真壁のことを思い出したのはその気分が引き金だった。あれはもう一ヶ月も前にもなる年末のある夜、彼女は理事の娘に招かれて親子の会食に同席したことがあった。雲の上の人物との実りある夕食はしかし途中で思わぬ座興に中断されたのだが、その座興が終わったあとのことだ。汗一つかかずに戻ってきた理事はある巨人の膂力を認めた。また、ある（今はもういない）戦士の身体能力と反射神経を絶賛した。そしてある若者のがむしゃらさに感心してあるダンサーの下半身の強靭さには本当に驚いていたようだった。明らかに理事の前に敵し得なかった彼らに対する高評価の大盤振る舞い、しかし彼らのほとんどよりも善戦した真壁啓一については――反則負けとはいえ――敗北を喫したにもかかわらずに認めようとはしなかった。口にも出さなかった。

　神田はそれを苦笑とともに眺めていた。理事はたしか長野の山奥の人間だったと思う。田舎に住んで愛娘をもつ父親はこういうあからさまな敵意を娘に近づく男にむけるものなのだろうか？　と。

　真壁の場合は実力を認めるべき分別を圧殺したものがあったのかもしれない。しかし、同じように善戦しておいてなお認めてもらえなかった男がもう一人いた。それが目の前の男だったのだ。

　ずっと前に酒場で行われた相撲の様子など当然神田は覚えていない。しかし印象に残っていたのはその試合を眺めながら三回も理事の娘が「すごい」とつぶやいたことだっ

た。一分足らずの間に三回。それだけの熱戦だっただろうか？　記憶を探る。

いや。たしか――神足さんは最初から組もうとしないで土俵の端っこで構えていて、理事がなかなか突っ込まなかったんじゃないか。そう。そうだった。理事が手加減して様子を見ており、そして突っ込んだら一瞬で勝負がついた。そうとしかとれない構図だったからこそ練達の剣士である女性が何度もすごいとつぶやいたことが意外だったのだ。

あれのどこがすごいことだったのだろう？　どうしても神田には理解できない。ただ寝転がって目を瞑っている男を眺めている。

立ち去ることもできず、かといって明らかに起きているとわかるのに声をかけることもできない。自分がそんな状態にあり、ある意味では行動を縛られていることなどは当然気がついていなかった。

寝転がる男の呼吸は低く浅く、長く深く、かすかに変化をつけておだやかにつづいている。

神足燎三　対　国村光　③

渡されたペットボトルに礼を返し、国村光（くにむらひかる）は試合場のはずれに視線をやった。行き交う人のために見たいものを捕らえることはできなかったが、人の流れがそこにあるべきものにまったく注目をしていないところからそこでは何も行われていないのだということは想像できる。すごいな、と感心することしきりだった。あと二試合あるから少しでも体力と集中力を温存しておきたい自分ですらこうして心を研ぎ身体を温める必要に駆られているというのに当の対戦相手はまるで試合などないかのようにおそらく寝転がっているのだろう。さすがはこの街でもっとも年季の古い戦士だとしか表現しようがない。

「余裕ですね神足さんは。さすがというべきか……でもちょっと信じられませんが」

隣りに並び同じ方向を眺める若者の横顔を見て、少し講義をしてやろうかと思う。名前を呼ばれた佐藤良輔（さとうりょうすけ）に自分の腕は何キロくらいあるか知っているか、と問いかけてみた。若い戦士は面食らったようだった。

「え。気にしたことありませんけど……両方で五キロくらいですか？」

もちろん他人の腕の重さなど国村にわかるはずもない（相当程度確実に推測する自信はあるが）。今度、体重計に手のひらを乗せて肩の力を抜いてみるといい。それが君が武器の一部分として使える部品の大きさだ。武器、という剣呑な言葉に佐藤の顔が引き締まった。

「俺たちが敵を殴り殺すときに考えるべき要素は鉄という金属じゃない。剣という形状じゃない。刀身の重量じゃない。どれだけの質量のものを、どれだけの勢いでどこにぶつけるかだけが問題になる。その意味では強化剣だの何だのを欲しがる前に体重計に手を置いて肩の力を抜くことを練習してみるといいな。脱力の度合いが強まればそれだけ、自分では重さを感じずに扱える質量が増えるということだから」

ペットボトルを口に当て、タオルで額の汗をぬぐった。そして人間一人壊すのに核兵器は要らない、とつぶやいた。

「質量、速度、硬度、接触する面積。それらによって衝撃量は決まる。さらにどんな場所にぶつかるかによって衝撃は減殺される。それが弱ければ相手は傷もつかないし、強ければ粉砕される。衝撃の量は三峰さんでも測定不可能な激動的なものだけれど俺たちは経験で大体わかっている。これくらいなら赤鬼は死ぬが天狗岩は死なない、とかな」

天狗岩とは第四層で出没する二足歩行をする上に翼を持つ化け物のことだった。飛翔するだけにその身体は軽くもろいが、表皮が第四層の岩肌に酷似して岩石に見えるため、また鳥類のくちばしを思わせるその外見からも岩でできた天狗と呼ばれている。まだ第四層に達していない佐藤はそれを見たことはないが毎晩のように化け物の情報は読み込んでいる。なんといっても、第二層からでも運が悪ければ第四層に強制移動される可能性があるのだから。ともあれ天狗岩の実際は知らなかったが、それでもこの相手ならばこれで十分、という感覚は佐藤もわかるから納得できた。

「君の仲間のでかいの。津差とか言ったか」

衝撃量、という言葉でまさに想像していた巨漢の名前を言い当てられて佐藤は少し驚いた。国村は続ける。あので

かいのはイナバの物置を一人だけでも壊せそうな体格をしていることからもわかるように他の戦士たちに比べて強烈な打撃力があるだろう。それでも、それは俺が挙げた中の一つの要素でしかない。剣と腕の質量だ。

特殊な石による強化剣の品質テストを委託されている津差なので実は武器の硬度と剛性も他の探索者より勝ってはいたが、確かにその通りだ。太刀ゆきの速さは笠置町翠や精鋭部隊の戦士たちはおろか真壁啓一や塩崎傑といった第二期屈指のアウトファイターたちにも劣っていた。もっとも、津差の筋力と振るっている鉄塊にはそんな速度など沈黙してしまう説得力があったが。

「津差はいい。あれだけの体格ならば普通に経験を積むだけで俺たちよりもはるかに強くなるだろう。しかしそれは、ユニクロで洋服を買うことができないという呪いと引き換えのものであってどうしたってうらやましいことじゃない。特に、それ以上の打撃力を半分以下の体重で実現しつつある人間がいる以上は」

聞き間違いではないのか？　と佐藤がいぶかしい視線を投げてきた。佐藤からすれば化け物ぞろいに見えるこの街の戦士たちだから、より小さい体格で同じだけの打撃を生み出している戦士がいてもおかしくないとはわかるだろう。しかし、国村は半分以下の体重と言ったのだ。いくら津差の巨体とはいえ体重は一三〇キロ程度だったはずだ。そしてこの街の戦士たちはほとんどが七〇キロを超えている。ではそれに当てはまるのは女性しかいない。

「真城さんですか？」

口をついて出たのは当然のようにこの街最強の女剣士の名前だった。国村はうなずき、それと鈴木秀美さんだと付け加える。鈴木さんは接触する面積をギリギリまで絞る剣術と、俺たちとは次元が違う相手の急所を見抜く能力だからまったく比較にならないが——そこで国村は懐かしそうに不精ひげの浮いたあごを撫でた。君たちは三原さんは知らなかったか？　あの人もそうだったな。殴れば必ず相手が死ぬ様子は手品としか思えなかった。そういえばあの葛西が裏拳一発で昏倒したはずだ、とつぶやいて一瞬言葉を切る——どこまで話した？　そう、鈴木さんは俺たちとは

まったく別のルートで強いから参考にも比較にもならないが、真城さんは違う。

「訓練場で見るときは隙だらけで、確かに体重を乗せて強そうだけどそれほどとは思えないですけど。体重を乗せてがんばってようやく男たちに並んでいるという印象があります」

率直な言葉はその相手がこの街の権力者だとわかっていないかのようで、国村は苦笑した。

「いや、彼女はよくわかってる。常に重心の所在を意識してエネルギーをなるべく浪費しない飛び方や空中での体さばきを勉強している。基本の基本を教えたのは俺だが、今ではその俺も到底及ばないレベルにいる。そして今だったら、不器用な奴が二メートル飛び込んだだけの移動エネルギーをたった半歩のすり足で剣先にこめられるはずだ。今度稽古をつけてもらうといい。傍で見るのとは大違いだとわかるし、俺たちが津差を気にする必要はないのだと教えてくれるから」

なるほど、けど真城さんとはあまり話したことないから気が重いですがと腕組みをした佐藤に向け胸の中で講義終わりと呟いた。そして視線を最初に見ていた方向に向け昔を思い出した。第二層に挑むために武器をなにか作ろうとしていた女剣士が自分に教えを請うて来たとき、国村は驚き疑問に思ったものだ。その頃の自分はまだどの探索者にもその優れた身体能力を見せていなかったのだから。第二層では全力を出すような敵などいなかったし、その第二層で苦労しているほかの探索者相手にはなおさらその必要がなかったからだ。それなのに娘は見抜いた。今ほどの迫力のなかった娘はしかし溺れる者がとりあえずわらをつかんだということではなく、「移動エネルギーや身体の重量を効率的に剣先に乗せる技術を学びたい」とはっきり表現し、そのために教えを請うなら国村以外にはいないのだと言い切った。

その時はたいした眼力だと感心しただけだった。確かに全力を出していなかったとはいえ隠してもいなかったのだから見巧者ならば見抜いてもおかしくはない。剣術や運動における見巧者というイメージとはっとするほどの美貌と

のアンバランスは意外だったがそういうこともあるのだろうと思っていた。

しかしある時、探索者有数の剣士に成長した娘から本当のことを聞いた。女戦士としての進む道を迷った彼女に目指すべき戦法とその最適な師匠として国村を頼れと指示した人間がいたことを。視線を人の流れに置く。その先に寝転がっている男が立ち上がったりしないだろうかと期待をこめて。しかし風景は変わらず行き交う人々はそこに寝ている男に特別な注意を向ける様子はなかった。

自分や真城雪が苦労して身につけた体術、それを実はあの男も体得しているなどということはない。世の中はそんなにドラマチックにできあがってはいない。体さばきのレベルは普段の動きを見れば十分に想像できた。だからこそ理解できない。

自分でも身につけることができ、それを学べば生き残る可能性が格段に上がる技術があるなら自分なら努力するだろう。しかしあの男がそれをしなかったのは何故か？　それをできない理由があったのか、しない理由があったのか——自分には必要ないと見切ったのか。それは、上回る別の武器を既に身につけているということ。

前者と思いたいところだが、世の中はそのように都合よくもできていないはずだった。気が重い。

神足燎三　対　国村光　④

二人同時に縛るのは、それが第一期屈指の探索者になるとやっぱりダメか。そう心中で苦笑してから神足燎三（てらしまかおる）は新たにやってきた寺島薫（こうたりりょうぞう）の顔を見上げた。年齢は自分より一つ下だったろうか？　この街では高年齢に位置するその戦士はくだけた表情でどうだいと声をかけてきた。その脇で、これまで立ちすくんでいた神田絵美（かんだえみ）が夢から醒めたような表情をし、そのままふらふらと立ち去っていった。その背中に対し申し訳なく思う。ついつい猫をじゃらしすぎ、ぐったりされたときの気持ちに似ていた。

「何が？」

寺島に問いかける。確かに寺島はどうだとしか訊かず、であれば何について尋ねたのか確認するのは自然なことだったろうがしかし寺島は面食らった表情をした。当たり前だ。今日一日この訓練場を熱気で満たした剣術トーナメントもいよいよ準決勝の第二試合、その出場者にとって目の前に迫った試合よりも重要なものがあるなんて誰も思わないだろう。寺島が面食らったのは、本当に神足が何について尋ねたのかを知りたがったと感じたから。もしかしたら——凝視する瞳が伝えてくる。もしかしたらあんた、本当にわかっていないのか？　口を開くより前に神足は答えを投げた。国村のことならいま困り果ててるところだよ。

「へええ」

寺島は興味深そうな顔をした。彼は迷宮街では珍しく、正規の剣術である日本剣道を相当なレベルまで修めた男である。その剣力を技術的に超えるのはこの街でも教官、理事の娘、二刀を使うサラブレッドだけとは衆目の一致するところだった。トーナメント自体はいいがかりともいえる不運によって早期に敗退したが序列で考えるならば次の試合のどちらに取って代わっていてもおかしくない実力なのだ。だからこそ次の試合、どちらの立場に立っても苦労することがわかっていたしそれを目の前で気にしていないように寝そべる男には興味を引かれていたし、なおかつその男の歯垣から『困り果てている』などという弱気がもれることには興味をかきたてられていた。

何を困っているんだ？　どっかりと神足の寝そべる腹の脇にあぐらをかいた。神足はいやそうな顔をして身体をおこした。なんだろう？　その表情と動きに違和感を感じる。

「国村は——」

違和感は言葉に吹き飛ばされた。国村は、この街で俺が一番苦手なタイプなんだよ。

「そうか？　純粋に剣の腕前で考えたらどうしたってあんただろう？　経験だって段違いだ」

国村光（くにむらひかる）は第一期の二日目に登録した男だった。年月で考えれば相当に古い。しかしその経験を段違いだと切って捨てる根拠は寺島自身が同じく二日目に登録した戦士だからでもあるが、なにより目の前の男のキャリアを実感して

いるからだった。大半の探索者には漏れなくおとずれた長い休み――経済的に安定した頃に心身の疲れを強く感じ、この状態で潜ったら死ぬと弱気になることによって否応なくはまりこむ『夏休み』と呼ばれている無気力状態――がこの男には結局なかったことを知っているからだ。誰よりも長く、誰よりも密度濃く地下に挑み続けた、人間の形をした砦が目の前で座っている男である。その前には長い年季とはいえ週末だけ訪れている国村のキャリアなど比較にならぬものに思われた。そしてこの街の探索者なら激動の中で生死を分かつ一線はこれまでの経験からくるひらめきにあることを熟知していた。

寺島の目から見れば苦戦はしても負けはないだろうと思われる目の前の男――その男がどうしていま弱気をもらすのか。そりゃあよ、と神足は続けた。

「真剣にやれば勝つ可能性は高いさ。でもお祭りには勝ち負けよりも大事なものがあるし、俺の場合それはどうやってお客さんを楽しませるかだ。そして、国村には小手先のペテンは一切効果がない。あいつは人間の動きを手足ではなくて胴体の自然不自然で見極める。あいつは緑川の手品を全部見破るんだぞ、知ってるか？」

「あれをか――。胴体を見てか」

寺島は絶句した。彼は見破れないのだろう。神足はうなずいた。

「ペテンが使えないなら会場に細工するしかないが、さすがにお嬢にやったことをもう一度なんて恥ずかしくてこれから街を歩けない。何か、何か会場の客が驚く工夫を――」

「あんた、相変わらずだなあ――なんだ？」

疑問は神足の凝視を感じたからだ。重ねてのどうかしたか？　という問いかけにも神足は答えない。

突然、寺島の手をゴツゴツして皮の分厚くなった手が握り締めた。毎朝毎晩千回の木刀の素振りをしている自分よりもはるかに皮が硬質化している手のひらだった。

「そうか、お前がいたな」

「え、俺？」

「そういえばお前がいたな、寺島」

「え、俺がいたのか？　俺が何かしたか？」

神足は立ち上がり、邪悪ともいえる笑顔で寺島を見下ろした。
「ネタは決まった。これで面白くできそうだ。今度は客にもスリルを味わってもらおう」
客にも？　寺島はなんだかいやな予感がして、訓練場の一角へと歩く背中を追った。

神足燎三　対　国村光　⑤

マイクの声はまるでこれが拡声されていることを自覚していないかのように楽しげに会場の空気を震わせる。さて先ほどの試合を振り返って、と真城雪（ましろゆき）は隣に座る娘に水を向けた。いかがですか解説の笠置町さん。
『見てるこっちまで痛かったとしかいえません。まるで自分が殴られたみたい』
『黒田選手の勝利は順当なところですか？』
うーん、とこの街でも屈指の剣豪は唸った。正直なところ、試合が始まる前までは試合なら黒田さん、ケンカなら葛西さんだと思っていました。
『それが開始一秒でケンカになりましたからね』
『それもしかけたのは黒田さんの方でしたから。意外でした』
『まあそれでもほんとの喧嘩になっちゃったら葛西選手が有利だったんですけど』
いやー、と翠はいまだ寝転がっている黒田をちらりと眺めた。
『あんな手数の中で反撃できた黒田さんはやっぱりすごいんだと思います。他の誰でも、葛西さんと喧嘩して勝てる人はいないんじゃないかな。それこそ津差さんとか南沢さんのような生き物じゃないと』
『普段は紳士なのに、実際はとんだチンピラでしたね』
『ですねえ。これからは寄らないでスケベ、とか迂闊に言えません。首絞められる』
『え。翠ちゃんそんなこと言ってるの？』
『だってあの人毎週のようにかの――』

唐突にマイクの音が途切れた。解説席では年上の女が唇の前に指を立てている。

再び音声が入った。

『で、次の試合はどうご覧になりますか？　国村選手対神足選手ですけど』

『そうですね。テクニックでは神足さん、基礎的な能力では国村さんで、ある意味この街の頂上対決ですよね。決勝に進出した黒田さんは先ほど亡くなったし、これが事実上の決勝戦になるんじゃないでしょうか』

そして、あー、もう！　と抑えきれないような声が漏れた。どうしたのさ？　という女帝の声も拡声器は拾い上げ会場に届ける。

『目の前であんな試合見せられて座ってろだなんて！　血が騒いでしょうがないです！　真城さん、解説なんてやめにしてあっちで稽古しましょうよ』

『ちょっと待って翠ちゃんスカート短い』

『スカートの中にジャージはけばいいですから、ほら真城さんも』

立ち上がり腕を引っ張ろうとする娘に女帝は苦りきった笑顔を向けた。

『あたしはダメよ。そんな姿写真にでも撮られたら一生の思い出になっちゃうから。いいから落ち着き――』

言葉が途切れ、腕を引っ張る娘と引っ張られる女は等しく一人の男を見上げた。神足燎三（こうたりょうぞう）は木剣の束を肩に担いでいる。そろそろ開始じゃないか？　お嬢。

「あ、あー、うん。そうだね」

そしてコホンと咳払い。

『それではこれより準決勝第二試合を開始します！　国村選手は試合場へおいでください！』

横目で、神足から木刀を受け取りながら目を輝かせて指示に聞き入る娘を眺めた。特別解説を放り出すのは別にいいけどさ、どうせ試合が始まったら話しかけても『気が散る！』としか言ってくれないんだから。でもね。

木刀を持って何をするのかわからないけど、あなたいまスカートだよ？　それは意識しておいたほうがいいと思うけどなー。

しかし娘は楽しげに試合会場の反対側に向かってしまった。木刀と木剣を合計で三本抱えて。まあいいかと苦笑して、座る人の列をまたぎこす国村光を確認した。マイクの音量を少し下げる。

『さあさ、お次はこの街きっての――』

口上を述べながら、ちらちらと試合会場に視線を走らせた。いつの間にか第一期の戦士たちが最前列に陣取っていることに気がついていた。そして、それぞれが手に木剣を持っていることにも。あのペテン師は今度は何をたくらんだのだろう。彼女も試合が楽しみになっていた。口上は短めに切り上げることにしよう。

神足燎三　対　国村光　⑥

視線は向かいに立つ神足燎三にすえたまま、両腕を頭の上で組み右の脇を伸ばそうと肩を傾ける。自然に突き出された腰が何かに当たり、その何かは小さい悲鳴を発してどさりと大きなものが床に投げ出される音がした。国村光はそこで初めて意外に思い視線を向かいの男からはずした。そこにいたのは笠置町翠というサラブレッドと呼ばれる優秀な女剣士であり、こちらがまったく距離を気にしていなかった以上身体がぶつかっても不思議はないが、転ぶような運動神経では断じてなかったから。見下ろした先では見覚えのある娘がなんだか紺色の布地に埋まっていた。

「ごめん、笠置町さん。ところで何をしている？」

ああいえこちらこそすみません、座ったままぺこりと頭を下げてから娘は立ち上がった。それで布の正体がわかった。剣道の袴である。上半身はぴったりしたタートルネックとベストなのに袴とは不似合いもはなはだしい。しかしそれに感じた違和感を追求することもせずに国村は再び視線を試合場の向かいに戻した。怪我をさせたなどということでもなければ理事の娘を気にする必要もなかったからだ。

やっぱりだ。

右肩から左脇へとたすきがけに巻きつけた帆布は無視す

ることにした。その中には何か自分に対しての罠が仕込まれているのは明らかだったけれど、今からペテンをあれこれ気に病んだところで自分のどんな推測よりもタチが悪いものであることは間違いないからだ。引き出しの多さでは到底及びもつかない相手である。自分は自分の土俵である身体能力で勝負するしかないのだ。だからこそ細心の注意で彼の状態を図ろうとする。

やっぱり、なんだかずれてるんだよな中心線が。

探索者はみな、とりわけ前衛たちは身体が柔軟だった。激動のさなかで自分の命を守るためには身体の稼動範囲が広いことが必要だと知っているのだ。しかしその中でも軟体動物としか思えない、おそらくヨガ行者も裸足で逃げ出す柔軟さを身につけているのが目の前の男だった。加えて意識してか否か、身体中心線をはさんでの左右の筋肉量もほとんど同じだった。普段は右腕で鉄剣を振るっているにもかかわらずの線対称は、一見訓練嫌いでペテンによって名をあげていると思われるこの男が実は身体を整えることに細心の注意を払っていることを示している。それらを踏まえてしかし目の前の男の立ち居振る舞いには違和感を感じずにはいられなかった。

全身こわばりがなく筋肉が左右対称に整っているならば動作の中心線は身体の真ん中に来るはずだ。そうして左右の動きに最高の性能を発揮するはずだ。それなのに目の前の男は少しだけ中心が左にずれているのだった。意識してのことではなく、同じだけの筋肉の束を備えているのにまるで左側だけ筋力が足りないかのような。それが不気味であり、訓練場で対戦してもやりづらかった。その変幻自在の剣術だけでも手を焼くというのに、繰り出される剣筋がほんの少しだけ想像から外れているのだから。

「今までできなかったんだから、この場でイメージの調整は無理だよな」

ポツリとつぶやく言葉を拾ったのだろうか。すでに袴を身につけた娘が何ですか？　と問いかけてきた。国村は軽くうなずいただけで答えない。

国村の意識は神足だけに向いていた。それは大舞台にあって強敵を前にした人間としては仕方のないことだったのか

もしれない。それに、集中するとはそれだけ相手の行動にすばやく対処できるということであってそれ自体はとがめた話ではないのはもちろんだろう。

しかしそれでも、隣りにいる娘が、既に自らの試合は終わったというのに袴をはいて最前列よりも前に陣取ることを不自然に思うべきだっただろう。神足たった一人に意識を向けずに会場を見渡すべきだっただろう。そうすれば会場の四方、最前列にすべて彼が名前を知り稽古相手に認めるほどの練達の戦士たちが2〜3人ずつ陣取り、一様に木剣を脇においていることに気づけたはずだ。各人の顔がなぜだか緊張していることにも気づけたはずだ。しかしそういったことすべてを置き去りにして国村の意識はペテン師と呼ばれた対戦相手にのみ向かっていた。

第一ラウンドは国村の負けということになる。

神足燎三　対　国村光　⑦

はじめの声に腰をぐんと落とした。普段はやわらかい太ももが硬直し膨張するのが自分でもわかった。反応速度は今日いちばんだ、と自分の身体への満足感とともに国村光は視線を対戦相手に当てた。敵手である神足燎三は右手の木の剣を肩にかけたまま棒立ちで国村を見ている。その姿勢に勝機を、しかし次の瞬間には他のものをも見出した。前へ飛び出そうとした動きをとどめたのはそれが原因である。はじめの声を受けてほんの一歩だけ神足が踏み出したその距離。スピードを殺さない踏み込みで国村が接近したら、二歩と少しだけ足りない。そして神足は二歩目にあわせて一歩踏み込むだけで木剣を当てることができる距離だった。気をくじかれて国村は半歩だけ背後に跳躍した。

危なかった、最初に決めたとおりに突っ込んだら完璧にカウンターだった。

心の中で冷や汗を流しながらそのまま神足を中心に弧を描くように左に動く。そうしながらも微妙に前進し、トップスピードで切り込める距離に調整した。

よし、いまだ――その意識はまったくの遅滞なく筋肉に伝達され、体重が右足にかかった。
すい、と神足が半歩を踏み出した。
国村は再び棒立ちになった。まただ。また、こちらの最高の距離を最悪の距離に変えられた――二度も続くなんて偶然だろうか？　まさか、まさか。
「どうしたい、国村よ。そっちがこないのなら俺から攻めないとダメか？」
意図してかどうか、二度も出鼻をくじいてくれた男ののんきな言葉に少しかっとしたが、その自分に対する警報が逆に国村を平静に引き戻してくれた。背を伸ばし大きく息を吐き出す。そして苦笑した。
「そうですね。あなたから踏み込んでくれればこちらも嬉しい。先手はお譲りいたしましょう」
ほお、と意外そうな神足の表情。しかし当てが外れたというものでもないらしく彼はあいている左手を背中に伸ばした。柔らかな肩関節を想像させる滑らかな動きで背中を何かまさぐり、その動きが止まった。さて、最初に気になった肩がけの帆布、どうやらそれ自体もしくはその中に何かあるのだということはわかった。一体何が出てくるのか、しかし何にせよ切り合い以外にもう一つ動作を入れるのならもとの剣技が上の相手だろうと五分以上に渡り合えるはずだ。大事なのは、何が出てきても平常心で対応することだ。さあ何が出てくる？
神足は背中から何か茶色の棒状のものを引き出すと、まったくよどみのない動作で――
投げた。
驚きよりも先に投擲された何かが空気を裂く音が警告を伝えてきた。必死の思いで半身になったみぞおちを掠めるように通り過ぎたものは、木刀だろうか？　訓練場では格闘の際に使用される小太刀よりもさらに小さい二〇センチくらいの木刀だった。それが、ぶつかったらケガではすまない速度で通り過ぎていった。
狂ってる！　観客もいるのに！
避けるしかできず、目で追うしかできなかった木片はしかし試合会場から出る前に静止していた。審判の橋本辰（はしもとたつ）が

片手で掴み取ったのだった。彼もまた仰天した視線を手元の物体にそそぎ、まったく同じ視線を神足の方向に向けた。つられて国村も神足を見る。その視線の途中にまた木刀がいた。

左の胸を襲った激痛に空気を求めてあごが上がる。狭くなった視野の端にもう一本飛来する木刀が映った。手に持つ木剣を何とか動かして弾き飛ばしたのはもう奇跡に近い動きだったと思う。

軽い音とともに弾き飛ばされた木剣は回転しながら試合会場から飛び出て行く。

「オーライ！」

元気のいい声とともに紺色の袴をはいた娘が身をかがめ、細いその身体が勢いよく跳躍した。さし伸ばした白い手のひらが依然として回転を重ねる木剣を捕らえるかと思ったその次の瞬間、その娘とは比較にならない巨大な物体が同じく跳躍してその木剣をさらっていった。ああ！　と袴の娘が悲鳴を上げる。

地響きを立てて着地した津差龍一郎に、寸前で獲物を奪われた笠置町翠が悔しそうな視線を投げた。

国村はまだ衝撃のさめやらない頭で神足を見つめた。四本目の木刀はさすがに投げなかったらしく、なんだか機嫌の良さそうな表情で自分の反応を待っていた。

「木刀投げるなんてあんた何考えてるんだ！　客席に危ないだろう！」

「大丈夫だ。きちんと客席の前にネットは張ってある」

ぐるりと視線をめぐらせる先には、もう立ち上がった第一期の剣士たちが並んでいた。皆木剣を利き腕に握っている。その数は十五人以上おり、なるほどと国村は納得した。彼らなら木剣を弾き飛ばすこともできるだろうし、無理でも身を挺して止めるくらいのことはするだろう。それにしても、剣と剣の戦いだと思っていたところにいきなり投げナイフを持ち込んでくるとは。

「飛び道具って、恥ずかしくないんですかあなた」

「ああ、こんなものに頼る男は懲らしめなけりゃいけんなあ、国村よ」

そしてにやりと笑った。

「あと弾薬は十二本ある。全部避けきったらお前の勝ちだ。体術の達人の面目をお客さんに見せてやれ。そして、お前らも頼むぞ。飛んでくる危険物からお客さんを守りきれ。試合のもうないお前らにせめてもの見せ場だからな」

試合場を取り囲む『ネット』たちの返答はさまざまだったが大半は面白がり任せておけといっているものだった。それらを圧して若い娘の「おー！」という能天気な号令が聞こえてきて国村は歯ぎしりした。小娘め、ひっぱたいてやりたい。

神足燎三　対　国村光　⑧

「神足さんってテレビの撮影のときにお話しただけだけど、なんというか」

そこまで口に出してから笠置町葵は残りの言葉を飲み込んだ。積まれた土嚢、一つ下の壇に座っている若林暁が半身で振り返り口元に笑顔を浮かべて続きを待っていたからだ。彼はたしか魔女姫高田まり子の部隊の罠解除師で、いま試合をしている神足燎三の仲間だったはずだ。もしも真壁啓一のことを「男らしくない」だの「なんだか頼りない」だのと他の部隊の人間に言われたら不愉快に感じる（もっとひどいことを自分は言っているのだが）ように、自分の正直な感想は若林にとってきっと失礼なことになる――

「いかれてるでしょ、あのおっちゃん」

思わず頷いてしまってからあら、と口元に手を当てる。そしてごめんなさいと謝った。若林は何を謝られたのかわからないのかきょとんとした表情をした。ええと、と言葉を選ぶ。

「いくら第一期の皆さんだって人間です。ミスする可能性はゼロじゃないと思うんです。それなのにあんなスピードで木刀投げるって、よほどの自信があるのか何も考えていないのか、とにかくすごいですよね」

言葉の終わりにかぶるように乾いた音が響き安堵のため息が続いた。四発目の木刀を国村光が横に飛びのいてか

わし、追い討ちをかけた五発目を飛び込んだ先で腕の力だけで倒立することで避けたのだった。当然投げられた二本の木刀は観客席を襲ったが一本は寺島薫（てらしまかおる）がやすやすと柄を当て真上に弾き、一発は野村悠樹（のむらゆうき）が左突きで床に縫いとめた。どよめきは見事にかわした上にそのまま距離をつめ必殺の斬撃を放った国村に対するものだけではなく、飛来する二つの弾丸をたやすく止めて見せた二人の剣士に対してのものでもあった。確かに彼らが木刀を処理する動作にはありありと余裕が感じられる。

　でも神足さん、ああ見えてきちんと考えて投げてるんだよ。若林が続ける。

「寝転がった国村さんへの二発目はもっと早く投げられたのに、野村くんが後ろにスタンバるまで待ったからね。ムチャクチャやるだけの配慮はちゃんとしているよ、あのひとは」

　同じ後衛とはいえ罠解除師で乱戦の中での総指揮を取ることが多い若林は、そのキャリアもあって闘いを見る目は葵よりは肥えているようだった。なるほど、彼が言うのならば安心していていいのかもしれない。けれど、と思う。先ほどのどよめきには国村と寺島と野村の優れた運動能力だけに対してだけではなく、国村が移動してきたことによって次には自分達に流れ弾が来るのだと宣告されたことになるこの南側の観客席の心の悲鳴もあったはずだ。これまでの五発のやり取りでどうやら安全らしいと信じているものの、怖い。

「うう、翠たちの後ろに行けばよかった」

　呟きは心の中だけではおさまらなかったようで、若林が怪訝そうな顔をした。でもこの方面は一番安全だと思うけど？　そう言って視線を自分たち観客を守る『ネット』たちに向ける。南沢浩太（みなみさわこうた）、小笠原幹夫（おがさわらみきお）、狩野謙（かのうけん）、秋谷佳宗（あきたによしむね）という四人はみな最精鋭部隊の戦士たちだった。どの三人を選んでも常に自分を守ってくれる仲間たちに比べてはるかに信頼できるはずだった。頭で考えれば。

　そりゃわかるけど、やっぱり評判だけではいきなりは信頼できないですよ。心の中で反論し、膝がかすかに震えるのがわかった。うう。逃げようかな。怖いな。でも多分探

索者の私が逃げたらパニック起きるな。でも怖いし。ううううう。

緊張のあまりきつく握り締めていた拳がそっと包まれた。見上げた隣りの男は、しかしこちらの視線にも気づかないように真剣に試合場を見つめている。もともと斬り合いに興味のあるわけではないのに、この試合だけは何も見過ごすまいと心に決めたようだった。腰は後ろに迷惑にならないくらいに浮いて、いつでも立ち上がれるように準備していた。

膝の震えはどこかに消えていった。

神足燎三　対　国村光　⑨

化け物め。

国村光（くにむらひかる）の渾身の胴をやすやすとかわし反撃の小手を（かわされたものの）打ち込んでいてなお、神足燎三（うたりりょうぞう）は背筋が冷えていくのを抑えられない。二発の木刀をかわしてのけるのは当然だとしても、倒立の姿勢から身体をねじりつつ跳躍（！）するのもまだ許せるとはいえ、そんな動きをしたら位置感覚は混乱するだろうし、およそまともに動けないはずなのにどうしてそこから一秒の遅れもなく距離を詰められるのだろう。目の前で見てもなお、人間にそんな動きが可能とはどうしても信じられなかった。

理屈はわかっている。人間の動作の基点となる胴体の動き、左右の脇を伸ばす／縮める、腰をひねる、前後にかがむ／反るというたった五種類の動きを限界まで究めることで、手足頭のどの動きにも全身を連動させ通常人とは比較にならない体さばきと動力を実現しているのが目の前の男だ。小さな片手突きも全体重での突きと同じ威力を乗せ、手打ちの切り込みでもまるでライフルを肩で固定し照準を覗いたと同じ精度を実現させることができるのが目の前の男だ。駆け引きもなく激動の判断力も必要のない場だったらこの街の誰も、それこそ教官レベルでないと相手にならないだろうとわかっているつもりだった。それなのに目の前で見たその運動能力はすさまじく、信じられなかった。

それでも、と再び距離を置いた目の前の男、その気迫が満ちた一瞬に半歩重心をずらして気をくじいた。それでもこと切り合いとなれば自分の敵ではないのだ。目の前の男はようするにチェスの素人が握りしめたクイーンだった。強力な行動力と破壊力を持つからこその力を使い惜しむ。使いどころを間違えなければ敵はいないと思ってしまうから納得できる使いどころ意外では行動を控えてしまう。国村に足りないがむしゃらさとでもいうべきものを十二分に持っていた（というよりもそれだけで優秀な戦士と呼ばれていた）若者との闘いを経て本人も深く感じたらしいからには今後は改善されていくだろうが、それでも自分との闘いという一大事にあって急場の修正はムリだったらしい。

敵ではなかったはずなのだ。苦々しく訂正した。先ほどのほんの一瞬の切り合いでわかった。弾幕をすべて乗り越え切り合いになったら自分は負けるだろう。いや、別に負けることはどうでもいいが、あっけなく負けてしまうだろうという点に問題があった。であれば、ギャラリーのためにはそれまでを盛り上げるしかない。弾幕を乗り越える姿それ自体でカタルシスを感じられるようにできれば最高だった。

背中の帆布の中に手を差し伸べた。両側から木刀を抜いているので数を重ねるほど抜きやすく投げやすくなる構造になっている。もちろん抜くまでにある程度まごつく擬態を見せつけるのは忘れない。こういう小さな、相手が気にも留めないような小細工が見ているものの無意識に降り積もるのだとはこの街で知ったことだ。

さて、今度の壁は頼りになるぞ。だったら少し厳しいところに投げようか。

ぐ、と右手の木剣を少し持ち上げた。その小さな動きに国村が腰を落とす。おやと思った。あの目はもしや、腹を据えたか？　急所のものだけをかわしあとは痛みをこらえることで、とにかく間合いに入る覚悟を据えたのかもしれない。

もしもそうなら決勝で黒田は苦戦するかもしれんな、少しでも削っておくか。

左手が背中の木刀を一本引き抜いた。

国村の姿がコマを飛ばしたかのように大きくなった。視覚が追いつかない瞬発力で一歩踏み出したのだ。この化け物め！　肌が粟だつ。

左腕を振り切り投げた。右手は木剣を宙に放り上げた。

国村の表情は恐怖を微塵も感じさせず静謐ですらあり、しかし顔の前で一閃させた木剣は神速の木刀を頭上に弾き飛ばした。

ほう。まったくの平常心か。すごいな。どこか醒めた頭で感心する。

そして、右手の木剣を放り上げて自由になった右手で背中の木刀をつかみ放った。右手は利き腕である。当然、速く重い。

国村の顔が驚愕にゆがんだ。当たり前だ。右手は木剣にふさがれていると思い込んだからこそ、神足にたどり着くまでには一発だけ打撃を耐えればいいと推測したのだろうから。だからこそ踏み込む覚悟を搾り出せたのだろうから。驚愕の表情が苦痛に塗り替えられ、自然に左手が右胸を抑えた。突進は止まっていた。

神足はまったくためらいをみせず、左、右とさらに二本の木刀を投げる。先発はみぞおちに食い込み国村の上体が折れ曲がる。そして右の太ももにもう一本が叩き込まれた。

下降してきた木剣を神足が右手で捕まえるのと、国村の両膝が耐えかねたように地についたのは同時だった。神足は左手に木刀を構えたまま様子を一瞬うかがう。その猶予が国村を救った。木剣を口にくわえると膝立ちから回復しそのまま斜め後方に跳ぶ。あわててあとを追って放たれた木刀は狙いをはずし、秋谷佳宗（あきたによしむね）が一振りで床に叩き落した。

「危なかった」

国村の息は荒く、目は血走っている。

「あと一発食らってたら気絶していた」

神足は肩をすくめた。

「そうか。でもあと五発ある」

息を整えながら身体の様子を再確認しようとした。それを阻害するのは間断なく伝えられる右腿からの痛覚だった。貫かれたわけでもない切り裂かれたわけでもない単なる打撲が思考力を奪うほどの警鐘を鳴らし、ともすれば闘志すら削ろうとしていた。震える奥歯をかみ締めつつ、必死になって頭を回転させた。

痛みのもとである右太ももの筋肉を緊張させてみる。反射速度はまったく衰えず、発揮できる筋力も影響なく、しかし痛みだけは盛大に鳴り響いていた。これは――たぶん、骨にひびがはいったか、けっこうな内出血が起きているはずだ。だから身体は治療させようと痛みをかき鳴らす。早いところ痛みを切り離す必要があった。

それにしても、あのおっさんはどうして畳み掛けてこない？

いくぶんはっきりした頭で考える。今がチャンスだということはわかっているはずだ。俺がいるこの場所か？　と後ろをちらりと振り返り納得した。

背後に並ぶ『ネット』は第一期ではなかった。笠置町翠、真壁啓一、津差龍一郎という第二期屈指のしかし第一期に比べると（理事の娘は別として）明らかに見劣りする三人が後ろに並んでいた。真ん中の娘の「バッチコーイ！」という声が癇に障る。

そして、三人の後ろには声援の声も消え入ってしまった一団が座っていた。すべて女性で、二十代前半から四十代後半くらいまでの明らかに探索者ではない彼女たちが集団だとわかったのは、恐怖に思わずお互いすがりあっているからだ。なんだろう？　誰かのファンクラブでもまとめてやってきたのだろうか？　ともあれ見劣りする『ネット』と身を守る力がまったくない女性たちの存在は神足燎三から木刀を投げる意思を奪ったらしい。ここでなんとか時間を稼いで回復できるか？

いや。神足の目を見てそんな楽観を打ち消した。今その瞳にゆらいでいる逡巡は、『ネット』がどれだけ頼りになるかを図っていることを示していた。そして津差という巨体がいる以上、津差が身を張って守ると信じることさえで

きれば背後の女性たちに危害は加えられないのだ。ここもすぐに安住の地ではなくなるだろう。

試合場をぐるりと見回した。

『さあどうする国村！　卑怯者に負けるな！』

女帝のアナウンスにあわせてさあどうする国村と心の中でつぶやいた。そして自分がなすべきことがわかった。

膝を落とし、姿勢を落としたまま右に走る。右腿と右胸が手足を動かすたびに激痛をかき鳴らした。試合場の白線ぎりぎりのダッシュに当然『ネット』たちはついてくることができず、『ネット』がいないかぎり神足は投げられない。一本の木刀を左手に構えたまま、線沿いに走る国村を常に中心におくように神足は向きを変えつつ視線を据えていた。その狙いはよくわかった。線沿いに走る限り、『ネット』を振り切ることができる。その間は木刀の恐怖は感じずに済む。しかし一辺を走りきれば当然次の一辺を守る『ネット』たちが待ち構えていた。一辺を走り終えたその瞬間、待ち受ける『ネット』たちと重なるその一瞬が神足が木刀を投げつける必殺のタイミングだった。そんなことは国村にもわかっている。角を眼前にしゆるくカーブしながら、『ネット』たちと自分が重なる直前に思い切り跳躍した。

神足がぽかんと口をあけて見上げたくらいにそれは高く長い跳躍だった。同じく呆然としたのは背後のネットたちも同様である。

ようやく『ネット』を振り払うことができたのだった。

三歩の距離を瞬く間に詰めた。木剣を構えたまま顔を険しくさせている男に左から袈裟懸けを見舞った。あまりに予想外が大きかったのか、直線で突っ込んでくる国村に対しても神足はカウンターをかぶせることができずにしかし斬撃はやすやすと受け止められ、岩を叩いたような堅牢な手ごたえが国村の両腕を震わせる。

それはあくまで国村の予定通りだった。反撃がないまま、左に大きく跳ねる。そのまま線いっぱいまで下がった。神足が「あ」という顔をした。

国村はすらりと胸を張り背筋を伸ばした。

「と、このように」

神足の苦々しい顔を見据えた。
「人質を手に入れたわけですが」
『いやあああ！　こっちにくんなー！』
国村のすぐ背後、白線に接して設置された放送席から真城雪の悲鳴が響き渡った。

神足燎三　対　国村光　⑪

白線いっぱいまで下がった国村光の太ももはすでに放送席の机のふちに触れており、つまり飛来する木刀から観客席を守るべき『ネット』たちはその間に陣取ることはできなかった。それは国村を狙って放たれる木刀のうちで低い弾道のものは誰にも邪魔されることなく国村の背後に座る女性を襲うということを意味していた。それを誰よりもわかっている背後の真城雪はマイクの音をそのままに怒鳴っている。どけ国村、と。その声は甲高く上ずり必死さを感じさせた。

その声を背中に黙殺しながら国村は視線を神足燎三からそらさず、しきりに右の太ももの筋肉を動かしていた。収縮、弛緩、収縮、弛緩と延々と繰り返す。次の瞬間でも神足が切りかかってくるのではないかと常に警戒をしながら。そうこうするうちに自然と右太ももの痛みが薄れ始めた。

治療術師の助けがあったわけでも人類の限界を超えた治癒力を備えているわけでもない。しかしこと痛みに関しては人間にはかなりの耐性があることを国村は知っていた。痛みとは身体各器官が延髄そして脳に送る警告でしかないのだということを知っていた。

通常では考えられないだけの負傷を負ったときその部位は神経繊維を通じて延髄にその被害を報告する。延髄は個体すべての置かれている状況と照らし合わせて即座の対処が必要なものだけを痛痒冷熱などの感覚として脳に伝えるのだ。痛みという存在がどこかにあるわけではない。痛みを生み出すのはあくまで脳であり、脳が痛みとして認識するかどうかはあくまでもおかれている状況と比較してのそ

の負傷の程度によって決まった。
外野でやかましい騒音を立て続けている理事の娘はずっと剣道を学んできたという。靴下とブーツで切り合いをする最近はともかく、道場で学んでいた頃の彼女の足の裏はおそらくまともな皮など残っていない無残な有様だったはずだ。そして、誰しもが目を覆うその足の裏でもしかし娘は「動き始めると忘れちゃうから」とけろりと言ってのけていたはずだった。彼女の延髄は足の裏の皮がはがれたくらいの負傷では個体として危険はないことを長年の稽古の経験から知っており、その結果足の裏の異常は脳には伝えないようになっているのだ。
今の国村の状況もそれと大差はなかった。足も肩もまったく影響なく動かすことができるから負傷があったとしても延髄が無視できる程度だったし、目の前に立つ男の相手をするためにはわずかな痛覚でも邪魔になる。それを延髄が理解してくれさえすれば、たったいま国村を悩ませている痛みを切り離せるはずだった。これまでも地下で幾度となく経験しているから痛みの切り離しには自信はあった。しかし延髄に対して負傷による影響がないことを納得させるにはある程度の時間をかけて動かしてやる必要もあるのだ。
いつしかマイクの声は自分に対する移動勧告から危険球を多用するピッチャーに対する命乞いに変わっていた。いわく、私に木刀ぶつけてこの街で無事にいられると思っているのか。投げるとしても顔だけはやめてくれ。というよりいきなり飛び道具持ち出して恥ずかしくないのか。投げないよね、投げないでよねったら。よくもまあ、と思えるほどに舌が回る。そのくせその女性は逃げ出そうとはしないのだった。
右太ももの弛緩と緊張がいきなり軽くなった。頑固だった延髄もとうとう納得し、その部位の負傷を無視することに決めたらしい。次は右胸、と緊張と弛緩の部位を肩と背中に切り替える。
右胸の痛みを切り離すのは太ももに比べれば簡単だった。国村はヘルメットを取ると大げさなそぶりで額の汗をぬぐった。それを見て取ったか女帝の悲鳴がぴたりとやんだ。こ

の人は、と苦笑して振り返り精悍で整った顔を見下ろしたところその表情は平静で、とても悲鳴をあげていた人間とは思えない。
「ありがとうございました、真城さん」
「少しは時間稼ぎができたみたいだね、国村くん。役に立った？」
年下とは思えない言葉遣いも違和感を感じさせないだけの貫禄とでもいうべきものがその笑顔にはある。
「ええ。勝てるとしたら真城さんのおかげだ」
そしてヘルメットをかぶりなおし、仁王立ちでずっと様子を見ていた神足を眺めた。この女性を人質に取ってから痛みを切り離すまで一分近く、彼はついに切りかかってこなかったのだ。そのことがこれまでの疑問を確信に変えていた。
「全部真城さんのおかげだ」
神足の表情は相変わらず気楽そうで何を考えているのかは読めない。
「真城さんと神足さんの試合だけは見ていたんですよ、俺は」
神足の目が一瞬だけきらめいた気がした。

神足燎三　対　国村光　⑫

ヘルメットをかぶりなおした国村光の姿に再び『ネット』たちを緊張が包む。日々後衛を守っている彼らとはいえこの『ネット』役は疲れるものなのだ。それまで半分以上が座り込んでいたことでもそれは明らかだった。同じく背後を守るとはいえ守る相手の力強さが違う。防ぐべき速度とサイズが違う。もちろん自分たちが『ネット』役を放棄すれば投げないだろうとは思うのだが、それを確信できない不気味さが試合場の中央に立つ神足燎三にはあった。
「最後はうちの面で来るからね、津差さん真壁さん」
笠置町翠は軽い口調で左右に立つ男たちに告げた。その姿は他のほとんどの『ネット』たちに比べて余裕があるように感じられる。

「やっぱりうちかな」
「当たり前でしょう？　ここの面が一番頼りないんだから」
言外にあなたたちが、と言ってのけているその小憎らしい横顔に、真壁啓一と津差龍一郎は視線を交わして苦笑した。そして津差が軽く木剣を一振りして右斜め上でぴたりと静止させる。その風きり音を背後で若い声援がきゃあきゃあと喜んでいた。同じような素振りの音は各所から響きそれがいやがおうにも緊迫感を高めていく。期は満ちようとしていた。
「あと五本か。確かに全部同時に来たら三人じゃつらいな」
真壁の言葉に津差だけでなくそれまで横顔しか向けていない翠までもがぎょっとしたような視線を向けた。
「真壁、お前あと五本だけだと本気で思っているのか？」
え、といういぶかしげな返答に翠が盛大なため息をついた。
「この人が仲間でよく生き延びてこられたなあ、これまで。真壁さん絶対六〇万の布団を買うよ将来」
「翠それ前にも言ってなかった？　何かあったの？」
「うん、大学のときのクラスメートのお兄ちゃんがね」
「六〇万円の布団を？」
「できるビジネスマンは安眠からって」
視線は試合場に据えながらの会話を、しかしさすがに苦笑まじりに津差がさえぎった。それはともかく翠ちゃん、いくらなんでも言うとおり一五本だけということはないだろうけど、あと何本くらいか見当つくか？
翠は考え込んだようだった。
「うーん、背中の広さと木刀の大きさから考えて、隠し玉はせいぜい一～二本だと思いますけど。あ、そういえば先週格闘戦の練習しましたよね大勢で。あの時ここの備品の小刀は出払いましたよ」
「ああ、そういえばそうだな。あの時は七組一四本だったか？」
「いや、八組でした。四組を翠が面倒見て四組を鈴木さんが面倒見たから」
「そういえばそうだったね。真壁さんは鈴木さん組だったよね。あの子教え方どうだった？」

「うーん……怖かった」
「それ答えになってない……けどわかる気がする」
それはともかく、とまた苦笑まじりの津差の言葉だった。
ということは全部で一六本か？　隠し玉は一本か？
「いいえ」
翠が否定する。そのときは私が一本使ってました。鈴木さんは自分のだったから、全部で一七本ですね。
「いくら頭ではわかっていても、実際に一五という数字をあれほど強調されてしまったらそれをクリアした時点で気が途切れるだろう」
津差の言葉に二人はうなずく。
「そこを襲う残りの二本が今日一番のピッチングだろうな。必ず止めないと」
真壁が風車のように木剣を顔の前で回転させた。高速の切っ先は当然のこと、巧みに持ちかえる手の動きすら残像を生みそうなその円は周囲の音を圧し、試合中の神足すら何事だよと振り返った。
「真壁さん、それじゃ前にははじき返せないよ」
感心した視線が集まる中で翠の声だけは冷たい。
「二人は叩き落そうとなんか思わずに、とにかく木刀の前に身体を割り込ませることだけ考えて。それと」
視線は自分たちが守る辺の端に向かった。そこには一人の男が大の字に寝転がっている。
「黒田さんを踏み潰さないように気をつけて。踏んだらその人はきっと殺人犯になると思うわ」
鼻血のしみが飛び散る黒田のツナギは厚ぼったく、そのため胸の上下が見て取れなかった。心配しなくてももう死んでるんじゃないのか。真壁はちらりと思った。

神足燎三（こうたりりょうぞう）　対　国村光　⑬

お前ら、声がでかいぞ。神足燎三は背後から聞こえてきた会話に苦笑した。自分の位置では一言一句もらさず聞こえたその会話、自分の残弾数を正確に看破したその会話はもしかしたら向かいに立つ男にも届いたかもしれない。

女帝との会話から敵手である国村光がこちらの弱みを掴んでいることはわかった。そしていま弾数を知られた可能性が――なんだ？

「だからさ、あと七発なんだって。神足さんの木刀。気合入れてなんとか防ごう」

葛西紀彦があけすけな声で対面に位置する月原浩に呼びかける声だった。これで可能性は事実に変わったわけだ。ようやく終わるか、と首をごきりとまわした。さあ、これでお役御免だ。自分は十分盛り上げに貢献しただろう。向かいに立ってこちらを窺う戦士に視線を置くと、彼もまた決着を予期する張り詰めた表情をしていた。潮時だから終わりにしようと思っている自分とは違い、彼は勝つため次に進むために勝負をつけようとしている。しんどい生き方だなとちらりと思った。

左手で一本の木刀を引き抜いた。右手は手首だけで木剣を回している。これは緊迫したときの癖だった。ポパイだかなんだかの力自慢が相手を殴る前に腕を回すのを見た幼い日の体験からのものだろうと思っている。もっとも地下の化け物たちはこういう動きにも十分意識を向けてくれるから、癖といっても侮れないものではあるのだ。何しろ自分が意図せず自然に出るものだから。

しかし国村がその回転に意識を取られたのは一瞬のみ、すぐに視線は自分の骨盤のあたりに戻された。投げられようとしている木刀にも意識を奪われずに自分の胴だけを見つめるその覚悟、自信はさすがに歴戦の戦士である。

国村が腰を落とした。そう思ったのは錯覚だったろうか？次の瞬間にはその身体は放送席の前を離れ角に達しようとしていた。その余りの速さに背筋を凍らせながらもまず一発目を投げる。その突進を先読みした木刀は、予期したかのような急停止によって外され、急停止したその場に投げられた第二弾は急発進によって外された。一発目を誰かの木剣が弾く音、二発目を誰かが身を呈して防いだうめき声が聞こえたがもう気にはしていない。

『ごー！』

アナウンスが残弾数を教えてくれた。やっぱりお嬢はわかってる、と嬉しく思う。そして次の『ネット』たちは頼

りになるぞ、と続けざまに二本を放った。一本は踏み降ろす足元に、一本はそれをかわすため跳躍した胴のまんなかに。グローブで木刀を叩き落す動きに場内がどよめいた。

『よーん！　さーん！』

白線ギリギリであれば十分かわすことができるのだ、この体さばきの達人は。その速度と正確さの調和に斬りあいを見る目がないはずの素人たちまでが気を奪われている。これはきっと彼らの夕食の話題になるだろう。

さあ、来るぞ。いよいよ第二期の三バカが『ネット』となっている面まで移動した。あいつらはどこまでやってくれるだろうか？　一瞬で背後の三人の気合をさぐった。笠置町翠には全く心配はない。的としては小柄だが、両側に二歩ずつプラス手に持った木刀の範囲内のものは絶対に叩き落すだろう。真壁啓一は本人の身体プラス両側一歩と木剣の半分の長さというところだろうか。津差龍一郎はその両手足の届く範囲だけにするべきだった、が、その身体自体が常識はずれに大きいので十分期待できる。とにかく、不安要素だった男二人が身を呈しても守る気概でいるのがありがたかった。左手を振りぬいた。

『にー！』

アナウンスと同時に低く走った木刀を、国村は走る踏み込みを広げるだけでかわした。股の間をすりぬける木刀に一瞬呆然とすると、その木刀をなんと理事の娘が袴の動きだけで絡めとった様子が視界に入る。こいつら化け物か！

国村がまた急停止した。物音が止みつつある訓練場に酷使されたブーツの音だけが響き渡る。

そして、ターン。想像どおりだった。国村も三バカの気概を見たのだ。そして予想外に頼りになる『ネット』であり自分の土俵ではない場所だと理解した。いまや国村の土俵は一つしかなくそこに向かったのだった。ターンし始めにあわせて投げられた木刀はしかしダッシュのスピードを追いきれず、背後に立つ津差の木剣をもかいくぐってその下腹に吸い込まれた。『いーち！』巨漢が膝を屈するのを見てあらためて自分が投げているものの威力にぞっとする。

そして国村が土俵にたどりついた。その背後には先ほど

の試合のダメージを癒している黒田聡（くろだ さとし）が寝転がるだけだった。顔だけは試合場に向け、必死で自分に投げないようにと懇願の視線を送ってきていた。気にせずに左腕を振りぬいた。

信じているぞ、黒田。だからお前の脇にも一本置いておいたんだ。

国村の顔色が変わった。黒田を背後にとうとう白線を離れ、距離を詰めようとした二歩目のことだった。その足元を狙った木刀を大きく跳躍することでかわす。それはとても高い跳躍だったから、寝そべりながらも驚愕と恐怖に歪む黒田の顔までがはっきりとわかった。その腕が慌てて木剣を掲げたことも。それを確認して意識から切り離す。そして滑空する国村に集中させた。着地すればあと一歩で間合いにいたるようなそんな大きな跳躍は、自分の残弾数がわかったからこそできる動きなのだろう。そう。背中にはもう木刀は仕込まれていなかった。背中には。

――癖ってのはいいな。ああ、いつもの癖かと認識されらそれ以降無視してもらえるからな。

極度の緊張により時間が長く感じられる不思議な世界で、胸のなかで呟いた。

――ちょっとくらい不自然な動きしても見過ごしてもらえるからな。

ほんのちょっと不自然な動き。手を回したふりをして、木刀の一本に結んでおいたピアノ線を引き寄せる程度の。いぶかしがって目を凝らさないと気づかないような動きはしかしこの緊張の場ではあからさまに察知されたことだろう。それをカバーしてくれたのが身に染み付き周囲に知れ渡っていた癖だった。野村悠樹（のむら ゆうき）に白線外に叩き落されたはずの木刀はいつの間にか自分の足元にまでにじり寄ってきていた。まだ国村は宙に浮いている。勢いをつけて右手を振り上げると足元の木刀が浮き上がった。同時に抱え込んだピアノ線の塊を手放した。

国村が着地し、そして自分の手の中の木刀に気づいたようだった。しかしその顔にはもう驚きはなくただ透徹する視線を注いでくる。

これで終わる、そう思いながらその顔の中心に狙いを定

めた。至近距離だからまず当たるだろう。そして当たれば死ぬだろう。それを知りながら左腕を振りぬいた。

神足燎三　対　国村光 ⑭

首の稼動範囲ではかわせない。至近に迫った神足燎三（こうたりりょうぞう）の表情、実はまだ一本残っていた（いったい、どこに！）木刀を掲げたその腕の位置、距離とこれまでの経験から予測される木刀の速度をすべて考え合わせての国村光（くにむらひかる）の感想がそれだった。首というコンパクトな動きですらかわせないなら腰から上の動きでもむりに決まっている。木剣ではじきとばす？　マンガじゃあるまいし！　だから首をひねった。ヘルメットから垂れるツナギと同じ厚さの生地が遠心力で翻り、少しでも勢いを殺してくれるのではないかと淡い期待をこめた。

首を向けた方向は右。その回転運動はそのまま二つの肩甲骨を動かし腰椎を動かし骨盤をずらし、そこで耳の下に激痛が走ったが無視することにした。ほとんど気を失いながらも、自分が生きて意識があることを確認するが、これが夢なのではないかという不安がぬぐえずにあった。それほどに耳の下に与えられた衝撃はすさまじく、その威力ではなくそんなものを至近距離で誰かに投げつけられる精神力のある人間が存在することが信じられなかったためだ。しかし夢でも動作をためらうわけにはいかなかった。これが唯一のチャンスなのだから。全身での時計回りの旋回が生み出す運動エネルギーはぎりぎりまで伸ばした右腕を伝わり肘で増幅され手首で増幅されて、そのエネルギーを伝えるには細すぎ、やわらかすぎる木剣を流れていった。そしてその先端が神足に触れた。

本来ならば打撃を防ぐべき神足の右腕は床に落ちた木刀を引っ張りあげる動きのために間に合わず、切っ先がその肋骨を叩いた。『あ!?』とアナウンスに心配そうな響きが混じっているのは、その声の主が先ほどの試合でつま先を叩き込んだ場所と寸分たがわなかったからだ。

国村は二人の試合を見たのだ。真城雪（ましろゆき）という、自分並

みに強靭な下半身を持つ女性の完璧な蹴りが肋骨に食い込む姿を見ていたのだ。まったく痛がるそぶりを見せなかったから忘れていたが、そのあたりの自動販売機ならひしゃげる威力であることを見て取っていたから、ずっと疑っていたのだ。肋骨は無事なのだろうかと。

回旋を止めようと踏みつないだ左足が予想外の位置に着地してしまったようだった。勝利を意識してしまったからだろうか、胸と太ももと、それをさらに圧して左首に激痛が走っている。平衡感覚も混乱あるいは損傷を受けたのだろうか、支えようとして伸ばした右腕が上がらず顔から床に突っ込んだ。摩擦で頬が熱い。

『ワーン！』

アナウンスのカウントをなんだか遠い世界のことように聞いていた。今自分が何をやっているのかも白いもやの向こうのことに思えてくる。このままここに寝ていたら気持ちがいいんだろうなあ。

『スリー！　おおっと！　立ちます、ダメージの蓄積が少ないのか、わき腹を押さえながら立ち上がります！』

すげえ。確実に肋骨が折れていると思うのに、まだやるのかあの人。なんのためにそこまでやるんだろう。狂ってるな。俺は、もういいや。もう降参でいい。足痛い。頭痛い。身体じゅう痛い。早く治療術をかけてほしい。もう一試合なんてちょっとムリだ。

『ファーイブ！』

ぞっとして上体を起こした。全身の痛みが消え去り、ただ視線は先に立ち上がった男に吸い寄せられている。

神足は木剣を片手に歩いていた。自分を中心にして円を描くその姿はカウントを待っているのではないと確信できた。殺される。背後に女子高生が座っている風景とのギャップを怪しむこともできず、その恐怖だけが身体に再び力を注ごうとしていた。カウントとかルールとか関係ない。あいつは俺を殺す気でいる。

そして神足が一歩こちらへ踏み出した。

そのあとのことを国村は思い出せない。きっとそれは無我の境地とかいうものだったのではないかと思っている。

そばにあったと思われる木剣をつかんだことも、

膝立ちから低く一歩飛んだことも、
自分が放ったという逆袈裟のことも、
大きく振りかぶった神足の上半身のどこにそれが吸い込まれたのかもずっと思い出せない。
ただ、気がつくと自分は白線ぎりぎりに立って、床の上でぐったりと倒れている男に木剣の先を向けていた。審判の橋本が、これは珍しく戸惑ったような視線をこちらに投げかけている。その気持ちはわかった。通常ならば敗北である構図であってもこの男だけは別なのだ。死ぬ直前までなにかけれんを仕掛けてきそうな、恐怖とともにそんな印象がある。
『エーイト！』
もともと勝敗を決するのはテンカウントではなく審判だったが、この場はカウントに勝敗をゆだねたのかもしれない。視線を放送席に置いたまま審判は待ちの姿勢になったようだった。
あっけなく残りの二つの英数字が読み上げられ、橋本が自分の勝利を告げた。巨大な歓声と拍手が降り注いでいた。
それでも国村は視線を神足から離せなかった。タンカを抱えた男たちの頑健な身体にその姿が見えなくなって初めて膝の力が抜けた。
しゃがみこむ直前に背後から誰かに抱きとめられ、恥も外聞もなくその細い身体にすがりついた。

神足燎三　対　国村光　⑮

その腕にすがりつきへたり込んでようやく、その細くて小さい腕が自分を全く支えられず引きずりおろしている体勢になっていることに気づいた。国村光（くにむらひかる）はその小柄な女性（名前はなんといったろう？　先ほどまで黒田の看病をしていた女性だ）に謝るとなんとか自分の脚で立ち上がろうと力をこめた。こめたつもりだった。
より強い力に左腕を引っ張りあげられようやく立ち上がった。『ネット』としての信頼度で一、二を争った顔がそこで笑っていた。この顔を背中にしたらとんでもない速度で

投げられるだろうと試合中はできるだけ忌避していた顔が今はありがたい。素直に礼を述べると寺島薫（てらしまかおる）は笑った。

「よう勝ったなあ、あんなメチャクチャなことされて」

一人の剣士としては遠く及ばない男が心から賞賛している。それがようやく勝利の実感をもたらしてくれた。木剣を杖代わりにしてとにかく土嚢の椅子へと向かう。試合中、意志の力でなんとか切り離した痛みはもちろんのこと当時は意識しなかった程度の微弱な打ち身などがしきりに警告のフルコーラスを奏でている。土嚢に腰掛け、立てた膝の上にぐったりと突っ伏した。飲み物を持ってくるか、という質問に肯定の視線を送ろうとして顔を上げたときにはもう娘は走り去っていた。この程度の動きにも時間がかかるのか、と自分の身体ながら驚く。

「自分でも信じられません。特に最後、神足さんは打ち下ろしだったのに私の剣が当たるなんて」

ああ、と寺島は頷いた。あの時はおっさんもろくすっぽ振れる状態じゃなかったからな。踏み込んだだけであばらはがら空きだったよ。

国村は絶句した。自分がもう立てないというのは戦っていた神足燎三（こうたりりょうぞう）には伝わっていたはずだった。それを引きずりあげたのは彼の殺気に対する恐怖心で、そのあと動かない身体を突き動かしたのもおなじものだった。アナウンスのカウントがある種の審判力を持っていたあの状況ならば、立ち上がれた神足がそのままテンカウントを待てば勝利は彼のものになったことだろう。それなのになぜ、振り下ろすこともできない身体で攻めかかったのか。

「俺はあのおっさんじゃないから間違ってるかもしれないけれど、もう勝つ気はなかったんだと思うぞ。試合前もとにかく盛り上げることが大事と言っていたからな。俺も気づかなかったけど、アバラ折れてたんだろう？　二試合するだけの体力はなかったんじゃないかな」

それは、なんというか。さっきからそんなことばっかりだな。国村は突っ伏したまま苦笑する。前の試合の相手は自分ではなく娯楽施設のペア入場券を見ていた。それなのに全力を出すほど追い込まれた。今回は勝敗よりも盛り上がりか。

「なんだか、自信失うな」
どうしてだ、といういぶかしげな声に突っ伏した顔を上げた。たったそれだけの動きで右胸がひきつれて痛み、見下ろすグローブにうっすら赤い色がついているのは、もしかしたら床に顔から滑り込んだ際の摩擦で皮がむけているのかもしれない。もしそうなら普段なら当然激しく痛むだろうに、それに気づかないほどに自分の身体は痛めつけられているのだ。
勝とうと思っていなかった男に。
その旨のことを話したら寺島は穏やかに微笑んだ。
「気持ちもわかるが、おっさんに関しては譲ってやってくれ。あのひとが勝利を第一に考えないのも理由のないことじゃないからな」
「どういうことですか？」
「あのおっさんはガチで殴り合ったら結局お前や黒田には負けるってことだ。体力勝負じゃどうしたって分が悪いからな」
そうだろうか？　確かに自分や黒田聡のような運動能力の塊には劣るかもしれないが、それでも最初から勝負にならないような差ではないはずだ。もともと名誉や勝敗に対して淡白な性格なのはわかるものの、実際のところ自分はぎりぎりまで追い込まれたのだ。あきらめる場面ではなかった。たとえあばら骨が折れていたとしても。
「あのおっさん、足の指がないんだよ」
その言葉の意味が理解できず、国村は顔を上げて隣りに座る男を見た。急な動きに上半身が痛む。
「子供の頃の事故だかなんだかで足の中指だけちぎれたんだって――」
「左足だ」
呆然として呟く。寺島は眉を寄せてからどちらかまでは忘れたと答えた。しかし国村はその言葉を聞いていなかった。ほんのちょっとだけずれている中心線、ずっと違和感として自分の判断を少しずつ阻害していたそのずれの原因がわかった気がした。左右対称で完全にリラックスした筋肉、しかし片足だけあるべき部品を失っている。
そしてその欠落を、あれほどまでに身体を調整している

人間はどれだけの不安に感じることだろうか。もしも自分の、たとえば左の奥歯が一本なかったとしたら？　左手の小指が一本なかったとしたら？　もう、今と同じ動きをする自信なんてどうしても持てないだろう。このような極限の運動を要求される場所になど来れるはずはなかった。その不安感と――悔しさ。

「ほんとは正々堂々この街の奴らとやりあってみたいんだと思うぞ、あのおっさんも。でもできない。そうやって同じレールを選んでしまっては、自分はいつか脱落することがわかってるからな。子供の頃の怪我なんてくだらない理由で」

国村は寺島の横顔を見つめた。明らかに悲しげなそれは初めて見る表情だった。誰もが認める剣術をまっとうな手段で鍛え上げたこの男がこの街にやってきた理由を訊いたことはない。漠然と実戦の場にさらなる強さをもとめたのだろうと思っていたが、少なくとも弱いということがどういうことかは知っているのかもしれない。

「退き際を鮮やかにする悲しい知恵か」

しばらく二人とも黙っていた。

「まあ、とにかく今は休め。次は黒田だぞ」

いやいや、と再び突っ伏してよわよわしく抗議した。

「最後のほうで黒田に直撃するコースが一本ありましたよ。休んでるところにあれ食らっちゃあさすがに死んだでしょう？　もうやです。もう休ませてください」

虫の良すぎる願いだとはわかっていた。黒田は元気いっぱいだったぞとの予想通りの回答にがっくりと肩を落とした。

第七章　決勝

国村光

黒田聡

小休止　笠置町葵

その女性に笑顔で呼ばれるといやな予感がする、とは恋人である常盤浩介の述懐だった。特別に頼むという雰囲気のないままいろいろなものを命じるような人だから、わざわざの笑顔の代償はなんだろう、という話らしい。自分にとっては優しく強いお姉さんでしかないから何かを命じられるなど想像できないが、以前一度北酒場に入ってすぐに自分がトイレに行ったとき、ごく自然に彼女のテーブルの女性たちにピッチャーのビールをついでまわっている姿を見たことがあった。そういうことを考えれば女帝と呼ばれるのも由のないわけではないのかもしれない。ともあれ名前を呼ばれ手招きされて断る理由もなく、笠置町葵は誰もいない試合場の真ん中に立つ三人のもとに歩き寄っていった。

「なんですか？」

真城雪に尋ねる。真城はうん、と一つうなずくと次の試合のことなんだけどねと説明を始めた。二人とも、試合をさせるには不安な状態らしい。それは格闘に関して経験の浅い葵にすらわかることだったので同意を示した。

「あの二人だからやりすぎてどっちかが即死するなんてことはないと思うけど、決着がついたあとの処置はなるべく速くしたいのよね」

その場にいた三人の一人、落合香奈があとを継いだ。

「決着がついたらなるべく速く境内に運んで、腕のいい治療術師――今日子か鯉沼くんだね――に治療してもらうつもりでいるのよ。でも、それでも境内まで運ぶ時間がもしかしたら惜しくなるかもしれないわ」

そこで、葵ちゃんに協力を願いたいと思ってね。

「触媒……ですか？」

三人はうなずいた。

触媒の利用は『人類の剣』と呼ばれる達人だけが伝える技術だった。術を使うために必要なエーテルを高濃度に固形化し持ち歩き、それを壊すことで一時的に術を使える環境を作り出す。その技術はもちろん探索者たちに与えられることはなく、この街でも訓練場の教官と自分だけが習得していたはずだ。確かにそれを使えば試合直後のこの場所

でも怪我人に治療術を施すことができるだろう。だが、それは――

「君が渋る気持ちもわかる」

葵のためらいをどう受け取ったのか、腕を組んでいた星野幸樹（ほしのこうき）が口を開いた。

「魔女姫は地上でも俺たちを焼き殺せるが、それでも俺たちが遠慮なくあの子をこづけるのはあの子をよく知っているからだ。知らなければ恐れるに決まっている。この街の術師たちの存在が許されているのも地下限定の能力と思われているからであって、でなければマッチもライターもなく放火ができる人間を世界は許さないだろう。だから君たちが、地上でも術を使えるようになる抜け道を持っていることを一般人から隠しておきたいのはわかる」

それでも、今は人命を優先したい。わからないように最低限の術を使うだけだと言われて葵は唇を噛んだ。

「特別に決勝だけ回復させるっていうのはどうですか？」

「それも考えたんだけどね」

と今度は真城が答えた。

「確かにいまは二人とも瀕死に思えるけれども、これがもしも片方はぴんぴんしていたら両方ともを治療するのは不公平になるでしょう？　あの二人の余力がどれだけあるか本当にはわからない以上、下手に手出しをするのは公平を欠くことになるからねえ」

それはそうだ。

「だったら、もう中止したらどうでしょう？　あの二人を見ていたら誰だってムリだって納得しますよ」

「確かに俺たちが言えば二人とも引き下がるだろうが、あとで悔やむだろうからな」

真城もうなずいた。それは葵にはわからない戦士たちの意識なのかもしれない。そんなことを考えていたら、少々いらだったような星野の視線を感じた。

「何が問題なんだ？　一般客たちは治療術がどのようなものかわからないから、いきなり全身の打ち身が消えたりしない限り疑問は感じないだろう。俺たちが試合終了と同時に使いたいのは、深刻な内出血を抑える程度のほんの初歩の治療術でいいんだ。それなら絶対に見抜かれることはな

いと思うぞ」
　自分よりもずっと年上の男性の視線に射抜かれて身をすくめる。真城が険しい顔をしてその視線に身体を割り込ませ遮った。
「星野さん、そんな怖い顔しないで。――きっとお母さんあたりに止められてるんだよね、葵ちゃん。変なこと頼んでごめんね」
「いえ、そうじゃないんです」
　そうじゃなくて、とコートのポケットに手を差し入れ、左右のポケットに一つずつある物体を取り出した。それを真城と落合に一つずつ渡すと女性たちはそろって歓声をあげた。それらは小さなしかし精緻な彫りがほどこされた猫の像だった。片方はあくびをする黒猫で片方は丸くなっているキジトラである。まるで今にも動き出しそうなほど、実際に生きている猫をそのまま縮小しただけの物に思えた。
「触媒を使うこと自体に問題はないんです。鯉沼さんと今日子さんだったら客席からでも術を届けられるでしょうし。でも、いま手持ちのがこれしかなくて。翠にも渡してるんですけどあの子の持ってるのは力の弱いものだけですから」
　昔かわいがってた猫に似せて作ってみたらとてもよくできて、いつも持ち歩いては眺めていたものだ。だからなるべくなら壊したくない。そう言ったら意表を突かれた顔で再び星野が腕組みをした。
　しばらく四人とも黙っていた。
「でもいいです。命には代えられないですから。使ってください」
　明らかに無理をして思いを振り切った葵の声に星野は困ったようなうなり声を返した。落合は目を伏せた。
　真城だけが微笑むと落合の手から黒猫を取り上げた。
「ありがとうね。今日子と鯉沼くんに一つずつ渡してそれぞれの判断で使わせることにする。これが必要にならないように祈ってて」
　こちらの気持ちをすべてわかりながらあくまで安全を優先する笑顔にすごいな、と思う。そして二匹の猫たちの無事を祈った。今日はじめて深刻に祈った。

小休止　佐藤良輔

室内の様子に佐藤良輔はぎょっとした。ここは現在剣術トーナメントが行われている屋根つきの訓練場に隣接する事務施設で、二階には基本四職業の各教官の教官室が並んでいる。それぞれの部屋は自分がこの街で借りている2LDKよりも広く、そのため教官の不在をいいことに利用させてもらっていたのだった。広い部屋を中央で二つに区切る背の低い本棚と応接用の机とソファ、そして教官その人が使う事務机。余裕を持ちつつ部屋を満たしていたそれらの什器は佐藤の手によって全て壁に移動され、でき上がった空間には中央を囲むように二台の石油ストーブ、そして汗の水溜りができていたはずなのだ。しかし、今ドアを開けた佐藤の前にある部屋は什器こそ同じように動かされていたものの床の上の汗はぬぐわれていた。

この街の探索者のすべてが共有する感情に教官と理事への畏怖というものがある。日々死線を渡るものにとって何よりも大切な生き残るための力で自分達よりもはるかに上の存在に対するそれはごく自然な感情で、部分的にとはいえ解放されているのは三百人以上いる探索者にあっても理事と血縁である笠置町姉妹、本人も優れた才能をもち魔法使いの教官とは友情を結んでいる高田まり子くらいのものだった。もちろん佐藤も大多数の一人であり、その部屋が片付けられつつあるありさまは彼を恐慌状態に陥れた。

まさか、まさか。この部屋の主である洗馬太郎は終日大阪に行っていると連絡の黒板には書いてあったのに、まさかもう戻ってきているのか？

戻ってきて荒らされた部屋に驚き、犯人がわからないながらもとりあえず部屋の片づけをしている最中なのだろうか？

もし自分だったら、そんな仕打ちをされたら不機嫌にならずにはいられない。そして自分の不機嫌とこの部屋の主の不機嫌とはそのおそろしさにおいて別次元と思われる違いがあった。

「あら、佐藤さんいいところに」

女性の声が背後から響き、佐藤は思わず驚きの声を上げた。声をかけた女性もつられて小さな悲鳴を上げる。恐れ

るべき相手なら決して漏らさないその小さな悲鳴が佐藤の恐慌を宥めてくれた。振り返ると、低い位置に見慣れた笑顔があった。

「驚かさないでください、的場さん」

的場由紀は怪訝な表情をしていた。当人に驚かせるつもりはまったくなくそれなのに大げさに怖がられて非難されたら釈然としないのも当然のことだろう。それでも逆らわないことにしたらしくごめんなさいと小さく頭を下げた。今度は佐藤が恐縮し、彼女が手に持ったバケツが視界に入る。なかには湯気をあげるお湯が満たされ汚れた雑巾が沈んでいた。

「この部屋、もしかして的場さんが？」

そうですよとこともなげに言い捨てて、小柄な女性は脇をすり抜けていった。ちょうどいいからストーブ片付けてきちゃってくださいねー、という言葉に慌ててストーブを二つとも持ち上げた。これらはこの部屋の備品ではなく、ひとつは寒い訓練場で戦士の教官があたるためのもの、ひとつは一階の小会議室に置かれているものだ。

部屋を出ようとして鼻歌に振り返る。自分の汗は思ったより飛んでいるのだろうか、壁ぎわまで寄せられた什器を丁寧に雑巾で拭いている小さな背中に視線を置いた。初めて会った人を見るような、それまでとはほんの少し違う視線で少しのあいだ見つめ、不意に夢から醒めたようにまばたきを繰り返すとドアを閉めた。

小休止　鈴木秀美

歩いていたら後頭部を叩かれて、鈴木秀美は非常に驚いた。普通の人間とはほんの少しだけ違う家庭で育った彼女は無意識のうちに周囲に気を配る癖がついており、自分に向けて物体がある程度以上の速度で向かってきたら脳裏に警告が響くようになっていたはずだ。実際その手のひらは毎日のように自分を襲ったものだがこれまでは寸前で頭をさげて避けていたのだ。

驚いたのは攻撃者も同じだったらしく、青島千尋は自分

の手のひらと鈴木の顔を見比べた。
「痛いなあ。ひどいよ青島さん」
「いやだって、避けない秀美ちゃんが悪いんじゃない」
背後から声もかけずに後頭部を叩こうとしたら避けられる方がどうかしている。言葉の不条理に気がついたか青島は苦笑した。そしてわずかに心配げな表情を浮かべた。体調でも悪いの？
「うーん、自覚はないんですけどお昼に運動したからちょっと疲れてるかもです」
あらそう、お大事にねといたわる表情に笑顔を返し、並んで歩いた。向かう場所は同じで、一人にとっては職場にあたり一人にとっては学び舎にあたる。
「体調が悪いっていうより、なんか変わったかも。ちょっと空気がやわらかくなったよ」
そうですか？　嬉しいなとあやふやに笑うものの自覚はない。予備校の自動ドアを抜けて教室に向かう階段を登りはじめた足を、青島の足が止めた。
「秀美ちゃん、前に頼んでいた自主映画のさ」
「ああ、エキストラですよね。いつでもいいですよ。この間実家から制服持って来ましたから」
「そうじゃなくて、あれ、やっぱりいいわ」
「あら。けっこう楽しみにしてたんですけど」
見上げてくる顔はなんだか嬉しそうだった。
「秀美ちゃん、やっぱりなんだかいい感じになったよ。昨日も会ってるけど、今日はなんだか目をひきつけて放さないもの。それは秀美ちゃんにとってはいい変化だけど映画の背景には向かないからね」
今度、もっと重要な役でね！　そう言い残して青島は講師の控え室へ消えていった。鈴木はしばらく階段の半ばに立っていた。ふむ、と一つうなずく。
「もしかして甲斐はあったのかな？」
ふと呟くとまた登りはじめた。口元には穏やかな微笑が浮かんでいる。

小休止　真壁啓一

真壁啓一（まかべけいいち）の通っていた高校では二年次～三年次の体育の授業として剣道と柔道を選ぶことができたが当然のように柔道を選んだ。理由はたった一つで共同使用される面や小手が臭かったからだ。それでも剣道クラスを選んだ生徒たちが（授業の直後は嫌悪感しか感じなかったが）廊下で飛び込み面をやっているのを見てかすかな憧れは抑えられなかった。どんな子供でも取っ組み合いよりはチャンバラの方が好きなのだから。大学に入学し山手線から埼玉方面に伸びるある私鉄沿線にアパートを借りたとき、すぐ近くには小学校があり教職の授業で比較的帰りが遅くなった夜などは、その中から気合の声と床を踏みしだく衝撃音が聞こえてきてそれもまた畏怖と興味と憧れを駆り立てていた。

この街を訪れた最初の日である十一月一日、真壁は体力テストの途中である男性に呼ばれた。三原という名のその男は真壁に激励を送ってくれたが、その心により大きな衝撃を与えたのはその背中に水平にくくりつけられている一本の（いま思えば自分が使うものよりも少し短めだった）鉄剣の柄だった。自分はとうとうこれを振ることになるのだ！　それまで基礎的なものを重視するスポーツに明け暮れていた真壁はその訓練として当然剣道はあるのだろうと思っていたし、大きな楽しみ（ネットで調べた結果、高級な竹の防具と手縫いの垂れを買おうとまで思っていた）にもなっていたのだ。

しかし、期待していたような剣道の訓練は施されずそこにあるのはチャンバラだけだったことが彼を落胆させた。その一方で彼があこがれた剣道を高い水準まで修めた娘に手も足も出ないことがその技術の神秘性を高めさせた。

そういったこと全てがあって、彼にとって目の前の訓練の風景は興味深く貴重なものだった。袴を借りた女子高生へのお礼を兼ねて、その率いる部員達を並べさせて笠置町（かさぎまち）翠（みどり）が命じたのは淡々とした素振りである。しかしすり足、重心、肩の力、剣筋、その他真壁が気づくことのできないような全てのことについて翠は一人一人丁寧に指導しており、そのためか寒い訓練場の中のゆったりした素振りなのに全員が五分で汗を浮かべている。さすがに部長というべ

きか袴を貸した娘がもっとも直される個所は少ないようだったが、それでも真壁にはわからないようなほんのちょっとした背の伸ばし方などを修正されていた。

「俺に対してもそれだけ真剣に指導してくれたらよかったのにな」

呟きは相手に届かせるためのものではなかったのでほぼ口の中だけのものだったけれど、娘の耳はそれを捉えたらしい。腰に手を当てたまま振り返って笑った。

「この子たちがやってる剣道と真壁さんが地下で必要とするチャンバラは、入り口はまったく別の場所にあるのよ。進んでいく先は同じで私とか鈴木さんとか寺島さんくらいまでやれば実戦で使えるようになるけど、明日地下に潜る人間に教えるには悠長すぎるかな」

まあそんなものだろう、という気がした。今日だって剣道の全国大会でベスト4になったことのある自衛隊員が出場して二回戦で負けた姿を見ているのだ。破った寺島薫（てらしまかおる）は剣の闘いでは到底かなわないと気づいて何でもありの勝負に持ち込んだが、寺島のような第一線の達人でなおかつ日本剣道の心得もある人間に何でもありをやられてはさすがにベスト4でもかなわなかったのだ。それでも一人一人の姿勢を眺めて翠がどこを直すかは非常に勉強になった。

背後に来ていた真城雪（ましろゆき）にこづかれるまで気づかなかったのは真剣だったからだ。振り向いて苦笑する端正な顔に謝ると、彼女は直截な質問を投げかけてきた。

「次の勝負、お前はどっちが勝つと思う？」

答えは同時に二人からもたらされ、それは同じ単語だった。女子高生に指導をつけている娘もそれを眺めている男も間髪いれず「黒田さん」と答えたのだ。真城はその迷いのなさに笑みを深くし、理由を問い掛けてきた。

真壁は一歩譲った。これまでの密度の濃い付き合いから譲ったほうがいい場合の呼吸はわかっている。

「黒田さんは私に勝ったから！」

その回答にあんまりだという思いを込めて女帝と呼ばれる女の顔を盗み見た。すると彼女も困ったような苦笑いを浮かべていた。真壁は心の中でため息をついた。この地獄耳の娘のそばにいるようになり、自分は表に出すため息の

回数が減ったなと思いながら。
「てことはあれか。真城さんに勝った神足さんに勝った国村さんより、翠に勝った黒田さんのほうが乗り越えてきた障害はでかいと、そう言いたいわけだな君は？」
途端に翠は視線を泳がせ、一瞬後には振り向いて一人の素振りを直しはじめた。大げさに肩をすくめてから、真城の瞳が真剣な色をおびた。
「技術は黒田さん、体力的には互角ちょっと国村さんが上。だからベストなら互角だと思うんですけど」
「国村くんのほうがダメージが深いと？」
「ええ。昔読んだ本に書いてあったんですけど、ええと、『実際にその戦闘でこうむった物質的被害よりも、まだ残っているはずの余力を減衰させてしまうような想像上の被害による士気の損失をこそ重視して対処するべき』だったかな。二人ともかなり痛めつけられて、普段だったら治療術が入るタイミングでもまだ痛みを放置されている。俺たちってなまじ治療術があるために継続する痛みには弱いですよね。そういう状況で気力だけが頼りでいる国村さんにとって、最後の最後で黒田さんが木刀を弾き返したっていう意味は大きいですよ。あいつはグロッキーなはずなのに、寝ていたのに、俺が苦労した木刀を叩き落しやがったってのは結構へこむと思うんですよね」
「あれ他のより防ぎやすかったよね」
翠の背中が相槌を打った。真壁はうなずく。
「あの時は気づかなかったけど、いま思えば神足さんはあの時点で黒田さんのアシストだったんでしょうね。実際、黒田さんのあの元気を見せられて棄権しない国村さんはすごいと思いますよ」
女帝は腕を組んで幾度かうなずいた。
「うん、参考になった。ありがとう！」
真壁の肩をぽんと叩くと小走りに走り去っていく背中は楽しげで、見送って真壁は翠と顔を見合わせた。

小休止　鹿島詩穂

ああん、もう！　と苛立たしげな声に鹿島詩穂は振り向いた。訓練場への入り口、靴を履き替えるべき個所で彼女の上司である迷宮探索事業団の理事、笠置町茜が立ち往生している。一瞬だけ考えて答えに思い当たった。

「茜さん、もしかしてここに体育館ばきを置いてらっしゃらないんですか？」

「今日初めて入るわよ。体育は昔から大嫌いだったから」

この訓練場を管理する教官の一人である鹿島は当然自分の靴箱を持ちスニーカーを置いている。用品の管理も教官の担当である以上に彼女もまた美容を気にする28歳の女なのだから、空いているときを見はからってはストレッチやダンベル体操などをしている。だから当然理事も靴を常備しているものだと思っていた。しかし用意してはいないらしい。それならばと覗いたダンボール箱の中の来客用スリッパももう空っぽで、普段ここを利用しない後衛や一般人の来客数がうかがえた。

「じゃあ、ちょっと待っててください。私たちのところからスリッパ持ってきますから」

いいわよ別に、と声が聞こえてその方向を向き、鹿島はぎょっとした。それはわずか一センチにも満たない違いだったが自分の上司の身長が伸びた、いや、少なくとも目の位置が高くなったことを知ったからだ。

このひと浮いてる！

それは彼女自身がつい先日に目の前の女性から授けられたもので、あらゆる物質が受ける引力に対して干渉することができる禁術だった。自分達が日々暮らしているこの惑星ほどに巨大な質量の引力すらも消去することができるこの術を使用すれば、遠心力を利用して物体を宙に浮かせることだってできる。それはもちろん個人には許されない種類の行為であり、学んだ際には目の前の女性の許可なく使用すると罪悪感を感じて集中が乱れるような暗示をかけられていた。教わったときにも扱いは慎重にするように何度も注意され、痴漢されたくらいで使ってはいけないと申し渡されている。鹿島にとって痴漢は死刑に値する罪だったから相当程度の自制が必要だと心に命じていたものだ。

もちろん鹿島も自分が人間であることは知っている。どんな初歩の術であろうとも完璧に制御できる、と言ってのける自信はなく、であれば物体一つを地表から消滅させられるような術を気軽に使用してはならないことはわかっていた。だから、理事の暗示に重ねてどうしようもない局面以外は思い出しもしないように自分でも暗示をかけているのだ。それほどまでに管理に神経質になるべき術をこの女性は訓練場に靴下であがって汚れるという状況を避けるためだけに使ったのだ。その能力となにより価値観の相違にはあきれて何もいえない。

「おやめください！　ひとに見られます！」

小声でたしなめても大丈夫と手をひらひら振るだけだ。

鹿島はため息をついた。こうなってはたとえスリッパを持ってきても履こうとはしないだろうし、先ほどまでの単純作業で昂ぶっているのだろうか？　――そばを離れてはいけない気がする。

「あら、駿くん　――大きくなったわねえ！」

嬉しそうな理事の声、遠ざかる背中を慌てて追った。ほんのごくわずかとはいえ宙に浮いているのだから足を動かさなくても進めるのだが、それをしないのはせめてもの偽装だと思っていいのだろうか？　あるいは術を使ったことをもう忘れているのかもしれない。

「今日はどうしたの？　働くお父さんを見に来たの？」

中学生でそれはないだろうと苦笑する。橋本駿（はしもとしゅん）という名前のこの少年は、戦士たちの教官である橋本辰（はしもとたつ）の一人息子だった。確か剣道の京都府個人戦で優秀な成績をおさめたのだとは父親である同僚から自慢されていた。剣に興味があるなら日々実戦で鍛え上げている探索者たちの闘いに興味を持っても不思議はない。おそらく見稽古に来たのだろうが、顔色が浮かないのはどうしてだろう？

「つまらなかったのですか？」

笑顔を浮かべて尋ねると、まだ中学生の少年は頬を赤く染めた。同僚は短く刈った髪だけではなく全身で無骨さを発散させていたが、息子は線の細いかわいらしい顔立ちをしていた。母親の血が濃く流れているのかもしれない。少年は何か答えようとし、しかし視線を逸らし口ごもった。

「焦ることないわよ。橋本さんがあなたを鍛えなかったのは仕方なかったことなんだから」

はっとして顔をあげた少年に、小太りの魔女は微笑んでみせた。そんな二人を眺めながら鹿島は頭を必死に働かせた。つまりこの少年は、『人類の剣』である父親が例えば笠置町翠（かさぎまちみどり）が施されたような訓練を自分に課さなかったことを残念に思っているということなのか？　会話すらなかったやり取りでどうしてこの中年女性はそれを感づいて自信たっぷりに口に出せるのか鹿島にはどうしてもわからなかった。それは娘を二人育て上げた母親として得たものなのか、あるいは森羅万象の髄まで感じ取りエーテルを集めることができると賞賛された感性によるものなのか、どちらも鹿島には未知の世界だからわからない。

「仕方なかった？」

おうむ返しに問い返した少年の顔にはいろいろな色が混ざっている。理事はうなずいた。

「橋本さん、うちの旦那に会うまで助成金のことを知らなかったのよ。知らなかったんなら、わざわざ子供につらい思いをさせたい親なんていないわ」

え、じゃあ！　と鹿島は声をあげた。橋本辰が遠州と呼ばれる老人に認められたのは十六歳の時だったと聞いていた。現在彼は三八歳だったか？　二二年間もの間の助成金はどうなったのだろう。言外ににじませたその疑問に理事はただ、私たちの中で一番のお金持ちは実は橋本さんなのよ、とだけ答えた。

未払いの助成金はいったいどれくらいになるのか？　右手指が素早く動いて架空のそろばんを弾く。一七歳から一昨年までとして三六歳、十九年間で毎月十万円の助成金が累積したらどれだけになるのか――？

「ずっと銀行に眠っていたことも忘れちゃダメよ。二十年前の高金利で複利でね」

結果は複利計算をする気にもならないものだった。

「私たち、どうして今まで飲み会は割り勘だったんでしょうか……」

惨めな思いで呟いた。そういう自分だって人類の剣として認定されたのは一七歳のとき、現在までには十一年とい

う歳月を経ている。日々の暮らしをしている上では気づかなかったが、積み上げれば莫大な金額になったと知った今ではその助成金はどこに消えてしまったのだろうと我がことながら不思議だった。

「助成金が出るということを知らなければ、わざわざ子供につらいことを強制したい親はいないわ」

この横顔はわかる。その横顔は、娘を二人もってつらい道を歩ませたことを省みたことのある母親の顔だった。鹿島は深くうなずいた。自分の修行時代を振り返ってみれば、それは親子という絶対的な上下関係で強制していいものかどうかは判断がつきかねるものだったからだ。しかしその鍛錬を知らない少年はでも、と言いつのった。

「そして、子供が真剣に学びたいと望んだ時に無視する親もいないわ。今から始めたとしてあなたのお父さん並みにはちょっと無理でも、うちの旦那くらいにならなれるわよ。一度しっかりとお願いしてみなさい、橋本さんに」

元気よくうなずき一礼して歩み去る背中を温かい視線で見送ってから、ふと上司の顔を眺めた。このひとは娘たちに技術を伝えたことを後悔しているのだろうか？

しかしそんな翳はどこにも見えず、それまでより明らかに二センチほど余分に浮遊していることに気づいた。慌ててその肩に手をかけると地面に向けて押しつける。必死なのは、気をつけて見れば浮いていると気づける状態だったからだ。板張りの床の冷たさに理事が悲鳴をあげた。

黒田聡　対　国村光　①

小声で名前を呼ばれ、黒田聡は薄目を開いた。それだけの動きでこめかみが鋭く痛んだが、顔をしかめたことを察したのだろうか？　見下ろす人影の表情が曇ったことに気づくとあわてて笑顔を浮かべた。気のせいかもしれないが、笑顔を保てばかすかに間断なくつづく頭痛が弱まるような気がする。

「こんにちは、まり姉。お仕事は終わりですか？」

黒田の部隊のリーダーである高田まり子はうなずくと、

その頭のすぐ脇に腰を下ろした。黒田は上体を起こすと周囲を見渡した。視界の端で、こちらの動きに気づいたのだろうか？　真壁啓一（まかべけいいち）がもの問う視線を向けてきている。彼に向けて黒田はまず高田を指差し、そして土嚢の段差を指差した。真壁は一瞬で了解したらしく、土嚢に置かれていた自分の雑誌を持ってきた。もう日が傾いており冷えこんできたこの会場ではめいめいがこうやって尻の下に敷くものを用意していたが、目の前の女性にはその用意がなかったのだ。高田は恐縮したように雑誌を受け取るとその上に再び腰を下ろす。

「どう？　体調は」

「さつきさんに今度会ったら、いつもありがとうございますと言うつもりです」

　高田は苦笑した。地下であれば行動を阻害されるような打撲を放っておくはずがなく、打撲と痛みをやわらげてくれるのは治療術師である縁川（よりかわ）さつきの役目である。いま、顔のほとんどが赤く青く変色するほどの怪我を負ってそのありがたみを再確認したというところだろうか。

　高田はしげしげと打撲を覗き込み、本当につらかったら棄権してもいいんだよ、と言った。黒田は微笑んだ。

「さっきまでうとうとと、越谷さんの夢を見ていました」

　高田は眉を寄せた。

「――亜美の夢？　あの子とクロって仲良かったっけ？」

「いえいえ、違います。その越谷さんじゃなくて、ええと――青面獣です」

「ああ、こっしー」

　そう、こっしーです。黒田はうなずき、少し言葉を選んでいるようだった。

「体力的に俺が劣っていた部分はなかったと思うんです。でも、手も足も出なかった。キャリアだって同じくらいだったと思います。二〜三日はやく来ただけだったんじゃなかったかな、あの人」

　高田は首をかしげた。彼女は第一期の募集締め切りぎりぎりにパスを手にしたので、各人の時期的な関係は今ひとつわからないでいる。

「身体能力では俺の方がずっと上だった。それをどうひっ

くり返していたんでしょうね、あの人は」

突然の呟きは、自分より身体能力では勝る男との決勝戦を前にしてのことだろう。高田は話題にのぼっている越谷健二という故人のことを思い返した。目の前の男との違いは何があるだろう？

高田からすれば二人とも見上げるような長身だったからその差はわからないけれど、筋肉質だが精悍な細身であることは同じだった。越谷の戦いぶりは見たことはなかったが、速い動きと強烈な打撃というオーソドックスな戦い方は同じだと神足という仲間が評していたのは覚えている。であれば精神的なものだろうか？　しかし周囲にやさしく笑顔を絶やさない姿勢こそが何よりその二人に共通したものだと思えた。

「あ、まり姉、髪型変えましたか？」

考え事を破られて苦笑した。変えたといっても午前中は気づかれなかったことが示すように毛先を揃えた際に美容師と相談しながらほんの少しだけ工夫してみただけに過ぎない。すでに二日たって普段と同じようにブローした結果誰も気づかないだろうと、気づくのはきっとこの世で羽賀研二くらいだろうと思っていたのだが、この男だったらわかるかもね、という気もする。そして一つ気がついた。

「こっしーだったら気づかなかったろうなあ。あの子は女を宝石飾り台くらいにしか思ってないフシがあったから。自分の興味のあること以外は鈍感な子だった。クロは反対だね。何でも気がついて言葉をかけて――だからこっしーはモテなかったし、クロはモテるのか」

黒田は何か考え込んだようだった。その間も高田の中で故人は踊る。

「そういえば、あの子が言った言葉で印象的なのがあったわ。人間が失敗するのは本来の目的に加えて自尊心をくすぐるような小さな成果を求めてしまった時だって。さっきの翠ちゃんとの試合はまるでショウのようで見ていて楽しかったけど、こっしーだったら絶対にやらないことだろうと思う」

でも、こっしーを真似することがクロにとっていいことは思えないわよ。こっしーとクロじゃ華が違うからね、

というその言葉はフォローだろうか？　しかし黒田には届かなかった。むかし、と呟いた。

「むかし、越谷さんと熊谷さんと草津温泉に行ったことがあります。三人でレンタサイクルを借りてスキー場のところから白根山の山頂まで競争をしました。ふだん越谷さんは自転車に乗っていましたけど、その場では自転車の条件は同じ。そして体力的には三人の中では一番劣っていたと思います。けれど俺たちは五分も差をつけられました」

そういえば、その時言われたんです、と黒田は懐かしそうに笑った。

「自転車に乗ったら顔を伏せてハンドルを握り締めて、あとは足だけ動かすんだって。顔を上げたり景色を見たり汗を拭いたり、余分な動作を一つすれば一秒タイムが遅れるんだって。確かにあの人のすることには無駄なことはほとんどなかったな」

目を背けたくなるほど痛々しい顔は、しかし穏やかに微笑んでいた。そんなこと思い出したからって、目の前の国村さんとの勝負に役に立つとは思えませんけど、と照れたように笑ったその顔にリーダーであり年長である女性は優しくうなずいた。どんな立派な言葉も、言われる人間に受け入れられる土壌ができていなければ意味はない。いま、目の前で一人の男が大事なことを血肉にしたのだ。それは心浮き立つ情景だった。

「すぐに役立ちませんけど、とにかく次の試合からちょっとやってみます。踏み込むときはそのことだけを、剣を振るときはそのことだけを、勝ち負けはちょっとよそにおいてやってみます」

そして失礼しますと呟くとごろりと横になった。早速、今は休むことだけを考えるようにしたのだろう。即座に寝息が漏れ始めた顔を微笑んで見下ろすと、足音大きく歩み寄ってきた津差龍一郎（つさりゅういちろう）にとがめる視線を向けた。

この眠りは守ってあげよう。なぜかそんな気分になっていた。

黒田聡　対　国村光②

心配していた太腿は骨折などしていなかったようで、国村光はほっと安堵のため息をもらした。さすがにぶあつい筋肉に守られているだけのことはあり、ここに比べたら右胸の方が怪我としては重いと触診を終えた今ならばわかる。それなのに試合中、右腿の痛みに気をとられたのはかつて自動車事故で骨折した箇所だからかもしれない。手術の痕は薄くなったが痛みの記憶は鮮烈に刻まれているのだろう。

さて、と国村は立ち上がった。直立の姿勢から、息を吐きながら両手を前に、そして頭上に運んでゆく。肘は伸ばしたままだ。両手が頭の真上を越え背中をそらしきってから息を吸い込んだ。肺を空気が満たすとそれを腹に、腹が満ちると喉や肩にまで満ちるように息を吸い込み続けた。吸気によって膨張した筋肉が身体じゅうから微細な痛みを伝えてきた。予想もしなかった箇所の痛みは倒れこんだ時の打撲か、緊張に力が入ったことによる筋肉痛だろう。一つ一つの場所をしっかりと覚えこむと再び息を吐きながら両手を前におろしていった。胸の高さからさらに下ろす動きにあわせて背を丸め、膝を折り曲げ、しゃがみこむように丸くなる。そして再び思い切り息を吸い込んだ。今度は先ほどとは違う箇所が痛み、それもまた覚える。同じ動きを三度繰り返してからツナギの前のジッパーを下ろした。汗でびっしょりと濡れたワイシャツを脱ぎ捨てその下のサラリーマンらしい白の肌着も脱ぎ捨てると、戦士という職業には似つかわしくない細身の身体が現れた。

革のビジネス用かばんを開け、ビニール袋を二つ取り出す。一つには『温』、一つには『冷』とマジックで記されている。中には三センチ角の正方形からさまざまな大きさの湿布が詰め込まれていた。

痛みの質を思い出しながら、冷湿布と温湿布をすべての箇所に貼り付けていく。それが済むと上半身の大半は白い布地に覆われてしまった。肌着とワイシャツを身につけると今度はツナギをすべて脱ぐ。普段の探索ならば保温用の肌にぴったりフィットするタイツを身につけるが今ではボクサーブリーフのみだった。靴下すら黒い薄い生地のもの

だ。そして下半身にも湿布をつけていく。

すべてが終わり再びツナギを着て、緊張感が途切れたのだろうか。そのままどさりと床板の上に大の字になった。びくりとして眺める周囲の視線を無視して大きく息を吐き出した。呼気とともに何か決意のような大事なものが抜け出ていくような気がしたが、それを不安に感じることすらできなかった。

もうやめよう。

それは試合が終わった直後から頭を占めていた選択の一つだったが、いま明らかにその方向に背中を押すものがあった。たった湿布を貼るという行為だけでわかったのだ。自分の身体はもう思い通りには動かないだろうということが。痛みを切り離せば済むというものではなく、打撲によって絶たれた神経線維と内出血を修復するために動員された血小板の存在が明らかに反射速度を鈍くしていた。それに、痛みの切り離しにしてもどこか良識を信頼できなかった先ほどの相手とは違い、決勝の敵手は間違っても最悪の事態をもたらすような危険な生き物ではなかった。それはありがたいことのはずだったが、その認識の分だけ身体は非常事態だとは思ってくれないだろう。参加当初の動機はもちろん優勝の名誉だったが、試合を経ていく上で再確認した同僚たちのすごさ（すさまじさといった方がしっくりくる）が、ここまで進めたのならいいではないか、参加しただけで十分ではないかと自分を納得させつつあった。それに、賞品のうちで一番欲しかったホテルミラコスタのチケットは——どうなることかと思ったが——手に入れたのだ。

やっぱりおなかが痛いですって言って棄権しよう。これ以上痛めつけられるのはゴメンだ。この状態で勝てる相手じゃない。なんといっても相手は寝た姿勢から木刀を叩き落すほど余力があるのだから。そう決心して立ち上がったとき、革の鞄が震えた。

急に呼び戻す仕事でもできたか？　それならしょうがないものな。生まれて初めて携帯へのメールが仕事の用事であることを期待しつつ開いた液晶には恋人の名前が光っていた。

『そろそろ決勝？　がんばってね。温泉楽しみです』

それを読んで座り込んだ。くずれおちたと表現した方が適切かもしれない。

「あー、温泉好きだったな」

誰にともなく呟く。普段は横浜に住んでいる恋人とは毎週末にこの街で会う習慣だったが、時間が余れば城崎や鞍馬や湯の花へと運転手を命ぜられるのが常だった。確か昼前に恋人に送ったメールには温泉旅館の宿泊券を獲ってみせると書いたはずだ。もしかしたら「絶対」という二文字も付随していたかもしれないが確認する気にはなれなかった。

男の見栄は勇気の原動力になる、とは昔読んだ時代小説に載っていた言葉だったろうか。惨めに思い出しながらごろりと横になった。少なくとも、全力を尽くさずに棄権はできないぞ、光。そう呟く。

「できないかな」

返答はどこからもない。

「できないんだろうな」

言葉の最後はため息に飲み込まれ、目を閉じた。

黒田聡　対　国村光　③

目を閉じたままでも周囲には気を配っており、平べったい音を立てるスリッパの足が自分をめがけてやって来ることに気づいていた。だから、来客が声をかける前に国村光（くにむらひかる）が顔をあげたことで神田絵美（かんだえみ）は驚いて立ちすくんだ。

「時間？」

探索者中屈指の魔法使いにして日曜大工の第一人者である彼女とは、彼女がこの街にやってきた頃から親しくしていた。年齢が近いこともあったが、『創る』うえでは欠かすことのできない醒めた客観視点を備えているので会話が楽しいということが大きい。週末探索者として価値観の中心をあくまでも街の外におく国村にとって、全てを捨ててこの街に来た純粋な探索者たちの意見にもどかしさと疎外感を抱くことはしばしばであり、しかし神田は別だったのだ。神田も国村を気にいってくれているらしく、店では売っていないニッチな小物（髭剃りを入れる皮袋や太陽電池を利用した携帯用充電器など）を快く作ってくれていた。

「まだだけど、入場の準備をしてもらいたくてね」

わざわざ？　なるべく嫌そうな顔をしてみせる。一歩だって動くのは億劫なのだ。どこに連れて行かれるのか知らないが、他人を喜ばせるための入場行進は気が進まなかった。いいよ、別に、めんどくさい。

「津差さん！　移動したくないってゴネてるからこれ持っていって！」

あ、本気だ。苦笑して国村は立ち上がり、津差龍一郎のもの問う視線には苦笑いのままかぶりをふった。あー、どこへでも行くよ。行きゃいいんだろう？　で、どこへ？　投げやりな言葉に神田は破顔した。そうすると童顔とあいまってまるで二五〜六に見える。答えず先を歩き出した。

「どう？　勝てそう？」

「なんかもう、やる気がないよ。さすがにしんどい。寒いし」

どこへでも連れて行けとは言ったものの訓練場の外にまで導かれたことへの苦情の意味をこめ見下ろす。神田がすまなそうな顔を浮かべたのと、閉められていた通用口が内側から叩かれるのと同時だった。準備が整ったみたい。神田が嬉しそうに扉を叩き返した。最初のノックは三回、こちらが三回、そして向こうからの返答は七回ではなく九回だった。三々九度かよ、と脱力した。

「じゃあ、そこに立って！」

嬉しそうな顔に押されるように鉄の扉の前に立った。いきなりクラッカーでも食らうのだろうか？　直撃したら俺死ぬかもしれないぞ、とちらりと不安になる。そして扉が勢いよく開かれた。

ほんの数分の間でカーテンが全て閉められていたようで、訓練場の中は真っ暗だった。いったいどこから用意してきたものか舞台を照らすために使われるようなライトが自分の直前の空間を照らしていた。円形のその白さの外側、視力が追いつかない場所に人影が列を作っており、その列は試合場まで自分を導いている。何事だと思いつつも一歩を踏み出すと白い光が広がった。そして列をなす影たちの顔を見分けることができた。

神足燎三の笑顔には好意しか浮かんでいなかったが、それでも国村が一歩あとずさったのは先ほどの試合でしみ

ついた恐怖心のためだからかもしれない。さらに深くなった笑顔になんとか踏みとどまり、おそるおそる歩みをすすめる。今度は木刀は飛んでこないだろうな、とびくびくしている自分は勝者とはとても思えなかった。そして次の人間の顔が見えた。

それは名前は知らないが、第二期の若い戦士だった。確かこちらに来て最初か次の試合かで自分が倒したはずだ。そのあたりのことはあまり覚えていない。

ぴんと心にひらめくものがあり、確認するために一歩を踏み出す。自分を中心にした白い円も同じく前進し、また顔が視界に入った。その顔とは今日は対戦していないが戦士の一人だった。

「今日、これまで倒した屍を踏み越えて決勝の二人の入場です！」

自分の列の半ばほどから聞きなれた女性の声が響いた。そうか、真城雪は神足に敗れたからこちらの列なのだ。見覚えのない顔たちも、自分が下した誰かに敗れたのだろう。

秋谷佳宗と、その背後の南沢浩太の顔にも驚いた。こんな男たちより強い誰かに自分は勝ったというのか!? 一歩進む。

そして予想外の口髭にはとうとう立ち尽くしてしまった。

「星野さん！　出てたんですか!?」

出場していたならば絶対にベスト4には残っているだろうと思える顔が楽しげに自分を見つめている。

俺は――呆然として考えが続かない。

列の最後はこれまでの試合で二番目に自分を追い込んだ若い戦士だった。がんばってください、という声に自然とグローブを外し手を差し上げ、若い戦士の手のひらとぶつかって甲高い音を立てた。俺は――

試合場の中央に立ち、向かいの列の最後に達しようとしている対戦相手を見た。普段の黒田聡は泰然という表現が似合う、あまり生の感情を出すことのない男だった。しかしいま、赤と青の腫れ以上にその顔は紅潮していた。彼が何を感じているのかわかる気がした。自分を満たしている思いと一緒のものだろう。これは――数年前に利益率四

九%の取引をまとめたときよりも巨大かもしれない感動だった。

いつのまにか痛みが全て消え去っていることに国村は気づいていた。

黒田聡　対　国村光　④

光の中に突然うかびあがったひょっとこのお面にぎょっとした。凝視する中で細い手がそのお面をはずすと理事の娘の笑顔があった。そうか、この娘との勝負も大変だったと黒田聡はしみじみと思う。手にしたお面をつけて登場した娘、そしていまそれをつけている娘。実は自分も大変な道だったな、と改めて実感した。そしてこの入場を考えた誰かに感謝した。

「入場は派手にしなきゃね！」　そう主張する部隊のリーダーに連れられ、もう薄暗い寒空に追い出された。動くたびに鈍く響く頭痛を何とか我慢しながら、身体が冷えないようにと小刻みにゆすぶっている。あまり寒いので押しくらまんじゅうのつもりでリーダーに体当たりしたら、高田まり子の頭が鉄の扉に音を立てた。振り返って涙目で睨むリーダーの背後、扉の中からは「まだだよ！」という誰かの声が響いた。何をたくらんでいる？　不思議に思ったものだ。

そんなことをしながら数分も待たなかったろうか？　開かれた扉の向こうは真っ暗で、自分が登ってきたトーナメントの半分で出場していた戦士たちが列を作っていた。黒田が直接にしろ間接的にしろ下してきた顔ぶれはみな自分の勝ちを信じて祈ってくれておりそれが気を昂ぶらせる。

「黒田さん、勝ってよね！」

お面をつけていた娘の声が背中を叩く。彼女にはどちらかといえば敬遠もしくは軽蔑されていると感じていたのだが。いい年しておぼこい娘だと思っていたのだが。それがこの熱烈な声援は何事だろうか？　疑問は続く言葉で氷解した。

「黒田さんが勝てば私がナンバーツーだから！」

なるほど、そういうことか。彼女は自分以外に負けていないのだから強弁が可能なのだった。寺島薫と手を打ち合わせながら思わず苦笑していた。

それにしても、寺島も自分と同じ山にいたのだ。知識として知ってはいたが、目の当たりにするとやはり今日の自分は組み合わせの運に恵まれていたと再確認する思いだった。何しろ寺島は向かい合って五本のうち三本取れるかどうかの相手なのだ。それが、と幾人かあとに浮かび上がった男にも笑いかける。この男、野村悠樹の方が寺島と早く当たると知って安堵したのだ。寺島と野村という強敵同士がつぶしあってくれるトーナメント表を見たときに優勝はもらったと確信したものだ。もっとも、実際の展開はまったく予想とは違ったが。

少し歩くと厚みのある身体が光の円に入ってきた。部隊の仲間でもある巨人が鍋つかみのように分厚い手のひらを向けている。ちょっといたずら心をだして木剣を床に置き、その両手のひらに見よう見まねの左ジャブを放った。巨大な手のひらはそれだけの衝撃を予期していなかったのだろう、ほぼ同時に身体の前から跳ね除けられていた。そして懐に踏み込んで右こぶしを下腹に叩き込んだ。

膝をついた巨人に列からは喝采が、会場からは驚愕の地響きが鳴り響く。今の動きがもたらした盛大な頭痛をなるべく表に出さぬよう、何食わぬ顔で木剣を拾い上げた。なんのことはない、先ほど木刀の弾丸を受け止めて湿布を貼っていたところを寸分たがわずに殴っただけだがそんなことを知らない人間は大喜びだろう。

そして列の最後の顔が目に映り、葛西紀彦の顔に思わず「ゲ」と呟いてしまった。しかし葛西は隣でうずくまる巨人と自分を呆然として見比べるだけだ。その目に恐怖がよぎっていることを感じ取り、危うくあとじさりそうになった動きを押しとどめることができた。笑顔を向けると葛西はようやくほっとしたように、勝て！　と叱えた。手を軽く上げて答える。

葛西の脇を通り過ぎた直後に背中を強く叩かれた。それは予想もしていなかったことで、ぶざまにたたらを踏んで試合場を囲む白線を越えてしまった。声援がひときわ音量

を増す。中央には対戦相手である国村光が自分を待っていた。散々木刀をぶつけられた男は、しかし調子が良さそうだった。

こっちもいいですよ、国村さん。黒田は心の中で話しかける。

前の試合が終わってからずっと彼を悩ませていた頭痛は加害者の応援の張り手でどこかへ飛んでいってしまったようだった。

黒田聡　対　国村光　⑤

開始の声と同時に構えたのは、国村光の奇襲を恐れてのことだ。とはいっても開始と同時に切りかかるといった簡単な話ではない。こちらの気が満ちている状態でも間合いにいればすべての行動が奇襲になるのが目の前の男だった。

戦闘における速さには三つの要素があり、東京を出発して京都に到着することを考えるとわかりやすい。一つはもちろん、動作をする上での肉体の速度だ。東京～京都間でJRの線路上を進む場合に、新幹線を使うか特急を使うか各駅停車を利用するかがこれにあたる。運動が必要とする純粋な速さであり、普段「動きの速さ」という場合はこれだろう。

二つ目は、東京と京都というスタートとゴールを同じくしても使用するコースによる所要時間の優位もまた速さと呼ばれる。自動車道を使うよりも整備された新幹線の線路を使う方が距離的に短くて済み、それよりも空中を飛んだほうがさらに短くなる。青くて巨大なネコ型ロボットが普及すれば、どこでもドアでゼロにまで短縮できるだろう。

この二つの速さにおいて黒田聡は目の前の男に敵し得ないことを理解していた。とはいえ最適の動作を考え追求しないようでは第四層の前衛などは勤まりはしないのだから、二つ目については深刻な差はないと思っている。しかし一つ目のものに問題があった。

筋肉が生み出す純粋な速度では劣っているとは思わない

し、反射神経では自分の方が勝っているとすら思う。しかし目の前の男の動作は異常なのだ。誰だって動作開始はゆっくりで徐々に加速し終了前には速度をゆるめる。それがこの地上で行動する上での原則であるはずだ。もちろん国村の動きにもそれは見られた。見られたが、動作が遅い状態があまりにも短く、他の大多数の人間を見続けた結果動きはじめからトップスピードまである程度の猶予がある、と思い込んでいる彼の延髄と頭脳では対処ができなかった。

ずっと前の会話を思い出した。骨と骨をつないでいる筋肉のすべての筋組織をどうにかして同時に収縮／弛緩できないかと試している、と。意識したことのない微細な動きまで制御するなどおよそ人間に可能なこととも思えなかったし、今でもそれができるとは信じられない。しかし、目の前の男の動作速度がトップスピードになるまでの経緯はまるで紙芝居の画面展開のように急激であることもまた事実なのだ。

とにかく、常人（大げさな表現だが国村が相手となるとしっくりくる）に慣れすぎた黒田の身体は国村の動きを察してもそれまでの経験に引きずられ、一瞬の猶予があると思ってしまっていた。頭でどれだけ「こいつは速いぞ」と言い聞かせてもそうなのだ。そしてそのぶんだけ対応のタイミングが遅れてしまう。その結果、目の前の男の行動はすべて奇襲になるのだった。向かい合っている限りは常に対処できる姿勢をとっておかなければとても安心はできない。

しかし国村は動く様子もなく視線を自分に静かに注いできていた。

身体の左側を前に出すように半身になっている。左腕は少し曲げた状態で自分に手のひらを向けて上げており、小手調べの攻撃ならばすべて叩き落されることが理解できた。半身になった理由は木剣の長さを隠したいのかと思ったがそうではなく右腕は肘を上げて引かれ、柄を握る手は顔の脇に添えられている。あごの高さから伸びる刀身が地面と水平にぴたりと黒田の喉下に狙いを定めているその姿勢は、明らかに突きを狙っているとわかる。この奇妙な形の片手突きは、通常の青眼の姿勢から両手で繰り出すものに比べ

て威力が足りないと普通なら思うだろう。だがあいにく突きを放つ男の胴体はひねりだけで第三層の化け物を両断する衝撃を生み出すのだ。審判は殺傷力有りと認定するはずだったし、まともに食らったら気絶は免れないだろうと思われた。

二歩下がって距離を置き、木剣の長さをはかる。おそらく七〇センチほどにもなるそれは長身の戦士たちが練習で使っているものだ。その分重く扱いが難しいが、チャンバラではなく突きに絞るのであればいい選択だろう。腕の長さと国村の歩幅をあわせた距離を頭に叩き込んだ。今はまだ安全圏にいる。

さて、どうするか。じっと腰に視線を置きながら考えた。切っ先が円を描く動きであれば避けるも受けるもそらすもできないことはないが、弾丸と化して一直線に向かってくるものをいなすのは難しい。先ほどの試合で他の戦士たちが飛んでくる木刀に対処できたのも五メートル以上の距離が開いていたからであり、一足一刀の空間でなら身体全てでかわすしかなかった。

横移動は無理だ。可能性を簡単に切り捨てる。その後の反撃をするには右か左かにステップして空振りさせることが一番だったが、常に動作が奇襲になるこの男の突きにそんなことができるとは思えないし、試すのも恐ろしい。であれば後ろか、と心を決めた。幸い突きなので射程距離には限界があるのだ。刀身がぎりぎり届かないところまで下がって伸びきった木剣をはじくか、できれば掴むかして無効化し一気に踏み込む。それしかなさそうだった。

国村が息を吐き出した瞬間、黒田をつつむ時間の流れがゆったりになった。それによって黒田は目の前の男が攻撃を開始したことを悟った。

国村がかるく半歩を踏み出し、腰をひねる。先ほどから腰に視線を置いていたためその動きははっきり見て取ることができた。しかし身体はまだ猶予があると思い込んでいるのか動こうとしてくれない。

腰のひねる力、それがまるで背骨の一つ一つの回転で勢いを増幅するかのように胸と腕に向かって伝わってきた。ようやく黒田の下半身に力が入った。二歩ぶん。それだけ

跳べば切っ先は黒田の前一〇センチ残して止まり、きっと掴むことができる。

国村の回転の動きがとうとう胸と肩に伝わった。ゆったりと流れる世界で切っ先だけが奇妙に速くこちらに伸びてきた。黒田の足が地を蹴った。

着地した。切っ先は自分に向かってくる。覚えた腕の長さと刀身の長さを反芻して届かないと確信する。木剣を掴み取ろうと左腕を上げようとした。

胸椎の上部に強い衝撃が走って上体が吹き飛ばされた。何がぶつかってきた!? 混乱しながらもとにかく立っていられないことは理解し、それならばと思い切り身体をそり返しながら背後に跳躍した。ブリッジの姿勢になって両手を床につけた。木剣と床に挟まれた右手の指が悲鳴をあげた。それにはかまわず（かまう余裕もなく）国村が踏み込んでこれないように思い切り足を蹴り上げる。両足を揃えたまま一瞬の倒立、それから両腕をまげて腕の力だけで跳躍した。

一瞬だけ国村と目があった。その目は足の動きに戸惑っていたがさらに畳み掛ける意思は痛いほど伝えてくる。

着地。耳が足音を拾う。その方向に思い切り木剣を振り回した。足音が止まった。

頭にフィギュアスケートの回転を思い浮かべながら、さらに二回転した。その都度国村のいる方向に木剣を振りながら、はたから見ればカッターの刃を生やしたコマにでも見えたかもしれない。

三度目の回転を終えて国村から逃れるように再度の跳躍をする。さすがにその動きは予測できなかったようで国村は見送るだけだった。ようやく息をつくと、胸が痛んで何度も咳き込んだ。手袋に吐き出されたツバは見ないようにする。もしもそこに血が混じっていたりしたら一気に戦意喪失しそうだったからだ。それほどの激痛であり、衝撃だった。

「国村さん」

意識して平静を装い、尋ねる。なんだ？ と国村は首をかしげた。

「その剣、ボタンを押すと伸びたりするんですか」

国村は苦笑し、うなずいた。
「ああ。あとはボタンを押すと爆発したり刀身だけ発射されたり」
「すごいな」
「スキーリフトでいつもきれいな女の子と一緒になる体質になったりする。でも押しすぎると上からタライが落ちてきたり便所掃除当番になったりするから気をつけろ」
「それはまた何か、えらくストレートですね。まさに諸刃の剣か」
「ああ。でも、今日はどんどん押させてもらう」
タライがこわくないんですか！　そう言って笑い、黒田は息を整えた。
ボタンで伸びたり便所掃除になったりするはずはない。あの木剣は友人の南沢浩太が常に練習で使うもので、見覚えがあった。タネは剣にはない。国村の身体にある。あそこに詰まった運動能力にあるのだ。自分の常識では想像できないものがある。
たとえ頭で理解できても、少なくともこの試合中では対応できないようなものがそこにある。暗い気持ちになった。こころなしか頭痛が復活したような気がした。

黒田聡　対　国村光　⑥

真壁啓一が大きく息を吐き出してようやく、縁川かんなは自分の身を縛る何かが消えたことに気づいた。それまで行われたのはたった一動作だった。国村という男が突き、黒田という男はそれをバク転でかわすという。それだけなのに肩には力が入りすぎて首が痛くなっていた。
「すごいな、黒田さんは」
真壁の言葉に笠置町翠――先ほど素振りを見てもらったばかりか、今は隣りで観戦させてもらっている！――は頷いた。それでも、何がすごいのかはわからずに二人の顔を見る。彼女の目には、黒田という男がかわしたにせよ、主導権は国村が握っているように見えるからだ。もちろんバク転はすごい。すごいがその前の突きだって腰のひねり

だけとは思えない切れ味だったと思う。
　視線に気づいたか、真壁がちらりと翠を見た。翠は軽くあごを引いてみせた。恋人もその許しなく発言はできないのだろうか。さすが、強くてきれいな女の人だ、となぜだか自分が得意になる。
「突きはかわしにくいけど、崩せば相手はがら空きになる。だから弾くなりそらすなり、自分が横に動くなりでなるべく間合いは保ったまま対応したいと思うんだよ」
　そういうものだろうか？　確かに日本剣道でも高校から突きは許可されているが、女子の世界では使用するものはほとんどなかった。首にあざでもついたらどうするのか！
　とみんな思うのかもしれないが、ともあれ突きに対する方法を真剣に考えたことはなかった。とはいえ、言われればそんなものかなという気もする。
「でも、黒田さんは国村さんの構えを見た瞬間そんな欲は捨てた。最初から下がろうと思ってないとあの突きはかわせないよ。俺だったら欲目を捨てられるかなあ」
　真壁さんだったら、と翠が口を挟む。
「欲を捨てたってあの突きはかわせないよ。あれに対応できる反射神経を持ってるのって、この大会に出てるレベルのひとじゃ黒田さんか内田さんくらいじゃないの？　あ、あとは鈴木さんか」
「翠さんでもだめですか？」
　驚きのために声が高くなったが、翠はこともなげにうなずいた。
「黒田さんは私に勝ってあそこにいるんだよ」
　それでも目の前の女性に対する思いは信仰に近い。むきになって反論しようとしたが苦笑されて口をつぐんだ。
「まあ、そこの兄ちゃんほどに無様にはならないだろうけどね」
　憎たらしい物言いに思わず苦笑する。真壁はしかし、この程度の憎まれ口は慣れっこなのかただ笑っているだけだった。
「まあ反射神経もそうだけど黒田さんが今回すごいのは決断の早さだよ。とにかくかわすならかわす、でけれんも遊びも入れるつもりがないみたいだ。誰かさんとの試合では

遊びまくってたけど、さすがに葛西さんや国村さん相手ではそんな余裕はないんだろうなあ」

先ほど息を詰めて見つめたのだ。『遊びまくられた誰かさん』が誰を示しているのか痛いほどわかった。いや、うっすらと笑みを浮かべて試合場を見つめている女性の隣りにいることはもう物理的に痛みをもたらしてくるような気すらした。憧れの女性は静かにあー、と呟いた。思わず距離を置いてしまう。怖い。

「あたし今ケンカ売られてる。買わなきゃ」

平然とした声がそれに答えた。

「まあそりゃ後まわしだ。二人が動くぞ」

その一言で剣呑な空気が溶けてなくなる。えーと、この二人の上下関係って一体……。おとなって難しい。

視線を移した試合場では、相変わらず切っ先を黒田に据えた国村が横移動のすり足を開始していた。

黒田聡　対　国村光　⑦

すでに三度の突きを放っており、勝負はまだついていない。黒田聡はさきほどの突きの射程距離に怖れをなしたのか大きく跳び退ってかわすだけで反撃まではできないようだった。そうでなければ困る、と国村光は焦りをかすかに感じていた。三度の突きのうち一度でも自分が納得のいかなかったものはない。姿勢を全く揺らすことのない横移動のすり足からまたたきほどの遅滞なく直角に踏み込み、腰のひねりだけの突きを放つ——横移動から縦移動の急激な切り替えは国村の身体にも負担を強いるほど人間には難しい動作なのだ。やすやすとかわされてたまるものか。

待たれている。不気味な直感があった。

試合場の中央に位置し、常に自分に正面を見せる黒田はいつしか木剣を頭の上に構えていた。突きに対する防御の動きは前後の跳躍だけに任せ、もしもこちらの突きが甘かったらその木剣を振り下ろして片をつけようというのだろう。自分に近い運動能力と信じられないほどの反射神経を持ちながら、動きの勝負を挑むではなく持久戦を選んだその決

断が不気味に感じられた。

動きの精確さでは自信があったから、心身を削りあうこの状況に不安を感じているのではない。それよりも目の前の男が先ほどみせた判断力に恐怖を感じているのだ。目の前の男は、自分の突きの構えを見た時点で反撃をあきらめて後ろに下がることにした。そして、その判断のおかげで試合は続いている。その研ぎ澄まされた感覚でいま持久戦を選ぶのならば、自分が自覚していない不利があるのではないのか？　自身ではわからない何かが。

それでも、とゆったりと緩急をつけてすり足で進みながら隙をうかがう。いや、隙などないから少しでもましな瞬間をうかがう。それでも、自分は細心の注意と最大限の勇気で踏み込んでいくしかないのだった。自分の背後に剣道着にコートを羽織った娘たちが来た時点でまた踏み込み木剣を走らせ、しかし切っ先は届かなかった。このときばかりは心中で苦笑する。名うての女たらしも試合中は煩悩を断ち切るのか、娘たちがまだ幼いといっていい年齢だからかはわからないが小細工は効果がないようだ。

だが、と別の意味で胸のうちに浮かんだ笑いは、ほくそえむ、というものが近かった。

先ほどの跳躍は、これまでのような全力のものではなかった。ほんとうにわずかだけ余力を残したものだった。

間合いを測り始めている。

黒田にも持久戦に不安が出てきたのか、もともと待ちの姿勢でいるつもりがなかったのかは知らない。しかしいま敵手は自分の突きの射程距離を測り始めていた。狙いがわかった気がした。

それならば、と次からはこちらも少しずつ跳躍と肩甲骨を伸ばす距離を短くしてやろう。黒田の狙いはこちらの突きをぎりぎりでかわせるまでに跳躍を抑え、なんとか反撃することだ。であればこちらで意識して距離を短くしてやればそれを信じ込むだろう。人間はとかく、信じたいものを信じる生き物だからだ。

間合いをつかみ反撃をしようと思った瞬間、抑えたものを再び出し切ってやる。反撃のため前に向かおうとする黒田の身体にとってそれは痛恨のカウンターになることだろ

う。しかしその計算も表情には出さない。
次の突きは、少しだけすり足の距離を抑えた。
黒田の跳躍もまた、少し短かった。
黒田の瞳がちかりときらめいたが、突ききった腰を戻し左腕を前に構える動きのため国村は気づかなかった。

黒田聡　対　国村光　⑧

何をしたいかはもう決まっていた。そのために何をするべきかの計算ももう済んでいた。その計算式はすべて破棄し結果だけを心に刻み、そのために行動に迷いは起こさない。黒田聡（くろださとし）はただ彫像のように木剣を振りかぶりこ揺るぎもしない。
向かい合う国村光（くにむらひかる）と目が合った。なぜだか彼の思考が伝わってきたような気持ちになった。しかし一瞬後にはすべてが身体を通り抜けて背後に消えていく。心のどこかで、かなり正確に看破したのだという声が聞こえた。だから計算をやりなおそうという勧誘が聞こえた。それらも聞こえただけで終わった。
それから二度の突きを跳び下がってかわした。気が満ちていくのが感じられる。自分のものも、向かい合う国村のものも。しかしするべきことは動かない。
さきほどから音が全く聞こえてこないことに気づいていた。どうしてかわからない。耳が突然聞こえなくなったのかもしれない。でもそれがなんだというのだろう。次第に目の前の男以外のものが視界から消えていった。それだってたいした問題ではなかった。ただ一つの行動だけを思い定めた。
呼気とともに国村が親指一本ぶん程度前に進んだ。ブーツのソールが床とこすれる音が鼓膜を打ったが、聴覚を喪ったわけではないとわかったところで安堵は浮かばない。ただじっと視線を注いでいる。
国村の身体がほんの少しだけ大きくなった。これまで、その跳躍のあまりの速さに対応できなかった視覚はもっと大きく見えるところまで接近してからようやく移動に気づ

いていたのだ。この上なく感覚が研ぎ澄まされている証だったがそれも喜びをもたらしたりはしない。

ただ、今こそ行動を起こすべきだという命令だけが全身に行き渡った。

これまでのように跳び下がったりはしなかった。腰、胸、肩、腕の筋肉が膨れ上がり木剣を振り下ろす。国村の驚愕の表情が視界に入ったがそれも単なる風景として残像も残さず通り過ぎていった。

木剣は狙い通りの場所に振り下ろされた。国村が牽制と防御のために前に出していた左手の上に振り下ろされた。予想していなかった衝撃を受けて左手がまさに撃ち落された。

必殺の突きは軌道をそらされしかし威力はそのままに、一人の男の上半身が生み出す衝撃をすべて切っ先に乗せ走る。それは両腕で木剣を振り下ろした直後の左肩に食い込んだ。反動で上半身がのけぞりそうになる。

背筋を引き絞って衝撃に耐えた。このまま吹き飛ばされることだけはないようにと。踏ん張るくらいだから自分の肩に加えられた衝撃のことは当然わかっていた。しかし、一度だけ左腕を上げようと試み、甲斐なく動かなかったことを理解した途端に左腕の存在すらも脳裏から消えてしまった。生まれた瞬間から右腕しかなかったような気分ですらある。

右腕だけで木剣を天に向け、片膝を床についている国村に対して身構えた。国村はほんの一呼吸だけ必死の視線を左腕にそそいでいたが、我に返ったようにあわてて黒田を見上げた。そこは黒田の間合いの中、注意をそらしていい場所ではなかったのだ。しかし続いての木剣を振り下ろすことなく黒田は静かに語りかけた。

「降参してください、国村さん。今の俺は寸止めができません」

黒田聡　対　国村光　⑨

「降参してください、国村さん。今の俺は寸止めができま

せん」

静謐な表情をしたままのその言葉に国村光は自分の敗北を悟った。嘘をついている顔ではなく、であれば、うかつに動かれたら相手を殺さずにはいられない境地にまで黒田聡は入ってしまっているのだ。それに比べて自分はどうだろう？　左手を撃ち落とされた、たったそれだけでまるまる一呼吸も黒田から注意をそらしてしまった。肝心なところで勝負に徹しきれていなかったという思いがある。

皮一枚の距離まで跳び下がってかわし、突きを戻す動きにあわせて踏み込み反撃するのだろうと思っていた。だから油断させるつもりで少しずつ射程距離を減らした。黒田がそれにだまされたと確信し、その裏をかこうと決めた先ほどの突きはこれまでで最長距離の踏み込みで、さらに背骨、肩甲骨、上腕骨をつなぐ筋肉を極限まで伸ばしきったもっとも遠くまで届いた一閃である。こちらの射程距離を短く見積もった回避では胸板を貫くだろう。勝利の確信があったのだ。

しかしそれも自分の中だけの計算だった。黒田の狙いは最初から左腕に絞られていた。左腕を叩き落せれば突きが急所からそれる可能性は高く、そこで気絶さえしなければ、突きを戻さなければならない国村に有利に切りかかれる。

まさに肉を切らせて骨を断つ決断をしていたのだ。

そして自分は、左腕が撃ち落とされたときにまず左腕のことを心配してしまった。視界からまさに消滅した映像にくわえてあまりの驚きのためか感覚までもが消失してしまったこともあるだろう。国村は闘いのさなかであるにも関わらず、左腕を失ったかと恐れたのだった。細心の注意を払い鍛えに鍛え上げた身体はもはや一箇所も欠くことのできない宝物なのだから。

しかし、左腕が打ち落とされたにせよすぐに反撃の姿勢を整えるべきだった。胸元への突きは逸れてしまったがおそらく肩甲骨と上腕二頭筋をつなぐ烏口突起という急所を骨折させておりもう左腕は動かせないはずだったのだ。自分の左腕がたとえなくなっていようと、条件ならば五分にすぎなかった。しかし国村はとにかく左腕の安否を気遣い、一方の黒田は左腕など気にせずこちらへの追い討ちを考え

た。その結果が降伏勧告である。
　戦意はもうなくなっていた。最後のあがきを考えることもできなかった。降参と口に出そうとして舌は踊り、しかし音がもれようとしない。黒田のいぶかしげな表情は明らかに攻撃を抑えるために努力している風情であり、迂闊に動いたら反射的に殴られるという確信があった。あわてて木剣を手放そうと右手指に力を込める。しかし危険な状態で武器を放すことをよしとしないのか、身体が命令を聞かない。なかば恐慌状態で審判に視線を送った。
「国村、降参か？」
　静かな声に、黒田の圧迫感が明らかに弱まった。予感がしてもう一度声を出そうとしてみる。マイクのテストのように、あ、あ、という音が漏れたとき再び安堵を感じた。今度の安堵は言葉を失ったわけではないとわかったためのものだ。そして安堵しながらも、目の前の男も他の戦士たちもこと戦闘中だったら気にもしないのだろうな、とちらりと考えた。骨を断つために肉を切らせる覚悟は自分にはなく、切られた肉を瞬時にあきらめる潔さも自分にはない。それは、効率よい身体の使い方を極限の激動の中で実践するためにこの街にやってきた自分と、全てを捨て再び全てを掴むためにやってきた者との差なのかもしれない。生活の中心を街の外におく自分にはついに手に入らないものかもしれない。
「参りました」
　しんと静まった会場にその言葉だけが広がり、消えた。
　誰も音をたてない。
　静寂の中、黒田が小さく腕をふりあげた。その控えめな喜びの姿が引き金となって喝采が巻き起こった。
　拍手と祝福の中、必死の形相で左肩を抑えている男を国村は信じられない思いで眺めていた。確実に烏口突起という部位が折れているはずなのだ。上腕二頭筋は肩甲骨のもう一箇所にもついているから確かに腕を上げる動きは可能である。しかしその激痛たるや人間が耐えられるものとも思えないのに、一度とはいえ腕を持ち上げていたのだ、この男は。
　そりゃ負けるよ。却ってすがすがしい気分でその場に大

の字になった。

黒田聡　対　国村光　⑩

国村光がその場に倒れこんだ姿を見て鯉沼今日子は思わず立ち上がった。決定打がなかったためにこの場での即座の治療術は必要ないかと思っていたが、もしかしたら国村の容態は相当に悪いのかもしれない。試合場に駆け込もうとする腕を誰かに掴まれた。振り返ると夫がかぶりを振っていた。それを見て安心し再び腰を下ろす。

大きく息を吐くと同時に張り詰めていたものが抜けていき、身体を支える力も抜けたらしい。ぐったりと隣に座る夫にもたれかかった。疲れた、との呟きに対しこちらも目を閉じて脱力していた夫が頷く。

いざというときは頼む、と部隊のリーダーでありこの街の最高権力者でもある女性に肩を叩かれた。かつて、女であるそれだけで部隊を解雇され行き場のなくなっていた今日子を、女だけの部隊を作ることで救ってくれた女性である。真城雪という名のその女性は地下でも一度も見せたことのない厳しい表情で頼みごとをしたのだった。地下でなら自分の命も秤にかけることができる。それは幾分なりと彼女の気を楽にするものだったろうが、この試合は違った。まったく安全な場所から二人の命に責任を持とうとしている女帝の緊張が伝わってきて、おかげで今日子と同じく託された夫までもがすっかり物見遊山の気分ではなくなってしまったのだ。道具屋でもらってきた最大の包装用紙を何枚も必要としたトーナメントの山を登りきった二人の攻防はとても今日子に対応できるものではなく必死になって追い続けた。まるで自分が戦っていたかのように疲れきっていた。

「お疲れさま」

いたわる声が聞こえてのろのろと顔を上げた。依頼者である真城雪が傍らにやってきていた。彼女もまた、タンカのそばで目を凝らして待機していたのだ。その顔にもまた疲労と安堵の色が濃く現れている。お疲れさまでした、と

鸚鵡返しに答えた。
「試合中ずっと、二人の気が伝わってきたよ。お陰で安心していられたわ」
真城さんこそお疲れ様でした、という夫の言葉に同意を示した。しかし真城はやさしくかぶりを振った。
「あなたたち二人が守ろうと見つめている、ということはきっと決勝の二人にも伝わってたと思うな。あの二人が全力を出し切れたのなら――見てる限り、全力以上の世界に行っちゃってたけど――それはあなたたちのお陰もあるわよ。ご褒美を考えないとね」
じゃあ、と反射的に口を開いていた。
「じゃあ、このネコください！」
真城の笑顔が凍りついた。
「ごめん。それちょっとあたしも怖くて言えない。それ、葵ちゃんがものすごく大切にしてるものなんだ」
言葉の最後に何か重いものが混じったような気がした。反射的にそちらを向くと、自分たちが座るすぐ斜め後ろに座っていた理事の娘がこちらを凝視していた。普段は明るい笑顔に彩られる美貌は今は一転して必死な哀願の表情だった。黒目がちの目は心なし潤んでいるような気もする。今日子はあわてて両手を振って微笑んだ。
「いや、うそうそ！　うそだからね！」
残念だったが仕方ない。あくびをしている作り物のネコの背中をそっと撫で、じっと目に焼き付けてから夫に渡されたものとあわせて白い手のひらに乗せた。手のひらがいとおしそうにぎゅっとネコたちを包み込んだ。

黒田聡　対　国村光　⑪

礼を終えて振り向いた黒田聡の身体が揺れた。ああ、音ってのは空気の振動なのだなと実感させてくれるほどの拍手と喝采が自分と国村光に向けて降り注がれている。左肩の付け根はずきずきと痛んだけれど、自由になる右腕を軽く突き上げた。それがさらに声を大きくした。
ぐらりと上体がよろめき、左の肘をつかまれ支えられた。

声にならない悲鳴をあげつつ、邪険に振り解くことだけはなんとかこらえる。支えてくれたのは好意と心配からだからだとわかるからだ。人の好意を、自分の都合でないがしろにしてはいけないとはこれまでの人生で学んだことである。

「ありがとう、若林さん」

仲間の罠解除師に微笑んだ。お疲れ、と笑う顔は上気しておりもう一度肘をゆすられた。鎖骨の下が激しく痛み、歯を食いしばってこらえる。手を離してくれ、と言いたいのにとても言葉にできない。

「おい君！」

少し離れたところから厳しい声が若林を打った。先ほどまで対戦していた国村だった。

「黒田、きっと左腕の付け根が折れてるはずだ。支えるなら右肩にしてやってくれ。で、すぐにでも診療所に連れて行ってくれ。術をかけるにせよきちんと骨の位置をあわせないと同じようには治らないからな」

慌てて若林が手を離しすまなそうな表情になる。黒田はありがとうともう一度微笑んだ。そして国村に向かう。

「重症ですか、これ。そんな気がしてたんですけど」

「上腕二頭筋と肩甲骨をつないでるところに亀裂が入ってるはずだ。触診してみないとわからないが、その部分が外れてしまっているということはないだろう。理想は診療所で寝かせたままレントゲンを撮って固定し、そのまま術をかけたいくらい重症なんだ。でもとにかくギプスで固めてから境内だろうな」

うわあ、とくらくらしたように黒田は天を仰いだ。好き放題やってくれましたね国村さん、と恨みを込めて呟く。

「俺だって大変だぞ」

よく見れば国村の額にはうっすらと脂汗が浮いていた。しかし痛みを感じさせない表情で左手のグローブの指先を噛み、手を引き抜いた。黒田の木剣は左手の薬指と中指の間に振り下ろされたらしい。指と指とがグロテスクに広がっていた。内出血をしているのだろうか？　指の股は赤黒く膨れていた。

「改めてみるとひどい有様だ。でもどう考えてもそっちが

重症だから、お前のレントゲンとギプスが終わるまでこっちの治療は後回しだろう。手は人間にとって大事な部分だから怪我した場合も他の部位よりも痛いのはわかってくれよな」

とにかく境内よりも先に診療所だ、と訓練場の出口に向けて歩き出す。そのそばに商社の技術者がまとわりつき、国村に一言かけると走り出していった。

喝采はすでにやみ、興奮したようなざわめきがあたりを包んでいる。黒田は目を閉じて大きく息を吸い込んだ。

「嬉しそうだね」

目を開くと部隊のリーダーが自分を見上げていた。ええ、と見下ろして微笑む。それを見て高田まり子は意外そうな表情を浮かべた。

「試合に出る以上は勝ちたい、そのくらいはあるだろうと思ってたけど、ほんとに勝ちたかったの？」

クロはあんまり名誉とかにこだわらないと思ってたんだけどな、という言葉にもまた頷いた。俺も、途中まではそう思ってましたよ。でも――

高田も釣られて黒田の視線の向かう先を追った。模造紙を並べて作られたトーナメントの中央には、赤く太いマジックの文字が『黒田聡（色魔）』と書いてある。その注釈が意外だったらしく高田は吹き出した。黒田もひどいな、と呟きながら苦笑した。

「あの山、あのトーナメントの山はやっぱりとんでもないものでした。一歩登るのも大変で。俺、結構醒めててそんなにやりがいとか充実感とか感じない方ですけど、あれを登り切ったってのはなんだか感動したな」

にこにこと見上げてくる視線は弟か息子を見るような愛情に満ちており、なんだかむずがゆくなる。それにしても、と呟いた。

「これから診療所でギプスして次は境内って長いな。途中で気絶しそうです。実はけっこう痛くて」

それは大丈夫、と魔女姫と呼ばれる娘は微笑んだ。

「診療所で治療術を受けられるようにしてあげるわよ。頼りになる前衛へのご褒美ってところね」

ありがとうございました、と下げられた頭に笠置町翠（かさぎまちみどり）は微笑んだ。昼ごろからすっかりお騒がせだった女子高生たちももう帰るという。ほっとするような、なんだか寂しいような複雑な気持ちだった。

もともと、試合後のこれからこそ彼女たちにきちんと指導してやる約束だった。しかし先ほどの激戦は真剣に見入った彼女たちにも疲労をもたらし、これから塾があるという幾人かにひきずられて今日は帰ろうという雰囲気になっていたのだ。それは翠にもよくわかった。翠自身にとってすら先ほどの試合は目を奪われ息苦しささえ感じるものだったのだ。まだまだ未熟で剣術の目もセンスも持たない彼女たちが追うには少しばかり過酷な空気だったというものだ。

「やっぱり答え、教えてもらえませんか？」

部長とおぼしき娘――友達からはかんなと呼ばれていた――が未練の残る表情でつぶやいた。決着の原因を尋ねた彼女に翠は正解をすべて与えることはなかったのだ。スピードの違いとだけ教え、しかし実際の動作の速度も行動の最適さで国村さんのほうがわずかに上だということは補足した。その二つが劣っても挽回できる要素がまだあるのだと、それは運動能力で結局は男にかなわない彼女たちにも重要なものだと教えた。自分で見つけるようにと。

「正解を知ってても納得できなければ意味のないことだからね。いろいろ考えて」

「お姉ちゃんとかに訊いてもいいですか？」

その問いには思わず苦笑がもれた。速さというものをつきつめて考えるような人間がこの娘の身近にいるとも思えない。うなずくと娘は笑顔を浮かべる。人懐っこい笑みだった。

「また来ていいですか？」

笑顔が凍りついた。こわばっていないことだけを必死に祈る。内面にある緋色の確信は、光り輝く世界の真っ只中にいるこの娘には見せてはならないものだと思えたから。

「いつでもおいで」

それまで傍らで黙って立っていた真壁啓一（まかべけいいち）だった。翠はその顔を見上げ、今の表情を彼女たちに見せずに済んだこ

とに胸の中で感謝する。しかしそれだけだ。胸をついた思いは消えることはなかった。

「アイスキュロスは――知ってる？　アイスキュロス」

女子高生たちは不得要領ながらもおたがいを見交わし、一人がおずおずと真壁の顔をのぞきこんだ。

「昔の詩人でしたっけ？」

真壁は正解、と微笑んだ。

「そう。古代ギリシアの悲劇詩人だ。アイスキュロスは生涯に八十二篇の詩を残したといわれるけれど、いろいろあって散逸して、まともな形で今に残っているのは七篇しかない」

この街にいる人間もそうだ、と続ける言葉に娘たちははっとした。武道に経験のある彼女たちは目の前で行われているものの水準を肌で感じただろう。その水準に達しなければならない環境の危険さも、同じくわかったに違いない。七十五篇の詩は消えてしまったのだ。そしてこの街での消滅は明日のことかもしれない。

そしてその恐れは、翠の内部にも残っていた。黒田も国村も、総合的に考えると自分より上の位置にいた。たどりつけないとすら思える位置にいた。

そして、その位置にいた人間がこれまでいなかったわけではないのだ。青あざに半面を覆われた顔を思い出す。彼はその場にいたし、もっと前にはさらにたくさんの人間がいただろう。その人たちは、いったいどこへ行ったのか？

全員が街の外で笑っているのか？

「でも大丈夫、この女は残るほうだからさ」

自身も娘たちも疲労の極みに達した観戦だったがこの男はまったく影響を受けていないようだった。それは翠には納得できることだった。深く感じていないのではなく、こと激動においての情報処理能力が自分とは桁違いだと知っているから。十数年の鍛錬と模擬戦闘の末に身体に刻み込まれた数々の模範解答を検索することにより、自分は切り合いならばどんな局面でも瞬時に（自分に実現可能な）最適解を出す自信があった。それに近いものを単なる観察力と判断力と反射神経で実現しているこの男なら、さほど疲れもせずに目の前の試合を受け入れられるのだと実感でき

た。かすかな羨望とともに。

この子たちは二度と自分を訪ねてはこないだろう。次に会える確証がないことを、真壁の言葉から理解したのだから。そしてベスト8にすら残っていなかったこの男の太鼓判を信じる理由は娘たちにはない。

でも自分にとっては違う。この男がそう言ってくれるなら、私は大丈夫なのかもしれない。私が見切れないものまで見ることができているこの男がそう言ってくれるならば。力づけられほっとして涙ぐみ、あわてて生あくびをした。

「ずいぶん偉そうねえ、真壁さん。私も一回戦で試合が終わったら御託並べる体力残ってたのかなあ」

女子高生たちが笑い、真壁も苦笑した。これでいい。小さくなった制服たちに大きく手を振った。

「……黒田くん」

その声だけを聞いた者がいたとする。そしてその人間が本日この街で剣術トーナメントが行われたとだけ知ったとする。それでも絶対に、その誰かはトーナメントの準優勝者とドアの向こうからもれてくる声の主を一致はさせるまい。黒田聡は苦笑した。

「あの女、いったい何者なんだ……」

一瞬だけいぶかしく思い納得した。トイレの中にいる国村光は週末だけこの街にやってくる週末探索者と呼ばれる生活を送る人間であり、あの女と呼ばれた相手は探索の前夜から探索中だけこの街にいると評判のある種の隠れキャラだったのだから。

「湯浅さん部隊の魔法使いで、西谷陽子さんです」

言葉の後ろは何かを吐き出す音にかき消された。もう胃の中に固形物はないのだろうか、何らかの物体が便器の水面をたたく音は聞かれなかった。黒田は傍らに立つ高田まり子を見上げた。嘔吐の音は魔女姫と呼ばれる女性に生理的な嫌悪感を感じさせるらしい。彼の鋭敏な肌は周囲に充満したエーテルを感じ取っていたが、戻す音が聞こえるた

びそれが揺らぎ薄れるのがわかった。当たり前だ。地上では本来ならば計測不可能なほどに薄いエーテルをこの空間に集めているのが彼女なのだから、その気がそれれば集められたエーテルは即座に雲散霧消する。

エーテルが薄れるたびに、黒田の肩に手を置いている鯉沼昭夫が焦りを交えた視線を高田に送っていた。黒田に見る限り、肝心なところでエーテルに逃げられてこれまで鯉沼は三度治療術に失敗している。治療術師として探索者中第二の評価を得ている彼であっても疲労は相当なはずだった。

「……絶対に」

吐き出す音がやみ、続いて恨み言が聞こえてきた。

「絶対にあんな運転は必要なかったんだ。ドリフトは現代日本には必要ないんだ。それよりなにより、俺たちは一刻一秒を争う重症じゃなかった。あのチビ、車用意するまではほめてやろうと思ったがとんでもない運転手を……」

どちらかに深刻な怪我でもあれば一刻も早く診療所に運ぶ必要がある。それに関してはみなが意見の一致を見、最善を尽くそうとしていた。宝物を術師のために差し出した娘がいた。それを握り締め、目を皿のようにして試合を見つめた夫婦がいた。タンカのそばで試合中ずっと中腰で飛び出せるようにしていた男女がいた。勤め先のコネで道具屋から軽トラを調達し待機させた研究者がいた。一秒を争う運転をするべく運転席でエンジンを温めたドライバーがいた。ぬかりはないように思えたのだ、その時は確かに。

たった一つの漏れは、緊急性がない場合の代わりのドライバーを用意していなかったことだ。さらに悪いことにはそのドライバーには打撲の深刻さを判断することができなかった。彼女が見たのは普段は整った眉目が赤黒く原型を失っている様子と、グロテスクに指の股が広がって内出血が膨らんでいる手だったのだ。それでも怪我人に余裕があればまだよかっただろう。しかし二人とも、ようやく休めると思ったために後部座席でぐったりと目をつむった。

車が発進したあとは三人とも何も言えなかった。何しろ「しゃべると舌を噛むよー」との言葉を冗談と思えなかったのだから。

トイレの中から延々と続く恨み言に辟易したか、魔女姫がふうと息をついた。エーテルが消えていった。
「それにしても」
同じく一息ついた鯉沼がつぶやいた。
「乗り物酔いって運動神経に左右されるのかなと思ってましたけど、国村さんが弱いって意外でしたね」
普段は酔わない、とつぶやきが返ってきた。自分でも自動車を持ってるしな。あの女のいかれた運転に乗れば誰だって——
そして静かになり、「よし、落ちた」と魔女姫がつぶやく。黒田は苦笑した。

第八章　後夜祭

ジョッキがぶつかる音は常よりも大きく思えたが、常盤浩介の心のうちには納得している部分もある。四角いテーブルの一角を占めた四人は四人とも目の前で激戦をたっぷりと見せつけられたのだから。うち二人、青柳誠真と真壁啓一は参加したもののともに一回戦で敗退し、残りの二人はずっと観客でいた。幼い頃正義の味方にあこがれなかった子どもはおらず、チャンバラにしのぎを削らなかった子どももまたいない。そしてこの街にいるのは人生の選択肢のなかに『怪物と戦う』というものが入ってしまうような熱い（危ない）血の持ち主なのだから。力がこもるのも自然と思えた。

「しかし、うちの部隊はほんとに第二期トップなのか？」

児島貴が隣りに座る二人をじろりと眺めた。視線を受けて青柳も真壁も苦笑するばかりである。第一期と第二期の探索者の間には明白なキャリアの差があったとはいえ一部では実力の逆転現象が起きているというのが一般の意識だった。現に発言をした児島も常盤も大半の第一期の術師たちを追い抜いているのだ。今回の剣術トーナメントだけに限ってみても迷宮街でトップクラスの剣士である星野幸樹を下し、準優勝者である国村光といい勝負をした佐藤良輔や、小笠原幹夫という最精鋭部隊の一角と寺島薫という技術面では五指に入る剣士をともに打ち破った津差龍一郎、一回戦、二回戦とも第三層に達している戦士を破った相馬一郎などが第二期の一人として気を吐いている。津差、佐藤は同じ部隊で（津差はかけもちで最精鋭部隊に加わっていたが）現在第二層どまり、相馬にいたってはたった一度第二層にもぐっただけであとはずっと第一層で新規探索者のサポートのようなことをしている。その中で唯一恒常的に第三層を歩いているいわば第二期のエリートチームが彼らであり、その前衛三人のうち二人が一回戦で敗退とは拍子抜けにもほどがあるというものだろう。ちなみに、サラブレッドと呼ばれる二人の娘の活躍は当然第二期の活躍には数えられていない。

「いや、無理。俺は相手が悪すぎました」

しゃらっと言ってのける真壁に青柳も同意してうなずく。

それで児島もからかいの矛先をそらされてしまったようだった。でもなあ、と今度は向かいに座る常盤を眺める。俺たちもやりたくないか？

ぎょっとしたのは自分よりも剣士たちの方だった。それを察してか児島が笑いながら手を振る。大丈夫、もちろん木刀つかったりはしないよ。アレだアレ、あのスポーツチャンバラみたいな防具つけてだ。浩介はやりたくないか？

そういえばこの男は暇があると山に走りにいっていると聞いていた。自分も真壁を見習ってたまにはジョギングをするのだが、山野走りを習慣的にしているなら体力には自信があるだろう。もし実現されたら優勝を狙う気でいるのかもしれない。

「楽しそうですけど、それ――」

隣りで刺身をつついていた秋谷佳宗（あきたによしむね）が口を挟んできた。優勝はもう見えてますよ、きっと。常盤もうなずいて同意した。真剣な表情で。

二人の自信ありげな態度に戸惑いつつ顔を見比べる児島にかわり、青柳が興味深そうに秋谷に話しかけた。その優勝する人間とはいったい誰のことか？

「うちのボスですよ。湯浅貴晴（ゆあさたかはる）」

ああ！　という納得の言葉は青柳も真壁も同時のもので、術師二人はぎょっとした視線を投げた。そもそもその名前自体を特に予想していなかったがこの二人がすんなりと納得する理由はなんだろう？　確かに湯浅は若年にして精鋭四部隊の一角でリーダーをつとめており、治療術師としては第一とこの街の誰もが認めている。最近では訓練場の教官が個人的に時間を割いて指導もしているほどだった。身長も津差、南沢浩太（みなみさわこうた）に続いて高いのではなかったか。そして後衛とはいえ探索のたびに二〇キロ以上の距離を歩き走っているためにその身体は鍛えられていた。サイズの有利は確かにあるだろう。それでも優勝は確実と言われる理由になるとは思えなかった。

術師二人の疑問を察したのか真壁が説明をつけくわえた。

「湯浅さんって後衛でたった一人自警団に入っているんですよ」

交番が一つしかなく警察力がほとんどないこの街で探索

者の横暴から一般市民を守るために探索者の中に自然発生した集団が自警団だった。ある程度以上の実力を備えた戦士たちがボランティアで事業団の事務棟に待機し、住民からの被害の訴えがあれば駆けつけて迷惑になっている探索者を叩きのめし木賃宿に放り込むのがその役目である。もちろん暴れている探索者の半数は戦士たちなのだから彼らを（多勢とはいえ）組み伏せられる格闘能力が必要とされた。ほとんどが第一期の戦士たちで構成されており、第二期で加わっているのは彼らの部隊の三人や津差、佐藤などほんの数人である。その中に、普段格闘をしない身で加わっているのだった。自警団の選別は教官が行うからその実力に間違いはないだろう。確かに自分たちとは明らかに違うと思われた。

それでも児島は一つ疑問に思ったようだった。浩介、と問い掛けられる。

「お前が優勝すると思ってたのは誰だ？　湯浅くんじゃないよな」

「葵ちゃんです」

奇妙な納得の空気がその場を支配した。この街にやってきて三ヶ月でそれぞれの分野でトップクラスに踊り出た双子の実力を培ったものは地下での経験ではなく親からの教育であることは知られている。姉に施された修練が程度こそ違えど妹にも課されていたと想像するのは容易だった。皆の興味と同情の入り混じった表情は、妹の方がどれだけ強いのか、ではなくどうして目の前の男がそれを知ったのかにより強くかかっているようだった。その娘の恋人なのだから。

視線の意味を悟ったか、常盤が苦笑した。

「葵ちゃんも剣道と護身術を習ったらしいんですけど、ちょっと前にびっくりさせようと後ろから抱きついたら――」

続きを待つ視線のなか、常盤は苦痛を思い出している表情でジョッキを口につけた。

「――つま先と金玉とみぞおちと鼻に同時に激痛が走ったんですよ。人間の手って二本しかないのに。で、腰が砕けたところで顔の前三センチで裏拳を寸止めされました。スカートじゃなかったら蹴りだったそうです。本人は恥ずか

しがってましたけど、あの子の身体は反射で金玉殴るようにインプットされてるんですって」

少しの間、その場の四人は痛ましげな表情で常盤を眺めていた。児島が軽く咳払いする。

「まあ、よく考えたら殴りあうのは俺たちの役目じゃないしな。俺たちがチャンバラ大会なんかする必要もないか」

「……ていうより俺、そっちの大会には絶対出たくないです」

真壁の言葉に青柳と秋谷が深くうなずいた。

後夜祭　国村光

常に明確に未来の筋書きを予想する。

その筋書きをもとに最適な自分の行動を計画する。

実際の事態の推移はもちろん予想通りにはいかないから、どのようになぜ異なったのかを確認する。

これは大なり小なり社会人の大半が意識していることだったが、その度合いにおいて国村光（くにむらひかる）は徹底している。効率よい身体の使い方を常に考えている影響もあるかもしれないが何よりもその職業に由来するものだったろう。国村が半期で達成するべき粗利益目標を所定の労働時間で割る（意地でも実労働時間では割らない）と十二万五千円となるが、これはつまり自分は時給でそれ以下の行動をしてはならない、ということなのだから。無駄な行動は許されない。

試合終了後からこれまではその国村の面目躍如たる一連の流れだった。

診療所で治療を受けながら優勝者の黒田聡（くろださとし）に衣服の替えを貸してくれるように依頼した。自分が着てきたものは連戦の汗で重くなってしまっていたからだ。幸いにも診療所で治療を終えることができ戻った木賃宿のコインランドリーで黒田の洋服に着替えて自分のものを洗濯し、銭湯に向かった。木賃宿を管理している女性とは懇意だから洗濯が終わったら乾燥機に入れておいてもらうようにも頼む。風呂場で眠ってしまってあとからやってきた黒田に起こさ

れたのは計算外だったが、乾燥機に移すことを頼んだ女性が気を利かせてたたんでおいてくれたからそれも帳消しだろう。そして試合終了して二時間も経ずに国村は北酒場のドアを押すことができた。これならば早い時間に名古屋の自宅に帰りぐっすり眠ることができるだろう。とにかく眠かった。

しかしその前に受取らなければならないものがあった。

喧騒の中、ぐるりと店内を見渡す。今日の大会の影響だろうか？　それとも平日はこうなのか？　普段見る酒場よりも熱気があるような気がした。見渡すと、目だって華やかな一角に求めていた人間の姿を見つけた。

「真城さん」

呼びかけた相手は顔なじみの探索者の一人で真城雪（ましろゆき）という。その美貌と戦闘能力と権威とでこの街に君臨する女性だった。ほんのりと赤くなった頬で国村を見上げ、笑顔になる。かけられたねぎらいにお疲れさまと笑顔を返した。

「もう名古屋に帰らんとならんのだが、ミラコスタはどこでもらえるのかな？」

回答はまだ配っていない、というものだった。

「国村くんも黒田もいないのにできるわけないって。黒田はさっき見かけたからそろそろやろうか？」

そして視線を座の一隅に移す。つられて送った視界には今日なんどか会話した顔があった。もうチケットは持ってきているか、という真城の質問に小柄な——ショートカットと野暮ったいメガネがあいまってまだ大学生くらいの探索者だと思っていたが、商社の人間だったらしい——娘がにっこりとうなずいた。よし、いい流れだ。

「ええと——すみません、おチビさん。お名前は？」

国村の言葉に三峰（みつみね）えりかの顔がこわばった。三峰ですという声は固い。

「三峰さん、ミラコスタの優先宿泊券、もし余っていたら買いたいんだけど」

「なになになによ国村くん。尚美以外とも行く気？」

真城の茶々は黙殺する。娘は固い表情のまま一瞬だけ考えたようだった。

「ありません」

返事はにべもなかった。そして――

「あと、私はおチビさんじゃないです」

しまった、口を滑らせた。ないというのは怒らせたからか？　せっかくいい流れだったのに。

「えりか！　嘘はいけません。お前がおチビさんじゃなくてこの街の誰がおチビさんなのさ。曲げたヘソ戻す必要はないけど嘘をついたらお母さん悲しいな」

真城の酔った言葉にぶすっとした表情をし、それでも娘はほんとうにないんです、と頭を下げた。これは事実だろう。国村は腕を組んだ。

目標は、ホテルミラコスタの優先ペア宿泊券を無事に持ち帰ることにある。再確認する。

それは奇妙な話だった。その券は彼が勝ち進むことで手に入れた正当な賞品なのだから。しかし奇妙を押し通すカが一つ課せられていた。審判をしていた絶対的強者がどんな気まぐれによったものか命じたのだ。そのときの対戦相手に譲ってやってくれ、と。奈落に叩き落された気がした。しかしあきらめきれない。それが今の思案の動機である。

最初に考えた方法は、提供元である商社にまだあるであろうチケットを適正な価格で買い取り、それを佐藤に与えることだった。しかしそれはいまのやり取りで不可能に終わった。失言のためだとは考えたくない。では、対戦相手である佐藤良輔（さとうりょうすけ）とチケットの奪い合いをしなければならない。

この場でチケットを受け取り佐藤に渡さずに立ち去ること――それは可能だ。佐藤はこのチケットに対して期待も何もしていない。賞品を訓練場で渡されたならば教官の目につく可能性があったがここならば妻子もちの男はやってこない。猫ババ（恐ろしいことに、自分自身の中にもその意識があった。それほどまでに教官の意向は重大なのか、とぞっとする気分になる）の現場を見つかることはないはずだ。

現行犯逮捕は免れても、後のやり取りで発覚する可能性はないだろうか？　一瞬考えてない、と結論づけた。教官は第一線の戦士たちに請われて相手をすることがほとんどで、第二期の中で自ら話し掛ける相手など理事の娘以外に

はいなかったはずだ。これまでの佐藤に対する無関心がいきなり覆ることは考えられず、ということはこのチケットが教官の記憶に残っている間に佐藤と会話をする可能性は限りなく低い。

よし、いい流れだ。国村はにやりと笑った。あとはチケットを受け取りすぐに立ち去るだけである。もう新幹線を予約してしまおう。

京都で懇意にしている旅行代理店への呼び出し音を耳にしながら、真城が張り上げる声を聞いていた。

「ご褒美の時間ですよー！　ベスト8どまりだった人は出ておいで！」

身も蓋もないその表現に苦笑して、呼び出し音を待つ視線が入り口に吸い寄せられた。それはまさに引力を備えていた。

入り口のドアの付近で席を探している橋本辰の姿を眺めながら、今ひとつ働かない頭でただ、隣りに立っている少年は息子だろうか、似ていないなと考えていた。

小さなガッツポーズを見て意外を感じた。佐藤良輔の目の前で同じ賞品である遊園地のチケットを受け取る娘は、その仲間の日記を読む限り恋人はいないと思っていたからだ。それでもペアチケットを喜ぶからには誰か一緒に行く相手がいるのだろう。うらやましいなあ、と胸のなかで呟いた。佐藤には誘うような相手もおらず、妹とその恋人にあげたところで恋人は多忙だったので大阪での券は活用できないだろう。十一月からこちら必死になって前だけ見て歩いてきたが、少し立ち止まって考えたほうがいいのかしら、とちらりと考えた。

小柄な女性から封筒を手渡されると同時に拍手が沸きあがる。振り返るとたくさんの笑顔が自分を見つめていた。尊敬すら感じるようになった対戦相手も拍手してくれている。その顔の中には一つとしてベスト8を自分が占めたことに対して異議をもつものはないようだった。これも悪くないな、と思い笑顔で一つ頭を下げるとテーブルに戻った。

円テーブルからはもう一度拍手が起こり、つられたのか

周囲から再度拍手が降り注いできた。これは、ちょっと、嬉しいが、照れる。そそくさと自分の席について、テーブルの一角に座る的場由紀(まとばゆき)に呼びかけた。

「このチケット、よかったら差し上げますけどいかがですか？」

的場はきょとんとした顔をする。佐藤さんはいらないんですか？

「男一人でペアチケットもらってもしょうがないですし、的場さんには掃除とか治療とかお世話になりましたから。お礼の代わりになれば嬉しいです」

ええと、と言葉を選んでいるような的場に代わり、自分の隣りから手が伸びてきた。かつて同じ部隊を組んでいた大野(おおの)ふみのものだった。的場が佐藤の部隊を離れたとき大野も行動を同じくし、今では新参者をサポートするような性格の部隊を組んでいる。その別れは決裂ではなかったので現在も親しく交流している。

「由貴ちんも行く相手いないのにそんなこと言うなんて、失礼な人だよまったく。だからあたしにおくれな」

無礼者、と苦笑しながら伸ばされた手をはたき、視線を的場においた。うん？　と屈託ない笑顔に迎え撃たれなぜだか狼狽する。鼻の下に生えた無精ひげを指の腹でなぞった。

少し立ち止まって考えたほうがいいのかしら。もう一度思い、すでに自分から視線を外しテーブルの上の麻婆豆腐を取り分けている娘を見る。そういえば、この人は会った最初からずっとこうやって取り分けてたな、と思い出した。ことさら意識しなかったのは恩着せがましくなく大変そうでもなく、つまり自然だったからだ。

「的場さん、もし――」

言葉はしかし中断された。黒田聡(くろださとし)の声が耳に入ったからだった。

「ミラコスタのチケット、誰か買うやついないかー？　三万からオークションやるぞー！」

立ち上がり振り返りながら十万と叫んでいた。倒れた椅子が一瞬遅れて大きな音を立てた。

探索者に対する批判でもっともふさわしくないものは吝嗇だったが金銭に無頓着であるわけでは決してない。明日をも知れぬ身であるから金には恬淡としており、高額の出費を担うことも高額の収入を求めることもごく自然に身についた態度だった。屠った生き物のどの部位に価値ある成分が潤沢に含まれるかという経験の蓄積は、戦闘の記録よりも大量に積み重ねられているのだ。そしてその知識を豊富に備え死体の採取に高い効率を実現できる探索者は、生き残る能力が高い者と同じく純粋な敬意を受けるのが常である。

そんな街に古くから住まう黒田聡（くろださとし）だったから、当然目の前に高い金額を提示されて拒否をするはずはない。トーナメントの商品として手に入れた三種類の商品のうち、温泉旅館の宿泊券とUSJのチケットには使い道があった。前者は会社経営という定年のない職業に奔走する両親を強制的に旅行させる理由として都合がよく、後者は一日のデートに便利な——自分にとっては何度行ったか数えられないような場所だったが——場所にチケット手配の面倒を省いて行けるものなのだから。

しかし、千葉にある遊園地の優先宿泊券は違う。それを目の前に提示されても処理に困るのだった。つとめて特定の異性と深い関係を結ばないように心がけるため、そのような重い（相手の心の中に残る）旅行をするつもりはないのだから。かといって一人で行って楽しい場所とも思えない。男友達を誘っても断られるか殴られるだろう。

厄介者を他人に売ろうと思ったのは自然な心の流れであり、競売という形にしたのは少しでも高い売値を期待したためだ。ネットオークションでしばしば予算以上の落札価格で自動車の部品を買ってしまう経験から、競売形式の効果は信頼していた。

しかし、としんと静まった視線の中で考えた。

それでも自分が設定していた目標はできれば六万円というものだった。いくら人気ある遊園地の人気のあるホテルとはいえ、一泊とフリーパス券が二人ぶんで六万円を超えるようでは許されないと思う。目標は六万円、それでも五

万円を超えれば仲間たちとの今夜の飲み食いは全て払うことができるだろう。そんな皮算用だったのだ。それがいきなり崩された。予想もしない、到底受け入れられない高値をつけられることによって。一つ息を吸い込んで佐藤良輔の目を見据えた。

強い光に迎え撃たれて思わず身がまえる自分に驚く。この若者にはしばしば稽古をつけていたが、これほどの気迫を備えていたのか？

「あのさあ、佐藤くん。十万はあんまりだろう十万は。たかが遊園地の券だぞ？　一日分だぞ？」

「十一万！」

え、と目を見開く。いまこの男はなんと言った？

「ちょっと待て落ち着け。俺は十万は高すぎると言ってるんだ。そんな値段で売れるわけないだろう」

「十二万！」

やばい、と呆然とつぶやいた。理由はわからないけれど、目の前の男には自分の言葉が聞こえていない。そして身体が戦闘状態に入っている。ビリー・ザ・キッドと面と向かった人間はこんな感じだったのだろうか。動けば撃たれる、という恐怖である。自分の場合は口を出せばさらに値段を上げられる、だったけれど。

自分が気圧され怯えていることを実感していた。え、ええと、と口ごもった。

「わかった、そんなに欲しいんだったら三万でどうだ」

「十三万！」

「二万五千じゃあ」

「十四万！」

だめだ。言葉が届かない。でもこのままでは埒があかなかった。提示される金額が国を買えるような数字になる前になんとか決着をつけなければならない。

簡単なのは一言「売った！」と叫ぶことだがそれはしたくなかった。遊園地のチケットを十四万円で売りつけるなどと、まるで弱いものいじめみたいではないか。いじめられているのがどちらなのかが良くわからなかったが。

金額を言うとそれがトリガーになるのかな。

「じゃあ、佐藤くんがもらったＵＳＪのチケットと交換と

いうのは――」
「十五万！」
この野郎ぶん殴ってやろうか。黒い衝動が胸の中に湧き上がった。鎖骨を両方とも叩き折って懐に強引にチケットをねじこめば俺は解放されるんじゃないだろうか。
一流の戦士の本分は激動の中での決断力にある。右腕がすぐそばの机の上のビール瓶を探ったとき、その動きを一つの声が止めた。
佐藤！　と低く鋭い声はムチのように響き渡り、壊れたテープレコーダーを人間に引き戻したようだった。二人して眺めた声の主は国村光（くにむらひかる）という。この大会の準優勝者である。
「せっかく黒田くんがＵＳＪとの交換でいいって言ってくれてるんだ。好意を受けたらどうなんだ？」
佐藤は目を数回またたかせて黒田の顔を覗き込んだ。憑かれたような輝きはすっかりと消えうせていた。え？　と驚きと喜びが声にあふれている。
「交換でいいんですか？　でもそれって不公平じゃないですか？」
何を言っているんだろうこの男は。黒田はぼんやりと考えた。わけがわからない。
「せめてそこにいくらかお金を」
黒田は慌てて手を振った。早く決着をつけないといつまたスイッチが入るかわからないと思ったからだ。
「俺にとってはＵＳＪの方が嬉しいからさ、何度でも行きたいし」
何人とでもでしょ？　とすぐそばの席の女性が投げた言葉に肩をすくめる。それでようやく佐藤は笑顔になった。
「すみません黒田さん、甘えます。どうしてもそのチケットは欲しかったんです」
そりゃよーくわかったよ。黒田は胸の中でつぶやき、国村に笑顔を向けた。助かりました。そう言外に込めたつもりだった。国村は鷹揚に微笑んだ。
「まあ俺がでしゃばることでもなかったみたいだけど、たかがミラコスタのために大の男が二人必死になるのもみっともないからな」

まったくです。感謝と尊敬の念をこめてうなずく。

確かに試合は自分が勝ったのかもしれない。でもそれは幸運が左右するものでもあるだろうし、チャンバラで強いからっていったい何の自慢になるだろうか？　そう思わざるを得なかった。それよりも、自分がどうにもできなかった難敵を一言で鎮めてのけたのだ、この男は。

「じゃあお前らの間で交換で決まったな？　なら俺はもう行くから」

なんだかそわそわしているのは列車の時間があるからだろうか。少なくとも明日は会社づとめがある男だった。店内のいたるところから投げかけられる送別の言葉に軽く手を挙げるだけで進む背中に感動を覚え、深く頭を下げた。

後夜祭　笠置町翠

苦笑とともにもらした呟きは同席している人間に意外に感じられたらしい。双子の妹である笠置町葵が代表して問いかけてきた。

「国村さんがちゃっかりしてるって……どういうこと？」

笠置町翠はその言葉に妹の顔を見つめた。視線を隣に座っている神田絵美と野村悠樹にも滑らせたが二人もまた自分の呟きを不審に思っているようだった。翠は一瞬考えて答えに思い当たる。葵、と妹に尋ねた。

「国村―佐藤戦のあとで、国村さんと橋本さんが話した内容は聞こえなかった？」

否定された。何か話しているのは知ってたけど。そういう答えだった。

一瞬の判断の緩みで明暗が分かれるのが地下での探索行為であり、優れた実績を残している人間は総じて外界に対する観察力が鋭かった。たとえば、この神田という魔法使いは翠の気分がふさぎこんでいる時、たとえ妹の葵が気づかないようなかすかなかげりであっても気を使ってくれる。野村の感覚について詳しくはわからないが、今はもういないある第一期の戦士とともに自転車で街を走ったときなど、カーブの向こうが見えているかのように車の接近を察知す

ることに驚いたものだった。野村もその戦士と同じ精鋭四部隊の一角を担っているのだから同じだけの鋭さはあるはずだ。しかし神田も野村も首を振るだけだ。そうか、聞こえていなかったのか。

その試合、自分はセコンドとして最前列に陣取っていた。だから同じように最前列に座っていた神田と野村は聞き取っていたと思っていたのだが。

自分の聴覚が常人よりもはるかに優れていることは知っていた。ともに人間の規格外にいる両親のどちらかから受け継いだものなのだろうが、あまり嬉しい贈り物ではなかった。飛び込んでくる物音にはいくつもの種類があり、その中にはため息と舌打ちも当然含まれる。見知らぬ誰かのものであってもため息と舌打ちは翠の心を落ち込ませた。

しかし今はちがう。種明かしの愉しみとともに答えを教えてやった。国村さん、橋本さんから言われてたんですよ、と。佐藤さんにチケットを譲ってやるようにって。国村さんは不服そうだったけど、橋本さんに口答えできるなんてこの街じゃ由真ちゃんくらいだからね。

そうなんだー、と神田が苦笑した。

「チケットなんか気にしてもいないような、そうやって言われないとわからない態度だったわね」

野村もうなずいた。そう。国村は実はチケットに執着していたのだ。しかしそれを毛ほども出さなかったから却って評価を高めた上でチケットも確保することができた。見事な立ち回りといえる。

ふーん、と立ち去る国村の背を眺めていた妹があ、と声を上げた。あそこ、孝樹兄ちゃんがいる。

「え？」

慌てて視線を追うと従兄の水上孝樹（みなかみたかき）が出口に向かって歩いていた。担いでいるのは旅行かばんだろうか？　たった今到着したのか、これから帰るのかどちらかだろう。

「今日、こっちに来てたんだ――翠？」

翠は立ち上がっていた。コートかけのコートのポケットから賞品のチケットをつかみ出す。

「翠？」

妹の声を背に聞きながら足早に進んだ。通り過ぎる雑音

の中になじみの深い笑い声が混じっていた。まったく普段どおりの馬鹿笑いが、その男が自分にいま意識を向けていないことを教えてくれる。名前を呼びながら追う妹があって足早に歩いているにも関わらず気づかないのだろうか。

目指す従兄は当然のように笑顔で親戚の姉妹を迎えていた。孝樹兄ちゃんは気づいているのに！　お前はそれでも第二期のエリート戦士か情けない！　気づけ！

かつての思い人に気づかれていることを喜ぶより前に、相変わらず続く仲間の馬鹿笑いになんだか腹が立った。

後夜祭　笠置町葵

「ええ？　いいよ別に」

従兄の断りの言葉を笠置町葵は意外に思った。双子の姉の笠置町翠があげようとしたのはたかが遊園地のフリーパス券であり、二枚で一万円だとかそこらのものだったはずだ。それは数日前に従兄とその婚約者が行こうとしていた場所で、突然行かれなくなった婚約者の代わりに姉が一緒に遊びに行った場所である。だからもののやり取りとしてもイーブンだったし、加えて姉の手にあるチケットは本日行われたトーナメントのベスト8の賞品である。金を払ってあがなったものでもないのだ。従兄にとってはとりたてて喜ぶほどのものでもなく、したがって断る理由もないと思っていたのだが。

なんで孝樹兄ちゃんが決めちゃうのさ。翠は苦笑して食い下がった。

「私を連れて行くようにって言ってくれたのは由美さんなんでしょう？　私も由美さんにお礼するおまけの孝樹兄ちゃんなんだからさ、とりあえず受け取っていおいてよ」

でもなあ、とまだ渋る。数秒たって、言い出しにくそうに呟いた。

「真壁くんが行きたがってるんじゃないのか？　翠ちゃんと」

姉は虚を突かれた顔をした。

「いや真壁さんは行かないわよ。だってあの人来週で――」

「なに？　兄ちゃん真壁さんにびびってたの？」
あわてて言葉をかぶせる。自分が危うく口を滑らせるところだったと悟ったのか、視界の端で姉が感謝の視線を送ってきていた。この従兄は真壁啓一（まかべけいいち）という名の若者と姉が交際していると思い込んでいる。どうしてそう思い込んだのか、どうしてその勘違いを矯正しなかったのかは事情があり、ここで真壁がこの街を去ると告げてしまったら、最悪の事態では従兄にその事情を話さなければならなかった。せっかく（たくさんの人間の気遣いの結果）事情は円満に昇華されるところなのに、いらぬ手間を自分から呼び出すべきではなかった。
水上は笑った。苦笑いといってもいい。従妹たちの目配せにはまったく気づいていないようだ。そりゃそうだ、と葵は別に不思議には思わなかった。従兄は武人として自分たちとは比べ物にならない存在だったが、それは臨戦態勢にあってのことだ。妹とも思っている二人の挙動を注視するはずもなかった。そう。気を許した人間の態度はあまり気にならなくなってしまうものだ。
似てるわー、と従兄と姉とを見比べた。自分は恋人に気を許しているが、それでもここまで鈍感にはなれない。
「なんかさ、君らがこっちに来たときから真壁くんの意識がビンビン伝わってくるんだけど。彼、ＵＳＪに執着があるんじゃないのか」
え？　と翠が振り返って店内の一隅を眺めた。いつものバカ面しかしてないけど。
「いや、かなり気を張ってるぞ。本当に気づかないのか？　葵ちゃんも？」
葵も一瞬考えて頷いた。それが妥当な回答だと思ったからだ。とにかく！　と翠が封筒を水上の手に押し付けた。
「私たちはいらないから、これは由美さんと相談して兄ちゃんが捨ててください。ほらほら！　今日中に東京に帰るんでしょう？」
「――ああ、チケットはわかった」
水上の顔は真剣だった。
「チケットはわかったけど、あの真壁くんの気を感じ取れないんだったらこれ以上潜るのは考えた方がいいんじゃな

いか？　鈍すぎるぞ、お前ら。二人がまだまだ未熟だということを差し引いてもちょっと隆盛さんの子供とは思えない」

アルコールだよ、と一言で切り捨て葵は従兄の背中を押した。俺また明日の夜に来るから、その時ちょっと試させろ！　言い募る背中を強引にガラスの押し扉から突き飛ばした。

ふう、と息をつく。恋人とは違い毎日鉄の棒を振ったり止めたりしているだけのことはある。その身体は肉厚で重く、押し出しも一仕事だった。ねえ、という声に視線を上げると姉が少しこわばった顔をしていた。

「今の孝樹兄ちゃんの言葉だけど、私たち鈍いのかな」

あー大丈夫大丈夫。面倒になってひらひらと手を振りながら席に戻った。肩から下ろしてみて初めて、双子の姉の片思いは自分にとっても重荷だったのだと気がついていた。私には痛いほど伝わってたし、翠も他の条件なら寝てても目が覚めたはずだよ。

条件？　いぶかしげな顔に返事はせずに、不在中に届いていたらしい麻婆豆腐を掬い取った。

本当に似てるわ、アンタたち。心の中で呟く。

孝樹兄ちゃんが翠の片思いに気づかなかったことも、翠が真壁さんにずっと気を配ってもらってたのにまったく気づかなかったことも。

ちらりと視線を送る。もう『条件』はどうでもよくなったのか、嬉しそうな顔で麻婆豆腐に挑んでいた。

後夜祭　中村嘉穂

言葉をかき消したものは、常日頃喧騒に満ちたこの場所であっても珍しいものだった。拍手と喝采である。その意外さに思わず中村嘉穂（なかむらかほ）は振り向いた。見ると、一角でよく見かける女探索者がなにやら声を張り上げている。名前だろうか？　誰かを呼んだのだろうか？　その直後に進み出た頑強な探索者がなじみの研究者から何かを拝領していた。

振り向いて、ガッツポーズ。そしてまた拍手と喝采だっ

た。なんのお祭りなのあれは？　見上げた視線の先で蝶タイをした男が首をかしげた。

「今日、チャンバラ大会があったんですよ！」

正解を教えてくれた娘の顔は紅潮していた。ほんの一瞬前までここにあった眉を下げての悩み顔はどこに行ったのだろうか。苦笑を押し殺してチャンバラ？　と聞き返す。

「そりゃ、惜しいものを見逃したな」

三人がいるのは北酒場と呼ばれる飲食施設にしつらえられたバーカウンターだった。中村とその隣りの娘である織田彩は客であり、スツールに腰掛けた彼らを見下ろす小川肇はカウンターの内部で飲み物を供する役を担っていた。

すっごい燃えましたよ小川さん！　織田は嬉しそうだ。大学をさぼった甲斐がありました！

チャンバラねえ。興味を失ったようにつぶやいてカウンターに向き直った。

「もうこの街に来て結構なるけど、未だにあの連中の考えることはわからないわね」

「彼らはいわば英雄だからな」

英雄？　と鸚鵡返しの言葉は織田がもらしたものだった。その理由が中村にはわかるような気がする。織田はこの街唯一のコンビニのアルバイトとしてこの街ができた時から働いている。『いちごオレ』や『かにパン』や『少年ジャンプ』や『ビスコ』を差し出し買っていく存在が彼女にとっての探索者なのだ。薬局に勤務する自分にとって探索者とは筋肉痛や花粉症や風邪や妊娠の恐怖にさいなまされている存在であるように、そこには英雄らしさというものは断片すら感じられないのだろう。

「まあ、アルコールが入って勇ましくなっているところしか見ていない肇にとっては英雄かも知れないけどねえ」

織田の表情にも同意の光がある。しかし小川は苦笑して、そうじゃない、と否定した。

「昔からの物語を読んでいると英語ではヒーロー、日本語では英雄と呼ばれる存在がある時期を境にがらりと変わることに気づく」

また始まった、と中村はうんざりした思いでカクテルグラスを口につけた。このバーテンは決して悪い人間ではな

いが、この街に来るまでの本業がものかきであることも影響しているのだろうか、話しているとしばしば講釈が始まることがあった。年齢の離れた織田にとってはそれもありがたく感じられるらしいが同年代の彼女からすると何をしゃらくさい、としか思えない。中村はこれまでそれなりの男性遍歴を経てきたが、部屋に大きな本棚がある男にろくな奴はいないというのが持論だった。そして目の前の男の部屋の本棚はこれまでの誰よりも大きく頑丈だったのだ。

「ある時期、というのは都市文化がその民族に定着した頃だ。都市文化を成立させるためには個人の感情よりも共同体の発展を優先させる必要が出てくる。都市文明以前の自分のためだけを考え行動し、そのためスケールの大きかった英雄たちは都市に飼いならされることによって自分以外の価値観に従うようになる」

たとえば儒教、公共への貢献、宗教、フェミニズムといったものだな。その例に織田は頷いた。

最後のしずくを飲み干した。普段ならばこちらの顔をうかがうだけで差し出される次の杯が出てこない。くるりとスツールを回転させて騒がしい探索者の群れを眺めた。その視線に沿うように、彼らは、と低い声は続く。まだ続くのかよ。

「彼らの価値観の最上にあるものは戦闘において勝利することで、ついで地下からの獲得を積み上げることが続く。社会道徳も法律もその前にはかすむほど小さい。彼らにとって探索者と英雄という言葉は同意語であり、探索者の行動の主要テーマは二つの基調――武勇と名誉――のうえに築かれている。前者は英雄の本質的属性であり、後者は本質的目的だ。彼らの価値観、判断、行為、技量や才能といったもの全てに名誉を明示できるかどうかのフィルタが常にかけられる。彼らのほとんどは行動、感情ともに情熱的で人生を愛し、そこには自分が納得しない価値への殉教者的な性格などは存在しない。にも関わらず、彼らの話を聞いている限りでは信じる価値観はその生命よりも優先されるらしい」

これが英雄でなくてなんだろう？　そして、チャンバラのトーナメントより彼らにふさわしい祭りなどなかなか

いさ。酔ったような言葉は一息ついたらしい。ちらりと隣りの娘を盗み見たが、半分納得で半分理解不可能という顔をしていた。潮時か、とくるりとまた回転した。

「肇、今度はビールベースで」

こちらの冷静な言葉に急に現実に引き戻されたのだろうか？　かすかに顔に朱をさしながら小川は首をかしげ問いかけるように小さく目を見開いた。

「ビールにジンジャーリキュールを少し入れて頂戴」

小川は苦笑した。ビールベースにジンジャーリキュールのカクテルは通称をストーンヘッドという。揶揄に気づいたのだろう。

「あ、そういえば」

もういちどくるりと振り向いて人影を探した。

「あのでっかいの来たよ、今日。栄養剤探しに来てた。温泉は好きかって訊かれたな」

「え？　優勝したら温泉旅行でしたよ確か。それって――」

棚の瓶の一つを手に取って軽く振る背中から低い声が漏れた。

「ほう。で、なんと答えた？」

別に、と表情を変えずに心の中では含み笑いをしている。

「温泉は大好きだから誘われればいつだってホイホイついてくって言ったわよ」

「ほう」

声は先ほどよりも低い。中村はなんとなくいい気分になってチョコレートを口に入れた。

後夜祭　縁川かんな

シャワーの音が聞こえる。曇りガラスにうっすらと映るプロポーションにいつもの羨望を感じながら、向こう側にいる人間に声をかけた。

「お姉ちゃん」

「あーん？」

「パジャマ置いておくよ。永田のおじさんが来てるから下着で歩くのはやめろって」

「あー、ありがとう」
縁川（よりかわ）かんなはうなずき、脱衣所を出ようとしてふと足を止めた。そうだ。訊いてみよう。
毎週木曜日以外は剣道部の練習があったが、今日は校外に出て行った。自転車で少し離れたところにできた迷宮街という場所で剣術の大会があると聞いたためだ。試合はとにかく基礎の運動能力が段違いでありかつ自分たちの剣道とはまったくルールが違うために見稽古の内容を消化することはできなかったが、正統派の剣道を修めている女性に素振りを見てもらうことで自分のよくない癖を知ることができたのはよかったと思う。
その時に一つの問題を出されたのだった。力ではなく技術と、何よりも速度が勝敗を左右した各試合を眺める自分たちに女剣士は三つあると説明した。
一つは動作それ自体を速くする、反射神経と筋力を鍛えることによって向上させられる速度。
一つは動作の軌道を最適化することによる速度。
決勝戦の二人、その二つにおいては年長者に分があったと（かんなにはその差はわからなかったが）女剣士は言っていた。それでもなお勝敗を決したのは速度の差で、勝者は第三の速度において勝っていたのだと。それはなんですか？　という問いは自分で考えるようにとはぐらかされた。その時に訊いたのだ。姉に質問してもいいだろうかと。その女性はたぶんかんなの姉のことを知らなかったらしく鷹揚に首肯した。それはそうだ。普段の生活を送るだけなら動作の速さを突きつめて考える必要はないのだから。
「おねえちゃん、あのさあ」
しかし彼女の姉、さつきは一風変わった職種についている。職場は今日の昼彼女が訪れた迷宮街で、週に二度ほど地下に潜るのがその内容だった。探索者である。それも本人が言うにはエリート部隊の一人だという。
もちろん身近なものとして姉を眺めている家族はエリートなのだと信じていなかった。いや、大事な家族が危険なところに挑んでいることを信じたくなかったのかもしれない。
しかし今は姉が優れた探索者だと信じたいと思っている。

現金なものだった。
「なーにー？」
浴室に声が反射する。これでは込み入った回答をもらっても聞き取れないかもしれない。
「聞きたいことがあるんだ。あとで部屋に行くね」
承諾の声と鼻歌を背に脱衣所を出た。
頬を上気させた姉と、姉の部屋で向かい合ったのはそれから三〇分後のことである。姉は濡れた髪にタオルを押し当てながらビールの缶を空けた。冬でもうまいようにと、部屋の暖房は暑いくらいだった。
「あー、生き返る！」
姉の部屋はいちばん狭い部屋だった。本当ならば自分が使うことになったのだろうが、もっとも日当たりがいいということで姉が選んだ。いま座っている椅子も、片づけが便利という理由でディレクターズチェアである。その上でぐずぐずと崩れそうな雰囲気に慌てて口を開いた。
「今日、見てきたよ。トーナメント」
「おお。誰が勝った？」
「黒田さんて人。かっこいい人」
「ほーん、クロか……まあ順当なところかな」
知り合いなの？　と思わずもれた驚きに姉はこともなげにうなずいた。知り合いも何も同じ部隊だよ。
かんなは二の句が告げなかった。確かに姉はずっと、自分はエリート部隊にいるのだと言っていた。エリート部隊というくらいだから数は多くないだろう。だったら姉の同僚であってもそれはおかしくはない。しかしやはり驚きだった。
これなら問題の答えもわかるかな。手短かに速さの違いについて尋ねる。姉はしゃらっとして簡単じゃないのと言った。
「わかりやすく、京都から東京まで移動すると考えるよ？　まず一つ目、実際の動作の速さってのはどんな移動手段を使うかだね。東海道本線と東海道新幹線はほとんど同じコースをたどっているけれど、新幹線を使った方が特急で行くよりも全然速い。それは新幹線が時速二〇〇キロメートル以上出せるから」

それはわかる。うなずいた。

「つぎ、今度はコースそのものを変えてみる。陸路を使うんじゃなくてセスナを使う。セスナが新幹線と同じ速度で飛んだとしても、障害物がなくて一直線で飛べるお空の方が速く着けるってわかるでしょ」

これが、動作の軌道の最適化か。あともう一つがわからないものだ。

「それともうひとつあるって笠置町さんには言われたんだけど」

そう言うと姉は眉をひそめた。

「そんなの簡単じゃない」

「簡単なの？」

「いつ出発するかよ。ロスが多いルートでスピードも遅く、例えば歩いて東京まで向かうとするよね。大体何日くらいかかるんだ？　一日四〇キロメートル歩くとして十三日かな？　それだけかかるにしても、歩きの人がセスナの人よりも十四日前に出発していたら歩きの人が速く到着するでしょ？」

かんなは面食らった。それは確かにそうだ。でも、それは速さとは別の問題じゃないのか。

「問題なのはいつ着くかよ。地下にいるときなんか、どれだけ速く作業を行えるかは問題じゃないの。いつ作業が終わるかだけが重要なのよ」

そしてため息をついた。

「私がいつも言ってることをなんだと思っていたの？　ほら、新しい建物に入ったときにまず何をしろって私は言った？」

これは思い出すまでもなかった。八才離れた姉はある意味では母のように影響力を持つもので、その姉が真剣に指示したことだからだ。新しい場所を訪れたらまず非常階段を探し、できればそれを使って安全な場所まで向かってみる、というものである。おかげで修学旅行では非常階段でタバコを吸っていた他校の男子生徒たちに絡まれそうになって怖かった経験がある。

「あれは、火事や地震で即座に動かないといけないときにどうするべきか自分の身体に教えるためにやってるんだよ。

実際に非常口を使って出る経験をしておけば、いざというときに考えなくても身体が動くから」

地下で大切なのは、と真剣な表情は家族に見せるものではなかった。ざっくばらんでそれでも優しい姉のもう一つの顔を見たような気がしてどきまぎする。

「地下で大切なのはムダなく動くことじゃなくて、速く動くことじゃなくて、すぐに動くってことなのよ。何かが起きたときにどう動くかもう決めてあるってことなのよ。起きてから対処法を考えるのではなく、できるだけ頭の中で予想してもう解決しておくの。剣道の試合だって、相手と向き合ってあれこれ迷ったら負けでしょう？」

それはそうだ。しかし、何が起きるかわからないことを全て予想して対処法を考えておくというのは本当にできることなのだろうか？　言葉に出すのは簡単だけれど、一つ一つを想像して最適の動作を頭の中で実行するなんて時間がいくつあっても足りなく思えるのだが。

「まあ、みんな苦手みたいね」

姉は苦笑した。そして視線を斜め上に泳がせた。

「そう言えばクロにもこの話したよ。ずっと昔に。どうして私の動きは迷いがないのかって訊かれたんだ」

今度こそ驚いた。あれほどすごくてかっこいい人が、ここでパジャマの上を脱ぎ捨てて足を崩している人間に教えを請うたって？

「かんなと同じこと言ってたなあ。可能性を考えたらきりがないし、考えた自分なりの対応が最適だと確信できないからあんまり効果がないって。囲碁とか将棋でもやって先を読む癖をつけろって言っといたけど、まあサボっているんだろうね」

「お姉ちゃん、すごい人だったんだ」

地下で偉くたってすごくなんかないよ、という言葉は、個人用の冷蔵庫に向かう尻が返してきた。冷蔵庫のドアも閉めずにプルタブと炭酸の音が続く。

そしてかんなは心配になった。彼女は昼間、いやというほど迷宮街の戦士たちの実力を見たのだから。そしてそれを育む土壌の危険を想像したのだから。もう一度会えませんか、と訊いたときの女剣士の顔のこわばりを思い出した。

「身体に気をつけてよね」
立ち上がりながらそう言う。当然姉は自分の内心は知らず、ビール二本くらいがなんだっての、と胸を張った。その笑顔は危険とは無縁のものだった。そう。だから家族は安心していられるのだ。
そうだね、強いもんね。
「でも最近、翌朝酒臭くなるようになったのよこれでも」
ため息の後半はげっぷになり、思わず笑う。そうだ。どんなに地下が危険でもお姉ちゃんは大丈夫だ。意味もなく確信し、安心した。

後夜祭　葛西紀彦

隣りに座ってきた男に向けて、屈託のない笑顔がすんなり出てくる自分に葛西紀彦（かさいのりひこ）は驚いていた。別に嫌っていたというわけではない。もともとそれほど近しくする関係でもなくなんとなしのよそよそしさがあっただけだ。自分自身に対して社交的ではないという自覚があったから、そんな距離の人間に対して即座に心からの笑顔が出ることが意外だった。
あれか？　お互い全力を尽くしたあとだからか？　夕暮れの土手で学ラン着て大の字になって「お前強いなー」とか言っているようなものだろうか？　そうじゃない、という気がした。目の前の整った顔立ちをした男にはこちら側の遠慮や気後れを気にせず踏み込んでくるだけの明るさと自信が感じられる。それがこちらの警戒心を無用のものだと教えてくれるのだ。こりゃもてるわけだ、と実感した。
「おめでとうございました黒田さん。俺も優勝者に負けたんだ、ってことで鼻が高いです」
黒田聡（くろださとし）は一つうなずくとテーブルの上のピッチャーから葛西のジョッキにビールを注いだ。
「俺も葛西くんに勝ったんだ、って鼻が高いよ」
返杯として誰のものともわからないジョッキにビールを満たしながら、またまた、とつぶやいた。
軽くジョッキをぶつけ、口につける。アルコールを流し

込みながら横目で伺っていたが優勝した男はなかなか口を離す様子がなかった。喉仏は間断なく動き、とうとう泡だけがこびりついたジョッキがそっと卓に置かれた。弱点なしかこの男、と呆れながら見つめる。

「そういえば」

ふと思い出して葛西は口を開いた。

「すごかったですね、あのパンチ」

黒田は怪訝な表情を浮かべた。

「君を殴ったあれか？　ぜんぜん効いている手ごたえがなかったんだけど」

いやそれじゃなくて。葛西は訂正した。決勝戦の入場で津差さんを一発でうずくまらせたじゃないですか。

ああ、あれかと黒田は口の端をあげた。

「神足さんの木刀が刺さったところそのまま殴ったからね。治療術は使ってないだろうって予想していたけど、案の定一発でダウンした。まあこけおどしにはなっただろ」

種明かしに感心した。試合場のすぐそばに転がっていた黒田は死体と見まごう有様だったけれど、それでも津差の巨体のどこに木刀が突き刺さったか寸分たがわず覚えていたのだ。なんで自分はいい勝負ができたんだろう。改めてその思いがわきあがってきた。

君と試合して、と黒田が口を開いた。

「さゆりのことを思い出したよ」

まじまじと顔を見つめる。その視線はテーブルの上で湯気を立てる鍋に向かっていた。エビやら白菜やら豆腐やらが赤いキムチ味の汁で煮込まれていた。おタマを片手に鍋を覗き込み、作戦を立てているらしい。

「奇遇ですね。俺もです」

もう三ヶ月くらいになるのにな。思い出したことに驚いたし、それよりも忘れていたことに驚いたよ。

まじまじと横顔を見てしまった。彼と目の前の男と話題に上っている女との間には、古今東西の恋愛譚で使い古されたような経緯があったのは事実だ。しかし女性関係において勇名をはせるその男には小さなことだと推測していたのだ。忘れて当然のものだろうと思っていたのだ。意外ですね、という思わずもれたつぶやきに視線が向けられた。

黒田は苦笑していた。
「俺がどういう風に見えるかはわかっているつもりだけど、うん、いろいろあるよ。人間関係は」
そういうものかもしれない。ともあれ今になって蒸し返す問題ではないのだろう。なんといってもその女性はもうこの世にいないのだから。
「葛西くん、料理人上がりだって？　葛西くんの鍋がおいしいんだってさゆりが言っていたのを思い出した。俺らにも振舞ってくれよ」
いいですね、と笑顔を浮かべる。真城さんのところに押しかけてやりましょうか？　そうそう、と黒田はもう一度視線をこちらに向けて頷き、目元にエビの殻からはねたしぶきが飛んだ。辛味に満ちた汁に目をやられたのだろうか、うめき声を上げながら目をこする姿に思わず吹き出した。
「そうだ。黒田さん、今度から稽古つけてくださいよ。結局切り合いじゃ相手にならなかったわけだし」
「断る！」
何を言われたのかわからず、葛西は美男子の顔を覗き込んだ。さっきまでの和やかな空気はどこに行ったのだろう。ずっと日本語で会話していたのに、いきなり他の国に紛れ込んだ気分だった。
「いや稽古ぐらいいいでしょ。今までの友好的な空気を読みましょうよ」
「コトワルッ！」
言葉がいびつに響くほどかたくなだった。途方にくれて視線を移したら話を聞いていたのか、サラブレッドの女剣士が深く頷いていた。わけがわからない。

後夜祭　津差龍一郎

『怪物情報』のうちの『日付順に並べる』というメニューをクリックする。ずらっと並んだタイトルを眺めたが、一番上にある書き込みは昨日、二十日のものだった。明日からのゴンドラ設置作業に備えて第三層以下にもぐる部隊はほとんどが休んでいるはずだ。まあそれは当然か、と津差（つさ）

龍一郎は納得する。

地下に潜らない日の探索者の日課にはいくつかあった。各人思いのままに訓練することもそうだったし、人生を謳歌することもそれに含まれるが同じくらい重要なものとして、他の部隊がもぐって得た発見について掲示板に書き込まれたものを読むというものがある。敵を知り己を知れば なんとやらという言葉があるが、己を知ることは日々の訓練のなかで、そして敵の知識はこうやって共有している。かかっているものが自分と仲間の命なのだから、心得のある探索者で予習と知識の共有をないがしろにする者はいなかった。

どの探索者も大体三〇〜六〇分ほどの時間をかけて情報を仕入れる。それが今日は不要になった、ということで途端に退屈になってしまった。ギ、と体重を預けた椅子のきしみはそれがもうずいぶんとくたびれていることを実感させた。ここは迷宮探索事業団の事務棟の一階にある小会議室で、現在津差のほかに四名の探索者が思い思いに暇をつぶしていた。

「今日、書き込みなかったろう」

漫画を読んでいる背中が問いを発した。寺島薫というその剣士は今日の昼に行われた剣術トーナメントで津差と戦った相手だ。実力ではまったく歯が立たず防戦一方だったが信じられない幸運で勝つことができた。もう一回やったら相手にならないだろう。なにしろ自分に背を向けている状態でクリック音だけで津差が何を感じたか把握していることをを驚く気にもなれないのだから。

「寺島さん、何を読んでるんですか？」

「ガラスの仮面。誰だかの実家が改修するらしく、少女漫画が木賃宿に大量入荷されたんだ」

他の三人を眺めても同じく白とピンク色の本に釘付けになっていた。これじゃ話し相手も期待できない。

「ちょっとくらいならいいから暇つぶしを持ってきたらどうだ？」

この部屋にいる五人はなんとなく事業団の事務棟（もちろん職員は全員帰っているのでこの部屋以外は真っ暗になっている）に集まったのではない。警察力がわずかしかない

この街で、探索者が非探索者に対して迷惑をかけた場合に取り押さえるための自警団を任命されているのだった。この部屋で日が変わるまで過ごし、あとはボケベルを持ってそれぞれねぐらに帰る決まりとなっていた。基本的に探索者の善意で運営されているだけあって規律は厳しい。でも、と反論しようとすると寺島は手を振った。

「今日のトーナメントに出た奴らは全員血の気が下がってるだろうし、出てない術師たちは俺たちがどれほどの存在か身に染みてわかったはずだ。だから今日はみんなおとなしくしてるさ」

それもそうか、甘えるか、と立ち上がって向かった扉が手を伸ばすより前に開いた。うわ壁！　と小さな悲鳴が胸の位置で起きた。

「おう、真城さんか。どうした」

寺島の言葉どおり、見下ろす先には真城雪（ましろゆき）が立っていた。アルコールがまわっているのかその頬はほんのりと赤い。しかしお疲れさまですと部屋の人間をねぎらう声はまだ落ち着いているようだった。

「津差さんに賞品のチケット渡しに来たのよ。あとはみんなに差し入れね。北酒場で適当なものを包んでもらったから。それとウーロン茶」

テーブルの上で湯気を立てる料理に歓声が上がり、男たちは少女漫画を脇に置いて集まった。真城がああ！　と悲鳴をあげた。

「三〇巻から先！　ここにあったのか！」

「昼ごろにもう運び込んでおいた」

しれっとした寺島の言葉に探し回ったんですよ、と悔しそうに答え、パイプ椅子に座り込んだ。どうやら読んでいくつもりになったらしい。

湯気の立つ食べ物がやってきたとなれば暇つぶしを探しに行くのはのちほどでいい。津差は傍らに置かれたウェストポーチから布でできた袋を取り出した。中からは短い菜ばしかと勘違いしそうなほど長い箸が現れた。それを見た寺島が苦笑したのはまさか食事があると思われないこのような場所にすら持ってきているからだろう。常識はずれの手のひらのサイズのために北酒場の割り箸ではうまくつま

めない津差を見かねて、日曜大工が得意な探索者が袋とも ど も作ってくれたものだ。右手全ての指の太さ長さまで計測して作ったもので、しかも漆で仕上げされている。十年ぶりくらいに箸にストレスを感じず食事ができた感動のために風呂場と布団の中以外の全ての場所、それこそ地下ですら持ち歩いている次第だった。

食べる者読む者それぞれの幸せな沈黙の後、真城が津差に呼びかけた。

「今日の大会はどうだった？　津差さん」

そうだなあ、とまず答えてから少し考える。試合はベスト8まで、大健闘だったがこの充実感の原因は結果に関してのものではないだろう。何を自分は得たのか？

「とてもいい経験だったな。今日だけでより強くなった気がする。もちろん俺だけじゃなくてみんなそうだと見てわかるけど」

寺島が頷いた。理不尽な不運で格下に負けた彼にもまた得るものがあったことだろう。

「そうだな、またやりたいな。次の次くらいには優勝できる気がするよ」

おお！　と男たちがどよめいた。彼らは全て第一期の戦士たちで、寺島は当然としてもまだ自分よりは道場勝負では強いだろうと思われた。その彼らにしては当然僭越と思われる言葉だったろう。しかし、今日のことは自分にたくさんのものをもたらしたと、そういう確信があったのだ。

「そっかー。うん、またやりましょうね！」

この街の権力者はアルコールで赤い顔でにこにこと笑っていた。本当に嬉しそうに笑っていた。

後夜祭　真城雪

マンガ本を満載したビニール袋がうるさく鳴る音は、めったに人の通らない深夜では目立った。どれだけ腕っぷしに自信がありこの街の人間を信頼していたとしても、結局は女である。一人で闇を歩くのは怖い。鋭敏な聴覚を手元のポリエステルが邪魔している今はなおさらだった。送って

いくか、という申し出に甘えればよかった、と後悔しつつ真城雪（ましろゆき）は歩を早めた。

常宿である『宮殿』に向かって歩く夜の道だった。東西大通りに面した事業団事務棟脇から北へ伸びる小道は美観に配慮した街区だけあって街灯の光も控えめで、一つの電灯から次の電灯へと進む足元の影は、かなり長く伸びてからようやく背中側へと切り替わる。

ふう、と息を吐いて立ち止まった。

コートのボタンを一つはずし、その中に手を差し入れる。引っ張り出されたものは細い金の鎖で、引かれるままに青いきらめきが電灯の明かりを反射した。白い手のひらに包まれたそれは大ぶりなロケットだった。ぱちりと開いた内側には一枚の写真が埋め込まれており三人の子供が並んで笑顔を見せていた。年長の女の子は中学生くらい、残りの二人は小学生くらいの男女だった。肩を組んでいるのか、頬をくっつけあって写真になんとか納まっている。真城は微笑んだ。

「うまくいったみたいだよ」

三つの笑顔のうち、たった一つ男の子のものに笑いかけた。勝気と朗らかさが想像される笑顔の少年はそのまま真城の脳裏で成長し、落ち着きと誠実さとやさしさを加えたものになっている。大きな青あざは変わらない。

しばらく前、ある提案を探索者中に実現させるために真城が奔走していたことがあり、この写真の子供の面影を残している男はその交渉にぴったりとくっついてきてくれた。何度ヤケになろうとしたかわからないが、暴発しなかったのはその男のお陰だと思っている。

二人で飲んだ夜のことを覚えている。いろいろなことを話したうち、彼は「模擬大会のようなものができないか」と言ったのだった。地下で戦うような緊張感をそのまま地上に持っていくには、真剣に戦えるような巨大な名誉をかけてトーナメントでもやったらどうだろう。何が何でも命を削って精進しなければならないことでもないし、落ち着いて他の人間の戦いを見るだけでも十分すぎるほど参考になるのではないだろうか。

真城は真剣に聞かなかった。その時の彼女にとって、探

索者全員の能力の底上げなど考える余裕はなかったからだ。いいんじゃない？　でもアタシは音頭とらないし、地下に潜る予定をずらしたりもしないからね。つっけんどんな言葉には、なかなかうまくいかない説得に対する苛立ちが棘となっていたことだろう。しかし相手は困ったような笑顔を浮かべただけで、旗を振るつもりはないかとだけ、残念だとだけ言ってその提案を引っ込めた。そして次の夜にはもう会えない場所に行ってしまっていた。

　実施してみた今振り返ると、確かに彼の言うとおり効果はあったのだとわかった。それも、想像もしていなかったほど大きな効果が。津差龍一郎という、まだ未熟だが将来的にこの街で屈指の存在になることが確実な男の自信ありげな言葉を思い出してくすくすと笑う。そしてそれを聞いた古参の戦士たちの表情も。でかいだけの男がしゃらくさい、という表情は大人気なくしかし頼もしげで、彼らもまた大事なものを今日だけで見つけたのだろうと推測できた。

「今ごろアンタが戻ってきても、もう黒田くんには全然かなわないんだからね。お願いだからまじめに稽古つけてくださいって怒られちゃうよ、きっと」

　だから帰ってきてよ。そう呟いたが写真の中の笑顔は動かない。その写真の中、左端にいる自分と右端のその少年との年齢差は一年、自分が年長だった。ずっと変わらなかったその数字は、これからはもう増えるだけなのだ。

　軽やかな音を立ててロケットを閉じ、もぞもぞとブラウスの中に戻した。夜の風にすっかりと冷やされた金属が肌に触れ思わず声が漏れてしまう。ばつの悪い思いを押し殺しながらあたりをうかがったが誰にも見られている様子はなかった。

　ほっと安堵し、そして空を見上げた。冬の乾燥した空気、そして京都の中心から微妙に離れたこの場所では空がとても広く近く感じられる。流れ星見えるかなあ、としばらく口をあけたまま星の海を眺めていた。

　うう、寒い寒い。今日はこっちの部屋で寝ようかなあ。あっちの部屋は布団薄いし、セリムも夜遅いとあんまり遊んでくれないし。

数十秒経ってあきらめて、指が痛くなっていたビニール袋を持ち直し、歩き出した。アスファルトをブーツのかかとが叩く音が小さくなっていく。

背中を見送る空、小さな星が一つ流れた。

和風Wizardry純情派　最強トーナメント　終

まず何よりも、ひどいリクエストに誠実な仕事でこたえてくださったイラストレーターのクワタナヲえ嬢に感謝を申し上げます。今回もお気に入りです。

チャンバラを描くのは非常に大変でした。動きを描写するにはイメージの助けとなる緻密な描写と、勢いを表現するための空隙とをうまく使い分ける必要があると思うのですが、今回はひとつとして納得いくものを描けませんでした。それはあるいはシャングリ・ラでしか描けない境地（少なくとも自分の実力では）なのではないかと思いますので、まあ今後の課題としておきます。

この本ならびにおまけの小冊子を最後に迷宮街の時間を止めようと思います。あとは何らかの必要があったときに本編の時間を細かく記述することがあるかもしれませんが、この前後は想像にお任せいたします。私はもうさようならです。前にもこんなこと書きましたね。

思えば一年半以上もこのお話にかかずらっています。いろいろなことがありました。一日で5万ものページビューがあったり、電車で隣りに座っていた女性が携帯で読んでいるところに遭遇したり、思いもしなかった人たちと交流が生まれたり。まさに一寸先は闇ですね。

本当に、読んで下さってありがとうございました。心からお礼申し上げます。

ではまたどこかでお会いできることを祈って。

二〇〇五年六月二六日

『リディキュール』を観ながら

林　亮介

さてまだ書けますので脳内ゲーム『木剣』のキャラ別攻略法でも書いて紙片を潰しましょう。『木剣』はポリゴンのキャラクタが木刀を持って殴りあう格闘ゲームです。というか『鉄拳』の劣化コピーと思ってもらえれば問題ありません。登場人物は全二〇人で、今回は初心者用の数人の攻略法をお知らせします。

星野幸樹

ガードからの突きの威力と速度は全キャラ中最高なのでこれを基調に戦う。拳銃による威嚇『両手を頭の後ろで組んで膝をつけ』は即死攻撃なので負けそうになったらこれを使うとよい。

笠置町茜

開始と同時にレバーを上に入れて攻撃の届かないところまで浮遊し、あとは適当にハリトとマハリトを投げれば勝てる。ダメージを受けることもないだろう。

真城雪

ジャンプ攻撃でダメージが二倍になるので飛び斬りを基調にして戦う。相手がすばやい場合は必殺技の『セリム、かかれ！』で犬を呼び出し相手の動きを止めよう。

笠置町翠

剣士タイプなので残心（斬りの後に一瞬無敵になる）があるため至近距離で小斬りをしていればまず勝てる。投げ技も豊富なのでガードさせて投げでもいい。

鈴木秀美

二刀小太刀のため、上斬りでは下段、下斬りでは上段に自動ガードが生まれる。加えて残心があるため接近の斬り合いでは最強。ゲージ満タンでオート状態（ダメージを受けずに自動攻撃を続ける）になるが体力も消耗するのでなるべくゲージは溜めないように気をつけよう。しかしオート状態で勝利した時の、我に返ってきょとんとあたりを見渡す動画はファンなら一見の価値があるだろう。

和風Wizardry純情派 祭

2005年8月13日　初版第一刷
著　者：林　亮介
発　行：迷宮探索事業団広報部
http://d.hated.ne.jp/WizDiary/

(C)HAYASHI,Ryosuke 2005

印刷・製本：株式会社イマイシ　Printed in Japan

禁無断転載

インタビューメモ（その２）

（表紙からのつづき）

◆田中元康（たなか　もとやす）　「道場勝負には自信があります。やりますよ」
◆塩崎傑（しおざき　すぐる）　「金星狙います。第二期の意地見せてやるってね」
◆田口敏之（たぐち　としゆき）　「旨いビールを飲むために、がんばります！」
◆真城雪（ましろ　ゆき）　「みんな楽しんでほしいね。でもお前ら、誰を勝たせるかは、忘れるなよ？」
◆常盤浩介（ときわ　こうすけ）　「うちの三人は期待できますから楽しみです。あ、三峰先輩の参加は断固阻止でお願いします」
◆中田武美（なかた　たけみ）　「わーがんばりますー大丈夫かなぁうーん」
◆後藤誠司（ごとう　せいじ）　『大会の成功をお祈りいたします。ご用命はご遠慮なく三峰にお申し付けくださいませ』
◆桐原聡子（きりはら　さとこ）　『ええ国村さん出るの？　サボって？　ホント？…（爆笑）…おなか痛いー。アホだあの人』
◆児島貴（こじま　たかし）　「やっぱり、俺たちが参加したら危ないよなあ……でもやりたいなあ……」
◆落合香奈（おちあい　かな）　「え？　私はいいわよう。……えーと、記録してますからフェアプレーでお願いしますね」
◆鯉沼今日子（こいぬま　きょうこ）「楽しみだよね、お花見みたいで！　みんながんばれー！」
◆若林暁（わかばやし　さとる）　「うちの人たちは優勝候補でしょうね。がんばれみんな！　星野組を超えろ！」
◆笠置町翠（かさぎまち　みどり）　「試合形式なら任せとけ！　でも鈴木さんだけは勘弁な。なーんてね。あの子出てないよね？」
◆内藤海（ないとう　うみ）　「殺伐としてますね、この空間。安全運転でね！」
◆鯉沼昭夫（こいぬま　あきお）　「本当に星野さんを仲間はずれにしてよかったのかなあ。何かいやあな予感がするんだ」
◆笠置町葵（かさぎまち　あおい）　「お弁当作りました！　野菜は全部実家のです！　たっぷりありますから遠慮せず！」
◆高田まり子（たかだ　まりこ）　「徳永さんってずっといるかな。トトカルチョしたいんだけど、いなくなったら教えてね」
◆縁川かんな（よりかわ　かんな）　「市内の高校の剣道部です！　見学しに来ました！」
◆鈴木秀美（すずき　ひでみ）　「（お面を押さえて）わ、私は秀美なんて人じゃありません！」
◆太田憲（おおた　けん）　「罠解除師もやりたいな。手を触れずにエーテルだけで相手を転ばせるようなね」
◆神田絵美（かんだ　えみ）　「ふー、これでなんとか飾りつけもサマになるか。ちょっと雪！　体操してないで手伝え！」
◆倉持ひばり（くらもち　ひばり）　「格闘は自信あるけど男とはヤなのでやめときます。女子の部があったらなあ」
◆徳永幹夫（とくなが　みきお）　「惜しい。次回はぜひ大々的に宣伝してお客さんを集めましょう」
◆大野ふみ（おおの　ふみ）　「やばい。おとこどもがかっこいい。熱でもあるのかな」
◆織田彩（おりた　あや）　「今日学校さぼりました！　燃えー燃えー！　優勝は津差さんですね！　間違いなし！」
◆高崎和美（たかさき　かずみ）　「元気な子たちねえ。でも、血で汚れたままで帰ってこないでね。血はおちないんだから」
◆藤野尚美（ふじの　なおみ）　『ええ？光も出るの？　……仕事サボるなこのダメリーマンって伝えて。あ、朝礼始まる』
◆西谷陽子（にしたに　ようこ）　「普段も面白いことしてるのねー。私ももう少し街にいようかしらねー」
◆的場由貴（まとば　ゆき）　「え、ええと、怪我だけは気をつけてほしいです」
◆三峰えりか（みつみね　えりか）　「参加したいのに受け付けてくれないんです！　しどい！　差別だわ！」